浦添市文化財調査報告書第19集

城　間　遺　跡

—牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書Ⅲ—

１９９２年3月

沖縄県　浦添市教育委員会

あ い さ つ

城間遺跡発掘調査は、牧港補給地区内に於ける建設工事に伴う緊急発掘調査として実施されたものであります。ご承知のように本遺跡は建設工事に先立ち昭和61年度に実施した試掘調査によって確認されたものであり、石灰岩丘陵上の台地に形成された近世の石列遺構と沖縄貝塚時代の遺物を包含する遺跡であります。

遺構は、石積み・溝遺構、石敷き遺構、石列、窯遺構、集石が確認されています。又、土器は沖縄貝塚時代前期の伊波式や荻堂式土器をはじめ同後期にかけてのものが出土し、中には「こしき」の底部資料ではないかと推察されるものも含まれています。その他にも石器・貝製品・沖縄産陶器や13世紀後半と推定される白磁の碗や青磁（14～16世紀）、染付（16～19世紀）など7,000点余の遺物が出土しています。

本遺跡は、広い空間の区画、排水、窯跡等の状況から住居以外の生産空間が想定されるなど貴重なものになっています。

今後は、貴重な出土遺物の公開・展示を図るため「遺跡発掘展」を開催すると共に活用を図っていく所存であります。

最後になりましたが、本報告書発刊にあたり指導・助言を賜りました諸先生方に対しお礼を申し上げるとともに、本書が歴史の解明の一助になれば幸いです。

平成４年３月

教育長　**保久村　昌伸**

例　　言

1　本報告書は牧港補給地区の開発工事に伴う城間遺跡の緊急発掘調査成果の記録である。城間遺跡の発掘調査は開発工事の工程上から2区に分けて実施したが、本報告書では2区合わせて報告することにする。

2　発掘調査は那覇防衛施設局からの委託を受けて、浦添市教育委員会が実施した。

3　発掘調査及び整理作業にあたり次の方々から指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げる次第である（順不同）。

池田栄史（琉球大学）、島　弘（那覇市教育委員会）、上村俊雄・本田道輝・西中川駿（鹿児島大学）旭　慶男・牛ノ濱修・新東晃一・前迫亮一・中村耕治（鹿児島県教育庁）、河口貞徳（鹿児島県考古学会長）、池畑耕一（鹿児島県立黎明館）

4　陶磁器の指導・助言、石質、獣・魚骨の同定については下記の方々による。金子浩昌氏と池田栄史氏には原稿の執筆をお願いした。記して、感謝申し上げる次第である。

磁器　大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
陶器　池田栄史（琉球大学）
石質　大城逸朗（県立教育センター）
獣・魚骨　金子浩昌（早稲田大学考古学研究室）

5　本報告書に掲載した地形図は浦添市都市計画部都市計画課所収の1／2,500地形図を複製した。

6　本報告書の執筆は下記のメンバーで分担し、編集は松川が行った。

松川　章　第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ章、第Ⅳ章第3節1・2・3・9
下地安広　第Ⅳ章第1節、第2節、第3節7、第Ⅴ章
高良京子　第Ⅳ章第3節4・5・6、第4節1
池田栄史　第Ⅳ章第3節8
宮里信勇　第Ⅳ章第3節10・11・12・13・14
金子浩昌　第Ⅳ章第4節2

7　出土した資料については浦添市教育委員会教育部文化課で保管している。

目　　次

あいさつ …… 2
例　　言 …… 4
目　　次 …… 6
第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 8
第１節　調査に至る経緯 …… 8
第２節　調査体制 …… 8
第Ⅱ章　位置と環境 …… 10
第１節　浦添市の概要 …… 10
第２節　遺跡の位置 …… 11
第Ⅲ章　調査の経過 …… 15
第Ⅳ章　調査の成果 …… 19
第１節　層　　序 …… 19
第２節　遺　　構 …… 21
第３節　人工遺物 …… 25
1　土　　器 …… 25
2　土 製 品 …… 32
3　石　　器 …… 37
4　貝 製 品 …… 49
5　骨 製 品 …… 49
6　類須恵器 …… 51
7　磁　　器 …… 52
8　沖縄産施釉陶器 …… 73
9　沖縄産無釉焼き締め陶器 …… 85
10　軟質陶器 …… 118
11　搬入陶製品 …… 127
12　円盤状製品 …… 134
13　煙　　管 …… 139
14　かんざし …… 142
15　銭　　貨 …… 145
第４節　自然遺物 …… 146
1 貝類遺存体 …… 146
2 城間遺跡出土の動物遺体 …… 155
第Ⅴ章　まとめ …… 160

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

昭和61年６月９日に那覇防衛施設局より在沖米軍施設である牧港補給地区の建設工事計画について本市に通知があった。

建設工事計画地区は牧港補給地区の西側一帯で、販売所、倉庫、診療所、野球場、高層住宅の合わせて150,000㎡である。

本市教育委員会では牧港補給地区の埋蔵文化財については十分に把握されてなく、したがって、埋蔵文化財の確認作業が必要であり、建設工事計画にあたっては本市教育委員会と協議を要する旨の報告を行った。その後、那覇防衛施設局と本市教育委員会で協議を行い、昭和61年10月22日から同年11月20日の期間で埋蔵文化財の有無の調査を実施することになった。

調査は那覇防衛施設局が主体になり、開発工事計画地内に１辺30m間隔の方眼を設定し、本市教育委員会の職員立会いのもと重機による試掘調査と表面踏査による調査を行った。調査の結果、販売所地区で古墓群（城間古墓群）と近世及び沖縄貝塚時代後期の遺跡（城間遺跡）、診療所・野球場地区で近世の遺跡（小湾遺跡）が確認された。高層住宅地区では昭和55年度に実施された市内遺跡分布調査の際に発見された嘉門貝塚が開発工事計画地内に大部分が含まれることが明らかとなった。

本市教育委員会では上述した調査の成果を踏まえ、那覇防衛施設局と確認された埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。数回にわたる協議の結果、小湾遺跡については盛り土し、野球場の付帯施設であるバックネット、ベンチ等の配置及び設計変更を行ない、保存することになった。しかし、城間古墓群、城間遺跡、嘉門貝塚については事業計画が既に確定しており、当該区域以外に建設用地の確保が困難であること、設計変更を行い現状保存が不可能であること等から、本市教育委員会が発掘調査事業を受託して実施することになった。

第２節　調査体制

事業主体	浦添市教育委員会	教育長	西原正次	（昭和63年３月まで）
			保久村昌伸	（昭和63年４月より）
事業所管	〃	教育部　部長	名嘉原安栄	（昭和63年３月まで）
			比嘉靖芳	（昭和63年４月～平成元年１月まで）
			東　一男	（平成元年２月より）
	〃	文化振興担当参事	西原廣美	（平成２年４月より）
事業総括	〃	教育部　文化課		
		課　長	宮里良一	（昭和62年３月まで）
		〃	豊里友建	（昭和62年４月～平成２年３月まで）

		〃	宮城　勝　（平成２年４月より）
事務総括	〃	文化財係長	前津政廣　（昭和63年３月まで）
			仲宗根盛栄（昭和63年４月より）
事業事務	〃	主　　事	小浜恵子　（昭和63年３月まで）
			小波津春美（昭和63年４月より）
			下地安広
			松川　章　（昭和62年４月より）
			宮里信勇　（平成３年５月より）
		臨時職員	嘉数喜久子・運天順子・川満美和子・喜舎場涼子・棚原明子・大城政子・与那覇あゆ子・鎌田桂子
調　査　員		主　　事	下地安広・松川　章
調査補助員	〃	臨時職員	宮城義明・比嘉　聡・与那嶺豊・廣山洋一・島袋春美・大湾政人・下地　傑・高良京子・又吉純子・仲宗根菊枝

発掘作業員

金城光子・比嘉サダ・石川チヨ・上地孝子・渡名喜悟・高嶺清子・崎浜良枝・宮城静子・石川ヨシ子・森本和子・棚原弘春・宮城春美・高野キク・玉江秋子・阿嘉節子・福嶺信吉・比嘉トシ・玉那覇スミ・豊平マサ子・宮城良子・宮城光子・島袋正助・平良米子・与那覇浩・宮城美代子・古堅厚徳・城間昌貞・城間辰重・宮城清子・宮城ユキ子・金城　清・宮城清子・上原ミヨ・宮平良子・秋吉慎一・上里恵子・豊元充子・翁長静江・諸見里ユキ・宮城ミネ・前里定勇・諸見太郎・宮平美千代・伊波盛吉・平山次郎・棚原キク・宮城昭善・嘉手納良信・横田政雄・久手堅ミヨ・仲松　章・仲間節子・永山ケイ子・西原節子・西里光夫・平安山寛三・平安山トヨ・粟国キヨ・垣花良子・山里　栄・當山玄昌・宮城ヨシ子・平良トミ・伊波富子・玉城キヨ・叶　ハツ・比嘉　澄・上地善一・宮城吉子・津堅ノブ子

整理作業員

比嘉典子・仲地智子・住友千恵子・安和千代子・大湾政人・宮城　敦・大城研一・大城広輝・宮平留美子・仲宗根菊枝・比嘉清美・波名城和枝・運天順子・儀間るみ子・金城京子・渡具知征子・嵩原朋子・与那嶺文子・大浜利子・中野洋子・又吉純子・冨里順子・上地孝子・上里恵子・当間初江・大城洋子・国中恵子・古堅禎子・平田サヨ子・渡具知孝江・菊池絹子・徳村カツ江・玉寄敏子・銘苅才子・奥原玲子・宮国福子・前川安美・真栄城由記子・又吉美佐江・栄あゆみ・宮城律子・宮城明美・謝花トキ子・嶺間信子・吉村優喜江・親富祖直美・小嶺千鶴子・仲間教子・比嘉郁子・安次富純子・佐和田悦子・銘苅尚子・小渡重成・仲松浩光・翁長律子・大見謝哲郎・松田啓子・知念孝子・仲宗根直美・西原正美・金城悦子

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　浦添市の概要

浦添市は沖縄県の主島である沖縄島の南部に位置し、西側は東シナ海に面している。市の南には県庁所在地の那覇市、東に西原町、北は宜野湾市に隣接する。

市域は北側を頂点とした扇形をなし、東西長6.20㎞、南北長4.50㎞で、面積は18.27k㎡である。西側は在沖米軍の牧港補給地区で、市域の16％を占められている。

人口は平成４年１月末現在、世帯数29,096戸、人口92,019人で（註１）、那覇市、沖縄市に次ぐ県下第３位の人口を擁する市である。人口は昭和５年から昭和25年にかけては11,000人台で推移し、市昇格した昭和47年には41,000人台となり、現在では２倍以上に急増している。

産業は卸小売業・サービス業を中心とする第３次産業が就業者全体の73.8％を占め、次いで第２次産業が発展している商業都市である。しかしながら、昭和５年には就業人口の約80％が第１次産業を占めていた純農村であった。

浦添市内で見られる地質は大きく３種に分けられ、下位には新生代第三紀中新世後期から鮮新世末期に堆積した島尻層群、そして島尻層群を不整合に覆う新生代第四紀更新世に形成された琉球石灰岩、上位には海浜堆積物及び沖積層である。

島尻層群は砂岩と泥岩からなる豊見城層、泥岩からなる与那原層、凝灰岩を主体とする新里層に分けられ、前２者は沖縄本島の中部以南の地域に広く分布する。市内では豊見城層と与那原層が見られ、その露頭する地域は市の中央部から南東部にかけてである。島尻層群の中でも与那原層の風化土壌はジャーガルと称され、アルカリ性に富む肥沃な土壌である。

琉球石灰岩は層位学的に那覇石灰岩、牧港石灰岩、読谷石灰岩に３分され、浦添市内には那覇石灰岩と牧港石灰岩が見られる。分布域は那覇石灰岩が北部と西部に多く、その他の地域でも部分的に見ることができ、牧港石灰岩は市の北西部の港川に露頭が確認される。

琉球石灰岩は雨水によって、主成分である炭酸カルシウムが溶解され、内部に鍾乳洞がつくられる。また、雨水は石灰岩を通り、下層の与那原層上に貯えられ、与那原層と琉球石灰岩の不整合部より湧出する。そのため、市内の先史遺跡の多くは石灰岩地帯に分布している。

地形は市内を南北に縦断する国道330号を境に東側は波浪状の地形を特色とし、西側は琉球石灰岩による台地状地形をなす。地形の相違は地質に対応しており、風化・侵食に弱い島尻層群が比較的多く分布する市の中央部から南東部地域では標高40m以上の小高い丘と谷間による波浪状の地形を呈している。

これに対し、比較的風化・侵食に強い琉球石灰岩の見られる北部と西部地域では、10～20mの段丘地形の発達が見られる。特に国道58号一帯でよく発達し、海岸において約20mの小さな崖をなす。北西部の牧港から南東部の前田にかけては石灰岩丘陵が連なり、断層による石灰岩堤の地形を形成する。丘陵の最高点は浦添城跡の148mである。

河川は牧港川、シリン川、小湾川、安謝川の４河川が市の東部の丘陵地帯を源として、東支那海に緩やかに流れる。

第２節　遺跡の位置

城間遺跡は浦添市の西部に位置する在沖米軍施設の牧港補給地区の浦添市字城間132番地一帯に所在する。

遺跡は標高15m前後の琉球石灰岩の台地上に位置し、西側は小崖を形成して海岸線に至る。遺跡一帯の旧地形は、遺跡の北東側に標高34mの石灰岩の小高い丘があり、遺跡の南西から北東にかけて約20mの小さな崖斜面がみられる。遺跡の位置している地点は東から西にわずかに傾斜する台地を形成していたようである（註２）。

昭和10年代の土地利用状況をみてみると、一帯は畑地として利用され、その南西側から北東側にかけての崖縁は山林・原野と墓地がみられる。また、発掘調査区を横断する形で水路が東シナ海へ注いでいる。戦前の集落は遺跡の東側に位置し、戦後は米軍に土地を接収され、東側（国道58号東）に集落は移動している。

字城間は23ヵ所の小字からなり、面積は浦添市で最も大きい字である。城間村の形成は古く、1631年に成立した古歌謡集「おもろそうし」の中に「ぐすくま」の地名が記録されている。

字城間に関するおもろの中に、「ぐすくま」の対語として「またよし」が記されており、慶長検知以前には「ぐすくま」村に接して「またよし」村があり、それが「ぐすくま」村に併合されたと考えられている。このことは、村の殿が２ヵ所（内原之殿と又吉の殿）にあったことからも推察されている。

「ぐすくま」村は第２尚氏尚真王期（在位1477～1526年）以降に整備された間切・シマ制度で浦添間切の行政単位としての１村となる。その後、明治41年施行の沖縄島及島町村制により、浦添間切が浦添村となり、城間村も字城間となって行政単位としての城間村は終わった。城間遺跡の発見は第Ⅰ章において略述したように昭和61年度に実施した牧港補給地区建築工事に係る試掘調査で確認された。

城間遺跡周辺の遺跡をみると、西側の崖斜面に城間古墓群、海岸の砂地に嘉門貝塚がある。城間古墓群は昭和62年に実施した調査の結果、12基の近世の古墓が確認され、岩陰墓からは土器、蝶形骨製品、貝輪等の先史遺物が検出された（註３）。土器は爪形文土器、室川式土器、沖縄貝塚時代の後期土器、グスク土器が検出されている。後期土器を除く３種の土器については、周辺に当該形式の土器を出土する遺跡の存在が想定されるが、現在のところ確認されていない。沖縄貝塚時代後期の嘉門貝塚からは後期土器、石器、貝製品等が出土している（註４）。また、城間遺跡の南側1.5kmの位置に沖縄貝塚時代後期と近世の小湾集落であった小湾遺跡、北東側１kmには沖縄貝塚時代前期から後期の複合遺跡である港川遺跡群が位置する。

註

1　浦添市役所総務部総務課編　『広報　うらそえ』1月号　浦添市役所　1992年1月

2　昭和22年浦添村現況地形図参照

3　浦添市教育委員会編　『城間古墓群』　－牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書－　浦添市文化財調査報告書　浦添市教育委員会　1990年3月

4　浦添市教育委員会編　『嘉門貝塚　A』　－牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ－浦添市文化財調査報告書第18集　浦添市教育委員会　1991年3月

参考文献

1　浦添市史編集委員会編　『浦添市史　第1巻　通史編』　－浦添のあゆみ－　浦添市教育委員会　1989年3月

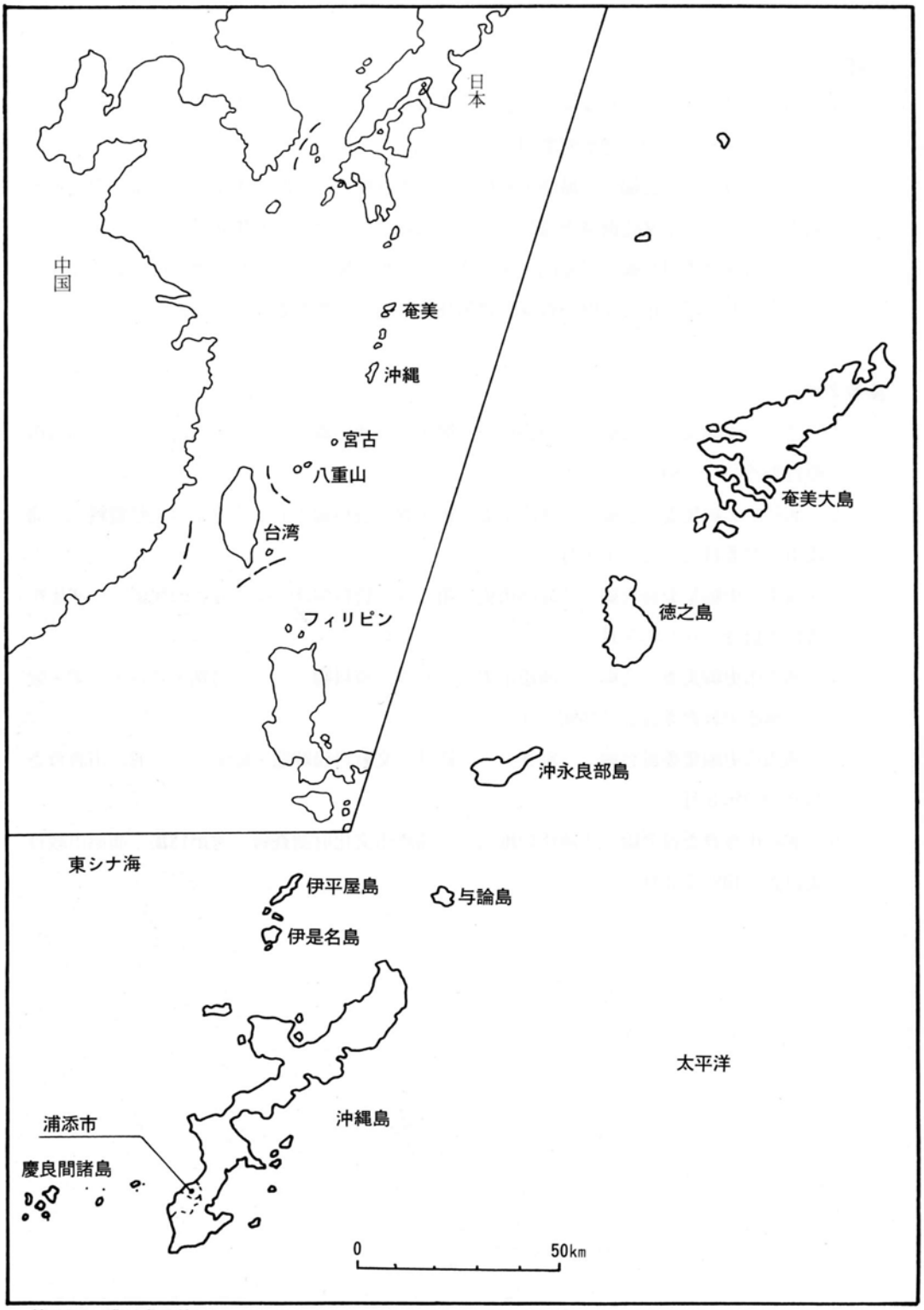
2　浦添市史編集委員会編　『浦添市史　第2巻　資料編1』　－浦添の文献資料－　浦添市教育委員会　1981年1月

3　浦添市史編集委員会編　『浦添市史　第4巻　資料編3』　－浦添の民俗－　浦添市教育委員会　1983年3月

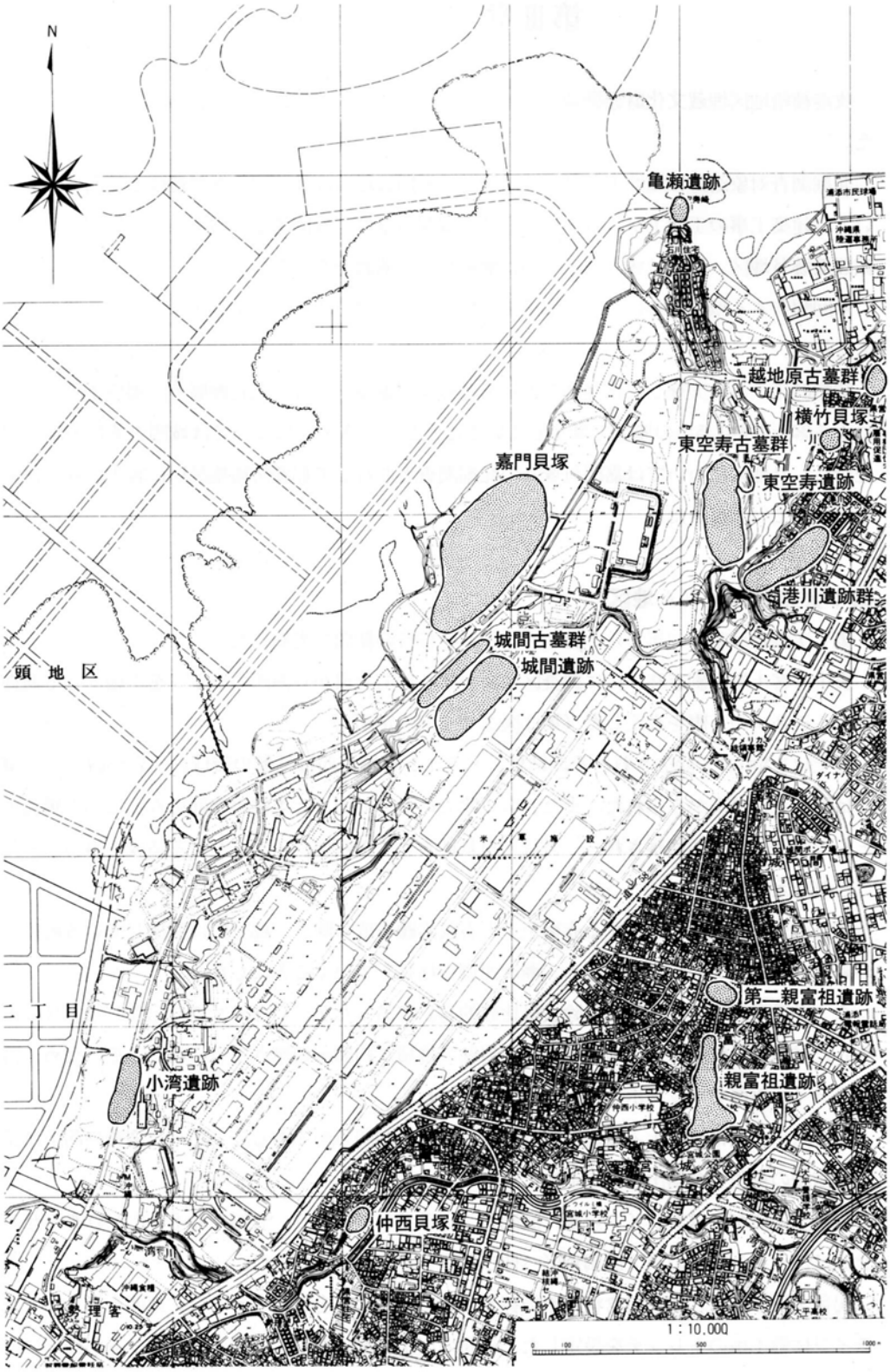
4　浦添市史編集委員会編　『浦添市史　第6巻　資料編5』　－自然・考古・産業・歌謡－浦添史教育委員会　1986年3月

5　浦添市史編集委員会編　『別巻』　－統計・文献目録解題・総索引－　浦添市教育委員会1990年3月

6　浦添市教育委員会編　『浦添の地名』　浦添市文化財調査報告書第13集　浦添市教育委員会　1988年3月


日本
中国
奄美
沖縄
宮古
八重山
台湾
フィリピン
奄美大島
徳之島
沖永良部島
東シナ海
伊平屋島
与論島
伊是名島
太平洋
沖縄島
浦添市
慶良間諸島
0
50km

第１図　浦添市の位置



第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅲ章　調査の経過

牧港補給地区埋蔵文化財発掘調査は昭和62年５月25日から昭和63年10月31日の期間で実施した。

発掘調査対象遺跡は城間古墓群・城間遺跡・嘉門貝塚の３遺跡で、城間遺跡と嘉門貝塚については建築工事の工程上から各２期に分け、城間古墓群、城間遺跡Ａ地区、嘉門貝塚Ａ地区、城間遺跡Ｂ地区、嘉門貝塚Ｂ地区の順に継続して発掘調査を実施した。

今回報告する城間遺跡については第１次に行った南側をＡ地区、第２次に行った北側をＢ地区とした。

昭和61年１月に実施した試掘調査の結果から城間遺跡一帯は石灰岩礫層と赤褐色土等の造成による客土が約1.5mの厚さで堆積していることから、Ａ地区については城間古墓群の調査と並行し、Ｂ地区については嘉門貝塚Ａの発掘調査と並行して那覇防衛施設局に客土の除去作業を実施していただいた。

第１次発掘調査（Ａ地区）

第１次調査は昭和62年７月２日から同年８月17日の期間で実施した。

表土（客土層）剝ぎ終了後に調査区に合わせる形で北東から南西のラインを主軸として調査区に１辺８mの方眼を設定した（第３図グリッド設定図）。

客土は1.5mまで除去され、その結果、Ｆラインを境に西は基盤の琉球石灰岩が露頭し、東では褐色土の分布がみられた。また、客土除去によってできた東側の壁面をみると、赤褐色土と石灰岩礫の互層が観察され、一帯は米軍基地として接収後、数回にわたる造成工事のあったことが窺えた。

調査は先ず、表面に散在する赤褐色土と石灰岩礫を取り除き、部分的に露出している褐色土の露出をＡラインの南側から始め、漸次西側へ移動していくことにした。

Ａ・Ｂラインでは石灰岩礫の除去は比較的容易であったが、Ｃラインでは昭和61年１月に実施した試掘孔の壁面より、造成時の石灰岩礫の堆積が約50㎝の厚さで見られた。そのため、再度Ｃライン以西をバックホーによる除去を行った。

調査区の北側は褐色土と基盤の琉球石灰岩の露頭が明らかであることから、調査の前半は調査区南側の褐色土の露出作業を進めた。

褐色土の広がりはＦライン以東に展開し、19ラインで狭まり、北側で若干の広がりをみせる。北側は23ライン以北の第２次調査区へ伸びていることが確認できた。

褐色土層の層厚、遺物包含状況を把握するために、南北を通るＣライン、東西を通る13・16ラインに幅１mのトレンチを設定した。遺物の出土状況は表面で陶器・カンザシ等が僅かに散見されるだけで、層中における遺物の出土は僅少であった。

トレンチ調査の結果、褐色土層下に黒色土層が確認された。褐色土層は遺物出土状況と土層が固く締まっていること等から土層観察用の畦を設け、バックホーで除去することにした。黒褐色土層を露呈させた後、調査区南側から発掘を開始した。黒色土層は調査区の南側ではDライン以東で見られ、北側では13ライン以北に広がる。

黒褐色土層を掘り下げ、南側と北側でそれぞれ1列の石列遺構が地山直上で検出された。

南側石列は、人頭大の石灰岩礫を20～50㎝の幅で黒褐色土層北縁のC－14グリッドよりA－15グリッドにかけて配される。東側はA－15グリッドの東壁内に伸びているようである。北側の石列遺構は地山を掘り込んで構築され、C－21グリッドの岩盤からC－23グリッドの北側にかけてみられる。本石列遺構は幅が150㎝あり、中央には幅50㎝の壁面を整えた石列、その東側は中央石列より若干小さめの礫を配し、西側は拳大の石灰岩礫で埋めている。

第2次発掘調査

第2次調査は昭和62年11月24日から昭和63年7月7日の期間で実施した。

本地区もA地区で見られたように、遺跡一帯には石灰岩礫と赤褐色土による造成工事が行われている。

客土除去後の状況は、調査区北西部には基盤の石灰岩が露頭し、東側は褐色土が部分的に確認でき、それ以外は石灰岩礫と客土が見られた。

調査は先ず、調査区全体の層序の把握と遺物包含層の範囲を把握するために、トレンチを東西に1本（Aトレンチ）、南北に2本（1・2トレンチ）を任意に設定して確認作業を進めた。1トレンチでは北側に琉球石灰岩の岩盤が露頭し、南側では客土の堆積が見られた。2トレンチの東側は表面の客土を除去する際の石灰岩礫と褐色土の混在する残土が残るものの、10～30㎝で残土を除去すると、未撹乱の褐色土層が露呈した。西側は1トレンチの南側で確認できた石灰岩礫層が約1m堆積し、下部には褐色土層が確認できた。

Aトレンチでは東側は残土を除去すると褐色土層、中央部では石灰岩の岩盤、西側は約2m掘り下げても客土層であった。

その後、詳細に把握するために東西に7本、南北に4本のトレンチ、褐色土層の分布する調査区東側一帯に8ヵ所の試掘グリッドを追加した。

その結果、褐色土の存在する範囲は調査区の東側に限られること、また、褐色土層下に黒色土層の存在が確認された。

調査区の中央部から西側一帯に広がる石灰岩礫層と撹乱土は、再度バックホーとトラックでもって除去した。調査の前半は東側の石灰岩礫層と撹乱土の除去、褐色土の露出作業を続けることにした。

東側は客土を除去し、褐色土層を露呈させた後にグリッド設定を行った。

前述したとおり本地区は石灰岩礫による石列と石敷が確認されており、その検出作業を進め、褐色土層に掘り込む状態で複数の石列と石敷が確認された。石列と石敷遺構の中には地山の赤土直上に配置するものもある。また、部分的に石灰岩の岩盤を掘り込んだ「T」字状の溝遺構も検出された。溝の両側あるいは片側には石積みが認められる。

F－31グリッドでは円形の掘り込み炉址、E－28グリッドでは窯状遺構も検出された。E－28グリッドで検出された窯状遺構は、北側は円形、南側は方形の竪穴を有し、前者の壁面と床面は明橙色の焼土となっている。また、いずれの竪穴にも琉球石灰岩礫が床面に存在する。

石列及び石敷遺構と溝遺構は写真測量で行い、遺構をそのまま残して褐色土層の発掘を続行した。

北東部の褐色土層からは先史土器の細片が僅かに採集されるだけで、遺物の包含は極めて低かった。溝遺構の北側（調査区の北東部）では、褐色土層の下位に黒褐色土層、そして地山の赤土となる。地山ラインはE－34グリッドを最低部としたナベ底状を形成する。

南東部では石敷と溝遺構の間に連なる石積みは褐色土層を掘り込んで構築される。本地点においても褐色土層からの遺物の出土は僅少で、石敷と石積み遺構より僅かに陶器片が得られた。黒褐色土層発掘後の地山面は全体的にほぼフラットで、D－26グリッドとE－28グリッドの窯状遺構の周囲で柱穴状の落ち込みが多数検出されている。

東部一帯の発掘調査と並行して北西部と南西部の発掘調査を行った。

調査区の西部一帯は、客土を除去し、遺構と遺物包含層の確認のために南北に2本（第5・6トレンチ）、調査開始後に設定したA・D・Eトレンチを延長して調査を始めた。

トレンチ調査の結果、西部一帯は北側より南側へ緩やかに傾斜し、北側は琉球石灰岩の岩盤が見られ、N－32グリッドと南西部を除く部分は地山の赤土層が露呈された。中央部ではほぼ南北に連なる石列と黒色土層が確認された。

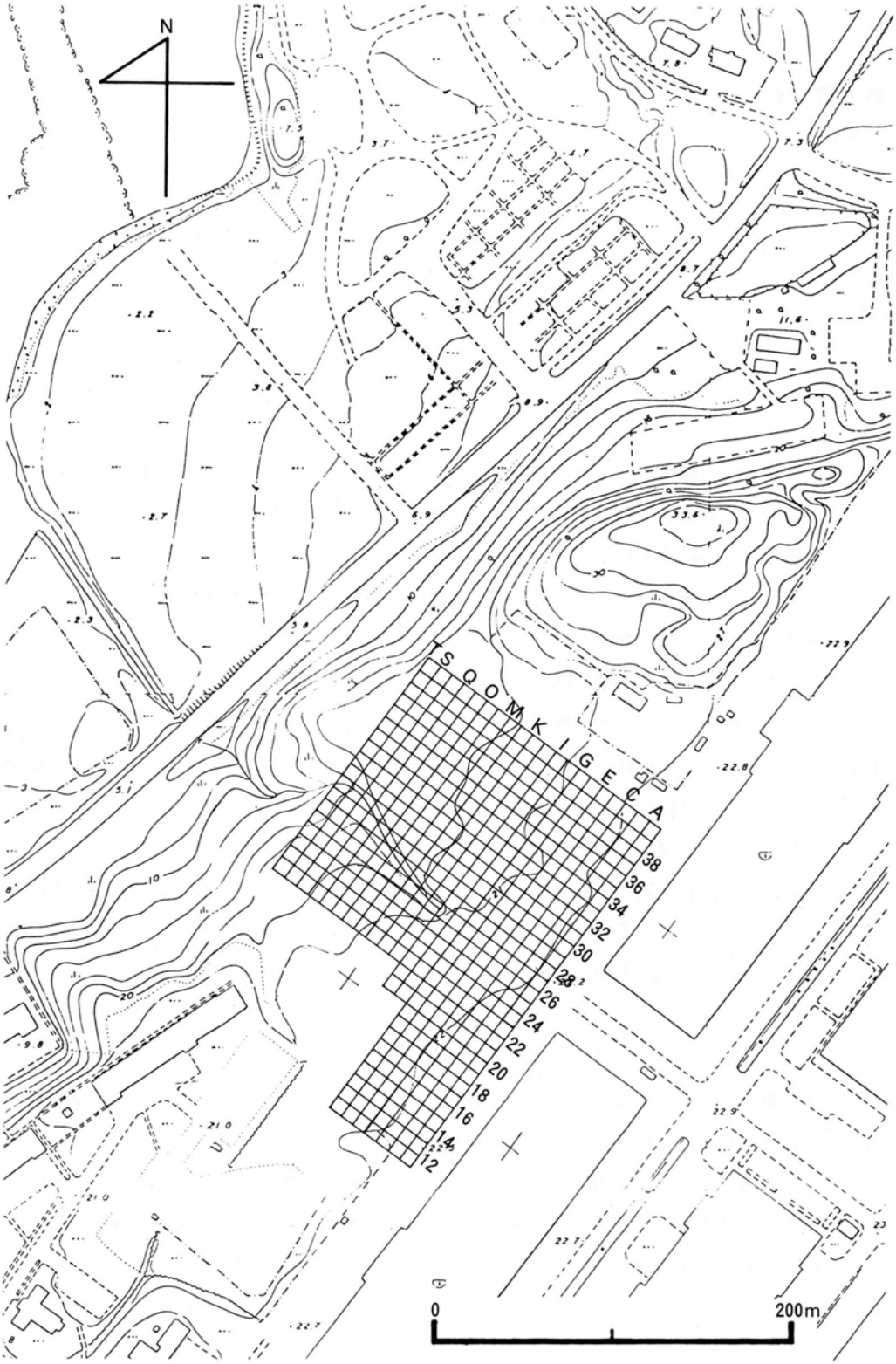
調査区西部の中央で検出された石列遺構は地山直上に僅かに残る褐色土層上にあり、石列の南側は北側より1段下がる位置に配列される。

石列の東側に先史遺物を含む黒色土層が分布し、黒色土層に土層観察用の畦を東西に1本、南北に2本設定した。層厚は厚いところでも10㎝と薄く、遺物の包含量は僅少であった。地山の赤土面では53基の柱穴状の落ち込みが検出されている。

南西部の調査区は標高が最も低い場所（標高15m）で、中央を小河川が縦断している。そのため、雨が降ると調査区に泥水が流入することもあった。

本区は河川の両側（北側に1ヵ所、南側に2ヵ所）に黒色土層の分布がみられた。比較的広い範囲に広がる川の北側と南側の2ヵ所では黒色土層を4分割するように畦を設定して発掘を行った。

遺物の出土は川の北側で最も多く、土器、石器、古銭等が出土している。また、円形の炉址、集石遺構、石列遺構が検出されている。地山面では39点の柱穴状遺構が確認できた。



第3図　グリッド設定図

第Ⅳ章　調査の成果

第1節　層　序

層序は、同遺跡をAとBの2地区に分けて調査時期を変えて発掘調査を行ったことから地区別に略述する。

A地区の層序（第4図）

城間遺跡A地区の発掘調査対象区と東側に位置する対象外が同地区の層序を理解する上で条件が良い「壁面」であった。グリッド設定図で言うところのほぼAラインの東壁である。以下、層序について略述する。

第1層　琉球石灰岩礫あるいは粉末からなり、同層の下方には転圧で強固に固まった15～20㎝の層が見られる。同層は全体的に上下の面ともほぼ水平で層の厚さ60～80㎝を測る。既に隣接して所在する施設（大型倉庫）を造る際の敷地造成の層であろう。

第2層　本層は赤褐色土に第1層に見られる琉球石灰岩礫を多量に含む層である。石灰岩礫の混入に自然の法則性が認められないこと、層にしまりが無いこと、さらには、現代遺物を含むことから自然堆積の層でないことがわかる。また、同層は上面が水平で層の下の面が起伏がある。客土と推察する。

第3層　前述の第2層とほぼ同じ性格の層である。前者の層に比較して石灰岩を主体にすることから層を分けた。しかし、造成工事を想定するとき部分的な層の変化の可能性も考えられる。あるいは、時期を異に造成層かも知れない。層の厚さは約20～65㎝を測る。

第4層　赤褐色土に石灰岩の小石を含む層である。層の厚さは、12～30㎝を測るが、全体はほぼ水平に堆積している。一帯を造成する際に同地点を均した層と思われる。後述の遺物の項では、同層以上を第Ⅰ層とした。

第5層　旧表土と思われるもので褐色を呈する土層である。層の上部35～40㎝は撹乱、下部20㎝は未撹乱である。層は、ほぼ水平の堆積である。遺物は上部で昭和の遺物より近世琉球の遺物がごく僅かに検出される。遺構は、石列が確認された。後述の遺物の項では、同層を第Ⅱ層とした。

第6層　発掘区の東壁から西側に広がりが確認された黒褐色土層である。土は細かく、泥質的である。遺物は殆ど含まない。層の厚さは、厚い部分で14㎝前後を測る。後述の遺物の項では、同層を第Ⅲ層とした。

第7層　赤土（地山）であるが、場所によっては、琉球石灰岩の岩盤が露出するところもある。

B地区の層序

同地区は、A地区の北に隣接する。同地区の大半は、基本的にA地区の層序と変わりない東部および北西部と貝塚時代後期に相当する包含層を確認できる南西部がある。

以下、貝塚時代後期の包含層が確認されている南西部を中心にし、東部および北西部についてはA地区と異なる部分について略述する。

東部および北西部（第4図）

東部は、第1層から第7層まで基本的に層序はほぼ同じである。従って、調査にあたっても第4層までは重機による除去作業を行った。

第5層は、厚い部分で約1.2mを測った。同層の撹乱部分20～40㎝を発掘すると石列、石列と石敷の組合せが確認され、場所によっては、赤土の地山や岩盤と面的につながるところも見られた。後述の遺物の項では、同層を第Ⅱ層とした。

第6層は、同地の北側で最も厚く、約2mの層厚が確認された。これは、東部の北側に鍋底状の地山の落込みがあったためと推察される。また、同地点の層は第6層の特徴である泥質の黒褐色土が基本であるが、層の途中に黄褐色土が約40㎝確認された。後述の遺物の項では、同層を第Ⅲ層とした。

第7層は地山であるが地形の起伏によって違いが多少見られた。下がった地形の部分は赤土の地山で、多少上がった地形の部分は琉球石灰岩の岩盤であった。地点で見ると東部の大半は、赤土の地山で部分的に琉球石灰岩岩盤が確認された。西部は大半が琉球石灰岩の岩盤で部分的に赤土の地山が確認された。

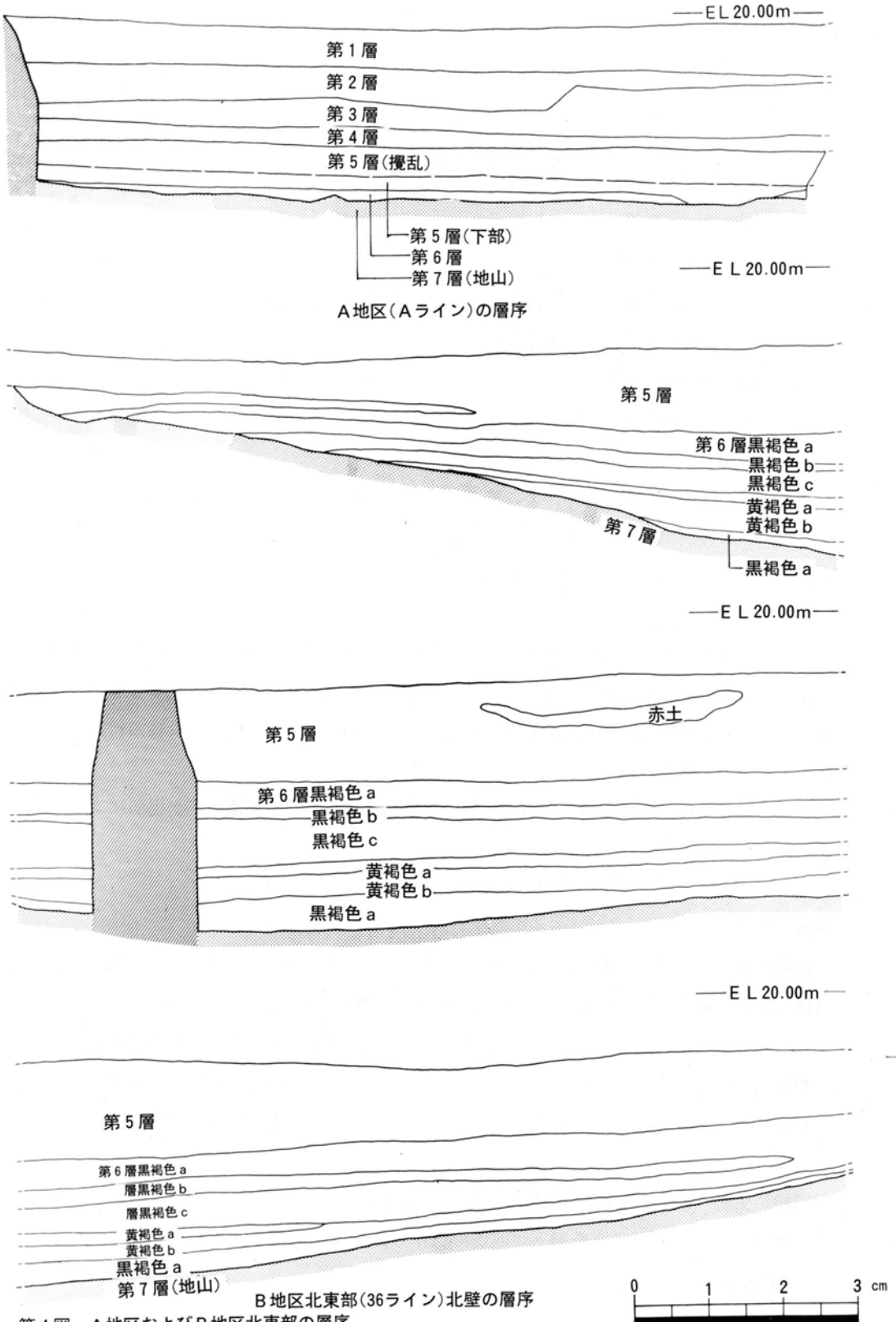
岩盤を掘り込んだ溝状遺構、岩盤上に敷いた敷石遺構および石列遺構等が場所によって確認された。

南西部（第5図）

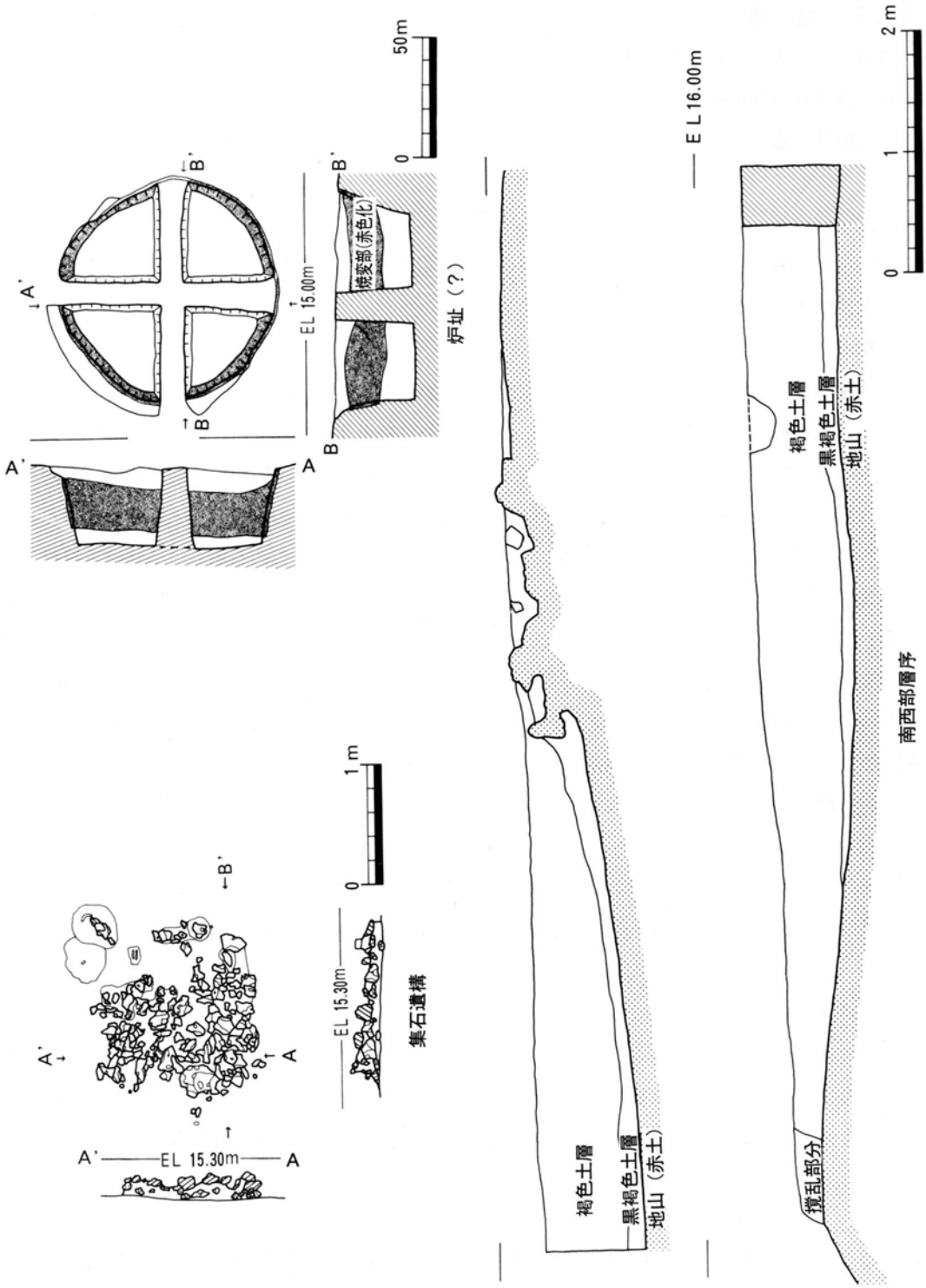
同地点は、地形上の諸条件から自然に形成された溝あるいは後世に成形された溝が調査区のほぼ中央より東から西側に走る。層序は、他の区と層の特徴、層の順位等ほぼ同じである。しかし、異なる点は、他の地点で黒褐色土としている層にあたる部分から貝塚時代後期相当の遺物や開元通寶（古銭）が検出されることである。さらには、黒褐色土層の下にある地山面（赤土）より柱穴状の落込み、炉址、石列等も確認された。以下、黒褐色土層のみについて概述する。

黒褐色土層（後述の遺物の項では、同層を第Ⅲ層とした）

本層は、層の厚さ約10㎝を測る。同層の広がり部分より前述の溝が走る。層の広がりは約150㎡である。



第4図　A地区およびB地区北東部の層序



第５図　南西部の層序と集石遺構・炉址（？）

第2節　遺　構

遺構は、調査の経過および層序で既にふれているように石列、石敷、窯跡？、炉址、溝、柱穴状の落込み群等が確認されている。ここでは、層序との対比をある程度可能にするため調査区別に略述する。

A地区

旧表土と思われる褐色を呈する土層（第5層）で石積みと石列が確認された。石積みは調査区の北側で確認され、石列は南東側で確認された。

＜石積み＞

同石積みは、北東側から南西側に幅40㎝、長さ17mにわたり確認された。同石積みは、人頭大の石（琉球石灰岩）を両側に面を意識して並べられているように見えた。また、石の隙間は小さな石で埋めていた。下方は、地山を幅120㎝、長さ17m、深さ20～30㎝を堀り込み、人頭大から拳大の石を詰め込んだ状況が認められた。同部分は、石積みの基礎部分と推察するが、これを裏付ける資料は提示できないので、今後、更に検討したい。この石積みにつながる遺構が、後に調査したB地区より確認されている。

＜石　列＞

同石列は拳大の石（琉球石灰岩）からなる幅20～30㎝、長さ760㎝のものである。石列の西側については現状でほぼ終了すると推察するが、東側は東壁（発掘調査対象外）に延びる。石列の下は、地山を僅かに掘っている。前述の状況から推察して、石列は、高さをあまり持たないもの（膝下）であったと思われる。

B地区

同地区では、前述のA地区石列の延長の石列とこれにつながる溝遺構の外、石列、石敷き遺構、窯（？）遺構、炉址（？）、落込み群（柱穴？）等が確認されている。以下、前述したように調査区別に略述する。

東部および北西部

東部はA地区につながりが推察される石積みと溝の組合せた遺構、その他の石列4基、石敷き遺構6基、窯遺構2基、落込み群（柱穴？）1ヶ所が確認された。北西部では、石列1基のみ確認された。以下、ここの遺構について略述する。

＜石積み＋溝の遺構＞

同遺構は、東部の中央から南側に総延長約52m、上面形略「T」の字状で確認された。「T」の上の横線に相当する部分は約34mで東西に走る。溝は横断面「U」状で多少曲線を描く。前述の溝は、琉球石灰岩（基盤）および赤土（地山）を20～120㎝掘込み、その両側あるいは片側に拳大から人頭大の石灰岩を1段～4段（20～60㎝）、幅60～200㎝の石積みが確認された。

「T」の縦線に相当する部分は、約18mで上部と中部および下部では遺構の状況が多少異なった。上部は地面が琉球石灰岩からなり、溝のみが確認された。中・下部は赤土（地山）の地面に位置する部分で石積み（高さをある程度持つと思われるもの）の両側に石積み（基礎工事的性格とおもわれるもの)、さらに、東側の「レ」状の掘込みからなる。前述の石積みの片側（西側）は拳大前後の石からなり、幅160㎝前後で積まれていた（積むより、詰めるが適切な表現かもしれない)。東側に位置する石積みは、人頭大から拳大の石を用いて積まれたもので、外側には大きな石を土を掘って配置していた。

遺構の機能は、排水の為の溝と一定の区画をする石積みを兼ねたものではないかと推察する。造られた年代ついては判然としないが、検出されている陶磁器の時期の範囲であろう。

＜石敷・石列遺構＞

石敷および石列は、地面を僅かに掘って石を置いたものと地面に直接石を置いたものがあり、石の大きさは人頭大から拳大の石で、加工は認められなかった。

北東部で石敷９基、石列１基。南東部では石敷３基、石列１基が確認された。２つの遺構とも石の状態から推察して高さは積めなかったと思われることから、その機能は区画あるいは工作物等の基礎部分ではないかと推察する。以下、遺構の大きさのみを報告する。報告は遺構番号、遺構の縦×横のサイズ、遺構の種類で記述する。

北東部①9.5×１m、石敷。②17×２m、石敷。③3.6×1.5m、石敷。④4×1m、石敷。⑤19×0.25m、石列。⑥16×２m、石敷。⑦３×１～２m、石敷。⑧19×１～４m、石敷。⑨6.5×１m、石敷。⑩16×２m、石敷。

南東部①6.5×2.5m、石敷。②14×1.5m、石敷。③16×1～1.5m、石敷。④18×0.3m、石列。遺構の①、②、④については、地面の掘込みが確認された。

各石敷および石列の造られた年代は判然としないが、検出されている陶磁器の時期を想定したい。また、全ての石敷および石列が同時期に存在したかであるが、北東部の一部に時期が多少異なるものがあったと思うものの、その大半は、遺構の造り等、その内容がほぼ共通することから同時期に造られたと想定したい。

＜窯遺構＞

２基確認された。いずれも調査区の南東部で検出された。以下、ここの遺構についてA・B遺構として略述する。

A遺構は、円形と横長の方形をつないだ平面形を呈する。円形部分の径は135㎝、深さは25～40㎝で、たき口へ掛け深くなり、傾斜角度６°を測った。方形部分は横位185㎝、縦位140㎝、深さは30㎝を測った。火の影響を受けている部分は、平面形が円形を呈する部分のみである。火の影響で土が赤色に変色している部分は、厚いところで13㎝を測った。発掘の際は、スミや拳大の石灰岩が僅かに検出された。F－31グリッド内の検出である。

B遺構は、隅丸のひし形（湾曲する）と横長の方形をつないだ平面形を呈する。ひし形部分

は、長いところで130㎝、短いところで100㎝、深さは45～50㎝を測る。同部分は、たき口よりやや奥に一番深いところがあり、奥に掛け約8°の傾斜角度であがる。火の影響で土が赤色に変化しているところは、厚いところで15㎝を測った。方形部分は、横250㎝、縦120㎝、深さ50㎝を測る。同部分の下場は、上場より多少小さくなるが形状的には殆ど変わりない。また、上述部分とのつなぎは片側に寄っている。発掘の際は、拳大の石が掘込み部分より検出された。

先述した2基の機能と年代であるが、機能については、窯であったと推察するものの「何の窯」かが判然としない。ただ、この遺構については発掘調査を実際に行った下地　傑氏（現：石垣市教育委員会職員）が調査中に製糖用の窯として捉えられないかとの意見があったことを添えておきたい。年代については、他の遺構とほぼ同じ時期と推察する。

＜落込み群＞

落込み群（柱穴？）は、前述の「窯遺構」の炉の周辺に確認できる群と窯遺構から少し離れて落込みの分布がやや方形状を呈する群、その他の落込み群に大別された。落込みは大半が比較的浅く、明確なプランを摑めるものはなかった。

南西部

同地点は石列2基、落込み群（柱穴？）1ヶ所、炉址（？）、集石1基が確認されている。石列のうち1基は前述した北東部の石列とほぼ同じもので、保存の状況も良くはないことから省略する。以下、ここの遺構について略述する。

＜落込み群＞

落込みは、同地点を東西に走る溝の北側で39個、南側で53個確認された。これらの落込みで、深さが15㎝を越えるものとするフィルターをとおして見たところ、北側の落込み群の中から方形状のプランらしいものが2つ見られた。南側の落込み群については、規則性のあるプランは確認できなかった。

フィルターとしての深さ15㎝であるが、同地点での落込みの場合、やや深さを感じるもの（柱穴の可能性を想定）の一定の線が前述数値であったことに起因する。前述の数値より浅いものは10㎝前後が2・3例あったが、その大半は5㎝に満たないものであった。

＜炉址（？）＞

同遺構はP－25・26グリッド間の39個の落込み群の南東外側で確認された。平面形は、ほぼ円形で直径90㎝、深さは約30㎝を測った。なお、下場の直径は上場より10㎝前後内側に入り若干小さくなる。落ち込んだ部分の面は火の影響で赤色を呈し、赤色土は厚いところ2㎝を測った。

同遺構は、発掘調査時に炉址として扱って来たため名称を「炉址？」としたが、これまで沖縄県内から検出されている貝塚時代の炉址の中では、落込み部分がやや垂直で深いことから、炉址とした場合は炉の変遷・種類を示す重要な資料ということになろう。しかし、同遺構につ

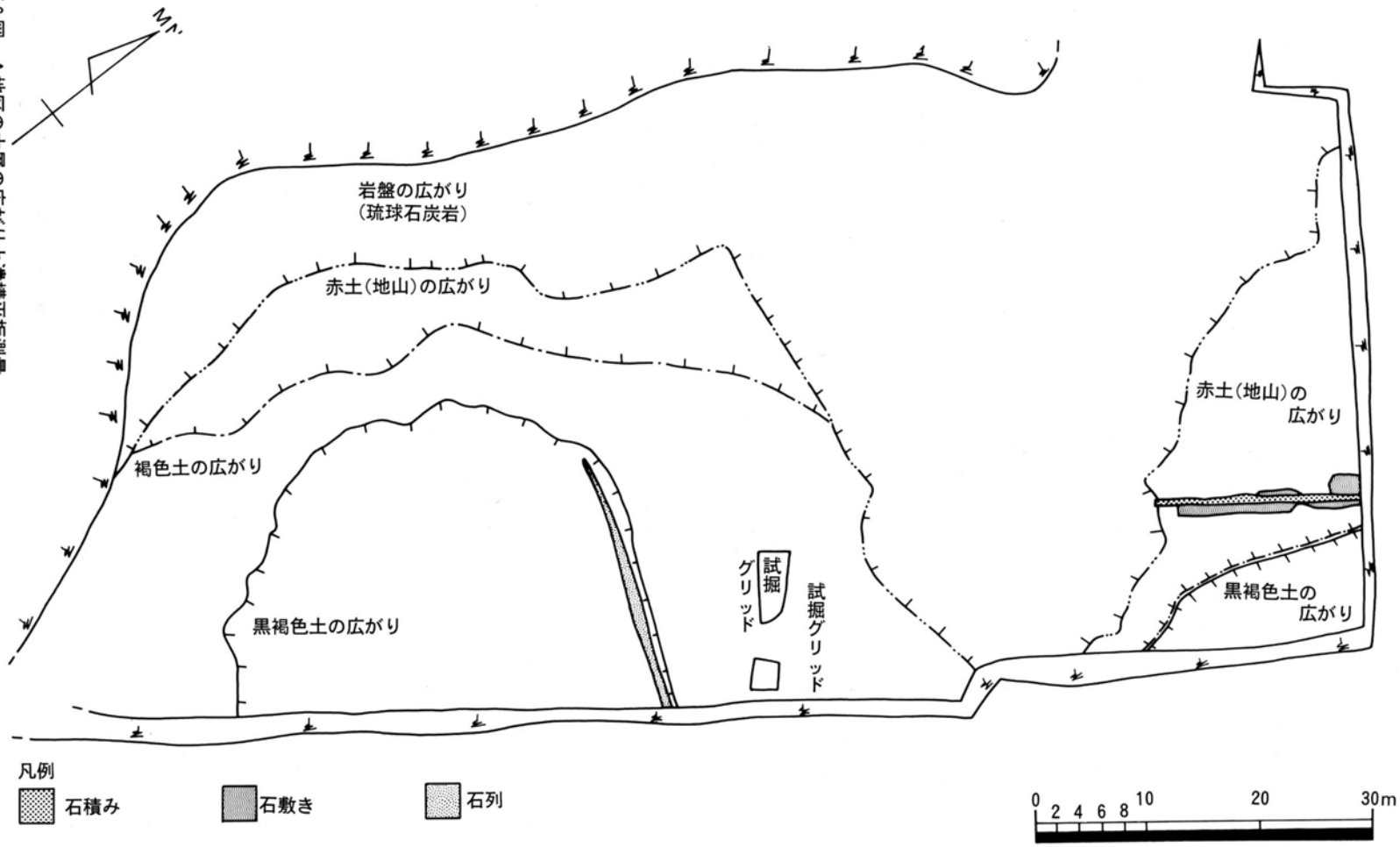
いては窯等を含めた機能の検討が必要と思っているところで、今後の類例を待って機能等について再考察したい。遺構の時期については、後述する土器の第２類の時期と見ている。

＜集石遺構＞

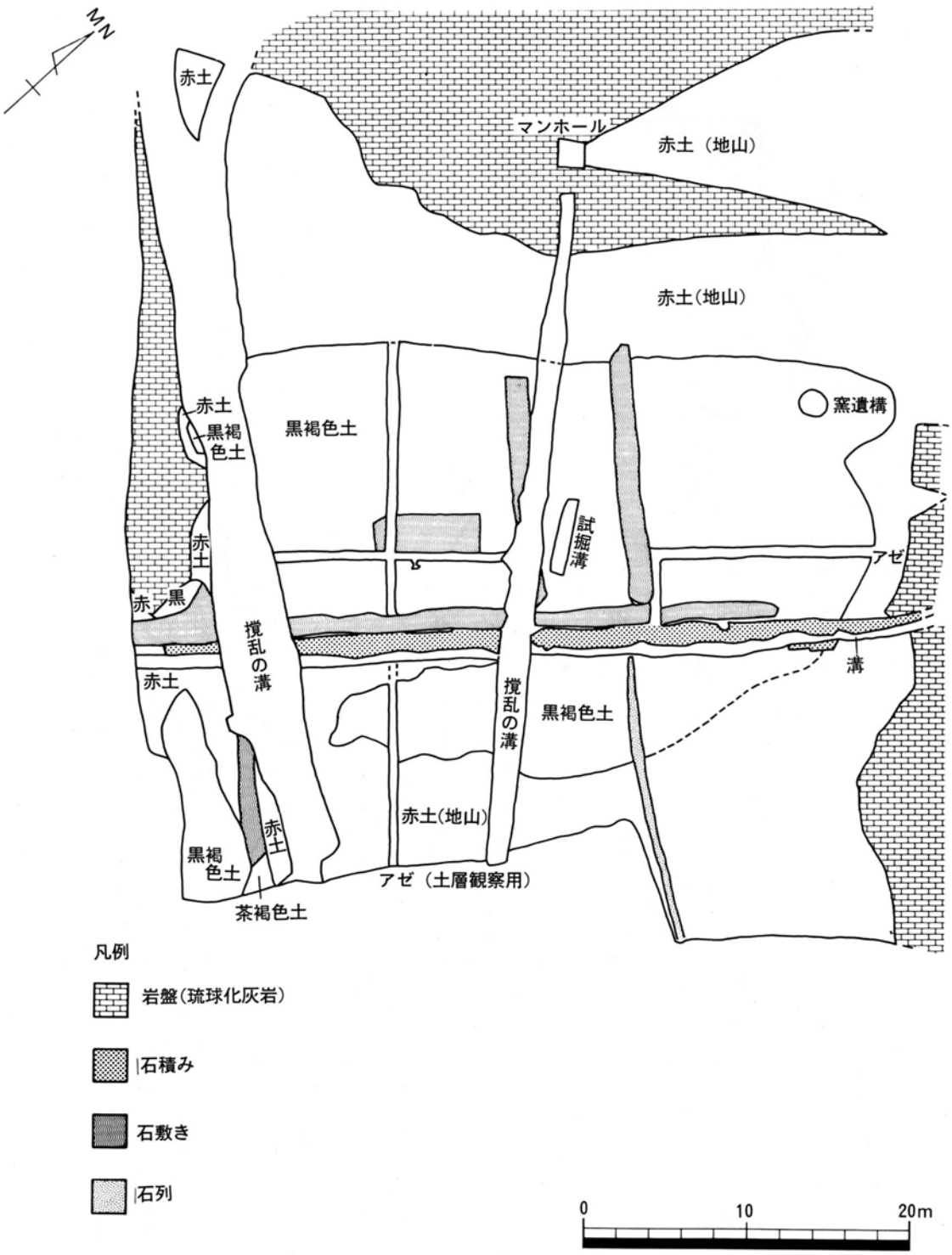
Ｐ－25グリッドの39個の落込み群のほぼ中央で検出された。平面形は横110㎝、縦100㎝のほぼ方形で人頭大の石が２・３あるものの、大半は拳大の石からなっていた。厚さは20㎝を測った。同遺構の機能については、今後に検討したい。時期は土器の第２類のころと推察している。

＜石　列＞

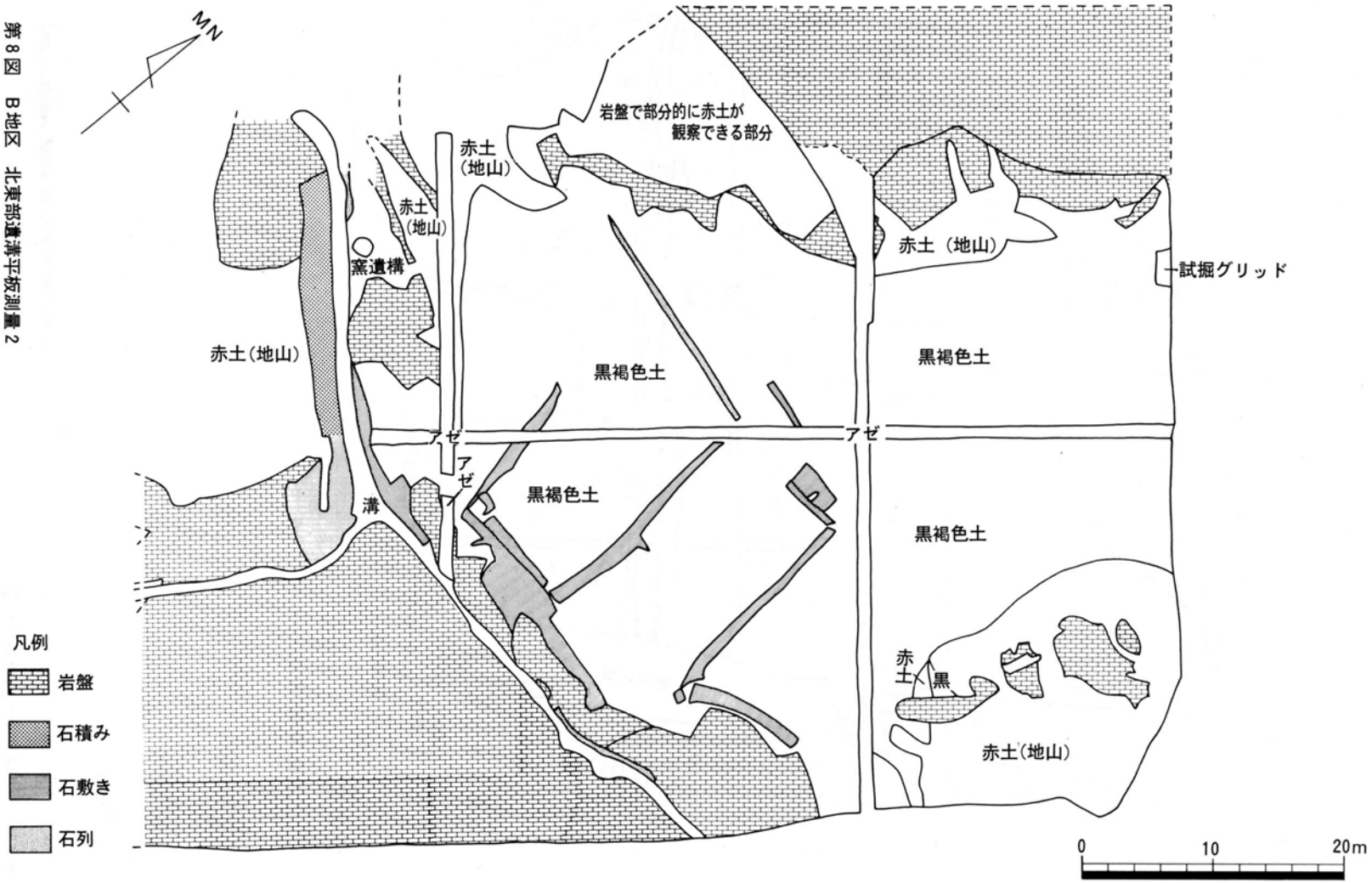
Ｐ－25グリッドの39個の落込み群の東に隣接して南北に走るように長さ約350㎝、幅約40㎝が確認された。石は琉球石灰岩が用いられており、落込み側に拳の２倍程の石を並べ、その外側には拳大よりやや小さい石の並びが見られた。前述の石列が住居址を囲うものであったかどうかについては、保存が悪く判然としない。時期は土器の第２類のころを推察している。



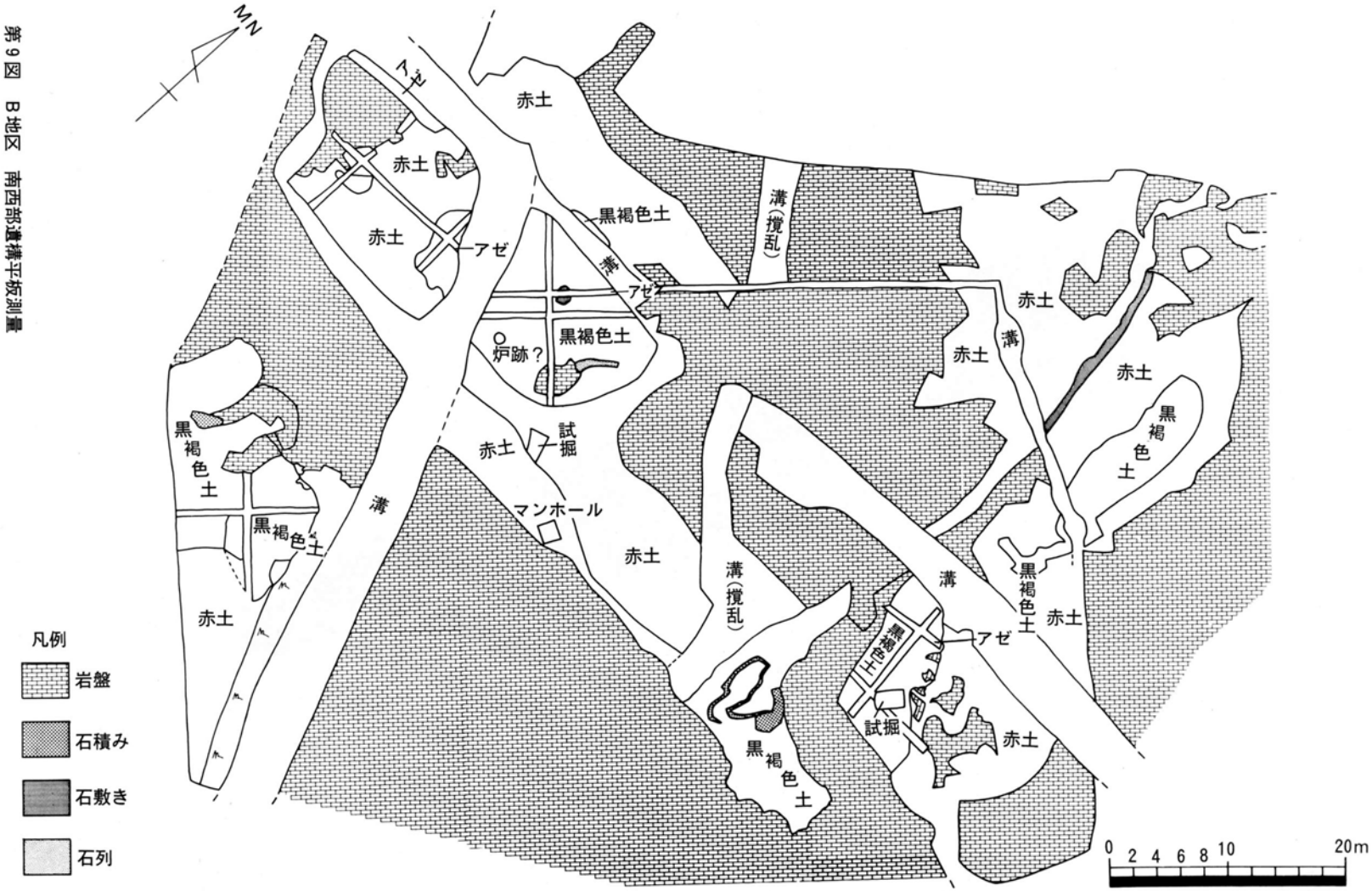
第6図　A地区の土層の広がりと遺構平坂測量



第７図　Ｂ地区南東部遺構平版測量１

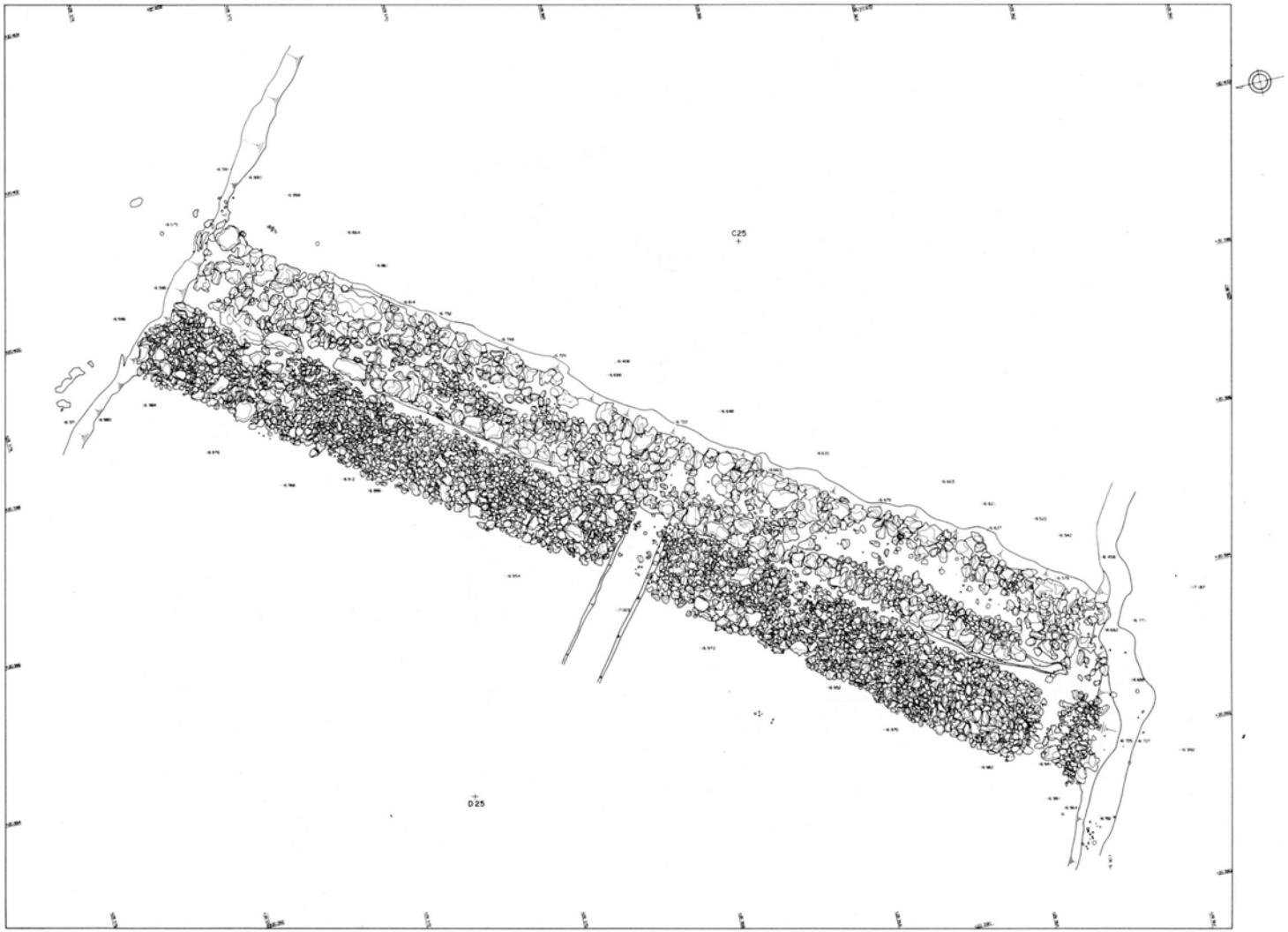


第8図　B地区　北東部遺構平板測量2



第9図　B地区　南西部遺構平板測量

城間遺跡石敷遺構平面図Ⅰ－4

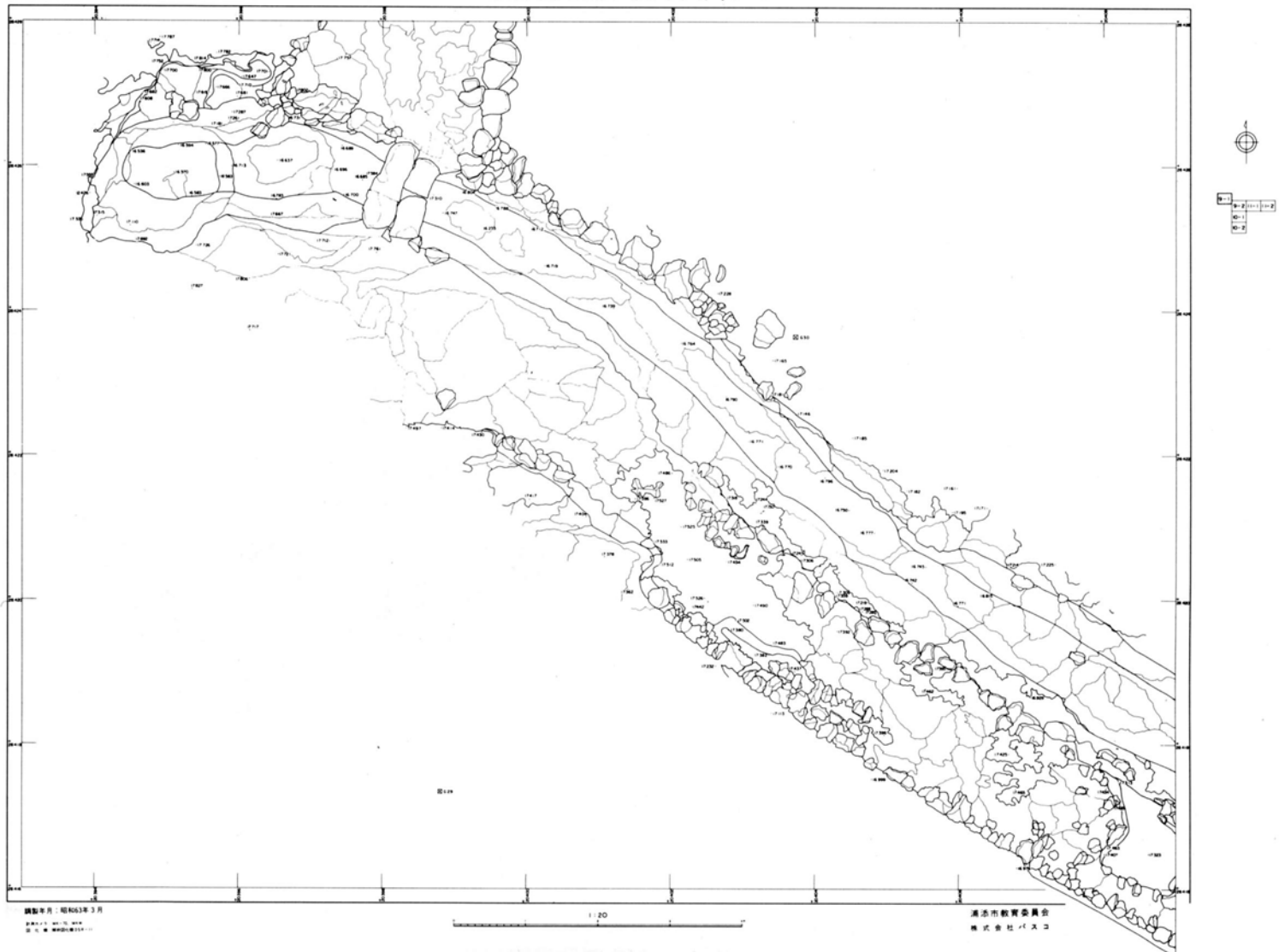


調製年月日：昭和62年3月
計測カメラ：MK－70、MKW
図化機名：解析図化機DSR－11

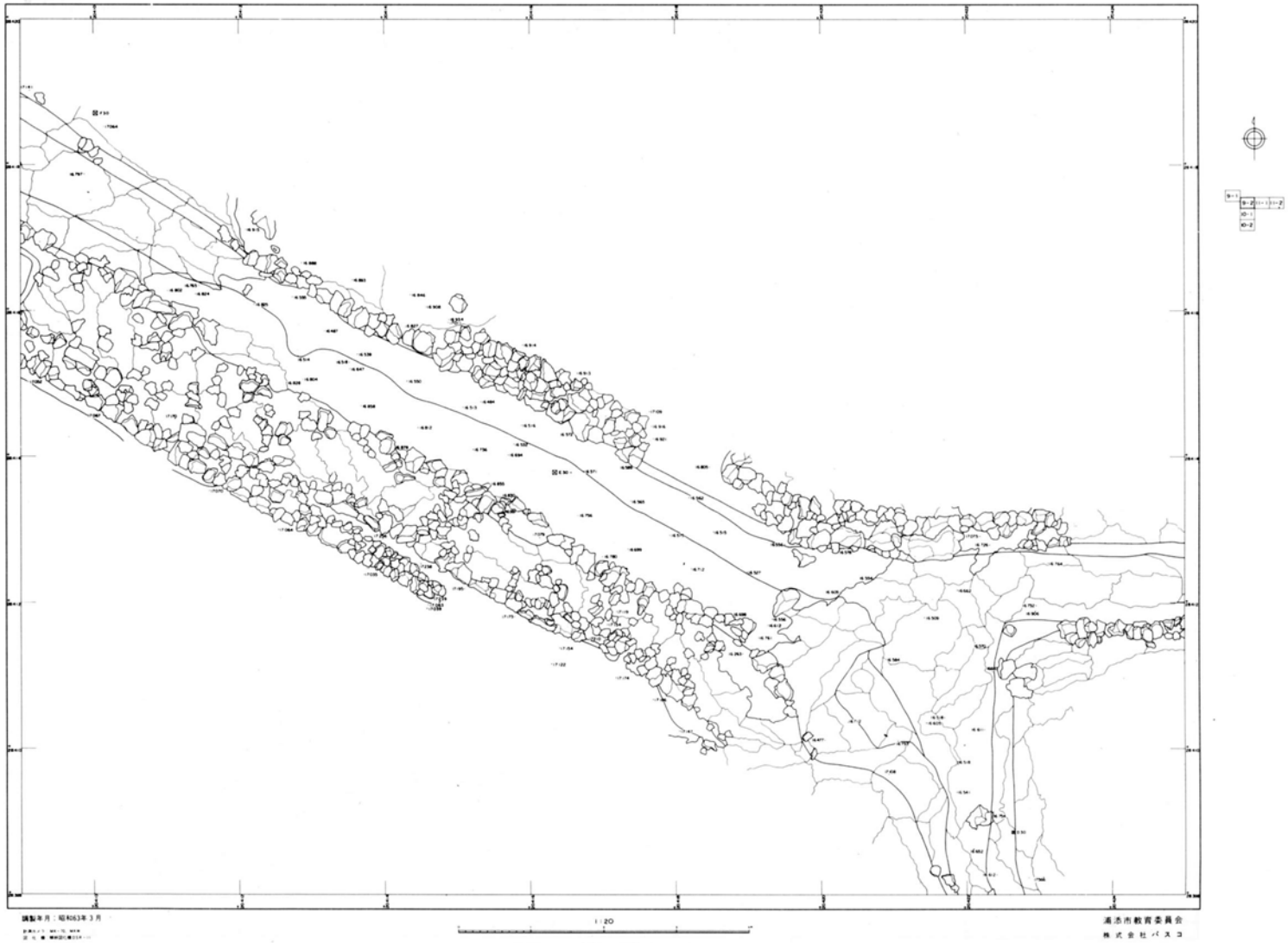
1：20

計画機関 浦添市教育委員会
作業機関 株式会社パスコ

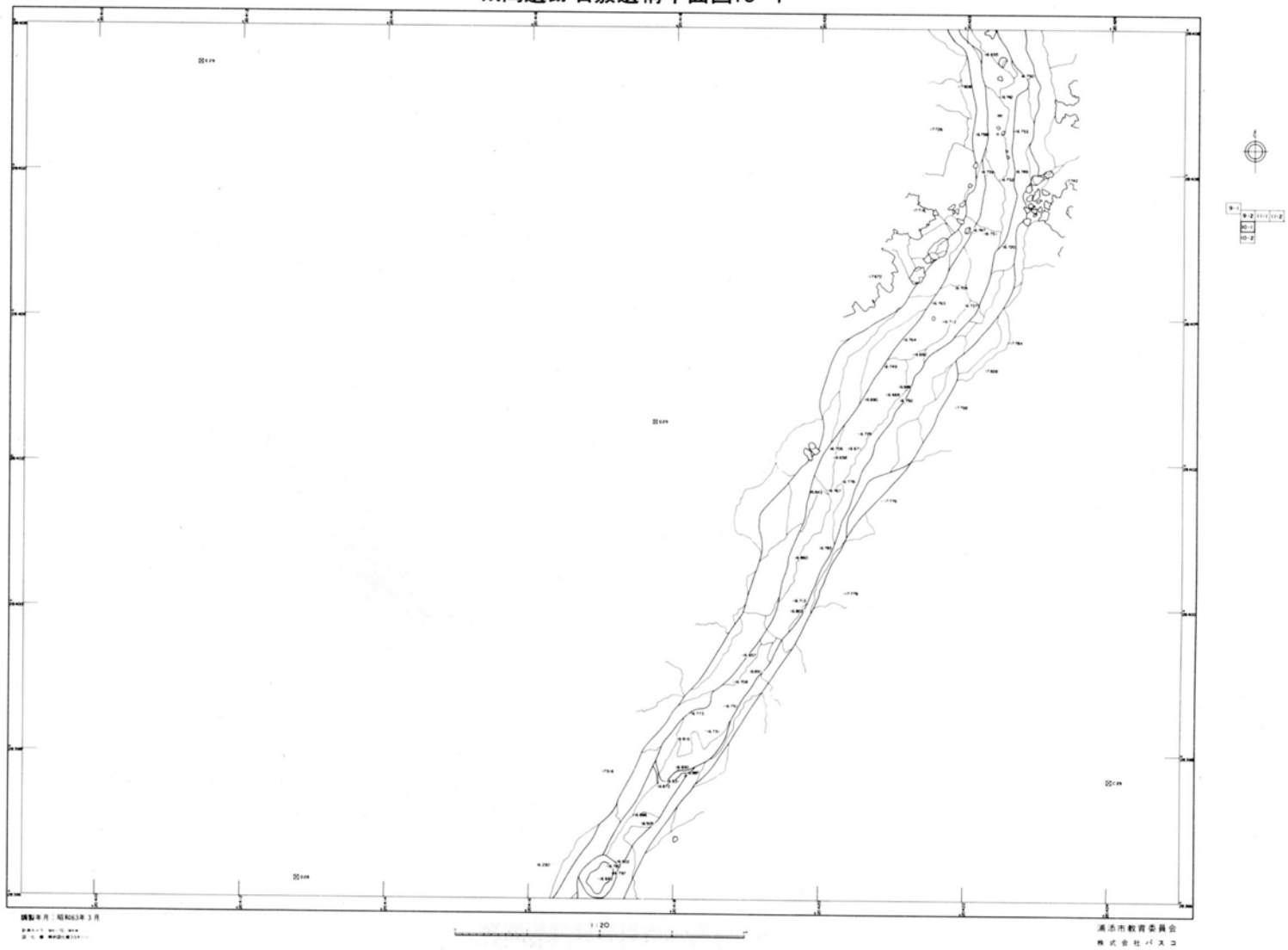
城間遺跡石敷遺構平面図9-1



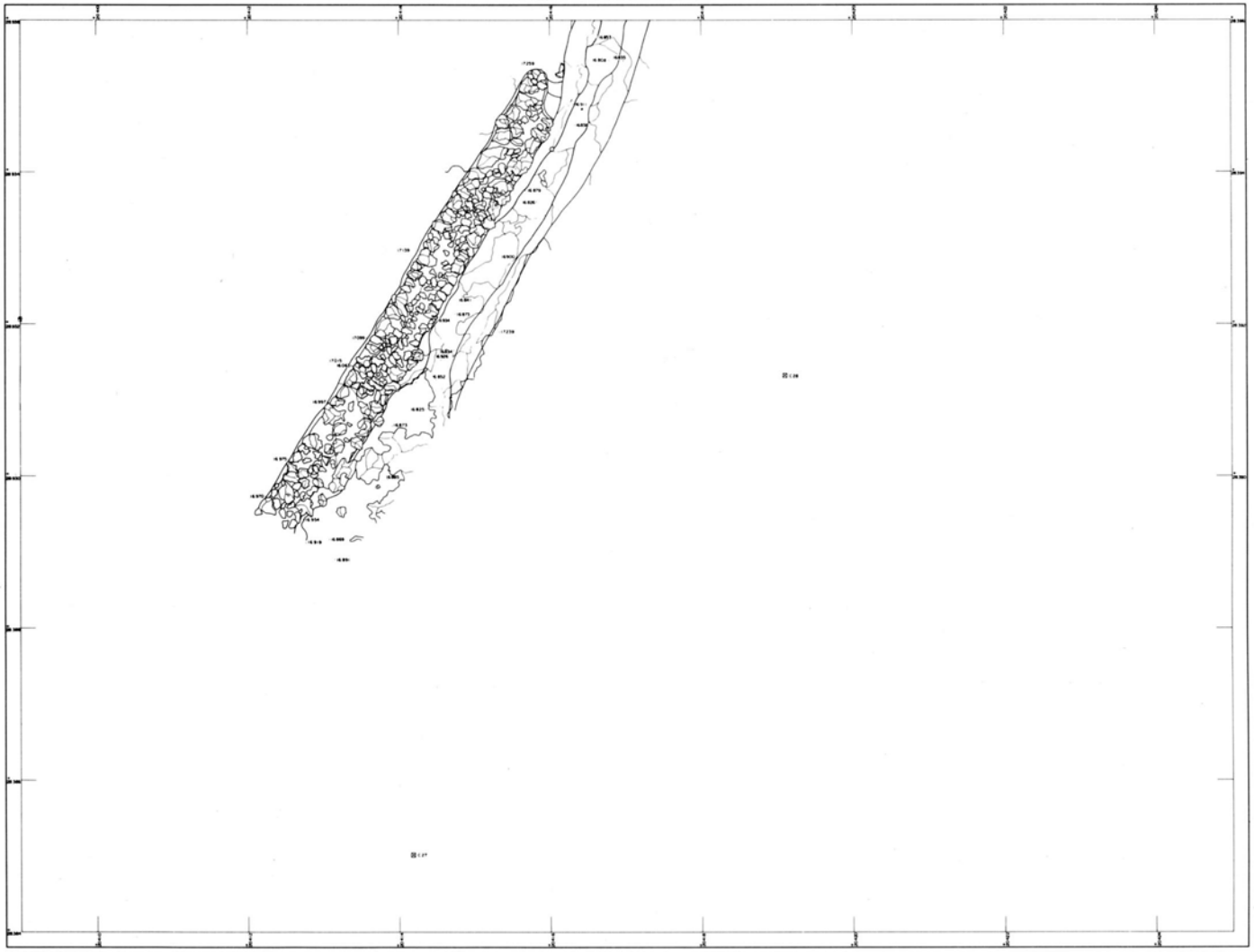
城間遺跡石敷遺構平面図9-2



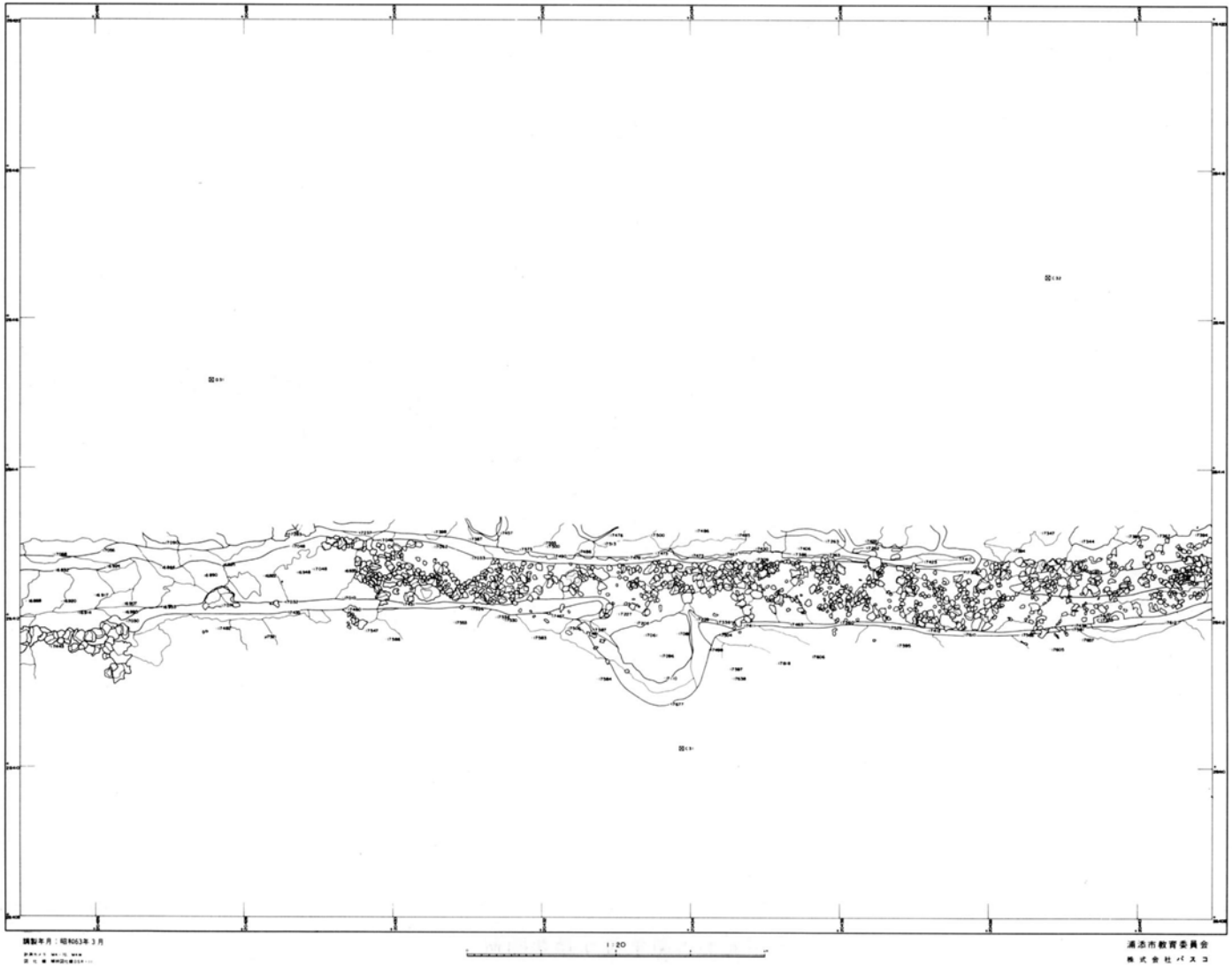
城間遺跡石敷遺構平面図10-1



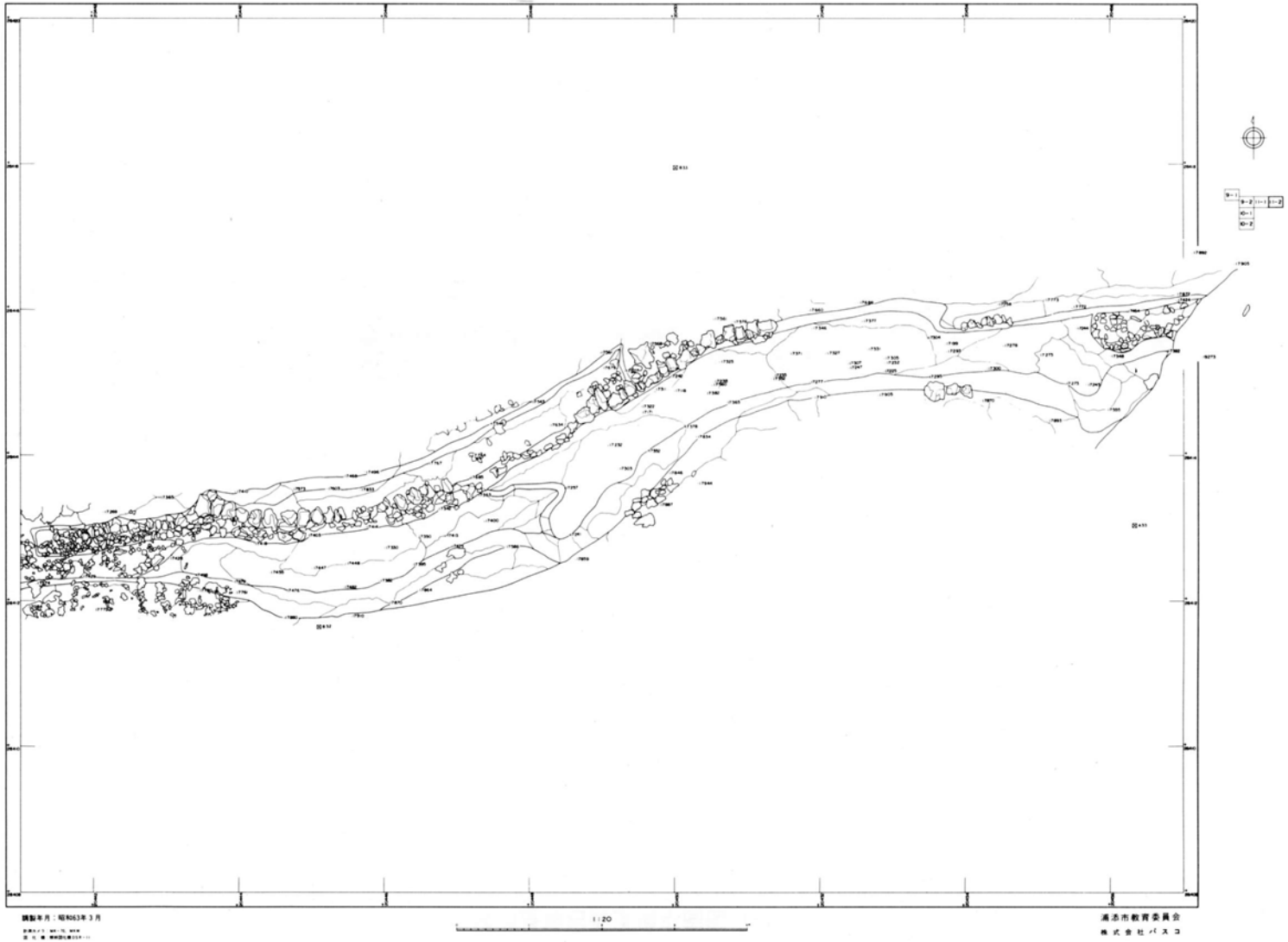
城間遺跡石敷遺構平面図10-2

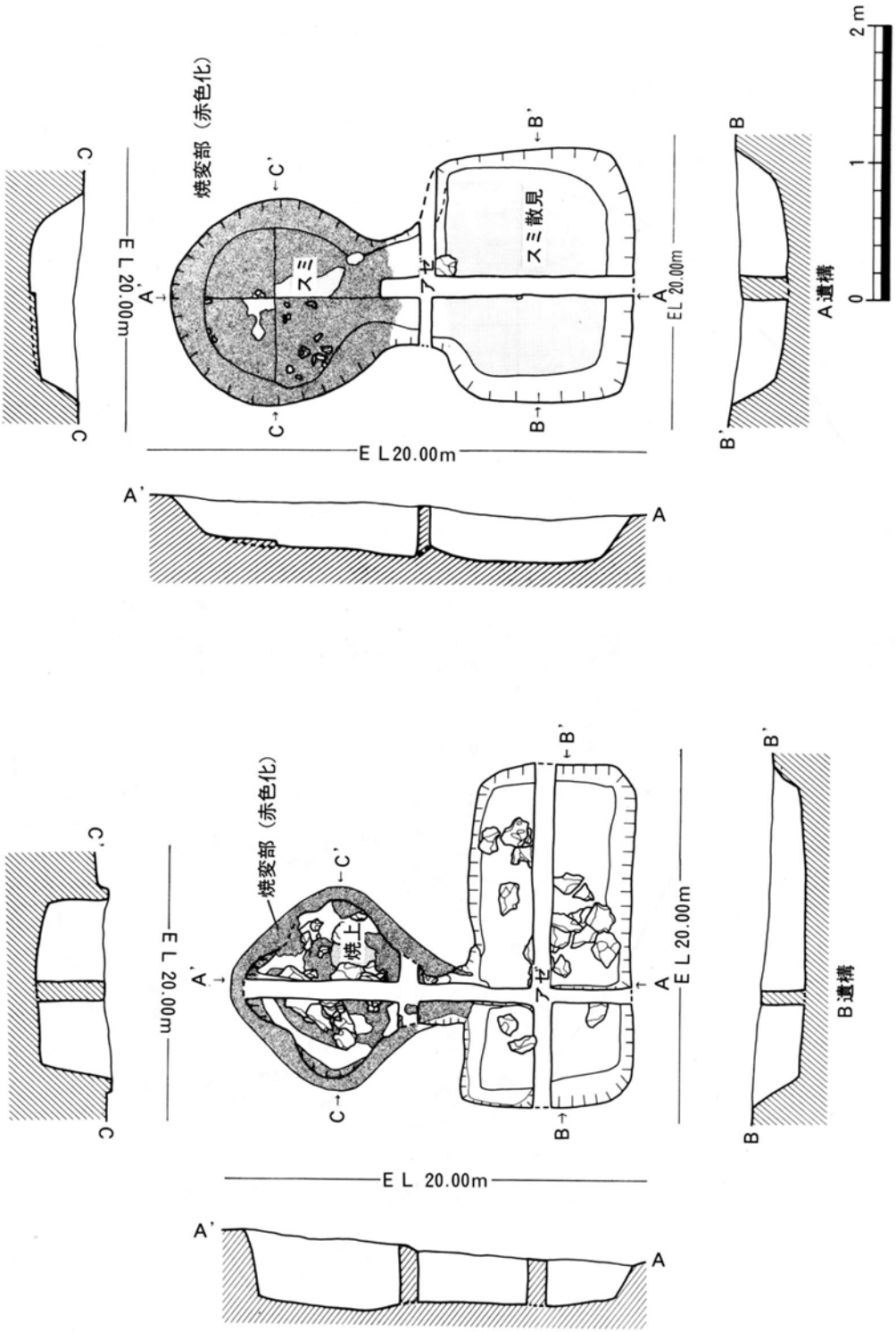


城間遺跡石敷遺構平面図11-1

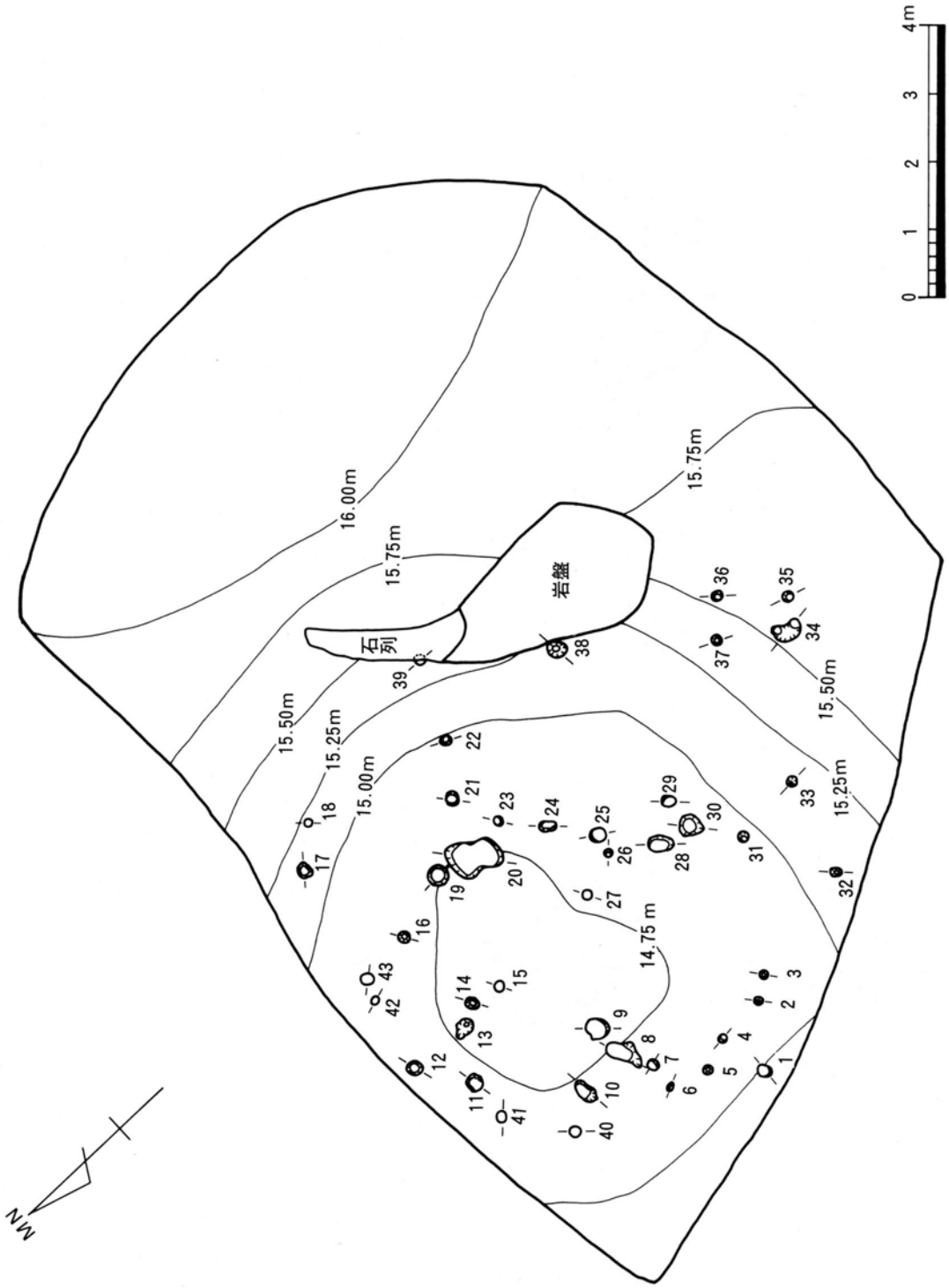


城間遺跡石敷遺構平面図11-2

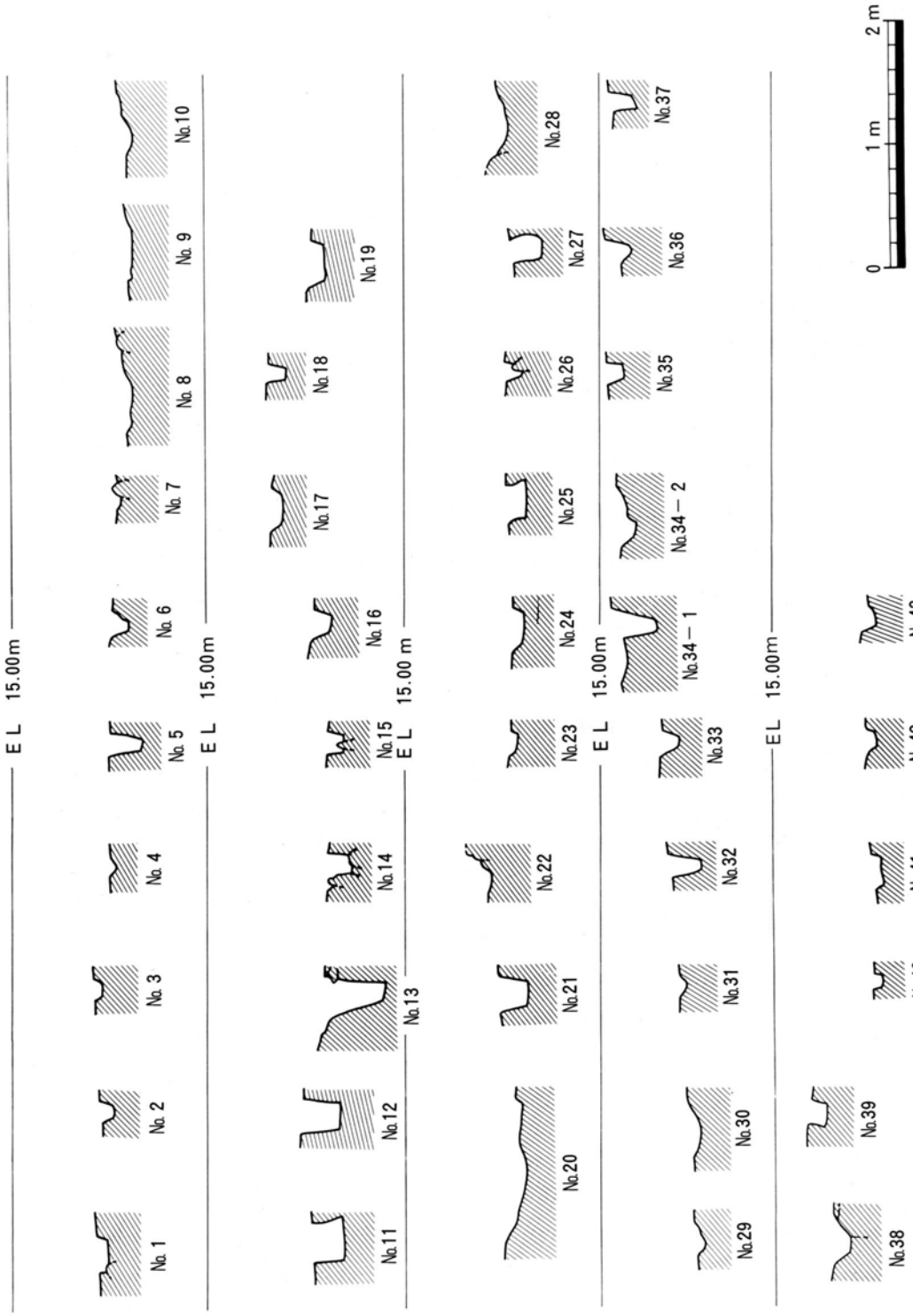




第10図　窯遺構



第11図　南西部の落ち込み群および石列平面



第12図　B地区南西部落ち込み断面

第３節　人工遺物

城間遺跡の発掘調査では土器、石器、貝製品、骨製品等の先史遺物と供に、磁器、陶器、カンザシ、古銭等の近世に属する遺物が採集されている。

以下、各遺物について記述していくことにする。

１　土　器

今回の発掘調査で採集された土器は総数7384点である。出土地区でみるとほとんどＢ地区からの出土で、特にＢ地区の南西部で最も多く全体の62％を占める。

層位的には旧表土層と考えられる褐色土層とその下位の黒褐色土層からの出土で、大部分は黒褐色土層からの出土である。

採集された土器は器形、胎土、混和材、器面調整、器色等から下記の３類に分類される。

第１類土器　深鉢形で、口縁部には文様が施される。胎土に混和材として石英・チャートの細礫を混入し、器色は暗褐色ないし茶褐色を呈する。焼成はやや不良である。

所属期としては沖縄貝塚時代前期と中期に属すると考えられる。

第２類土器　無文の甕形土器で、胎土は泥質、混和材の混入はほとんど認められないものが多く、中には石英細礫を混入するものもある。器色は淡い黄褐色や橙褐色を呈し、焼成不良なものが多く、器表面に触れると粉末として手に付着する。

所属期については、土器の器形、伴出遺物（開元通寶）等から沖縄貝塚時代後期と考えられる。

第３類土器　胎土は泥質で、混和材として石灰質砂粒、赤色粒を混入する。器面は「アバタ」状の小孔がみられ、焼成は良好なものである。

所属期はグスク時代に属するものである。

以下、上記分類の順に略述することにする。

(1)　第１類土器（第14図，図版38）

本類に含め得る資料は39点で、部位別にみると口縁部14点、胴部24点、底部１点である。

第14図１は深鉢形土器の口縁部資料で、口縁部に二又状の施文具による連点文が施される。口唇部は平坦に整形され、文様は施されない。胎土に混和材として石英とチャートを混入し、焼成は不良である。器色は茶褐色を呈する。前期の伊波式土器あるいは荻堂式土器であろう。Ｃ－26グリッド第Ⅲ層の出土。

２は深鉢形土器で、口縁部に先端が爪形状の施文具による押し引き文を施す面縄東洞式土器

である。器面摩耗のため調整は窺えない。胎土には石英を混入し、焼成は不良である。器色は内外面とも暗褐色を呈する。E－27グリッド第Ⅲ層の出土。

3・4・5は胎土、混和材、器色等から同一個体と考えられるものである。3・4は口縁部が僅かに外反する深鉢形土器で、口縁部上部に単箆の施文具による刻文を施している。口縁端部は尖状に整形される。胎土に石英とチャートを混入し、焼成は不良。器色は2点とも外面黒褐色、内面茶褐色を呈する。3はQ－26グリッド第Ⅲ層、4はP－26グリッド第Ⅲ層の出土。

5は口縁上部に凸帯を横位に貼り付け、凸帯上に単箆施文具による刻文を施している。凸帯は左傾しており、波状をなす凸帯の可能性がある。胎土、混入物、器色とも前述した3・4に類似する。Q－26グリッド第Ⅲ層の出土。

第1表　第1類土器出土状況

出土グリッド	層			
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	不明
A－34		2		
B－27			2	
C－11			1	
C－26			8	
C－27			1	
C－30			1	
D－24			1	
D－26			1	
D－27			2	
D－29			1	
E－27			9	
O－32			1	
P－26			2	
Q－26			5	1
B地区南西部			1	
合　　計	0	2	36	1

6・7は口縁部が花鉢状に肥厚する外部有段の深鉢形土器である。6・7は口縁部が外反し、口唇部は平坦に整形される。胎土に石英の細片を混和材として用い、焼成は良好である。器色は橙褐色を呈する。6はD－29グリッド第Ⅲ層の出土、7はC－11グリッド第Ⅲ層の出土である。

8～12は口縁部断面が三角形をなす深鉢形土器で、中期の宇佐浜式土器になるものであろう。

8は口縁部の直口するもので、口縁部の肥厚部断面は扁平な三角形となっている。胎土に石英と千枚岩質の細片を混入し、焼成は良好である。器色は外面黄褐色、内面橙褐色を呈する。E－27グリッド第Ⅲ層の出土。

9は口縁部断面が比較的整った三角形をなすものである。内外面ともナデ調整されており、他の調整痕は認められない。胎土に石英の細片を混入し、焼成は良好である。器色は外面黄褐色、内面橙褐色を呈する。P－26グリッド第Ⅲ層の出土。

10は9と同じく口縁部断面を整った三角形に整形するもので、器色は内外面とも淡い橙褐色を呈する。器面はナデ調整され、焼成は良好である。胎土に石英と千枚岩質の細片を混入する。Q－26グリッド第Ⅲ層の出土。

11は9・10に比べ口縁部肥厚の小さいものである。胎土に石英を混入し、焼成は良好である。器色は淡い橙褐色を呈する。Q－26グリッド第Ⅲ層の出土。

12は口縁部の外反するもので、口縁部の肥厚は小さい。胎土に石英と千枚岩質の細片を混入する。器色は黄褐色を呈し、焼成は良好である。D－24グリッド第Ⅲ層の出土。

13は口縁部がわずかに外反する深鉢形土器の口縁部資料である。胎土に混和材として石英と石灰質砂粒を混入し、器色は橙褐色を呈する。焼成はやや不良である。O－32グリッド第Ⅲ層の出土。

14は宇佐浜式土器の口縁資料と考えられるものであるが、破損のため確言できない。胎土には石英と千枚岩質の細片を混入する。器色は橙褐色を呈し、焼成はやや不良である。C－26グリッド第Ⅲ層の出土。

15は中期に属するとみられる底部資料で、丸底をなす。胎土に石英と石灰質の細片を混入する。器色は外面橙褐色、内面黒色を呈し、焼成は良好である。Q－26グリッドの出土で、検出層は不明。

(2) 第2類土器（第15・16図，第17図1～20，図版39・40，図版1～20）

今回の調査で採集された第2類に属する土器は7349点が得られている。部位別にみると口縁部44点、胴部7168点、底部138点である。

A地区で3点、他はすべてB地区出土資料である。B地区では4地点で集中してみられ、Q－26グリッド周辺（南西部）で4565点、N－31グリッド周辺（北西部）で1443点、D－36グリッド周辺（北東部）375点、D－27グリッド（南東部）で156点が出土している。

層位的出土状況は黒褐色土層から6557点の出土で、他は褐色土層から792点の出土である。採集された土器のうち、口縁部資料と底部資料については器形による分類を行い、口縁部資料17点、底部資料20点を図示して略述することにする。胴部資料は有文資料5点を提示することにする。

口縁部

採集資料は甕形土器の口縁部資料で、壺形土器の口縁部資料は得られていない。それらを器形から下記の3種に分類した。

第1種　口縁部は外反し、頸部でくびれ、胴部へ緩やかに脹らむもの。

第2種　口縁部はわずかに外反し、口縁部下部から胴上部にかけては直線的なもの。

第3種　胴部から口縁部にかけて外側に開く器形で、口縁部の形態から次の2種に細分される。

①口縁部の外反するもの

②口縁部の直口するもの

以下、上記の分類順に記述していくことにする。

第1種

本類に属する資料は5点が得られ、そのうちの4点を第15図1～4に図示した。

1は器面調整が比較的丁寧なもので、内外面とも滑らかな器面を有する。外面は刷毛目状工具で調整後、ナデ消しを行っている。内面はナデ調整が徹底しているためか、他の調整痕は認められない。胴上部に器面を囲繞すると思われる1条の極小凸帯を横位に貼り付けている。焼

第2表　第2類土器出土状況

グリッド	層				
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	不明	合計
A－25		1			1
A－34		1			1
B－23		4			4
B－26			7		7
B－27		7	2		9
B－28			5		5
B－32		2			2
B－34		2	3		5
B－35			6		6
B－36			3		3
C－25			4		4
C－26			12		12
C－27			32		32
C－28			4		4
C－29			6		6
C－30			1		1
C－32			10		10
C－33			2		2
C－34			23		23
C－35			2		2
C－36			22		22
C－38			11		11
D－24			2		2
D－25			1		1
D－26			30		30
D－27		8	14		22
D－28			6		6
D－29			2		2
D－30		1			1
D－31		6			6
D－32		11	4		15
D－34			8		8
D－35			2		2
D－36			28		28
D－37		2	29		31
D－38			14		14
E－27			16		16
E－33			2		2
E－36			49		49
E－37			13		13
E－39		57			57
F－27		1			1
F－29		6			6
F－35		4			4
F－36		9			9
F－37		25			25
F－38		2			2
G－20		1			1
G－27		1			1
G－33		1			1
G－36		2			2
G－37		10			10
G－38		8			8
H－27		1			1
H－31		1			1
H－32		1			1
H－34		1			1
H－37		3			3
K－29		2			2
L－28		3			3

グリッド	層				
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	不明	合計
L－29		10			10
M－27		1			1
M－29		1			1
M－30		31	172		203
M－31			1		1
M－32			11		11
N－30			4		4
N－31			190		190
N－32		44			44
O－21			2		2
O－25			5		5
O－26			3		3
O－27		17	4		21
O－30			1		1
O－32		1	901		902
O－34		1			1
O－36		1			1
O－37		2			2
O－38		2			2
P－24			1		1
P－25		45	4		49
P－26		11	1760		1771
P－27		10	1122		1132
P－29			1		1
P－32		1	95		96
P－33			3		3
P－36		1			1
P－37		1			1
Q－25			18		18
Q－26			1162		1162
Q－27			370		370
Q－29			194		194
Q－32			8		8
Q－33		9			9
Q－35		1			1
R－24		1			1
R－25		3			3
R－26		12	13		25
R－27			5		5
ア－25		2			2
ア－28		1			1
ア－38		1			1
B地区1トレンチ		5			5
B地区2トレンチ		2			2
B地区4トレンチ		6			6
B地区5トレンチ		2			2
B地区6トレンチ		2			2
B地区Aトレンチ		5			5
B地区Bトレンチ			1		1
B地区Cトレンチ		4			4
B地区Dトレンチ		2			2
B地区Fトレンチ		2			2
B地区北東部		18	129		147
B地区南東部		37			37
B地区南西部		7	1		8
B地区北西部		1			1
不明		305	1		306
合計		792	6557		7349

成良好で、器色は橙褐色を呈する。Q－26グリッド第Ⅲ層の出土。

2は1と比較して口縁部の外反が弱いもので、口唇部は丸く整形される。器面調整は内面に調整工具の痕跡を残すものの、全体的にはナデ仕上げされる。外面のナデ調整は雑で、器面は細かな凹凸が見られる。器色は外面橙褐色、内面黄褐色を呈し、焼成はやや不良である。C－27グリッド第Ⅲ層の出土。

3は胴上部で「く」字形の屈曲を示すもので、口唇部は平坦に整形される。内外面ともナデ調整されるが、調整工具による線条痕が認められる。焼成良好で、器色は橙褐色を呈する。P－27グリッド第Ⅲ層の出土。

4は内外面とも比較的丁寧にナデ調整され、滑らかな器面を有する土器である。口唇部は平坦に整形される。焼成良好で、器色は外面暗褐色、内面橙褐色を呈する。Q－26グリッド第Ⅲ層の出土。

第2種

本種に分類できるものは14点で、そのうちの7点を第15図5～11に示した。

5は口縁下部の器壁を薄く（3㎜）仕上げるものである。内外面ともナデ調整されるが、外面には横位の線条痕を残す。器色は外面淡橙褐色、内面橙褐色を呈し、焼成は良好である。C－35グリッド第Ⅱ層の出土。

6は他の資料より器壁の薄いもので、口唇部は舌状に整形される。内外面に横位の線条痕が認められるものの、最終的にはナデ調整される。器色は淡い橙褐色を呈し、焼成は良好である。Q－27グリッド第Ⅲ層の出土。

7は口縁部の外反が弱いもので、口唇部は丸く整形される。器面は全体的にナデ調整され、他の調整痕は認められない。器色は黄褐色を呈し、焼成は良好である。C－35グリッド第Ⅱ層の出土。

8は胎土に混和材として石灰質砂粒を混入するもので、2・3・5と同じく口縁上部を薄く（3㎜）仕上げる。内外面に横位の線条痕を残す。器色は淡い黄褐色を呈し、焼成は不良である。出土グリッド及び層は不明。

9は口縁部が微弱な外反を示すもので、粘土帯の継目は他の器壁より厚く、稜を形成する。器面調整をみると、全体的にナデ調整されるが、外面は口縁部に横位、胴部に縦位の線条痕が消えきらずに残り、内面は横位の線条痕が認められる。器色は外面褐色、内面淡黄褐色を呈する。O－32グリッド第Ⅲ層の出土。

10・11は口縁部が朝顔状に開くもので、口唇部はいずれも尖状に整形される。10は内外面ともナデ調整され、その他の調整痕は認められない。焼成不良で、器色は外面淡黄褐色、内面明橙色を呈する。P－27グリッド第Ⅲ層の出土。

11は内外面ともナデ調整されるものの、内面に調整工具の線条痕を残す。器色は外面褐色、

内面淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。Q－26グリッド第Ⅲ層の出土。

第３種

本種に属するものは13点が得られ、そのうちの６点を第16図１～６に図示した。

１・２は口縁部の外反するもので、１は器面調整、焼成ともに良好なものである。口縁部は微弱な外反を示し、口唇部は平坦に整形される。器面調整は内外面とも丁寧にナデ調整され、滑らかな器面を有する。器色は褐色を呈する。Q－27グリッド第Ⅲ層の出土。

２は胎土に混和材として石英の細礫を混入するものである。口縁部は微弱な外反を示し、口唇部は舌状に整形される。器面のナデ調整は徹底せず、細かな凹凸をなす。P－26グリッド第Ⅲ層の出土。

３は口唇部を舌状に整形するものである。内外面ともナデ調整され、他の調整痕は認められない。焼成はやや不良で、器色は外面橙褐色、内面淡橙褐色を呈する。Q－26グリッド第Ⅲ層の出土。

４は刷毛目状の線条痕の認められるものである。器色は内外面とも淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。Q－26グリッド第Ⅲ層の出土。

５は器形、器色、胎土、混和材等が13に類似するものである。Q－26グリッド第Ⅲ層の出土。

６は口縁部が直口するもので、口唇部は舌状に整形される。器面調整は内外面ともナデ調整され、焼成はやや不良である。器色は外面淡黄褐色、内面灰褐色を呈する。グリッド不明第Ⅲ層の出土。

有文胴部

有文胴部は浮文４点、沈文１点の５点が得られている。

第16図７は弧状をなす凸帯を貼り付けるものである。焼成はやや不良で、器色は淡黄褐色を呈する。O－32グリッド第Ⅲ層の出土。

８・９は凸帯を横位に貼り付けるものである。８は器壁の厚さが約４㎜と薄手の資料で、凸帯も他の資料に比べ小型の凸帯が貼り付けられる。焼成不良で、器色は淡黄褐色を呈する。F－37グリッドの出土で、層は不明。

９は比較的整った断面三角形の凸帯を横位に貼り付けるものである。凸帯は器面を囲繞するものであろう。器色は内外面とも淡黄褐色を呈し、焼成はやや不良である。O－32グリッド第Ⅲ層の出土。

10は凸帯を縦位に貼り付けるものである。内外面ともナデ調整されるものの、内面に横位の線条痕が認められる。焼成はやや不良で、器色は橙褐色を呈する。Q－27グリッド第Ⅲ層の出土。

11は横位に１条の沈線文の認められるものである。器面調整はナデ仕上げされ、内面は外面

に比べ丁寧になされる。器色は外面褐色、内面橙褐色を呈し、焼成は良好である。Q－27グリッド第Ⅲ層の出土。

底　部

底部資料は138点が採集され、それらは器形から次の４種に分類できる。底部資料中、比較的保存の良好な20点を第17図１～20に示す。

第１種　丸底（第17図１）

第２種　外底面と胴部の間でくびれるいわゆる「くびれ平底」（第17図２～11）

第３種　外底面より斜方向に直線的に立ち上がる平底（第17図12～16）

第４種　外底面より垂直に立ち、その後胴部へ移行する平底（第17図17～18）

第５種　外底面より弧状を描いて胴部へ移行する平底（第17図19～20）

以上の４種で、量的には第１種は１点、第２種は90点、第３種は11点、第４種は12点、第５種は12点、破損及び小破片のため上記分類に含め得ない不明資料は41点である。

第２種には胎土に混和材として石英を混入する資料が７点認められた。また、刷毛目状工具による線状痕の確認できた資料が１点得られている。

内底面の形状は殆どが凹部であるが、20は内底面が平坦に整形される唯一の資料である。

２・７は底径が小さく、外底面から胴部への「くびれ」部は緩やかな弧を描き、器台状をなす。

第３表　第２類土器底部観察表

挿図番号 図版番号	分類	出土地区 グリッド	層	底径cm	器面調整 外面	内面	焼成	混和材	器色 外面	内面
第17図1 図版41-1	第1種	P－26	不明	不明	ナデ。	ナデ。	良好	石英	橙褐色	黄褐色
第17図2 図版41-2	第2種	O－32	Ⅲ	3.6	ナデ。	ナデ仕上げされるが、器面は細かい凹凸が見られる。	やや不良	無	淡黄褐色	淡黄褐色
第17図3 図版41-3	第2種	P－26	Ⅲ	4.6	ナデ。	縦位の条痕が認められるが、大部分はナデ仕上げされる。	良好	石英＋千枚岩	橙褐色	橙褐色
第17図4 図版41-4	第2種	B地区 北東部	Ⅱ	4.6	ナデ。外底面に３個の粘土粒が付着する。	ナデ。内底面には細かい凹が認められる。	良好	石灰質細片	淡黄色	橙褐色
第17図5 図版41-5	第2種	P－26	Ⅲ	5.6	ハケ目状調整痕を残すが、大部分はナデ仕上げされる。	ハケ目状調整痕を縦位に残す。最終的にはナデ仕上げ。	良好	石灰質細片	茶褐色	茶褐色
第17図6 図版41-6	第2種	P－26	Ⅲ	5.0	丁寧にナデ調整される。	ナデ	良好	無	淡橙褐色	暗褐色
第17図7 図版41-7	第2種	Q－26	Ⅲ	4.2	ナデ。	ナデ。	良好	無	淡黄褐色	淡黄褐色
第17図8 図版41-8	第2種	P－26	Ⅲ	6.0	ナデ。	ナデ。	不良	無	淡黄褐色	淡黄褐色
第17図9 図版41-9	第2種	P－26	Ⅲ	6.4	ナデ。	ナデ。	不良	無	淡黄褐色	淡黄褐色

第17図10 図版41-10	第2種	P－26	Ⅲ	6.2	ナデ仕上げされるが、雑である。	全体的に細かい凸凹が見られる。最終的にはナデ仕上げ。	不良	赤色鉱物	淡黄褐色	淡黄褐色
第17図11 図版41-11	第2種	P－26	Ⅲ	7.8	ナデ。	ナデ。	良好	無	黄褐色	橙褐色
第17図12 図版41-12	第3種	P－27	Ⅲ	3.2	ナデ。	工具調整後、ナデ。	やや不良	石英	淡橙褐色	淡橙褐色
第17図13 図版41-13	第3種	B地区 北東部	Ⅲ	6.2	ナデ。	ナデ。	不良	無	明橙褐色	灰褐色
第17図14 図版41-14	第3種	B地区 北東部	不明	4.4	ナデ。	ナデ。	やや不良	無	橙褐色	橙褐色
第17図15 図版41-15	第3種	P－27	Ⅲ	4.0	ナデ。	ハケ目状工具による調整後、ナデ仕上げ。	良好	無	淡橙褐色	淡黄褐色
第17図16 図版41-16	第4種	Q－24	不明	3.0	ナデ。	ナデ。	不良	無	橙褐色	橙褐色
第17図17 図版41-17	第4種	P－26	Ⅲ	5.0	ナデ。	ナデ。	良好	無	黄褐色	淡黄褐色
第17図18 図版41-18	第5種	P－27	Ⅲ	6.2	ナデ。	ハケ目状工具による調整後、ナデ仕上げ。	やや不良	石英	黄褐色	淡橙褐色
第17図19 図版41-19	第3種	O－32	不明	5.0	ナデ。	ナデ。	不良	無	淡灰褐色	淡黄褐色
第17図20 図版41-20	第5種	O－32	不明	5.2	ナデ。	ナデ。	やや不良	無	黄褐色	橙褐色

(3) 第3類土器

本類に属する資料は胴部資料4点、底部資料1点である。胴部資料4点のうち1点は胎土に混和材として滑石の細礫を混入するものが得られている。他の3点は、胎土に混和材として石灰質砂粒を混入する。

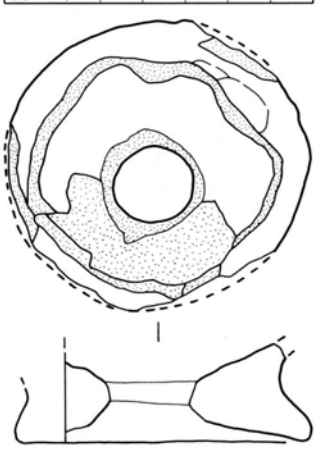
底部資料は第17図21に示すもので、底径算出が不可能なため、断面図を掲載する。内外面とも比較的丁寧にナデ調整され、他の調整痕は認められない。内外面には1㎜以下の小孔を有する。胎土には石灰質砂粒と赤色の鉱物を混入し、焼成は良好である。器色は外面灰褐色、内面淡橙褐色を呈する。Q－26グリッドの出土で、検出層は不明。

第4表　第3類土器出土状況

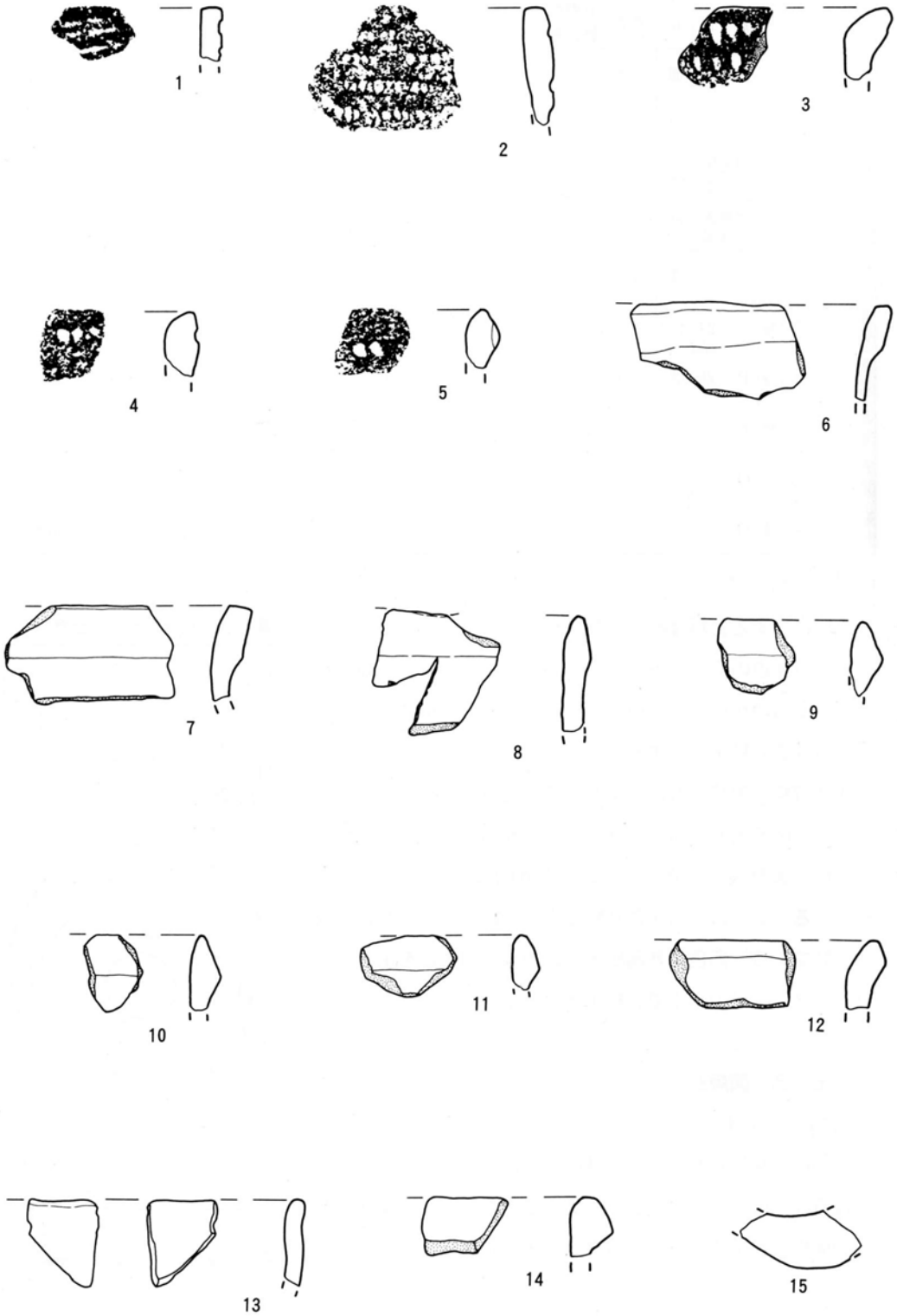
出土地点					
グリッド	層				
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	不明	合計
E－36		1			1
C－34				1	1
F－34		1			1
Q－26			1	1	2
合計		2	1	2	5

2　土製品（図版82－6）

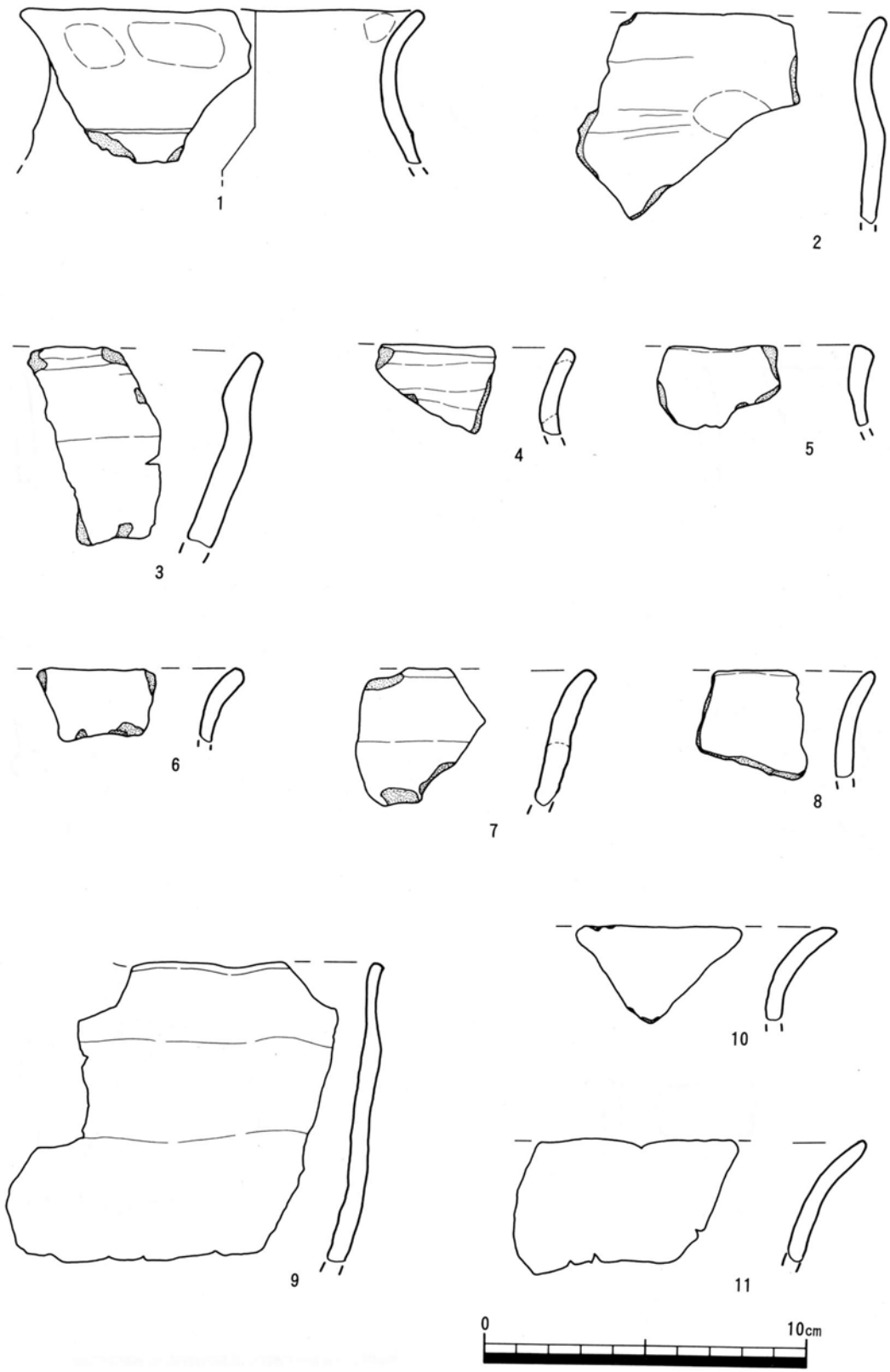
第13図に示す1点が得られている。底径7.8㎝の「くびれ」平底を利用したもので、外底面は揚げ底をなす。中央部には直径2.0㎝の孔を焼成後に設けている。器色は摩耗のため淡横褐色を呈する。Q－27グリッド第Ⅲ層の出土。



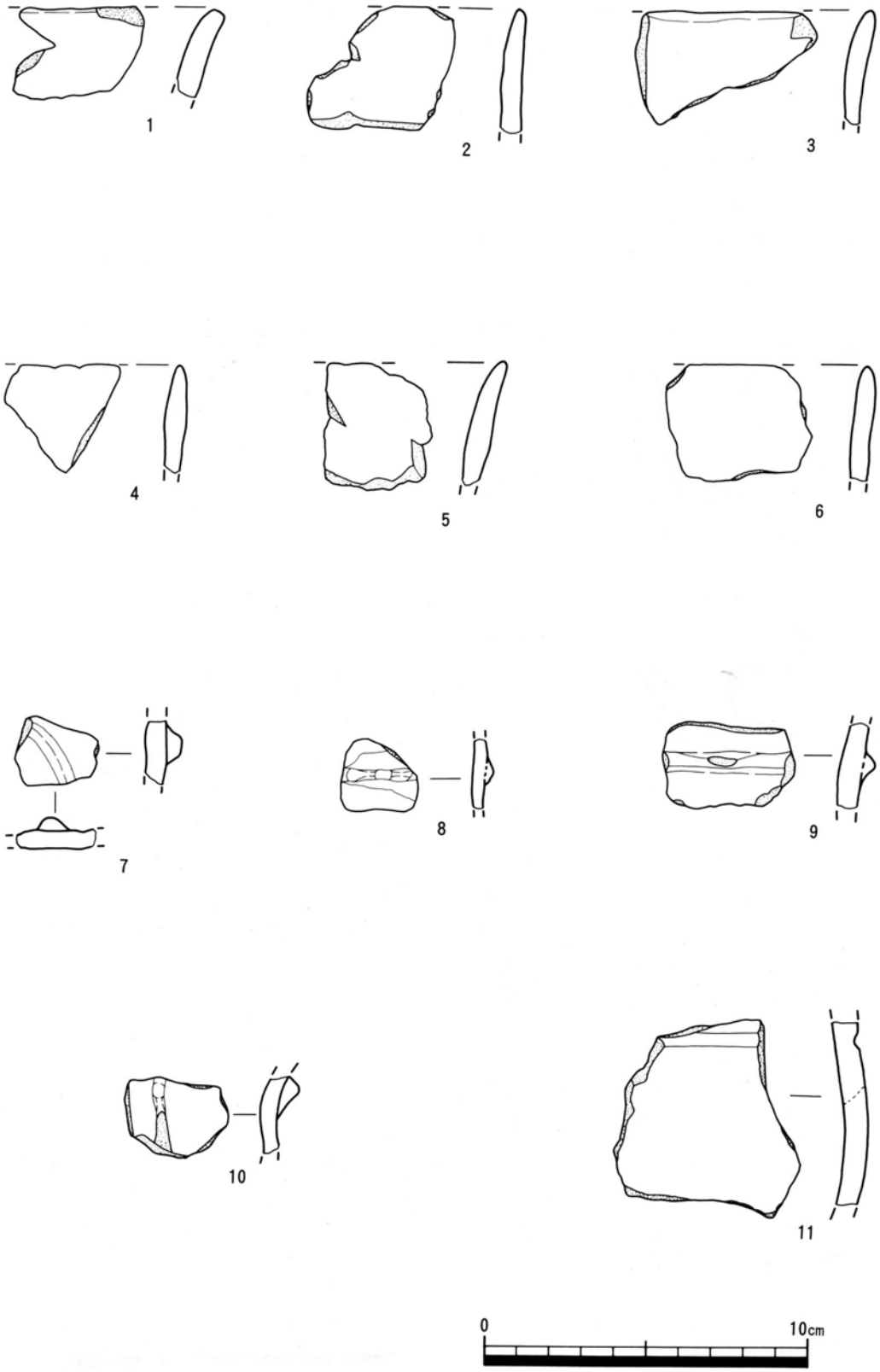
第13図　土製品



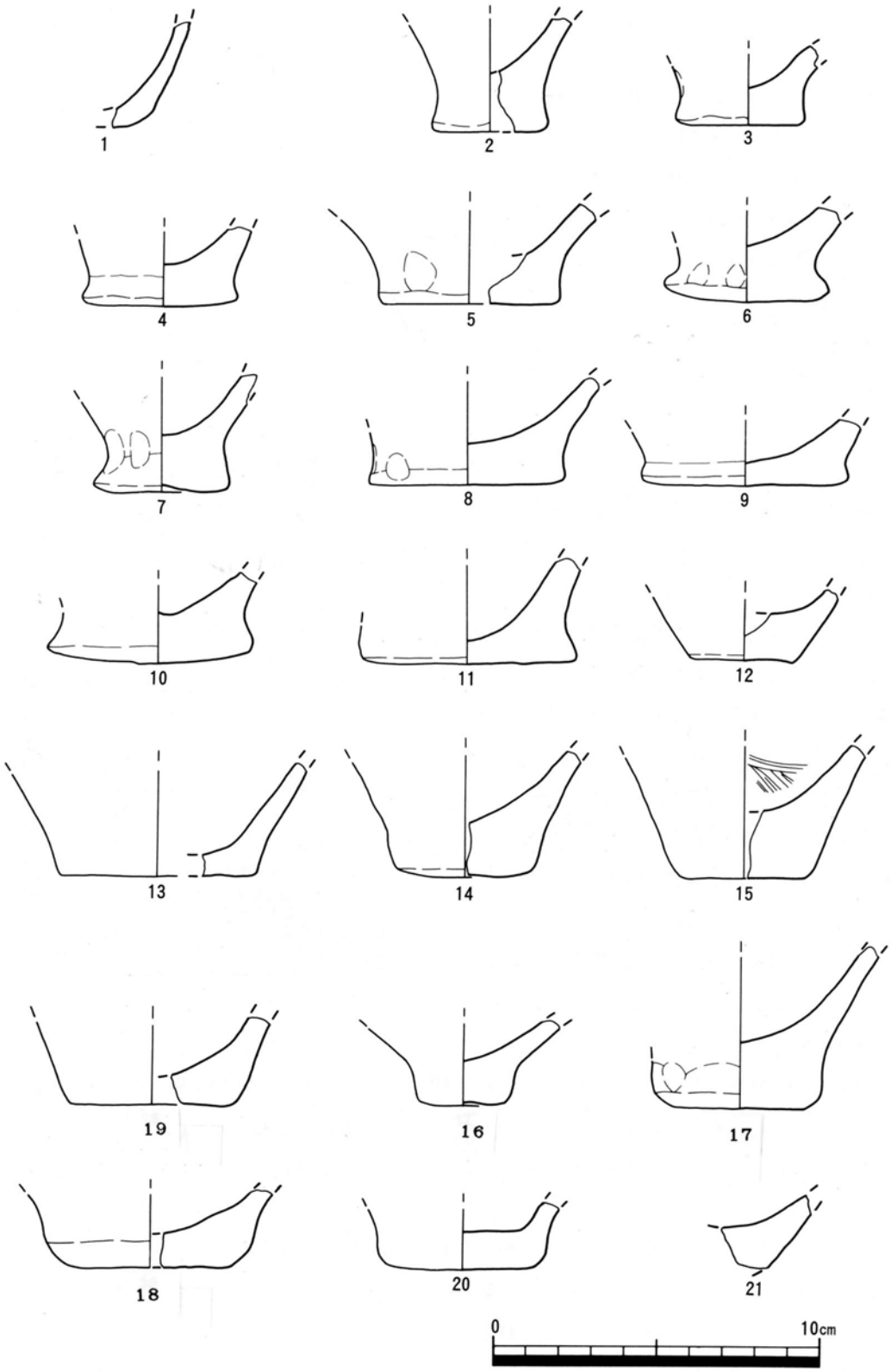
第14図　第１類土器



第15図　第2類土器



第16図　第２類土器



第17図　第２類土器（１～20）　第３類土器(21)

3　石　器

本遺跡の発掘調査で総数113点の石器が得られている。器種別にみると石斧36点、敲石26点、磨石17点、凹石１点、石皿２点、器種不明31点である。

出土状況はＡ地区で16点、Ｂ地区で97点、地区不明５点の出土であった。

採集された石器と石材（22点）の石質についてみると、アプライト（１点）、チャート（６点）、角せん石ひん岩（３点）、角せん石安山岩（１点）、輝緑岩（40点）、黒色千枚岩（６点）、砂岩（18点）、細粒砂岩（４点）、石英斑岩（１点）、粘板岩（３点）、斑れい岩（26点）、片状砂岩（16点）、緑色千枚岩（10点）であった。細粒砂岩以外は搬入品であり、遠くは沖縄本島の西側30㎞に浮かぶ慶良間諸島に分布する片状砂岩もある。

以下、器種別に略述する。

①石斧（第19・20図）

36点の資料が得られている。部位別にみると、完形品１点、刃部資料10点、基端の残る基部資料19点、刃部と基端を欠く基部資料６点である。

出土状況はＡ地区で３点、Ｂ地区で33点の出土である。Ｂ地区では近世期の石列遺構の出土した北東部で16点、南東部で８点、後期土器の集中して出土した南西部で９点の出土がある。出土層位は表土層から25点、第Ⅱ層から２点、第Ⅲ層から９点である。

石質は輝緑岩が15点と最も多く、斑れい岩９点、緑色千枚岩、黒色千枚岩、砂岩は各１点である。

第５表　石斧グリッド別出土状況

出土グリッド	層				合計
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	不明	
Ａ－34			1		1
Ａ－35		1			1
Ｂ－23	1				1
Ｃ－26			1		1
Ｃ－29	1				1
Ｄ－26			1		1
Ｄ－31	1				1
Ｄ－37	1				1
Ｄ－38	1				1
Ｅ－27			2		2
Ｅ－37	1				1
Ｆ－32	1				1
Ｇ－37	2				2
Ｇ－38	1				1
Ｍ－27	1				1
Ｍ－28	1				1
Ｐ－26	1	1	1		3
Ｑ－26			1		1
Ｑ－32	1				1
Ａ地区不明	3				3
Ｂ地区北東	2		1		3
Ｂ地区南東	2				2
Ｂ地区不明	3		1		4
不　明	1				1
合　計	25	2	9		36

完形品が１点であるため、部位別に製作状況をみてみる。

刃部資料

10点の製作状況は磨製と打製があり、前者は刃部から基部にかけて研磨を施すものと、刃部のみに研磨を施すものがある。後者は打剝と敲打痕の認められる資料である。

形態的にはバチ形石斧の刃部資料と考えられるものは２点、短冊形の石斧の刃部になるものは５点、不明２点である。

素材として扁平の自然石を用いるものが２点あり、側辺部を打剝と敲打で形を整え、研磨で刃部を造りだしている。他の資料は岩石塊から打割を行い、その後、打剝と敲打調整がなされ、最終的に刃部あるいは全体に研磨が施される。

基端を残す基部資料

当該資料は使用により刃部が折損したと考えられる資料である。研磨痕の認められる資料は4点で、他15点は剥離痕と敲打痕の見られる資料である。

素材は扁平の自然石を利用する資料が多く、側辺部に剥離と敲打の痕跡を残す。

形態的にはバチ形石斧は11点、短冊形の方形石斧は7点である。

刃部と基端を欠く基部資料

当該資料6点の中の1点は全面に入念な研磨を施すが、他の5点に研磨痕は認められず、剥離と敲打痕を残す。

第6表　石斧観察表　単位　cm／g（　）は現存

挿図番号 図版番号	出土グリッド 出土層	長さ 幅 厚さ 重量	石質	観察状況
第19図1 図版42－1	D－31	8.90 5.15 2.40 194.00	斑れい岩	平面形がバチ形を呈していたと考えられるもので、刃部破損後に敲石に転用される。側面は敲打調整され、左側面は部分的に研磨が施される。表裏面は敲打調整後研磨されるが、裏面の大部分は敲打痕を残す。
第19図2 図版42－2	F－32	10.80 5.30 3.20 308.00	斑れい岩	平面観が長方形状をなすもので、刃部破損後に敲石に転用される。側辺部は打剥後、敲打調整され、上部と下部は研磨が施される。裏面の研磨は部分的である。
第19図3 図版42－3	不明	(5.80) 4.60 1.30 (70.00)	輝緑岩	身の半分を欠くもので、現状から長方形の石斧が想定される。素材は扁平の自然礫が用いられ、打剥調整が側辺部に見られる。裏面は割面である。研磨は表面、両側面と裏面の一部に施される。刃縁は円刃である。
第19図4 図版42－4	E－27 Ⅲ	(4.90) 4.20 1.20 (34.00)	緑色千枚岩	身の半分を欠くものである。裏面が平坦な扁平の自然礫を利用し、表裏面から刃部を研ぎだしている。そのため刃部は片刃である。側辺は細かい打剥で形を整えている。
第19図5 図版42－5	M－27	(6.30) (6.00) 1.40 (77.00)	緑色千枚岩	扁平の自然礫を素材として用いるものである。側辺を打剥調整し、表裏面より刃部を研ぎだしている。裏面は割面である。刃部は裏面からの研ぎだしが強く、断面は片刃的様相を呈する。
第19図6 図版42－6	M－28	(7.60) 4.50 2.00 (128.00)	輝緑岩	平面観が長方形をなすものである。打剥で形を整え、側辺は敲打調整されるが、研磨痕は認められない。裏面と左側面には使用による光沢が認められる。

第19図7 図版42－7	不明	(5.50) 4.60 2.50 (118.00)	輝緑岩	基部資料である。裏面は自然面で、両側面に敲打痕が見られる。研磨は施されない。
第19図8 図版42－8	G－37	6.30 (3.60) 1.20 (35.00)	緑色千枚岩	バチ形石斧の基部資料である。裏面は使用により節離面より破損する。左側面に打剝痕がみられ、表面は部分的に研磨が施される。
第20図1 図版43－1	C－29	7.60 5.20 1.20 81.00	緑色千枚岩	平面観がバチ形を呈するもので、裏面は割面である。扁平な自然礫が用いられ、左側辺部に打剝痕が認められる。裏面下部には研磨痕が見られる。
第20図2 図版43－2	D－37	(4.90) 4.50 1.30 (65.00)	輝緑岩	バチ形石斧の刃部資料である。側辺に製作時の剝離と敲打痕が認められる。表裏面は研磨が施されるが、徹底はしていない。刃部は表裏面より研ぎだされるが、刃縁は使用により鋭さを失っている。
第20図3 図版43－3	D－38	(5.60) (4.80) 1.00 (49.00)	輝緑岩	バチ形石斧の基部資料である。扁平の自然礫が素材として用いられ左側辺に剝離痕と敲打が見られる。研磨痕は認められない。
第20図4 図版43－4	Q－26 Ⅲ	(6.10) (5.60) 2.70 (158.00)	輝緑岩	バチ形石斧の基部資料である。表面は研磨が入念に施されるが、裏面は徹底していない。
第20図5 図版43－5	B地区 北東部	(5.40) (5.40) 2.20 (228.00)	輝緑岩	刃部を欠く基部資料で、素材として板状の自然礫が用いられる。左側辺に敲打痕が認められるだけで、他に研磨痕等はない。
第20図6 図版43－6	A地区 表採	(6.80) 3.96 1.50 (60.00)	黒色千枚岩	基端を欠く資料である。扁平の自然礫が用いられ、側辺を打剝調整と敲打で形態を整えている。刃部は表裏面より研ぎだされるが、表面からが強く、片刃的様相を呈する。他に研磨痕は認められない。
第20図7 図版43－7	B地区 北東部	(9.10) (5.00) (2.00) (145.00)	斑れい岩	製作中途の破損と考えられるもので、裏面は割面である。右側辺を打剝し、表面全体に敲打痕が認められる。破損は敲打時におけるものであろう。
第20図8 図版43－8	F－26 Ⅲ	(6.50) (4.20) (1.90) (88.00)	輝緑岩	バチ形石斧の基部資料である。右側辺は自然面で、左側辺と基端は打剝後、敲打調整される。研磨痕は認められない。

②敲石（第21図，第22図１～５）

敲石は26点の出土がある。それらは敲石のみの機能を有する資料（16点）と、磨石との兼用品（８点）、くぼみ石との兼用品（１点）がある。

敲石は素材として手ごろな自然礫あるいは楕円形の河原礫を用いる資料が見られるが、本遺跡出土資料は前者に属する資料が多い。また、河原礫を用いる敲石は裏面が破損しているものが多く、使用による破損か、破損後も継続して使用したものと考えられる。

出土状況はＡ地区で４点、Ｂ地区で22点である。Ｂ地区においては調査区の北東部15点、南東部４点、南西部６点、不明１点である。層位的出土状況は第Ⅰ層22点、第Ⅱ層２点、第Ⅲ層２点である。

第７表　敲石グリッド別出土状況

出土グリッド	層			合計
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	
C－18	1			1
C－33		1		1
D－27			1	1
D－31	1			1
E－34	1			1
F－35	1			1
F－38	1			1
G－37	3			3
M－27	2			2
Q－26	1			1
Q－32	1			1
Q－35	1			1
A地区	2	1		3
B地区南西部	1			1
B地区南東部	1			1
B地区北東部	4		1	5
不　明	1			1
合　計	22	2	2	26

石質は輝緑岩製７点、斑れい岩製５点、砂岩製５点、片状砂岩製７点、黒色千枚岩製１点、細粒砂岩製１点である。

第８表　敲石観察表　単位　cm／g（　）は現存値

挿図番号 図版番号	出土グリッド 出土層	長さ 幅 厚さ 重量	石質	観察状況
第21図１ 図版44－１	B地区北東部 Ⅱ	13.50 (6.50) (7.80) (950)	斑れい岩	横断面が三角形を呈するもので、比較的重量のある資料である。表裏面の３カ所の角と下端が敲打部位として使用される。敲打は粗く、裏面は使用時の破損である。
第21図２ 図版44－２	Q－26 Ⅲ	14.40 6.40 (7.50) (1060)	輝緑岩	縦断面が三角形の自然礫を利用する。表面上部と下端を敲打部位として使用し、粗い敲打痕を残す。表面下部と裏面の剝離は使用時のものであろう。
第21図３ 図版44－３	F－35	7.80 7.60 6.40 560	輝緑岩	四角錘になるもので、頂部と底面を敲打部位として使用する。底面の敲打は中央部より周辺部が多用される。
第21図４ 図版44－４	C－18	8.20 5.70 2.30 194	細粒砂岩	平面観が長方形になるもので、完形品である。両側面と裏面中央部が敲打部位として使用され、後者は凹部を形成する。上・下端に使用痕は認められない。
第21図５ 図版44－５	G－37	7.50 8.00 8.40 730	片状砂岩	多面体の自然礫を用いるものである。表面と下端が敲打部位として使用され、特に表面は顕著である。左側面は使用時に節理面より破損している。
第21図６ 図版44－６	不明	(8.80) 6.90 (5.90) (464)	片状砂岩	楕円形の自然礫を素材とするもので、表面頂部を敲打部位として使用する。
第22図１ 図版45－１	M－27	(7.70) 6.70 2.90 (165)	片状砂岩	磨石との兼用品で、楕円形の自然礫が用いられる。下端に敲打部、左側面を磨面として使用される。上部の破損は使用時のものであろう。
第22図２ 図版45－２	B地区 北東部	9.50 7.00 5.40 630	片状砂岩	くぼみ石と兼用するものである。側面の大部分を敲打部位として使用され、特に下端が多用される。磨面は認められない。

第22図 3 図版45－ 3	D－27 Ⅲ	(8.50) 9.40 4.10 (760)	片状砂岩	磨石との兼用品で、両側面と下面が磨面である。敲打部は表面の左隅が使用される。
第22図 4 図版45－ 4	A地区	(6.40) (7.50) 4.30 (530)	片状砂岩	磨石と兼用するもので、身の上半部を欠く。下部側面が敲打部として使用される。表面が磨面である。
第22図 5 図版45－ 5	Q－32	(6.40) (8.00) (4.30) (354)	輝緑岩	磨石との兼用品で、身の上半部を欠く。表面を磨面、下部の側辺部を敲打部位とする。楕円形の河原礫を用いるものである。裏面下部使用による破損であろう。

③磨石（第22図６，第23図１－２）

17点の資料が得られている。磨石は楕円形の河原礫を素材として用いることが多い。採集された資料のほとんどが破片であることから、敲石としての機能を合わせ持った結果と考えられる。

出土状況はすべてＢ地区からの出土で、北東部10点、南西部３点、南東部４点である。層位的出土状況は第Ⅰ層10点、第Ⅱ層５点、第Ⅲ層２点である。

石質は角せん石ひん岩１点、輝緑岩６点、砂岩６点、斑れい岩２点、片状砂岩２点である。

第９表　磨石グリッド別出土表

出土グリッド	層			合計
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	
A－34		2		2
C－27		1		1
C－28	1			1
C－33	1			1
D－34		1		1
D－35	1	1		2
D－38	1			1
F－30	1			1
G－37	1			1
H－30	1			1
P－24	1			1
P－27			1	1
R－25	1			1
B地区北東部	1		1	2
合　　計	10	5	2	17

④くぼみ石

第10表　磨石観察表　単位　cm／g（　）は破損による最大値

挿図番号 図版番号	出土グリッド 出　土　層	長さ 幅 厚さ 重量	石質	観　察　状　況
第22図 6 図版45－ 6	A－34 Ⅱ	(8.20) (7.30) (3.30) (228.0)	輝緑岩	表面中央部の磨面以外は割面である。剝離痕を明瞭に残すことから敲石の兼用品と考えられる。
第23図 1 図版46－ 1	D－34 Ⅱ	(11.9) (8.00) (2.50) (372.0)	斑れい岩	楕円形を呈するもので、裏面が磨面である。周辺部には剝離痕も見られることから敲石の兼用品かと考えられる。裏面は割面である。
第23図 2 図版46－ 2	C－27 Ⅱ	(5.90) (6.00) (4.50) (325.0)	角せん石ひん岩	方柱状を呈していたと考えられるものである。表面と左側面に部分的に自然面を残すが、大部分は研磨が施される。裏面と上・下面は割面である。

第24図１に示す１点が得られている。表面下部を僅かに破損するものの、全形の窺える資料である。凹部は表裏面の中央部に認められる。細粒砂岩製で、重量3150ｇである。Ｆ－32グリッドの出土。

⑤石皿

第24図２・３に示す２点が得られている。

２は扁平の資料で、破損品である。表面は使用により滑らかな面で、裏面は自然面である。細粒砂岩製で、重量700ｇである。Ｈ－34グリッドの出土。

3は平面観が三角形を呈するもので、右側辺をわずかに破損する。表面は全体的に凹面を形成し、裏面もわずかに凹面をなす。重量は3340ｇで、細粒砂岩製である。表採資料。

⑥器種不明

器種不明とした資料は31点で前述した器種に分類できない資料と、研磨面あるいは敲打痕等を残す破片資料である。前者に属する資料は4点で、第18図と第23図3～6に図示し、略述する。

第23図3は身の上半部を欠く石斧様の資料である。側面観は両刃の様相を呈するが、刃部の研ぎだしは表面から行われ、裏面は割面である。右側辺は敲打調整され、中央はわずかに凹部をなす。刃縁は僅かに欠けている。左側面と裏面は自然面である。現重量は290g。輝緑岩製で、A－24グリッドの出土。

4は鍬の刃状をなす資料で、身の上半部を欠く。右側面は敲打で整えている。刃部と見られる下端の表裏面に剝離痕が認められる。表面は自然面、裏面は割面であるが比較的滑らかな面をなす。現重量は271ｇ。斑れい岩製で、C－32グリッドの出土。

5は全面に敲打痕の認められるものである。本来は球形を呈していたものと考えるが判然としない。裏面と上面は破損面である。器表面の敲打は細かく、複数の稜が見られる。現重量は251ｇ。角せん石安山岩製で、P－26グリッドの出土。

6は平面観が石斧様の形態を呈するが、刃部の形成はみられない。しかしながら、両側辺部の中央は「くぼみ」が造られる。また、下部は比較的滑らかな面をなす。完形品で、重量224ｇ。黒色千枚岩製で、P－31グリッドの出土。

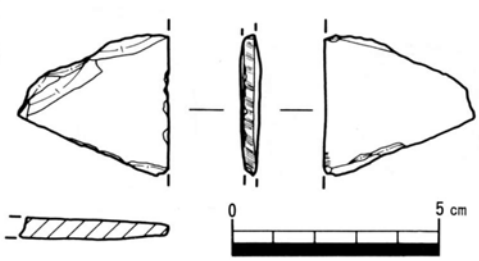
第18図に示すものは厚さ5㎜のプレート状のもので破損品である。表裏面は研磨が施され、滑面を呈する。右側面には斜位の研磨痕が認められる。現重量8.0ｇ。
粘板岩製で、A地区の表採資料である。

第11表　器種不明グリッド別出土状況

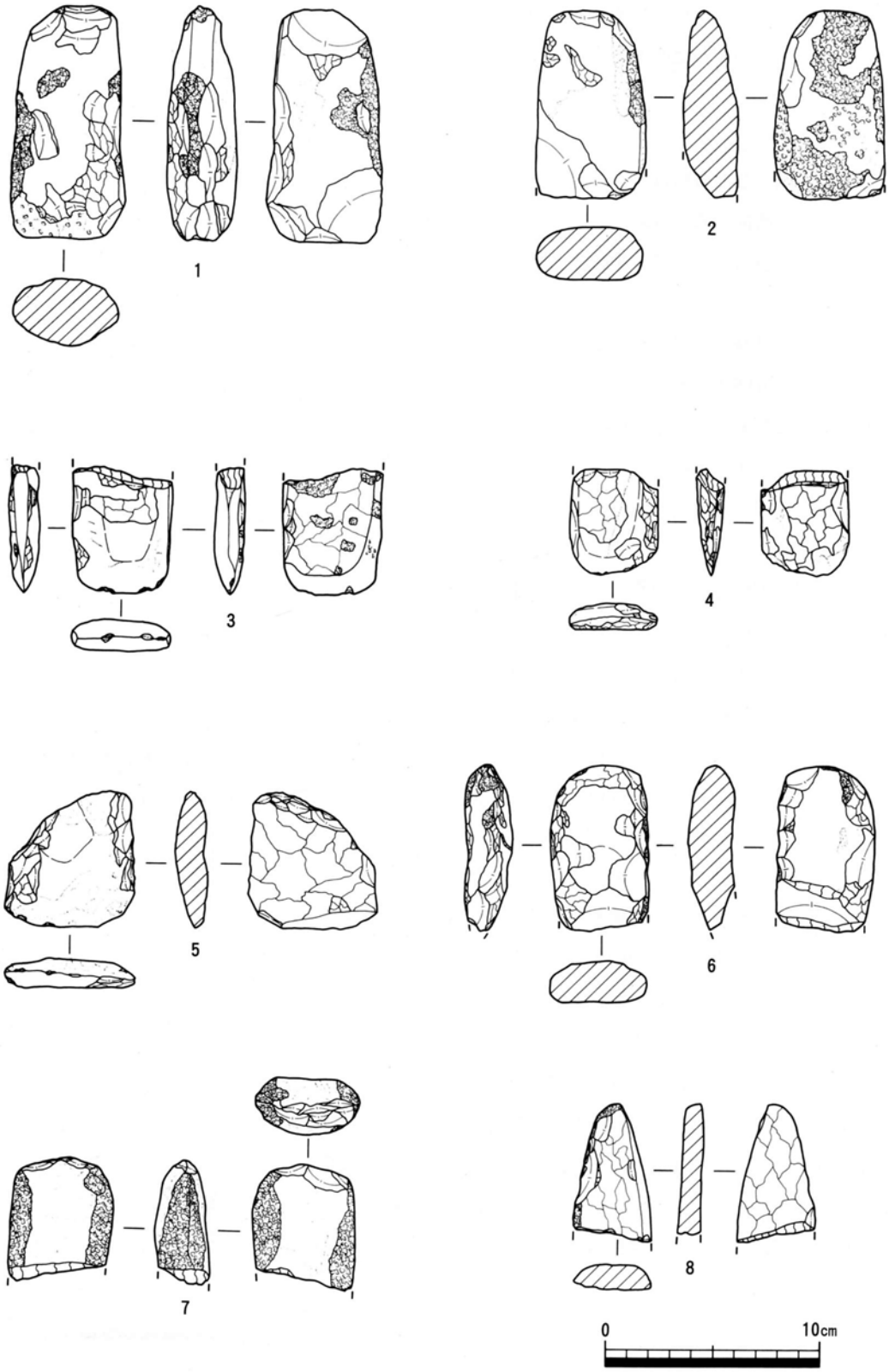
出土グリッド	層 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	合計
A－34		2		2
A－35		1		1
C－18	1			1
C－25	1			1
C－32	1			1
D－23	1			1
D－34		1		1
D－37	1			1
E－37	1			1
F－30	1			1
F－37	1			1
H－37	1			1
M－27	1			1
P－26			2	2
P－31	2			2
P－26			2	2
A地区	2	2		4
B地区北東部	2		3	5
不　明	2			2
合　計	18	6	7	31

第12表　器種不明石質分類表

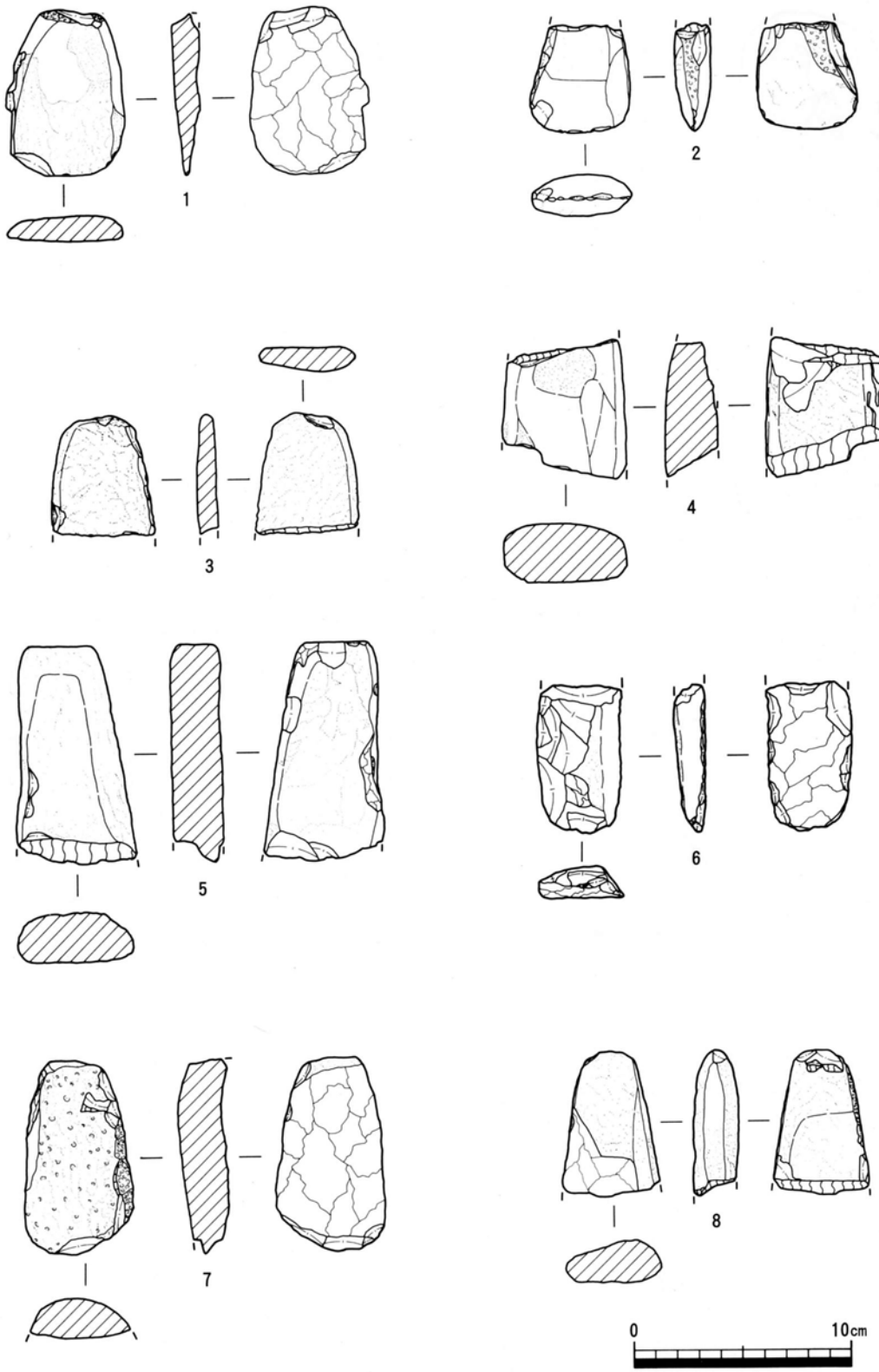
石　質	個　数
アプライト	1
角せん石ひん岩	1
角せん石安山岩	1
輝緑岩	6
黒色千枚岩	3
砂岩	4
石英斑岩	1
粘板岩	1
斑れい岩	7
片状砂岩	5
緑色千枚岩	1



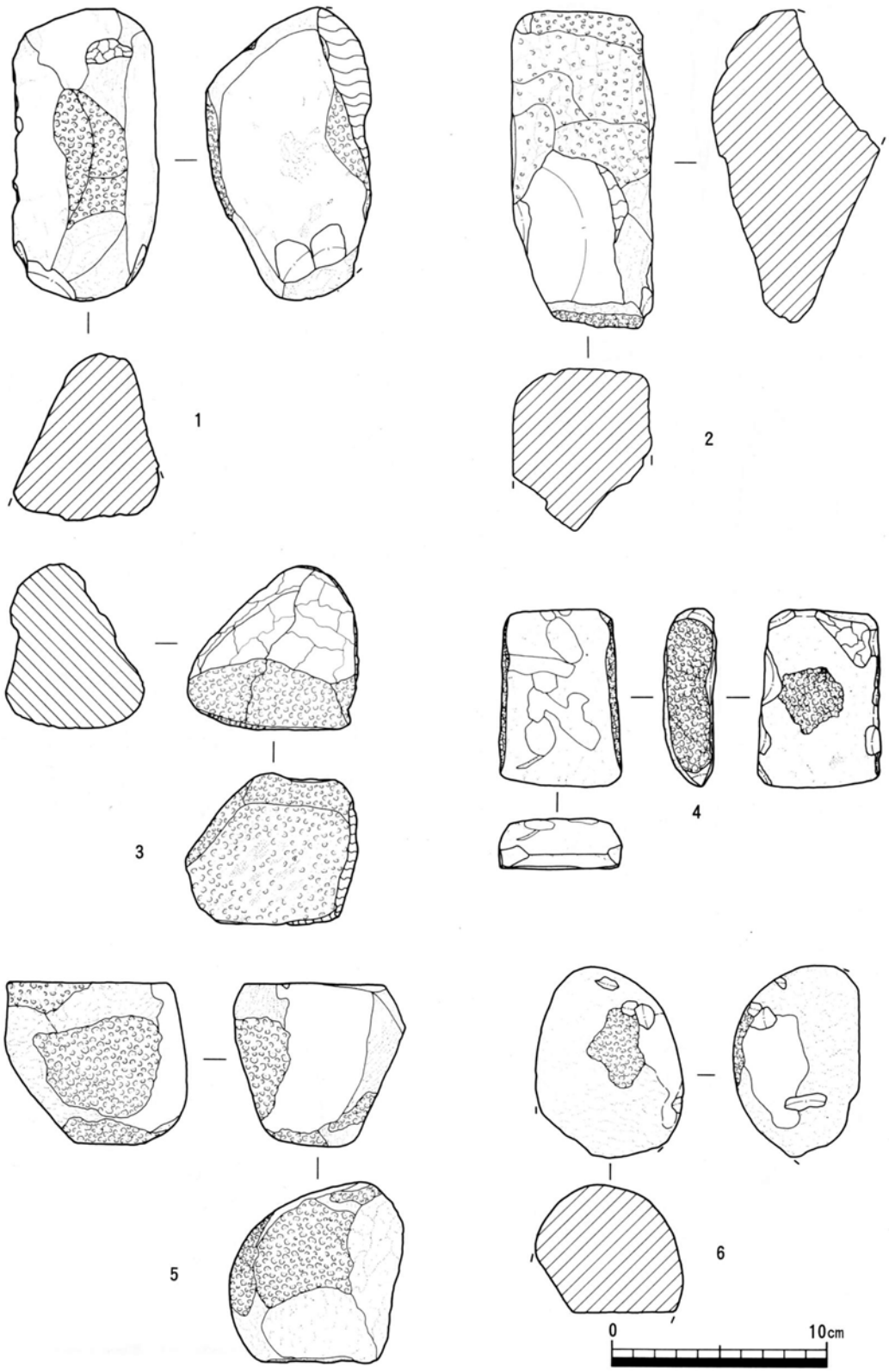
第18図　器種不明石器



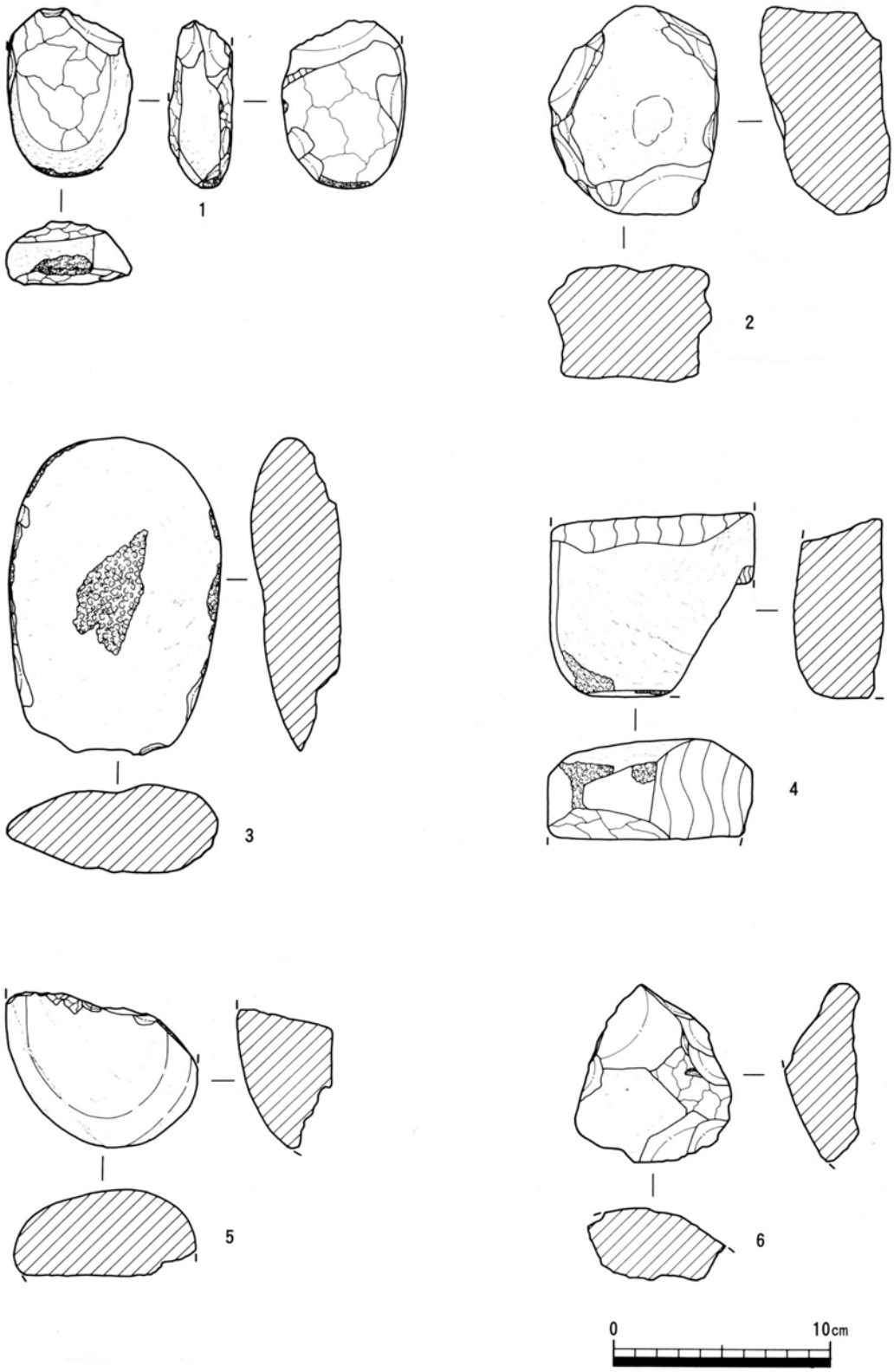
第19図　石斧(1)



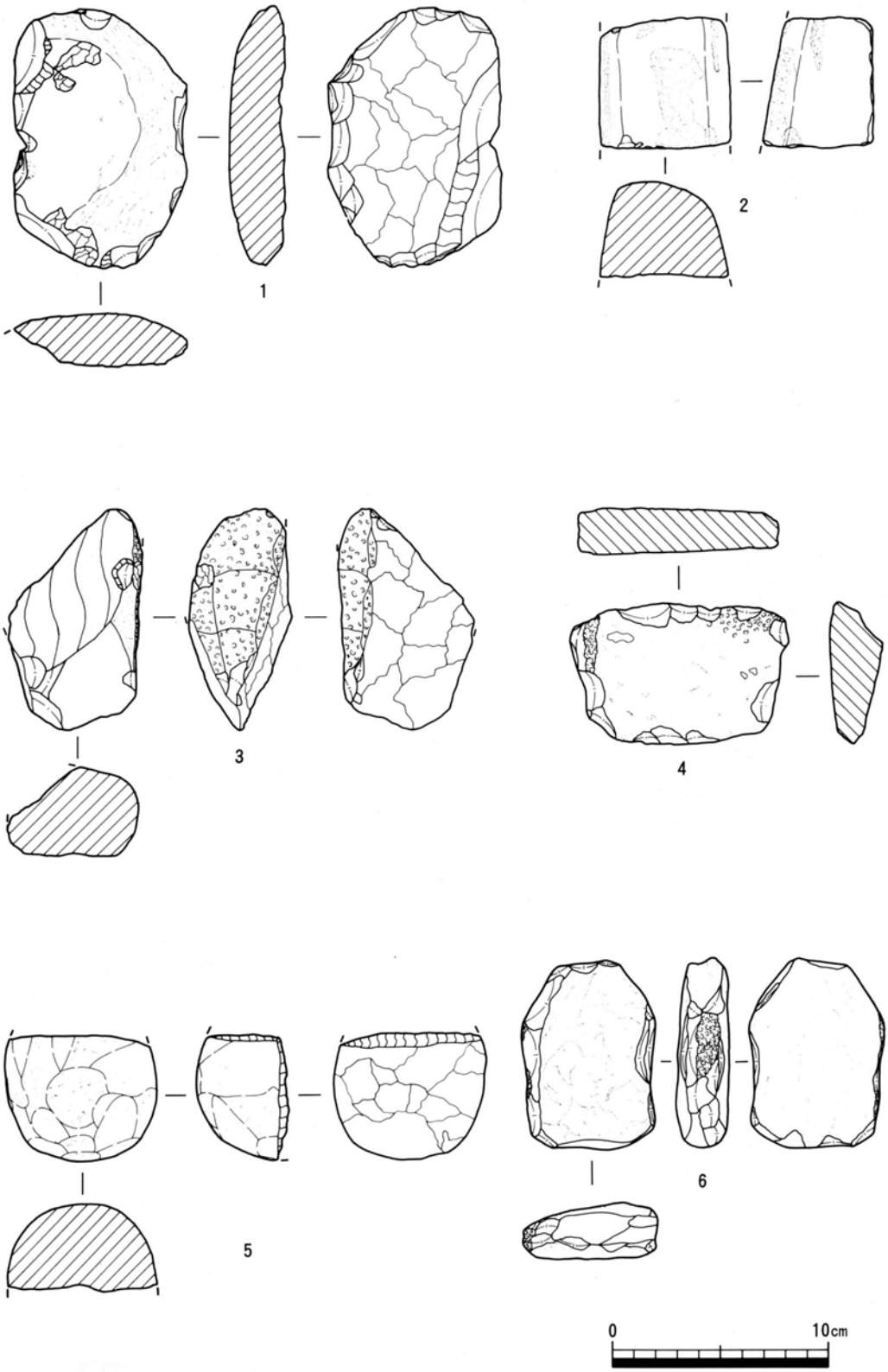
第20図　石斧(2)



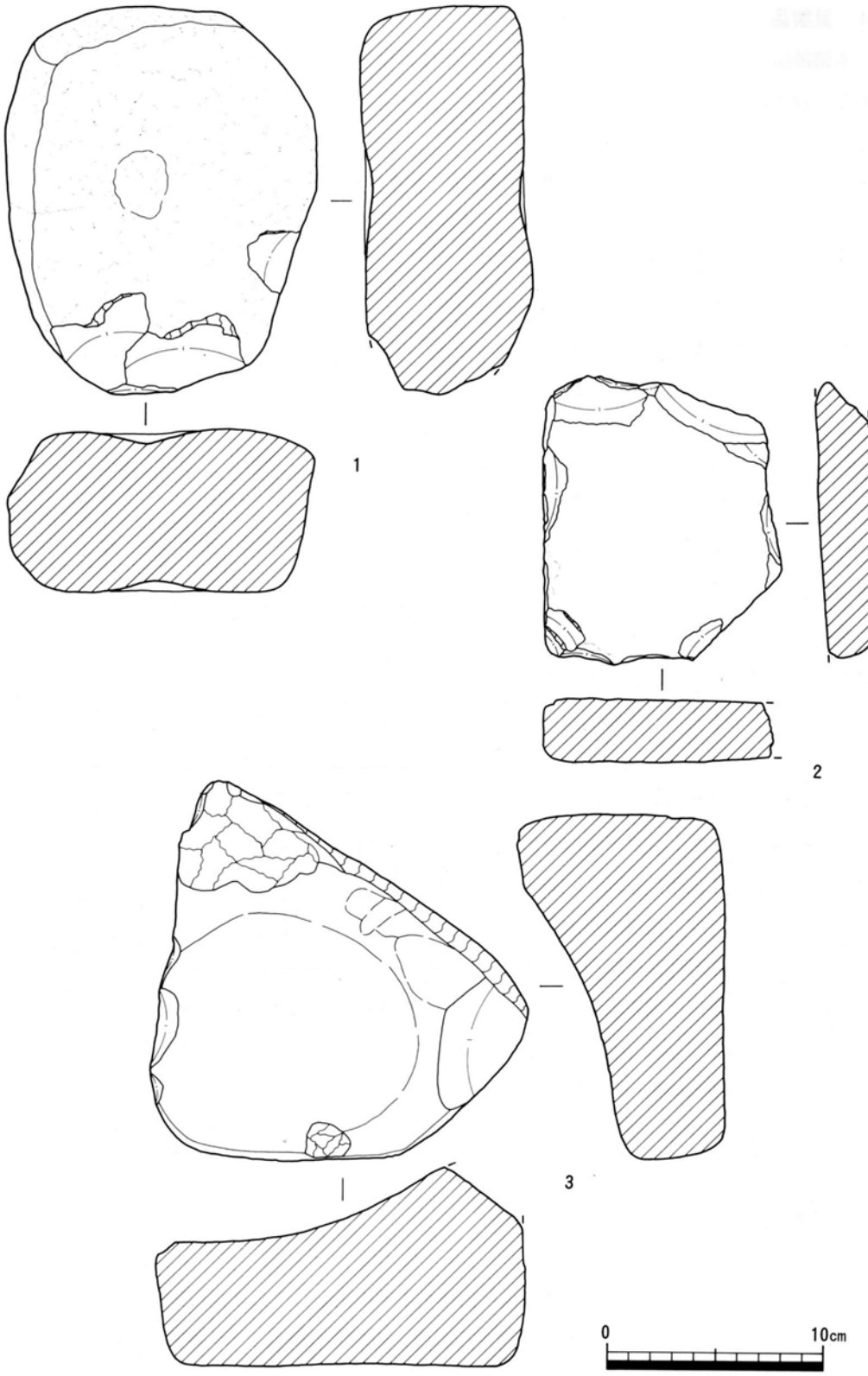
第21図　敲石



第22図　敲石（1～5）、磨石(6)



第23図　磨石（1・2）、器種不明（3～6）



第24図　くぼみ石(1)、石皿（2・3）

4　貝製品

本遺跡出土の貝製品は総数25点で、その内訳はタカラガイ有孔品23点、二枚貝有孔品２点である。以下に、これらについて略記する。

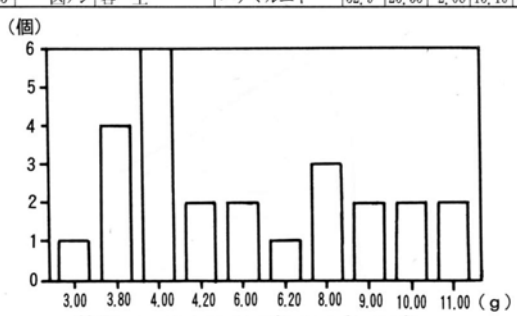
①タカラガイ有孔品（第26図１～10）

いずれもタカラガイの背面を除去し、扁平状にしたものである。貝種はハナビラタカラガイ、ハナマルユキガイ、キイロダカラガイ、シボリダカラガイの４種類が見られ、出土個数は計23点である。除去した面や軸部に打割が認められるものや殻軸が破損したものが出土している。しかし、いずれも研磨調整等は認められない。第13表に計測一覧を示した。

重量について見ると、３ｇから４ｇ台が多く採取されている。最大値11ｇ、最小値3.0ｇである（第25図）。

第13表　タカラガイ有孔品計測一覧　単位：mm／g

No.	押図番号	出土地点	種　目	殻長	殻径	孔径 縦	孔径 横	重量
1	第26図1	Q－25	ハナビラカラガイ	22.85	17.35	18.35	13.55	4.00
2	第26図2	C－27	ハナビラカラガイ	24.8	22.45	19.15	14.25	4.00
3	第26図3	B地区4トレンチ	ハナビラタカラガイ	22.95	16.65	18.85	13.15	3.80
4	第26図4	C－27	ハナビラタカラガイ	25.85	18.15	18.15	15.00	3.80
5	第26図5	表　採	ハナマルユキ	31.25	24.00	20.35	14.00	8.00
6	第26図6	F－37	ハナマルユキ	33.25	25.15	23.45	15.45	9.00
7	第26図7	B－33	ハナマルユキ	34.75	27.25	24.35	16.35	11.15
8	第26図8	B地区南東部	ハナマルユキ	27.55	22.25	18.85	14.00	6.20
9	第26図9	E－30	シボリダカラガイ	32.00	19.15	22.25	15.15	4.20
10	第26図10	P－32	キイロタカラガイ	24.95	18.65	17.95	13.45	3.00
11	図ナシ	Q－33	クチムラサキタカラガイ	33.35	22.35	24.15	17.00	8.00
12	図ナシ	H－30	ハナビラタカラガイ	27.00	18.75	18.15	14.00	4.00
13	図ナシ	K－31	ハナビラタカラガイ	26.95	18.00	20.75	15.00	4.20
14	図ナシ	Q－27	ハナビラタカラガイ	24.25	22.35	22.00	12.75	4.00
15	図ナシ	B地区3トレンチ	ハナビラタカラガイ	28.45	23.65	20.45	14.45	4.00
16	図ナシ	L－29	ハナビラタカラガイ	24.15	17.15	14.15	12.25	3.80
17	図ナシ	B地区2トレンチ	ハナビラタカラガイ	25.65	16.65	19.45	13.00	3.80
18	図ナシ	B地区南東部	ハナビラタカラガイ	26.35	18.45	18.85	13.55	4.00
19	図ナシ	表　採	ハナマルユキ	33.00	25.35	20.45	16.35	10.00
20	図ナシ	N－28	ハナマルユキ	35.45	27.25	21.75	16.95	11.00
21	図ナシ	N－31	ハナマルユキ	29.35	21.85	19.45	13.75	6.00
22	図ナシ	B－28	ハナマルユキ	29.75	22.35	21.85	14.95	6.00
23	図ナシ	B－29	ハナマルユキ	32.95	24.95	21.25	14.95	9.00
24	図ナシ	テストピットNo.8	ハナマルユキ	28.01	23.00	19.45	14.02	8.00
25	図ナシ	客　土	ハナマルユキ	32.9	25.55	2.08	15.10	10.00



第25図　タカラガイ有孔品重量分布

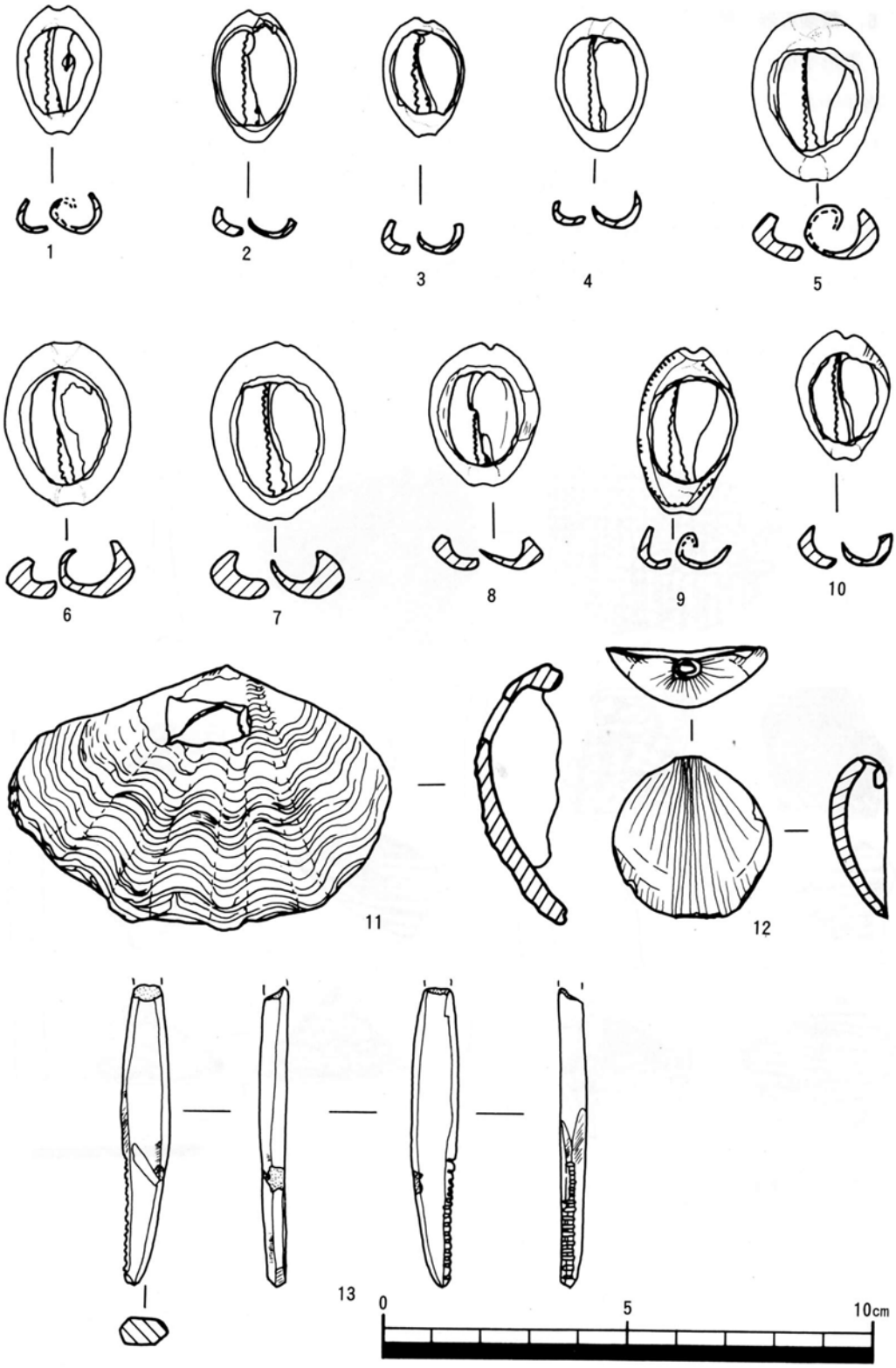
②二枚貝有孔品（第26図11・12）

同図12はソメワケグリガイの右殻を利用しており、殻頂部に0.25×0.35㎝の孔が施されている。孔は内側より穿たれており、その形状は横楕円を呈する。研磨等の調整痕は見られない。殻長3.1㎝、殻高3.24㎝、重量8.2gである。同図11はヒメジャコの右殻を利用しており、殻頂付近に7.85×14.95㎜の孔が施されている。孔は内側より穿たれている。研磨等の調整痕は見られない。殻長7.47㎝、殻高5.38㎝、重量34gである。C－25グリッド出土。

5　骨製品

①用途不明品（第26図13）

ジュゴンの肋骨を利用するものである。全体を丁寧に研磨しており、表裏面は平滑に仕上げられている。左側面には細かい刻みが認められる。先端部は破損する。現存長6.15㎝、幅1.0㎝、厚さ0.6㎝、現重量6.0gである。G－22グリッド表採品である。



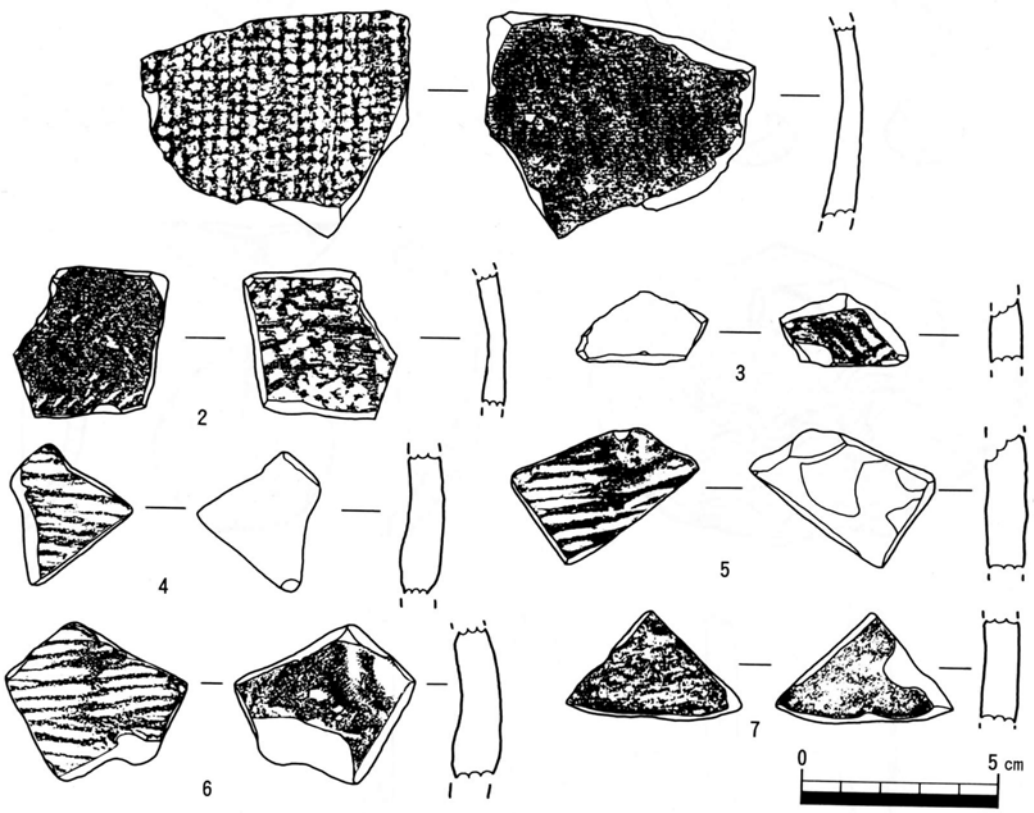
第26図　タカラガイ有孔品（1～10）・二枚貝有孔品（11～12）・骨製品(13)

6　類須恵器（第27図）

器形を復元できる資料はなく、全て胴部破片である。計７点出土している。１～３の３点は格子叩き目が見られる資料で、１は表面に、２・３は裏面に施されている。器色は灰青色を呈し、硬質のものである。１・３はＢ地区北東部、２はＱ－27グリッドの出土である。

４～７の４点は表面に平行叩き目の見られる資料である。６は裏面に当て具の痕が見られる。器色は５～７は表面が淡黄色、裏面は灰色を呈し、４は両面とも灰色を呈する。いずれも軟質で、器面の保持が悪い。これらは焼成不良の資料と思われる。４・５・６はＰ－27グリッド出土で、７はＢ地区北東部出土。

全ての資料に胎土混入物として石英、雲母等がみられる。



第27図　類須恵器

7　磁　器

磁器は、青磁、白磁、色絵、かけ分け、るり釉、中国産染付、肥前染付の幕末以前のものと明治以降の国産磁器が得られた。これらの資料は、同遺跡のこれまでの保存状況、層の状況等から推察できるように遺構との伴出が僅かに見られたものの、大半は遺構に伴う出土状況ではない。しかし、ここの遺物は遺跡の所属時期を考える上で貴重であることから種類ごとに大別し、次に器種別に分ける方法を行った。
以下、個々の特徴について略述する。

①青磁（第28図１～６）

青磁は、碗の破片82点、盤の破片２点、皿の破片６点、壺の破片２点、合計92点が出土した。その中から比較的おおきな資料６点について概述する。図示した資料の時代的位置づけは、14世紀から16世紀を想定するが、小破片のため判然としない。

第28図１～４は、碗の底部資料と思われるものである。１・２は高台が比較的幅広く、高台外面は竹節状を呈する。釉は外底部および畳付部分以外に施釉するが、内底部では輪状に釉を削り取っている。１は底径８㎝、２は6.8㎝を測る。

同図３は、高台内側まで施釉する資料で竹節状を呈する。底径は5.9㎝を測る。

同図４は、釉を外底部まで施釉するが、外底部分は釉を削るものである。内底部には箆彫り状の草花文が認められる。底径は5.8㎝を測る。

同図５・６は皿と思われるもので、５は底部、６は口縁部の資料である。２点とも片刃彫りの文様が認められるが構図ははっきりしない。底部の径は７㎝を測る。

②白磁（第29図１～４）

白磁は碗・皿・坏の破片と器種が判明しない資料、計40点が出土した。以下、図示した４点について概述する。

第29図１は碗の口縁部破片でビロースクタイプ碗Ⅱと推察されるものである。口径は13.4㎝を測る。同図２は型成形の小坏で18世紀末～19世紀の福建系と思われるもので、口唇部は無釉である。口径は3.4㎝、器高は1.7㎝、底径は２㎝を測る。ビロースタイプ碗Ⅱは13世紀末から14世紀中葉のもの考えられている（註１）。同図３は皿で型成形である。18世紀末～19世紀の福建系と思われるもので、口唇部は無釉である。口径は9.1㎝、器高は2.4㎝、底径は5.2㎝を測る。同図４は高足坏の足の資料で、16世紀～17世紀前半のものと思われる。足の底径は３㎝を測る。

③色絵・かけ分け青磁・るり釉（中国産）（第29図５～８）

色絵は４点、かけ分け10点、るり釉８点が検出された。いずれも小破片であるが、色絵は18

世紀～19世紀、かけ分けは18世紀末～19世紀、るり釉は16世紀～17世紀の所産と推察された。以下、大きい資料について図示し、概述する。

第29図５は型成形された碗で、口唇部は無釉である。外体部に赤（？）の文字状の文様が見られる。口径は8.1㎝を測る。福建系と思われる。同図６も碗の胴部破片で、外面の緑色の窓内に「喜」文字の下部と思われる文字文様が認められる。同図７は青磁染付碗の口縁部破片で外面は青磁釉、内面は染付である。同図８は福建系の型成形皿と思われるものである。口唇部は無釉で、畳付にはもみがら状の砂熔着が認められる。

④染付

染付は中国産のものと肥前産のものが検出された。先に中国産のものについて概述し、次に肥前産のものについて概述する。

中国産の染付は、総数586点出土した。この内286点については小破片のため時期の推察が困難であったが、他の資料300点については、下記のとおりに大別された。

器形、文様等の諸特徴から時期を大別すると15～16世紀のもの：１点、16世紀のもの：２点、17世紀前半のもの：47点、17世紀のもの：14点、17～19世紀のもの：49点、18世紀のもの：142点、18世紀末～19世紀のもの：30点、19世紀のもの：15点に分けられた。これらの資料の内、器形が推察できるものは約３分の１ほどで、その大半は碗であった。その他の器形では、皿、坏が次に多く、僅かに瓶、鉢が見られた。以下、器種別に図示して概述する。

碗（第30図１～９・第31図１～10）

碗と思われる破片は、266点検出された。以下、特徴的な資料について、図示して概述する。

第30図１は口縁部外面に雷文帯を描くものである。口径は11.2㎝を測る。17世紀の所産と思われる。同図２は口が直線的に開く碗で、釉を口唇部で取る口禿である。18世紀頃の福建・広東系と思われる。口径は14.1㎝を測る。同図３・４も18世紀頃の福建・広東系と思われる口縁部破片で、外面に印判の花文が認められる。３は口縁部が直線的に開き、端部は僅かに外反する。口径は12㎝を測る。４は前者に比較すると口縁部がやや立ち上がるもので、口径は14.1㎝を測る。

同図５は底部資料で印判の花文が認められる。底部内面には蛇の目釉剝ぎがあり、高台は無釉である。底径は8.9㎝を測る。18世紀頃の福建・広東系のものと推察される。同図６・７も18世紀頃の福建・広東系のものと思われる底部資料である。６は底部内面および高台を無釉にするもので、底径は7.5㎝を測る。７は底部内面および底部外面の高台から底にかけては無釉にするもので、底径は6.4㎝を測る。

同図８・９は同種の資料で、18～19世紀初め頃のものと推察される。８は口縁部破片で外面に花散文、口縁内面には界線が２条認められる。口径は13㎝を測る。９は外体部に寿字文と蓮

弁文を描くもので、高台は前述の５～７より0.5～0.7㎝高い。本資料は口径12.9㎝、器高5.8㎝、底径6㎝を測る。

第31図１・２は呉須の文様が見られないが諸特徴から前図６・７と同種の資料と思われる碗の底部である。底部内面には蛇の目釉剝ぎが施され、高台の畳付部分は露胎にする。１の底径は7.2㎝、２の底径は7.8㎝を測る。

同図３は口縁部破片で内外面に文様が認められる。口径は12.3㎝で、18～19世紀初め頃のものと思われる。

同図４は底部の底の破片で外面に「和美」（？）の銘が認められる。18～19世紀初め頃のものと思われる。

同図５・６は、18～19世紀初め頃のものと思われる口縁部破片である。５は外面に花唐草文と蓮弁文、内面には界線を配する。６は外面に丸状の文様が見られるが構図は判然としない。

同図７は底部の資料で、内底には蛇の目釉剝ぎが認められる。高台の畳付は露胎で、高台の内側にはもみがら状の砂の熔着がある。底径は7.7㎝を測る。18～19世紀初め頃の福建・広東系のものと思われる。

同図８～９は18世紀末～19世紀初め頃のもの思われる底部資料である。８は体部外面に唐草文（？）と蓮弁文、底部外面に銘（文字は判読できない）が認められる。底径は４㎝を測る。９・10は唐草文（？）および界線が体部外面に認められるものである。後者については、底部の内面に草花文状の文様、外面には界線を配する。底径は前者が3.8㎝m、後者は4.9㎝を測る。

坏（第32図１～６）

坏は15点出土した。以下、図示したものについて概述する。

第32図１は小坏の底部破片で16世紀頃の景徳鎮窯系と思われるものである。底部内面に山水文、外面には銘が認められる。高台の畳付および内側は無釉である。底径は、3.1㎝を測る。２は呉須の文様が僅かに認められる小坏である。高台は無釉で、底径は２㎝を測る。17世紀頃のものと思われる。３も17世紀頃のものと思われる小坏の口縁部破片である。

同図４は、器形が推察できる小坏である。呉須の文様が認められるものの構図は判然としない。口唇部は釉剝ぎが施され、高台は無釉である。17世紀頃のものと推察される。口径は5.3㎝、器高は3.2㎝、底径は2.6㎝を測る。

同図５・６は口縁部破片である。５は外面に梵字文を配するもので、口唇部の釉は剝ぎ取る。18世紀末から19世紀頃の福建系と思われる。口径は５㎝を測る。本資料は、小碗が想定される。６は外面に唐草文が見られるもので、19世紀頃の所産と推察される。口径は3.7㎝を測る。

皿（第33図１～７）

皿と思われる破片は、17点出土した。以下、特徴的な資料について図示し、概述する。

第33図１は内底部に花文状の文様、高台外面に界線が認められる底部破片である。16世紀前

半から中葉の景徳鎮窯系と思われる。畳付部分は無釉で、底径は8.7㎝を測る。

同図2・3は、18世紀から19世紀初め頃のものと思われる口縁部破片である。2は内面に呉須の界線等の文様が認められる。3は内面に仙芝祝寿文を描くものである。外面にも文様が認められるが、構図は判然としない。

同図4は18世紀後半から19世紀のもの思われる底部破片である。内面および外面に文様が認められる。畳付は露胎で、底径は8.9㎝を測る。同図5は18世紀頃の景徳鎮窯系ものと思われるもので、内底部に梅花文が認められる。畳付は露胎で、底径は9㎝を測る。

同図6は型成形のもので、器の形は4弁花状を呈していたと推察する。内底に呉須の文様が認められる。畳付は露胎で、底径は4.5㎝を測る。口径は長径6.7㎝、短径6.1㎝を測る。18世紀後半から19世紀のもの思われる。

同図7は口縁部破片で、内面には草花文状の文様が認められる。口径は10.2㎝を測る。18世紀から19世紀頃の資料と思われる。

瓶（第33図8）

明らかに瓶と分類できるものは、図示した1点のみ出土した。8は外面に唐草文（？）および界線が認められる。15世紀から16世紀前半頃の景徳鎮窯系と思われる。

鉢（第33図9）

鉢になるものは図示した1点が出土した。9は印判状の花文および唐草文が外面体部に認められる。内面底部には蛇の目釉剝ぎが見られる。高台の畳付部分は露胎で、内側にはもみがら状の砂粒の熔着がある。17世紀後半から18世紀頃の福建・広東系と思われる。

⑤肥前産染付

これに属するものは、碗4点、鉢3点、皿1点、瓶1点が出土した。以下、順に略述する。

碗（第34図1～4）

第34図1～4に図示もので、1は口縁部および体部下方の内外面に界線が認められる。口径13.8㎝、器高7.8㎝、底径5.2㎝を測る。1650～1680年頃のものであろう。2は底部の破片で高台の畳付部分を欠損する。底部内面には荒磯文（跳魚図）を配する。1655～1670年代のものであろう。3は18世紀頃のもの思われる底部資料である。底径は3.7㎝を測る。4は底部資料で外面体部に矢羽根文、腰部に蓮弁文を描く。内底に銘状の文様が認められ、底径は3.2㎝を測る。畳付は露胎である。1780～1820年代のものである。

鉢（第34図５・６、第35図１）

第34図５は型打成形のもので、内底部に蝶文を配する。畳付は露胎である。大きさは、口縁長径16.2㎝、器高7.4㎝、底径7.5㎝を測る。1820～1860年代頃のものと推察される。

同図６も型打成形によるものである。外面には区画文と格子目文が認められる。内面には界線と内底の文様が確認できる。畳付は露胎で、底径は5.7㎝を測る。1800～1860年代のものと推察される。

第35図１は口縁部が外反するもので、外面にブドウ文、内面にはブドウ文および草花文を描く。高台は蛇の目凹形で、畳付および底部外面の一部を露胎にする。大きさは口径19.2㎝、器高7.3㎝、底径10.1㎝を測る。1820～1860年代のものと思われる。

皿（第35図２）

同図２は型打成形によるもので、口縁部が波状を呈する。内底には山水文が配される。高台は蛇の目凹形で、大きさは口径12.9㎝、器高3.1㎝、底径7.9㎝を測る。1800～1860年代のものと思われる。

瓶（第35図３）

同図３は瓶の胴部破片で、外面に網目文を描くものである。17世紀後半のものと思われる。

明治以降の国産磁器

明治以降の国産磁器については、文様の付け方から型紙染付・銅版転写文・吹き付け文・印文・手書き文・その他の文様のあるもの・クロム青磁に大別されたが、ここでは、本遺跡から多量に出土した型紙染付、銅版転写文、吹き付け文の一部、印文、あとは産地がある程度特定できる資料について概述する。

⑥型紙染付（第36図）

型紙染付としたのは、沖縄で一般的にスンカンマカイと呼んでいるものを含むもので、碗115点、皿18点、器種不明５点が出土した。以下、碗と皿の特徴的なものを図示して概述する。

碗（第36図１～７）

第36図１・２は腰部分から立ち上がり、口縁は外反する。文様は点の集合で外面体部を埋めるが、ひし形の窓が横つながりで体部外面を取り巻き、窓内に星形状の八弁花文を配する。口縁内部は点の集合からなる三角と三角の窓（窓の中には点による花文？を描く）を交互に配して口縁を囲繞する。内底には草花文を配する。さらに、内底には５足のハマ痕も認められる。大きさは、１が口径14㎝、器高6.5㎝、底径5.1㎝、２は口径13.1㎝、器高5.6㎝、底径4.5㎝を

測る。本資料に類似する資料は、愛媛県砥部町で主に大正時代に生産されたとされる（註２）資料に近似することから大正から昭和10年代にかけてのものと推察する。

同図３・４は器形が前者とほぼ同じで、文様が異なるものである。３は体部外面に丸い窓（窓の中には、羽を広げた鳥を配する）と竹の葉および松をモチーフにしたと思われる文様を配する。大きさは、口径12.9㎝、器高5.3㎝、底径4.4㎝を測る。４は花状の窓（窓の中にはすいせん花状の花文を配する）と竹の葉状の文様が外面体部に認められる。大きさは、口径14.2㎝、器高5.6㎝、底径６㎝を測る。

同図５・６は、愛媛県砥部で主に大正時代に作られたと扱われている型紙染付に器形・文様とほぼ同じものが確認できる資料である。５は外面体部および口縁内面に草花文を配するものである。また、内底には５足のハマの足痕と草花文が認められる。大きさは口径13.5㎝、器高5.6㎝、底径5.1㎝を測る。６は口縁がほぼ直口になるものである。外面体部および口縁内面に「福・壽」の吉祥文字と草花文（？）を描くものである。大きさは、口径11.1㎝、器高5.9㎝、底径4.3㎝を測る。同図７は前述の６点に無い文様が認められることから紹介したもので、底径は5.6㎝を測る。

皿（第36図８～１１）

同図８・９は口縁が波状を呈するものである。８は草花文を内面および外面に描くもので、大きさは口径13.6㎝、器高2.5㎝、底径6.8㎝を測る。９は内面に白抜きの窓を設け、中に花文を描くものである。口径は12.3㎝を測る。

同図10は、折り帯文と草花文が認められる底部破片である。底径は８㎝を測る。

同図11は内面に花文を配し、口唇はコバルト釉でぬるものである。大きさは、口径10.4㎝、器高2.2㎝、底径6.5㎝を測る。この皿に近似するものも砥部焼の中に確認することができる。

⑦銅版転写文（第37図）

銅版転写文の磁器は小碗57点、皿45点が出土した。資料としては、前述の中国産の磁器に比較して口縁から底部まで器形が推察できる大型破片が多く得られた。

同資料の産地と時期については、判然としないが明治以降の陶磁器製造業の工場制手工業化の中で銅版転写が広く導入されてきたこと（註３）、また、工場制手工業化は瀬戸・美濃を中心に広がり、明治29年～昭和48年まで陶磁器全国生産の約54～82パーセントを占めてきた（註４）ことから明治以降の国産磁器については瀬戸・美濃産の磁器が比較的多く全国に産出されている可能性が強いのではないかと想定している。しかし、前述の内容は想像の域をでないことから、今後、専門の方に指導をお願いし内容を充実したい。

小碗（同図１～12）

同図１は、体部外面にバラを描くもので、口径は8.2㎝、器高4.7㎝、底径3.5㎝を測る。同図２は、体部外面にツバキを配していたと思われるもので、口径7.6㎝、器高4.7㎝、底径3.9㎝を測る。同図３は、栗の木（？）を描いたと思われるもので、口径８㎝、器高4.7㎝、底径４㎝を測る。同図４は、ソテツあるいはサボテン状の植物を描くもので、口径7.9㎝、器高4.7㎝、底径3.6㎝を測る。同図５～８は菊の花のような文様を配するもので、６～８については口縁部に吹き付け文が加わる。５は口径７㎝、器高4.7㎝、底径3.6㎝を測る。６は口径８㎝、器高4.4㎝、底径3.6㎝を測る。７は口径6.9㎝、器高4.7㎝，底径3.3㎝を測る。８は口径７㎝、器高4.2㎝、底径3.1㎝を測る。

同図９は葉の文様が認められる口縁部破片で、口径は8.1㎝を測る。同図10も口縁部破片で体部外面に松と家を描く。口径は８㎝を測る。同図11は釉の発色等の特徴が前者10に近似する底部破片である。体部には丸い窓と家が認められる。底径は3.7㎝を測る。

同図12は、丸い窓に「福」の文字（？）が認められる口縁部破片である。口径は8.2㎝を測る。

皿（第37図13～18）

同図13は内面に花、壺、魚、船、落下傘を描くので、絵の内容から軍の経済統制下のものではないかと推察する。大きさは、口径14.5㎝、器高2.9㎝、底径８㎝を測る。同図14はさくらの花を内面に描くもので、口径16.6㎝，器高2.8㎝、底径10.3㎝を測る。同図15は菊をモチーフにしたと思われる文様が認められるもので、口径11.4㎝、器高2.2㎝、底径6.9㎝を測る。

同図16は葉および花の文様が認められるもので、口径13.4㎝、器高2.5㎝、底径８㎝を測る。

同図17・18は同一個体と思われるもので、前者は口縁部破片、後者は底部破片である。内面に馬がしら状の絵を配する。口径は14.2㎝、底径は7.6㎝を測る。

⑧印文・吹き付け文（第38図）

ここで扱うものも基本的には銅版転写文と背景は類似すると思われる。印文小碗44点、皿７点、吹き付け文碗５点が出土したが、その中から特徴的な資料について図示し略述する。

小碗（第38図１～13）

第38図１は体部外面に菱形状の菊花文を配するもので、口径8.4㎝、器高4.8㎝、底径3.3㎝を測る。同図２は体部外面に小菊文を配するもので、口径8.2㎝、器高4.7㎝、底径3.7㎝を測る。

同図３は花文？と扇子文を描くもので、口径8.4㎝、器高4.7㎝、底径3.4㎝を測る。同図４は体部外面を線で区切り、その中に竹と松？を描くものである。大きさは、口径7.8㎝、器高

4.8㎝、底径3.2㎝を測る。

同図５～９は口縁部破片である。５は梅と木を描くもので、口径は8.2㎝を測る。６は線文で亀甲を描き、その中に梅状の花文を配するものである。口径は８㎝を測る。８は菱形の窓と菱形の菊花文が認められるもので、口径は8.2㎝を測る。９は体部の上下にすだれ状の線文と花文を配するもので、口径は8.2㎝を測る。

同図10は短線からなる長方形の文様と花文で体部外面を埋めていたと思われるもので、口径8.2㎝、器高4.9㎝、底径3.2㎝を測る。

同図11は体部外面に縦線文とツバメ文を配するもので、口径8.4㎝、器高4.8㎝、底径3.6㎝を測る。

同図12は山・家・木・鳥・帆舟を体部外面に描くものである。底部外面には「岐325」の文字が認められる。この種の文字については、昭和10年代の統制経済下に岐阜県で製造されたものとされている（註５）。口径8.2㎝、器高4.6㎝、底径3.1㎝を測る。同図13は口縁部破片で、口径8.6㎝を測る。

吹き付け文碗（第38図14・15）

同図14・15は同一個体と思われるもので、前者は口縁部破片、後者は底部破片である。体部外面には雲から頭をだす富士山を描く。口径は7.7㎝を測る。底部外面には「岐409」の文字を配する。底径は3.1㎝を測る。昭和10年代のものであろう。

印文皿（第38図16～19）

同図16～18は同一あるいは同種の資料と思われるものである。内面には文字、石燈籠のある庭園（？）を印文で描く。大きさは同図16で口径12.8㎝、器高2.5㎝、底径7.2㎝を測る。

同図19は内面に文字、木、家、帆舟等を印文で描くもので、口径13.2㎝、器高2.8㎝、底径6.6㎝を測る。

⑨昭和10年代頃の瀬戸・美濃産磁器（第39図）

これに分類できるものは、碗26点、皿23点、器種不明８点が出土した。この種の磁器については「統制経済下における陶磁器生産の一様相」(註６）を参考にこのような時代区分を試みた。以下、図示した資料について略述する。

碗（第39図１～６）

同図１・２・４・５は「岐286」の文字を底部外面に配することから美濃産と推察できるものである。１・４・５は口縁に２条の緑色線文を描く。１は口径８㎝、器高4.3㎝、底径3.1㎝。２は底径3.2㎝。３は口径7.6㎝、器高4.4㎝、底径３㎝。４は口径8.1㎝、器高4.7㎝、底径3.3㎝。

5は口径8㎝、器高4.5㎝、底径3.2㎝を測る。

同図3も口縁に2条の緑色線文が認められるもので、大きさは口径7.6㎝、器高4.4㎝、底径3㎝を測る。

同図6は、口縁部から体部にかけての破片で口縁に3条の緑色線文を配する。口径は8.2㎝を測る。

Ⅲ（第39図7～9）

第39図7は底部からほぼ直線的に外反する。高台の畳付は丸く成形され、内外面には丸い溝状を呈する。また、高台の内外面には白土の熔着が確認できる。畳付部分は露胎。文様は口縁内面口縁に沿って2条の緑色線文を配する。底部の中心部分を欠く為、文字があったかは不明である。大きさは口径13.6㎝、器高2.4㎝、底径8.4㎝を測る。

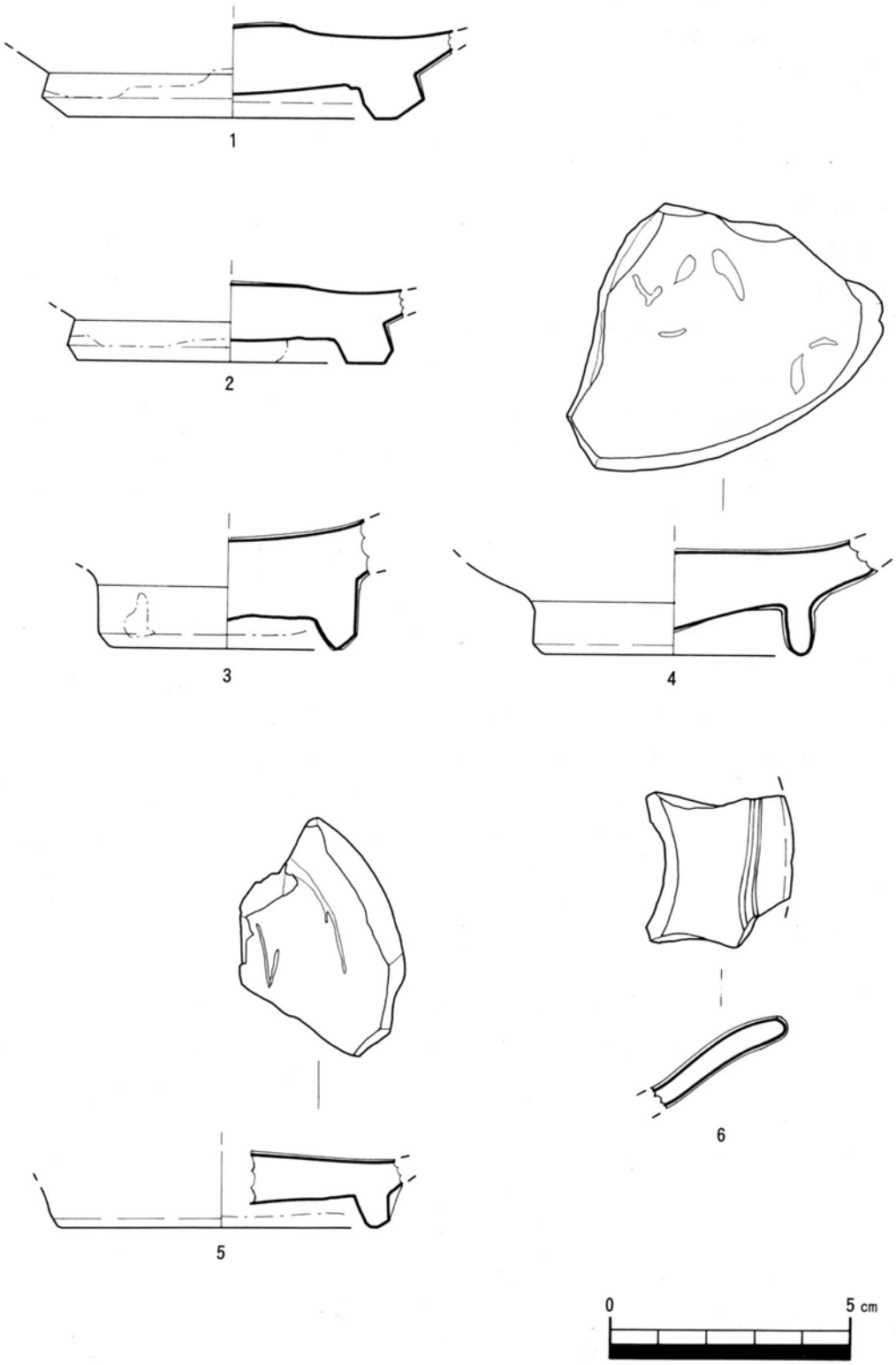
同図8・9も前記の資料と基本的には同種のⅢと思われるものである。8は口径13.5㎝、器高2.5㎝、底径8.1㎝を測る。9は底径8.5㎝を測る底部資料で、底部外面に「岐122」の文字が認められる。

註

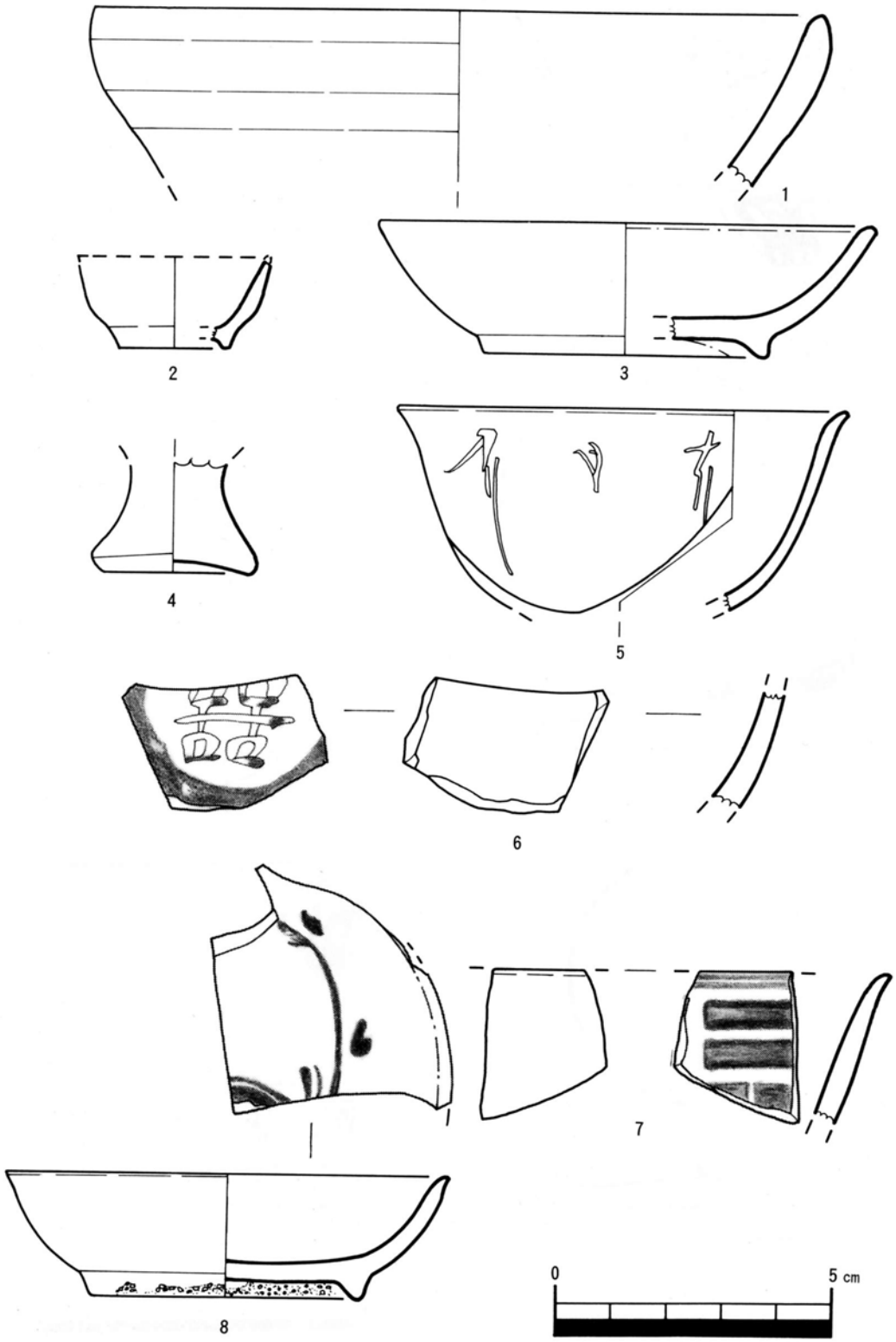
1．金武正紀　「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」『沖縄県立博物館紀要第15号』沖縄県立博物館　1989.
2．伊予陶磁器協同組合　『砥部』　（株）東京印書館　1977.
3．古島敏雄　「産業史Ⅲ」　『体系日本史叢書』　山川出版社　1966.
4．日本陶磁70年史編集委員会　『日本陶磁70年史』　株式会社電通名古屋支社　1874.
5．天内克史　「統制経済下における陶磁器生産の一様相」　『村上徹君追悼論文集』　1988.
6．前記5に同じ。

追記．

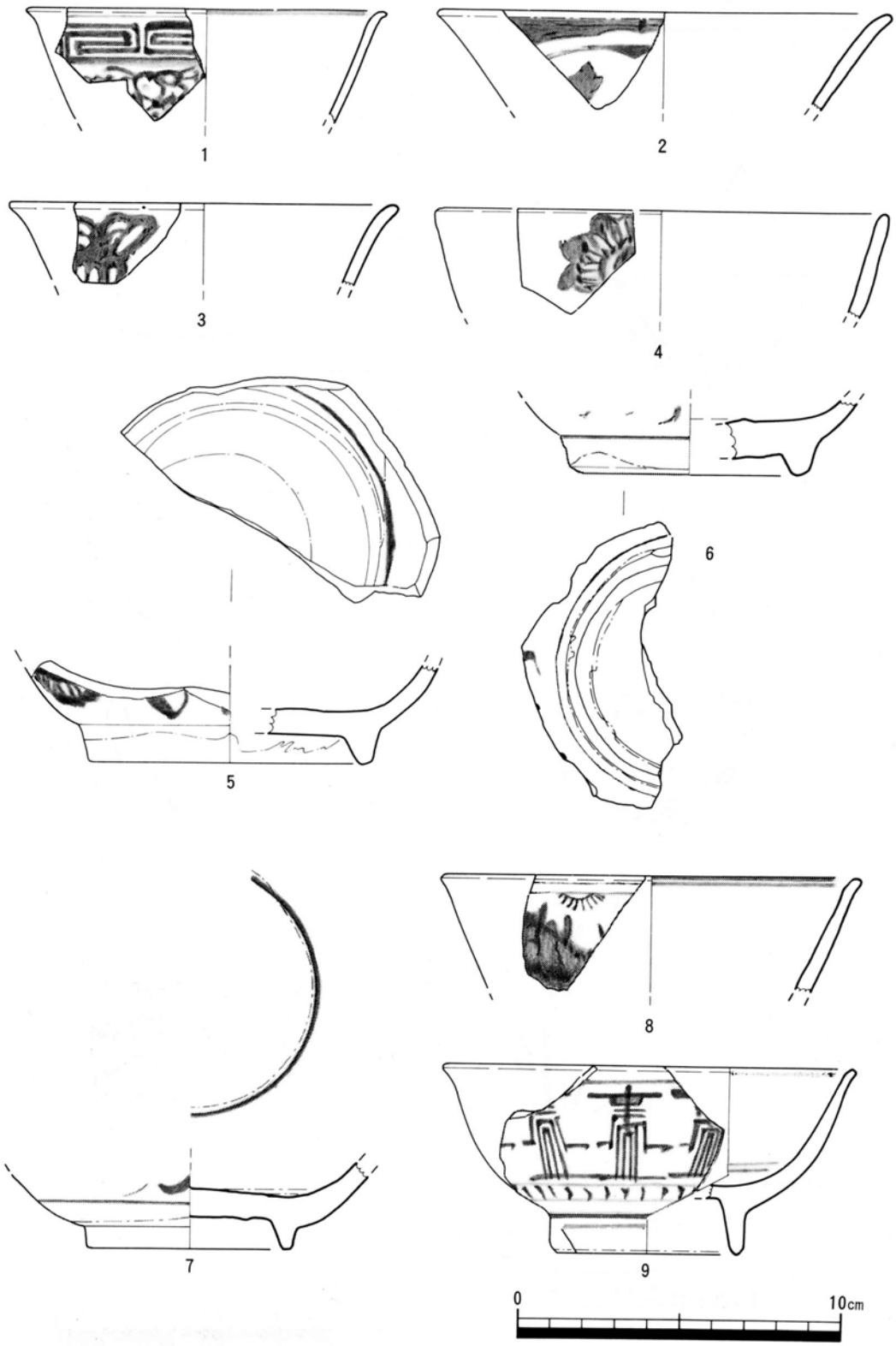
白磁の一部、中国産染付、肥前産染付については、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長）より器種、文様、年代について指導・助言を賜わった。



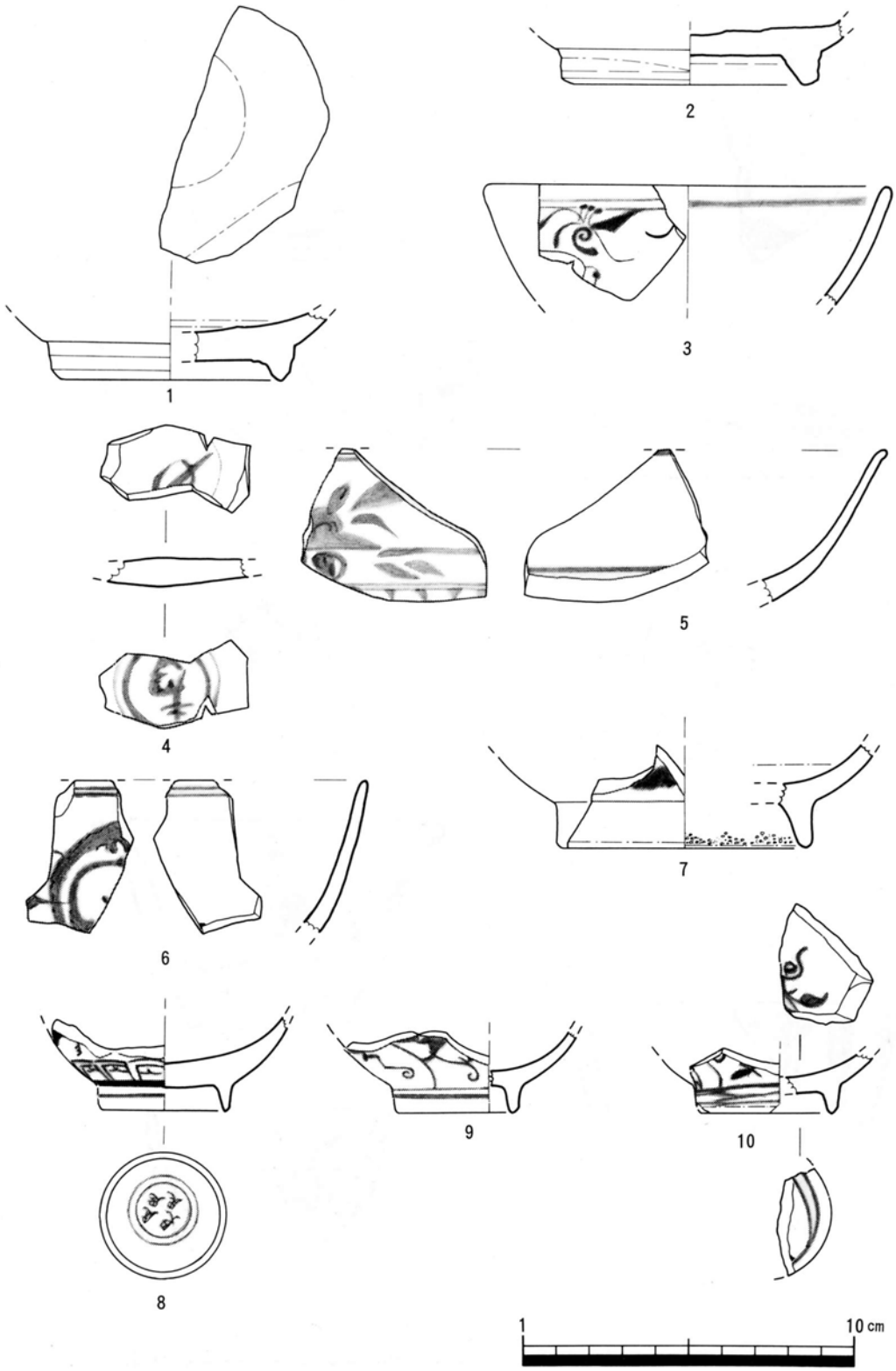
第28図　青磁（碗１～４、皿５・６）



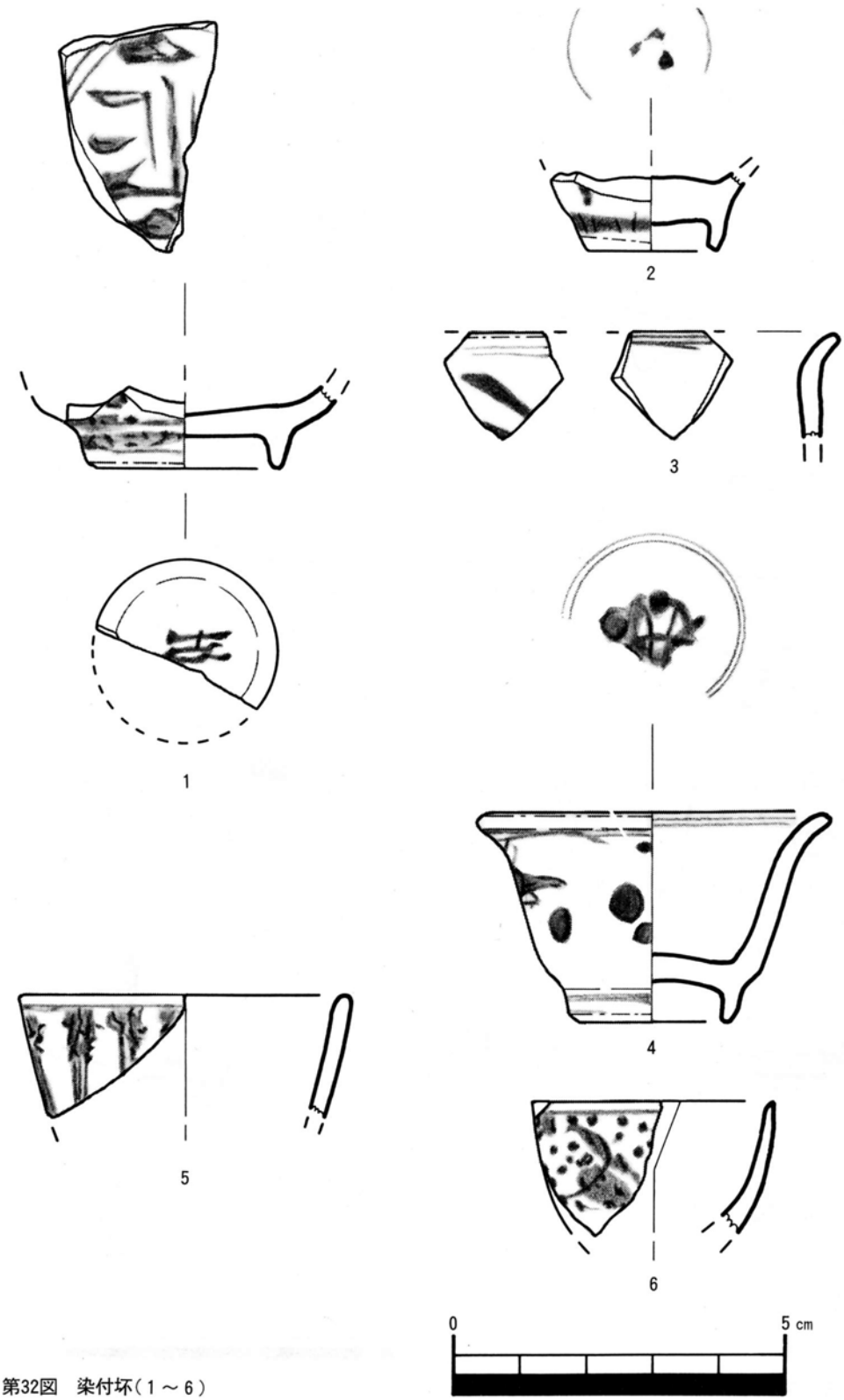
第29図　白磁（1～4）、色絵（5・6・8）、かけ分け青磁(7)



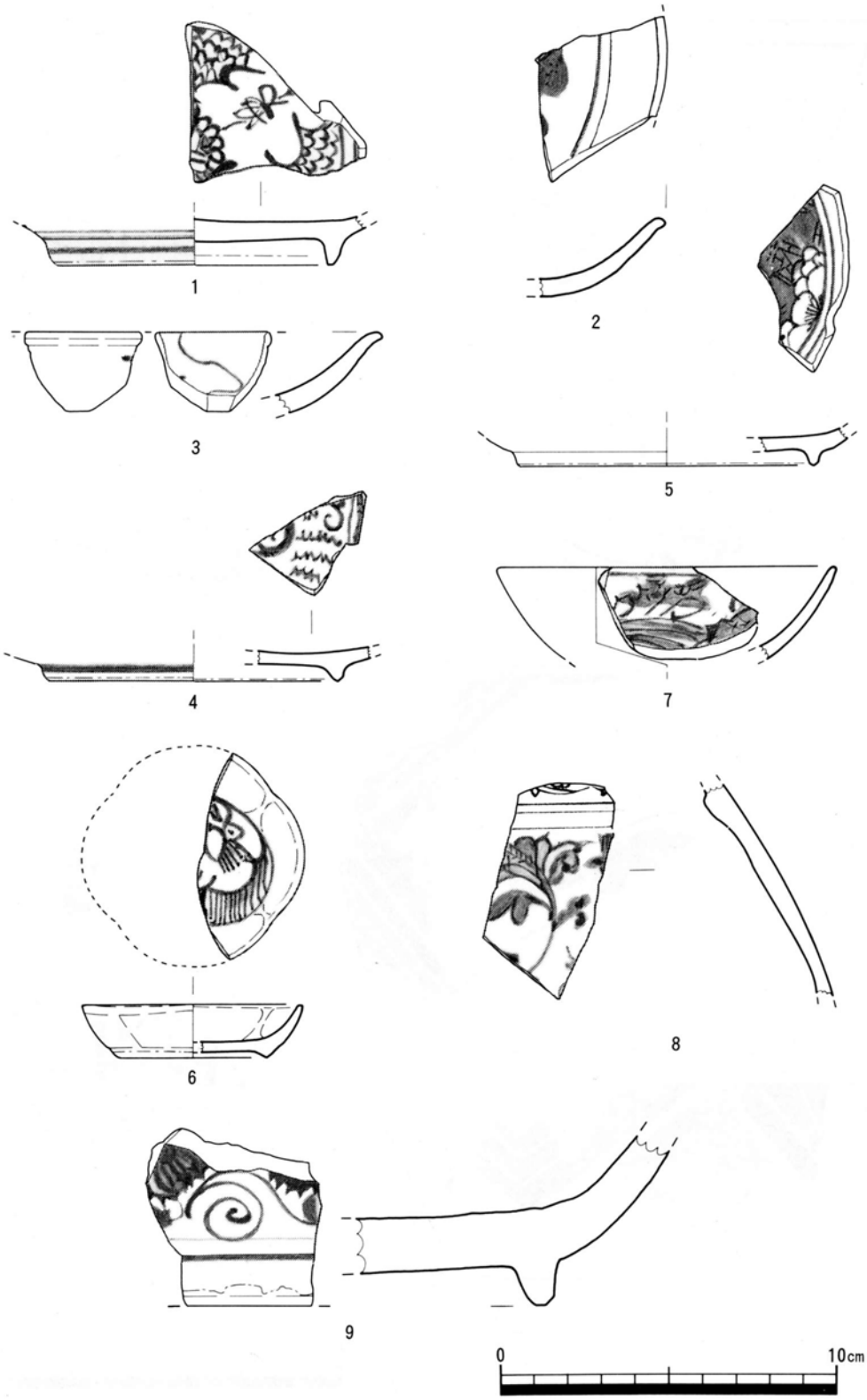
第30図　染付碗（1～9）



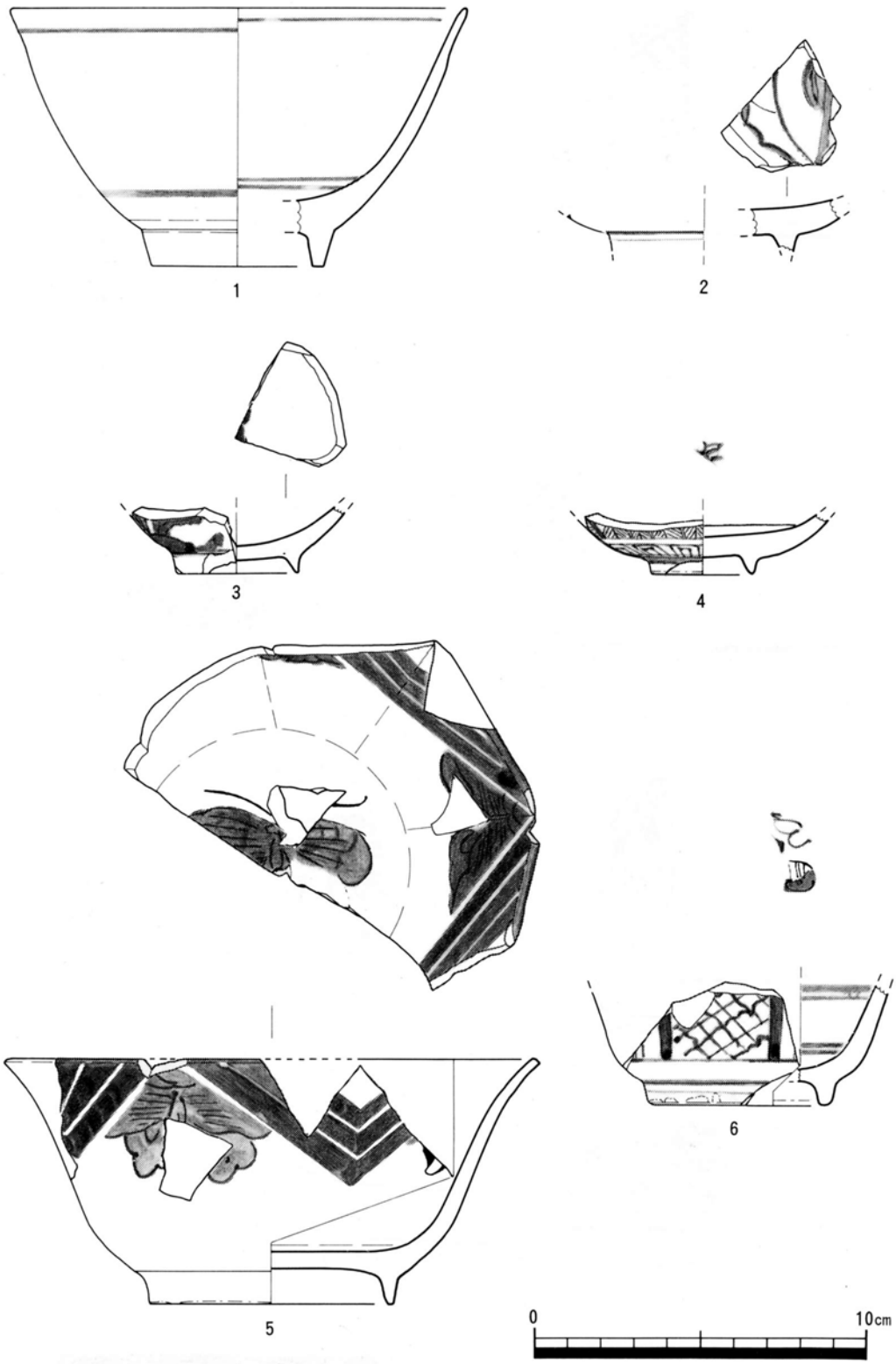
第31図　染付碗（1～10）



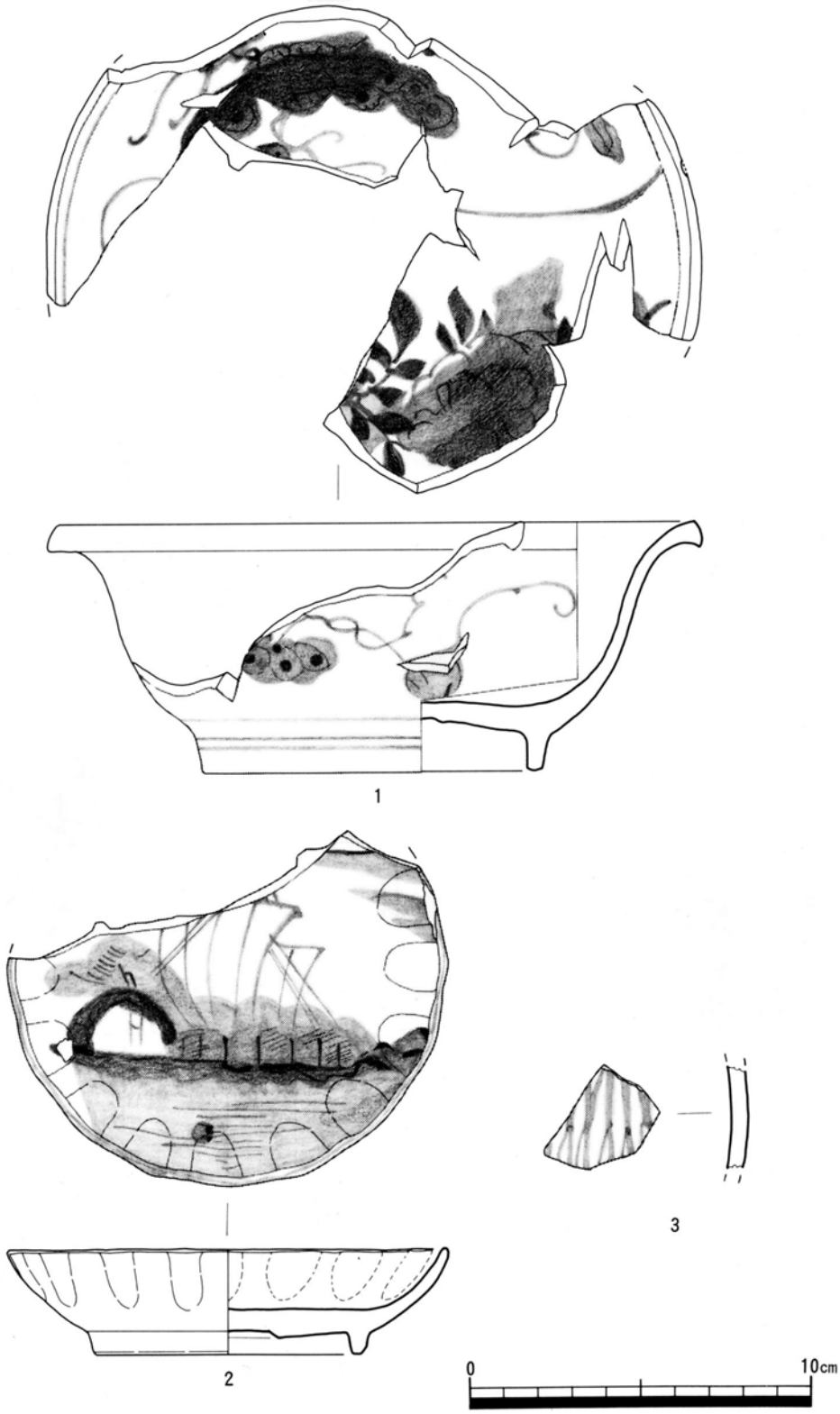
第32図　染付坏（1～6）



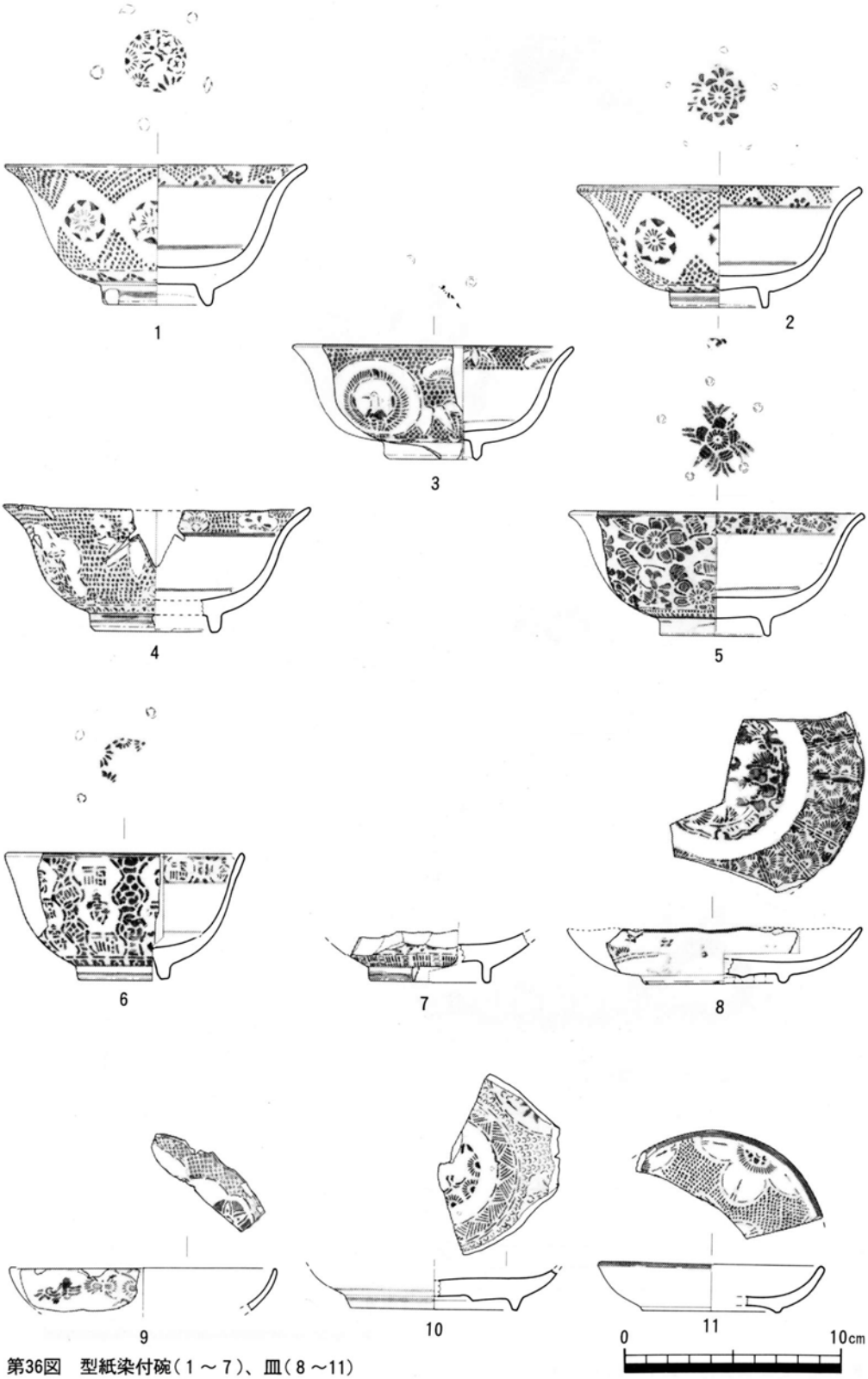
第33図　染付皿（１～７）、染付瓶(8)、染付鉢(9)



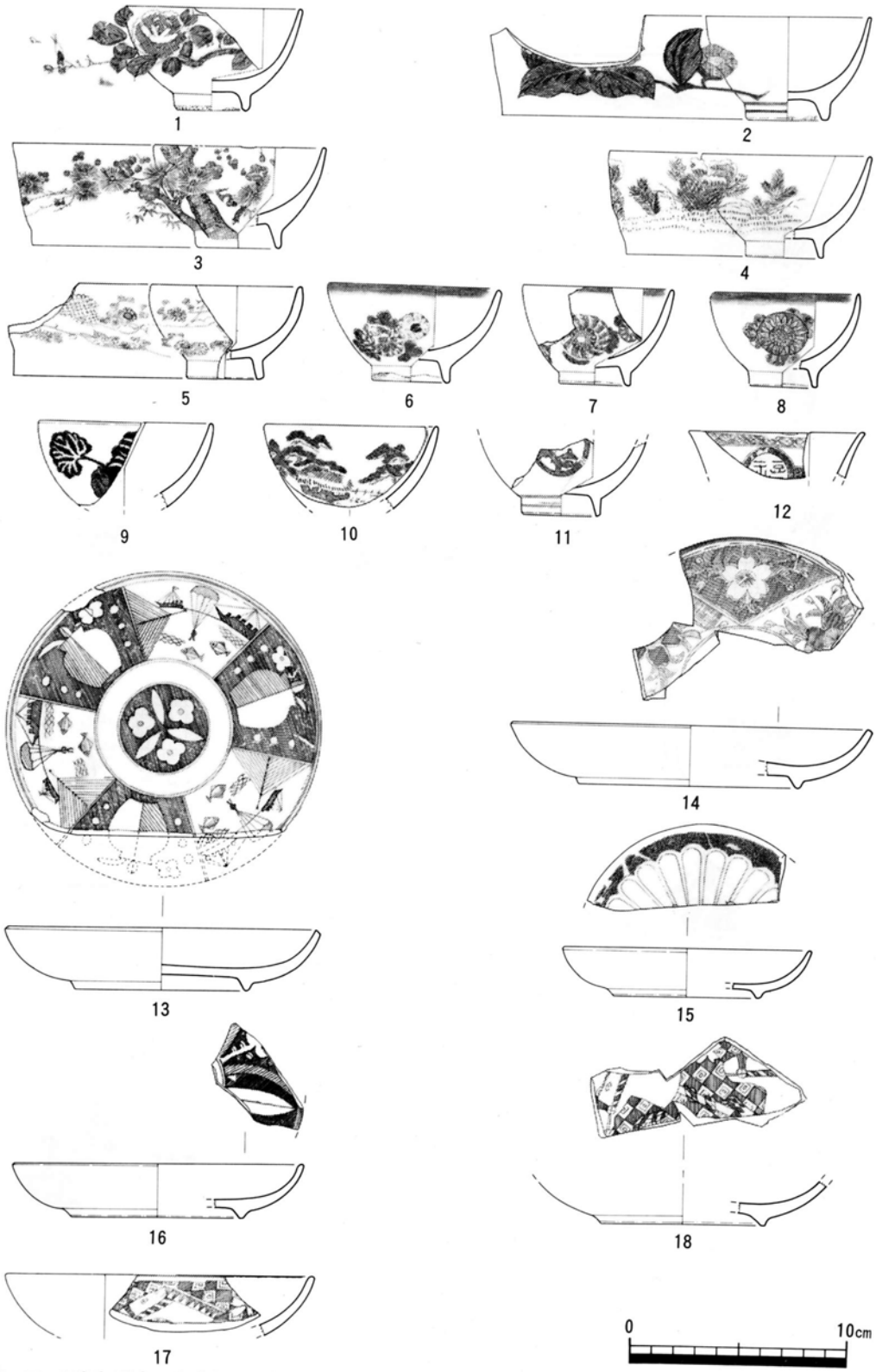
第34図　肥前産染付、碗（1～4）、鉢（5・6）



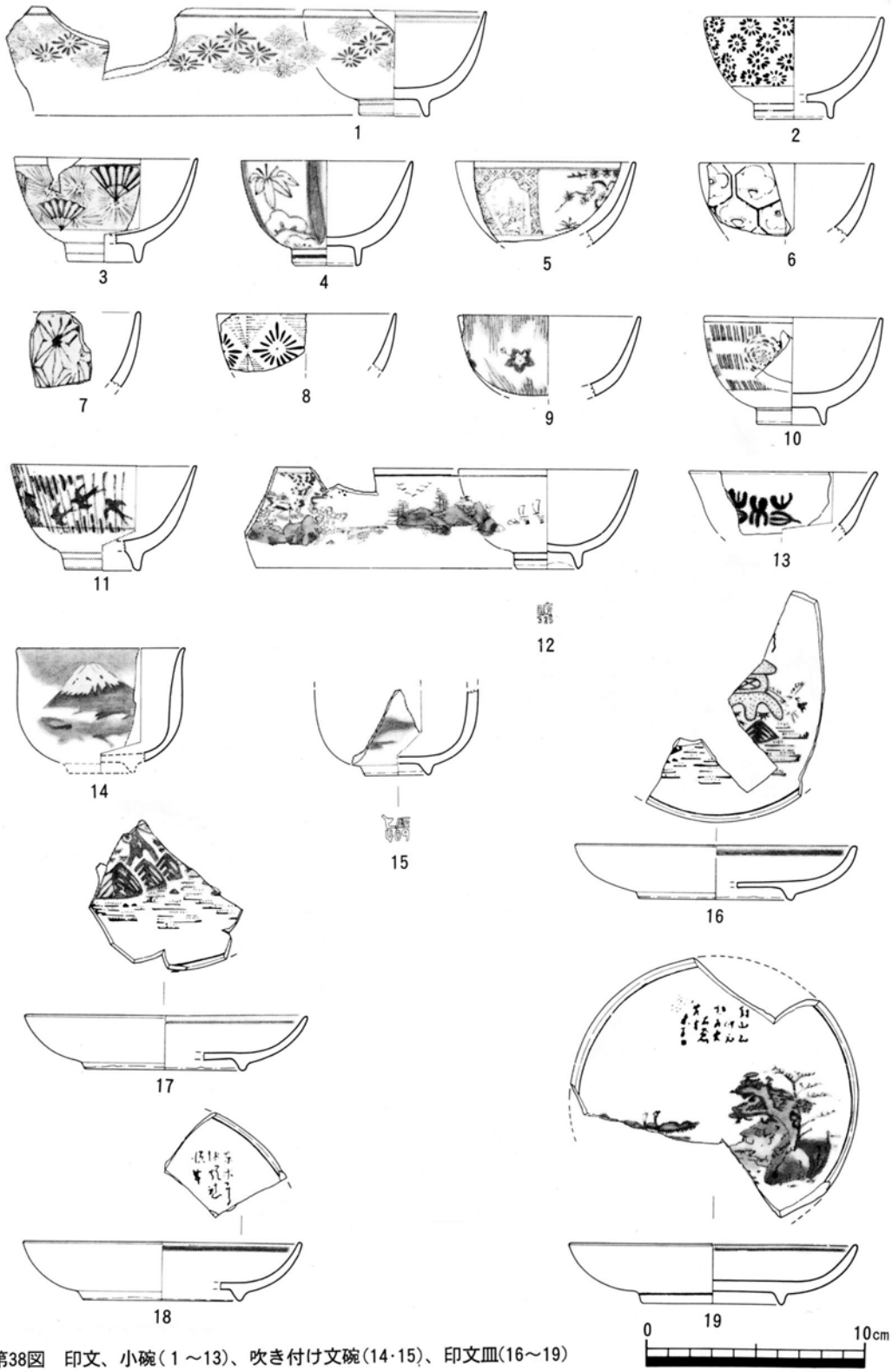
第35図　肥前産染付、鉢(1)、皿(2)、瓶(3)



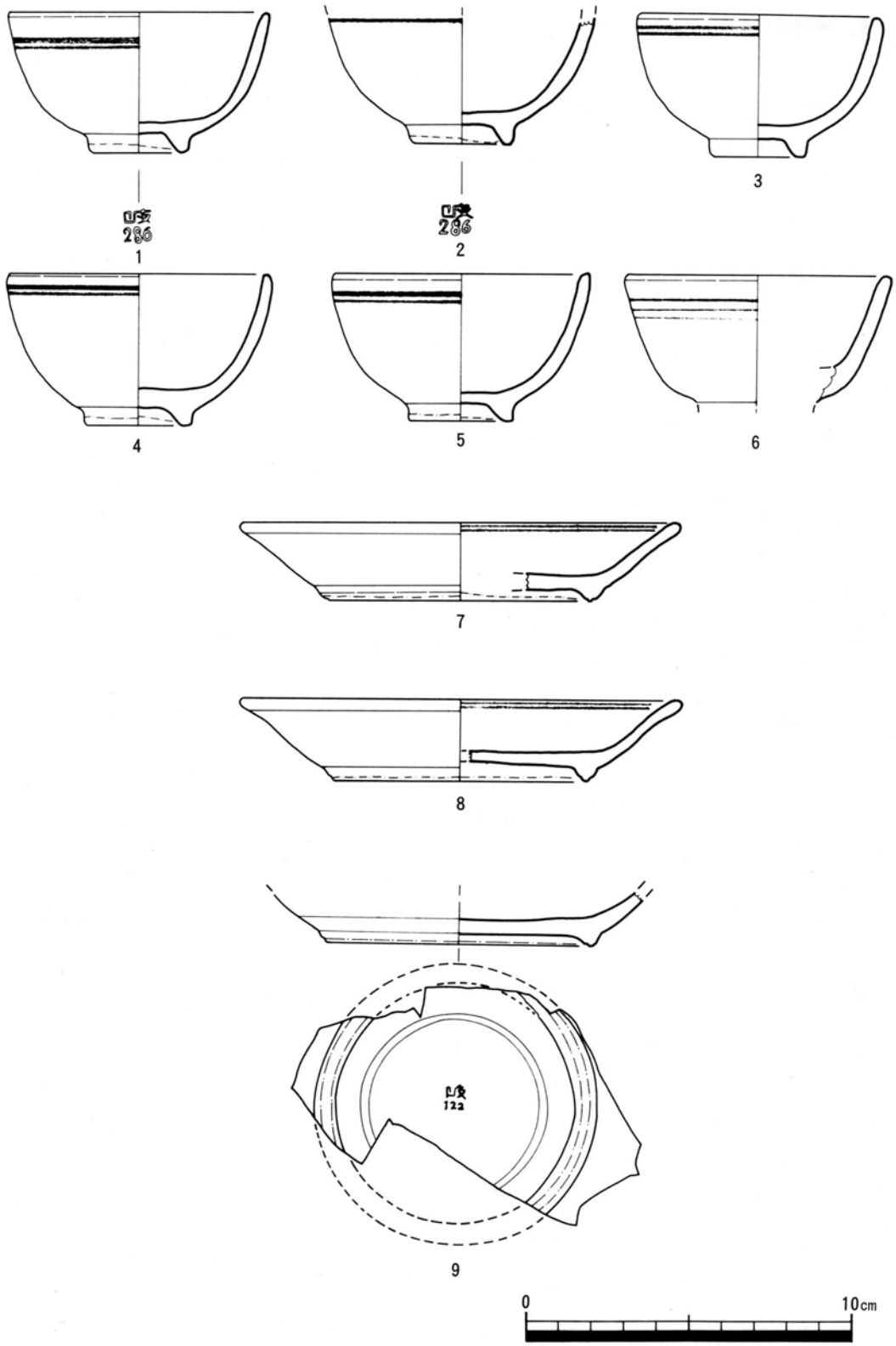
第36図　型紙染付碗（1～7）、皿（8～11）



第37図　胴版転写文、小碗（1～12）、皿（13～18）



第38図　印文、小碗（1～13）、吹き付け文碗（14・15）、印文皿（16～19）



第39図　瀬戸・美濃産磁器、碗、(1～6)、皿（7～9）

8　沖縄産施釉陶器（上焼）（第40～46図、図版62～68）

城間遺跡で採集された沖縄産陶器は総数1,000点余に及ぶ。これらのほとんどは遺構に伴うものではなく、遺跡内の包含層に散布した状態で検出されており、器種の組み合わせや遺構との伴出関係を明らかにすることはできなかった。そこで、ここでは検出された沖縄産陶器を器種や製作技法によって分類し、その中の210点余りを図化し、採録した。

①碗（第40・41図、図版62・63）

第Ⅰ類（第40図１、図版62－１）

灰釉掛け丸碗である。1／4ほどの口縁部破片１点のみであるが、素地・釉掛けともに丁寧に仕上げられ、見込み腰部にロクロ回転を利用した鉄釉線が巡る。

第Ⅱ類（第40図２、図版62－２）

灰釉折り縁碗である。口縁部1／10ほどの破片１点のみで、器外面下半部は露胎となる。

第Ⅲ類（第40図３、図版62－３）

飴釉天目茶碗1／4の破片である。やはり１点のみであり、あるいは沖縄産陶器ではないとも考えられるが、素地や釉調などから沖縄産陶器に含めた。将来的な検討が必要である。

第Ⅳ類（第40図４、図版62－４）

鉄絵灰釉碗である。口縁部1／10ほどの破片で、次の第Ⅴ類の灰釉碗と器形・製作技法などは基本的に変わらないが、鉄絵があることから分けて一類とした。

第Ⅴ類（第40図５～14、図版62－５～14）

灰釉碗である。高台部を手に持ち、釉掛けを行うことから、高台部分や見込み内底部は露胎となる。一般にフィガケ碗と呼ばれ、器高が低く口縁部が内湾する５・６のようなものと、その他の器高が高く口縁部もほぼ直立する類のものがある。図を掲載したもの以外に多くの破片が検出されている。

第Ⅵ類（第40図15・16、図版62－15・16）

飴釉碗である。製作技法・器形は第Ⅴ類と同じであるが、釉が飴釉となる。数も多い。

第Ⅶ類（第40図17、図版62－17）

第Ⅴ類と同じフィガケ灰釉碗であるが、見込み内底部中央に飴釉で、径1.5㎝ほどの円文を筆描きする点が異なる。

第Ⅷ類（第40図18・19、図版62－18・19）

第Ⅴ類のフィガケ灰釉碗の見込み内底部に、ロクロ回転を利用した飴釉蛇ノ目文様を描く。

第Ⅸ類（第40図20～22、図版62－20～22）

技術的には第Ⅷ類碗と同じであるが、フィガケされる釉薬が灰釉ではなく、飴釉となる。出土例も多い。

第Ⅹ類（第40図23～27、図版62－23～27）

器内外面掛け分け碗である。内面に灰釉、外面に飴釉を掛け分け、見込みは蛇ノ目釉ハギを施し、中央部分は灰釉下に飴釉による円文を描く。外面の飴釉は高台付近まで掛けられるようになる。

第ⅩⅠ類（第41図28～33、図版63－28～33）

器内面は白化粧土の上に透明釉を掛け、見込みに蛇ノ目釉ハギを施し、外面には飴釉を掛ける碗である。外面の飴釉は高台内に及ぶものと露胎となるものの２種があり、出土例も多い。

第ⅩⅡ類（第41図34～42、図版63－34～42）

器内外面とも素地に白化粧土を施し、その上から透明釉を掛けた碗である。見込みに蛇ノ目釉ハギを施し、高台部は高台内にまで施釉される。大量に検出されている。

第ⅩⅢ類（第41図43～50、図版63－43～50）

第ⅩⅡ類碗の器外面に飴釉と呉須（コバルト）釉で印花文を施したものである。壷屋焼の代表的な碗であり、イングアチチャーとも呼ばれている。大量に出土している。

第ⅩⅣ類（第41図51～54、図版63－51～54）

第ⅩⅡ類碗の器外面に唐草文などの図柄を呉須（コバルト）描きしたものである。

第ⅩⅤ類（第41図55、図版63－55）

第ⅩⅡ類碗の器外面に、飴釉を筆塗りしたものである。底部1／2の破片１点がある。

②小碗（第42図56～79、図版64－56～79）

第Ⅰ類（第42図56～59、図版64－56～59）

器内外面掛け分け小碗で、内面に灰釉、外面に飴釉を掛け、見込みは蛇ノ目釉ハギされる。

第Ⅱ類（第42図60～66、図版64－60～66）

第Ⅰ類に類する内外面掛け分け小碗であるが、内面に白化粧土掛けの上から透明釉掛けされている点が異なる。また、高台内にも釉掛けされるものが多い。66には見込み蛇ノ目釉ハギが見られない。

第Ⅲ類（第42図67～70、図版64－67～70）

器内外面とも白化粧土を施し、その上から透明釉を掛けたものである。

第Ⅳ類（第42図71、図版64－71）

第Ⅲ類小碗の器外面白化粧土を斑に掻き落とし、素地の鉄分を反応させ文様化させている。

第Ⅴ類（第42図72～77、図版64－72～77）

第Ⅲ類小碗の器外面に呉須（コバルト）釉・飴釉で、印花文などを施したものである。

第Ⅵ類（第42図78・79、図版64－78・79）

素地に彫り込みを加えたものであり、78は線彫り後、白化粧を掛け、79は線彫り部分にのみ白化粧土を象嵌している。

③角杯（第42図80～87、図版64－80～87）

素地外面を角杯状に削り、白化粧土を塗った後、透明釉を掛けたものである。内面は丸く碗状を呈する。16面体や22面体など多角面にいくつかの種類があり、口縁部と胴部で二段をなすものもあるが、ここでは一括して扱った。類例は多い。

④蓋類（第42図88～101、図版64－88～101）

第Ⅰ類（第42図88～93、図版64－88～93）

器外面のみ素地の上から飴釉を掛けたもので、急須・カラカラなどの蓋と考えられる。

第Ⅱ類（第42図94・95、図版64－94・95）

第Ⅰ類と同じく、器外面のみ素地の上から釉掛けしたもので、94は飴釉、95は飴釉と緑釉を流し掛けしている。

第Ⅲ類（第42図96、図版64－96）

やはり第Ⅰ類と同じく、素地に瑠璃釉を打ち、その上から透明釉を掛けたものである。素地はきわめて白く、選択された土である。

第Ⅳ類（第42図97～101、図版64－97～101）

素地の上に白化粧土を施し、その上から呉須（コバルト）釉・飴釉で文様を描き、透明釉を掛けたものである。ただし、器内面には白化粧土を施すのみで、透明釉は掛けられていない。

⑤カラカラ・急須類（第43図102～130、図版65－102～130）

第Ⅰ類（第43図102～108、図版65－102～108）

白い素地の外面のみに線彫りを施し、灰釉あるいは透明釉を直掛けしたものである。線彫りされた部分に釉が厚く掛かり、緑や茶色に発色する。素地は白い上質のものが選択される。

第Ⅱ類（第43図109、図版65－109）

素地の上に外面のみ白化粧土を塗り、これに線彫りを施し、呉須（コバルト）釉を象嵌したものである。１点のみの上に小片であり、あるいは瓶子などの破片かも知れない。

第Ⅲ類（第43図110～112、図版65－110～112）

素地の外面のみに飴釉を直掛けしたものである。釉の厚さによって発色が異なり、飴色や鉄色を呈する。

第Ⅳ類（第43図113、図版65－113）

白い素地の外面に印判で文様を印刻し、その上に飴釉薬を掛けたものである。第Ⅰ類と印判を用いる点が異なり、焼成も他のものに比べてやや軟質である。

第Ⅴ類（第43図114～119、図版65－114～119）

素地上に白化粧土を掛け、器外面に線彫りして幾何学文様を描き、呉須釉・飴釉・緑釉などを掛けた後、透明釉掛けしたものである。内面は露胎・化粧土掛け・透明釉掛けなどがある。

第Ⅵ類（第43図120～129・図版65－120～129）

第Ⅴ類と同様の技法で製作されるが、掛けられる釉薬が主にコバルト釉となり、一部鉄色に発色する飴釉が掛けられる。内面の上半部には化粧土や透明釉が流れ掛けされているが、下半部は基本的に露胎である。

第Ⅶ類（第43図130、図版65－130）

茶色を呈する素地に直接飴釉を流し掛けし、その上から透明釉を掛けたものである。薄い作りで、固く焼き締まっている。一例のみが出土している。

⑥盃（第43図131・132、図版65－131・132）

白い上質の素地に、131は透明釉、132は飴釉を直掛けしたものである。口径3.5㎝前後、器高2.0㎝ほどのものが多い。

⑦瓶子類（第44図133～158、図版66－133～158）

第Ⅰ類（第44図133～148・157・158、図版66－133～148・157・158）

成形した素地に飴釉を直掛けするものを一括して、第Ⅰ類とした。器形の上では瓶子だけでなく、油壷のような小物もあると考えられ、140～142などがこれに相当する。また、157・158はもっと大きい袋物の底部とも考えられるが、一応この類に含めた。

第Ⅱ類（第44図149・図版66－149）

白い成形した素地の外面に透明釉を直掛けしたものである。149は鶴首徳利の頸部である。

第Ⅲ類（第44図150～156、図版66－150～156）

成形された素地の上に化粧土掛けし、さらに飴釉や呉須釉・コバルト釉を流し掛けしたり、図柄を描くものである。多くの類例資料があり、釉掛技法や釉種によっていくつかの分類が可能であるが、ここでは一括して扱った。

⑧火取・香炉類（第44図159～169、図版66－159～169）

第Ⅰ類（第44図159～164、図版66－159～164）

成形した素地に飴釉を直掛けするものを一括した。162は素地に沈線を施し、ここに白土を象嵌している。また、163・164は素地に彫刻で文様を彫り、その上から釉掛けしている。

第Ⅱ類（第44図165～168・図版66－165～168）

成形した素地に白化粧土を掛け、その上から釉を施したものを一括する。167は線彫りで幾何学文を描き、その上から呉須釉・飴釉を流し、その上から透明釉を掛けている。

第Ⅲ類（第44図169・図版66－169）

成形した素地にロクロ回転を利用して緑釉線を数条巡らし、その上から透明釉を掛けたものである。一例のみが検出されている。

⑨大鉢（ワンブ－）（第45図170～190・図版67－170～190）

第Ⅰ類（第45図170～175、図版67－170～175）

成形した素地に釉薬を直接掛けるものを一括して扱った。170～173は内外面飴釉掛け、174・175は外面飴釉、内面灰釉の掛け分けで、175は内面に印判による白化粧土の印花文が施されている。

第Ⅱ類（第45図176～182、図版67－176～182）

内面は白化粧土を塗布した後、透明釉掛け、外面は飴釉を直掛けするものを一括した。183には内面に飴釉による列点文が施されている。また、底部資料内面には全て蛇ノ目釉ハギが施されている。

第Ⅲ類（第45図184～186、図版67－184～186）

内外面とも素地に白化粧土を塗り、その上から釉薬や透明釉を掛けたものである。184・185には見込み蛇ノ目釉ハギ技法が認められる。

第Ⅳ類（第45図187、図版67－187）

素地にコバルト釉薬で唐草文を描き、その上から透明釉を掛けたもので、一例のみがある。

第Ⅴ類（第45図188～190、図版67－188～190）

底部高台周辺の破片で、釉が剝がれたりしており、細かい技法の観察ができないものを一括した。あるいはもっと大きい皿類の底部かとも考えられる。

⑩燭台（第46図191・192、図版68－191・192）

191は素地に飴釉、192は白化粧土を塗ったものである。192は器表面が剝落している。

⑪香炉（第46図193、図版68－193）

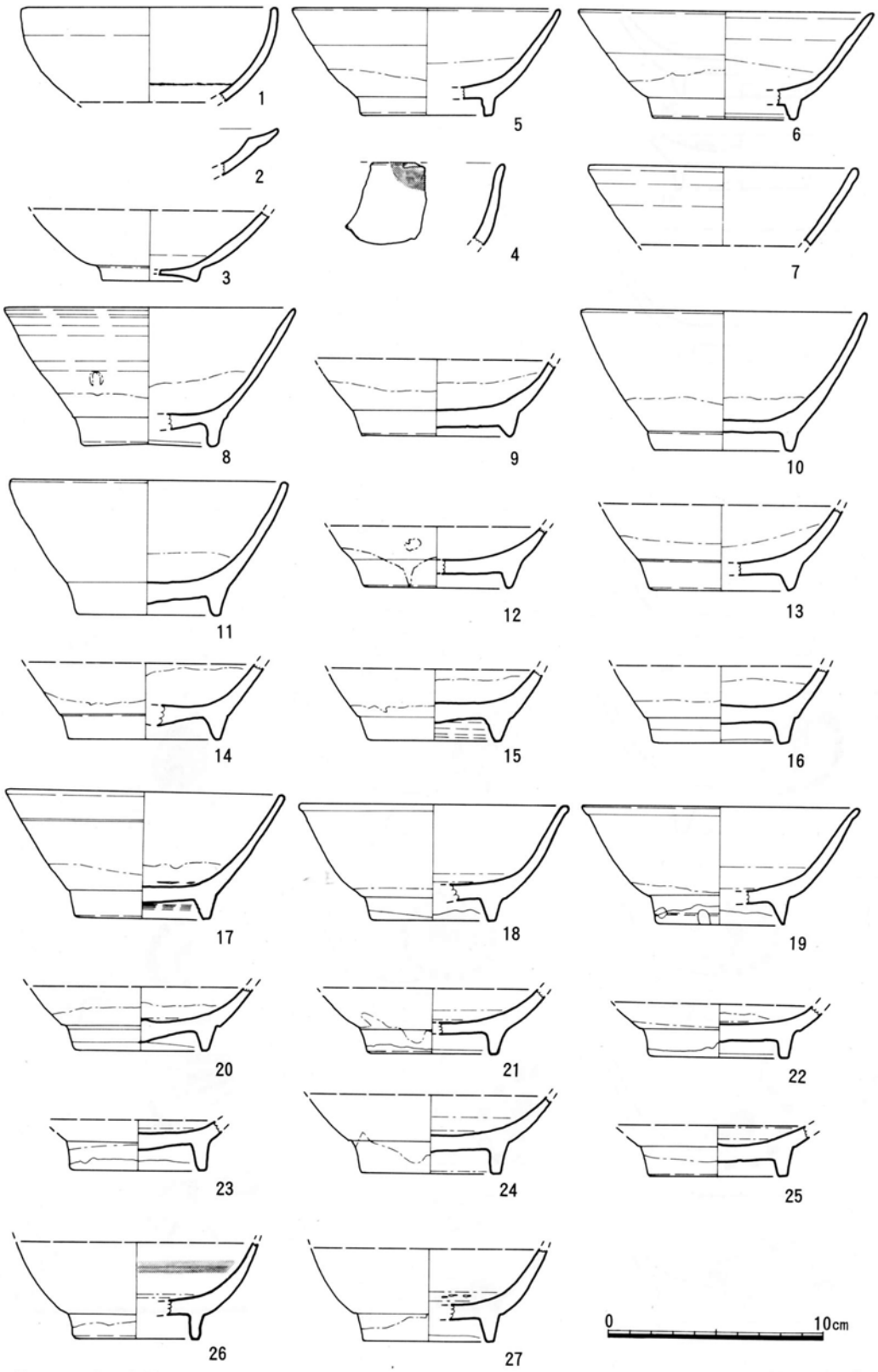
ほぼ完形の香炉で、白化粧土掛けした後、底部を除く器外面にコバルト釉を掛けている。

⑫火入れ（第46図194～202、図版68－194～202）

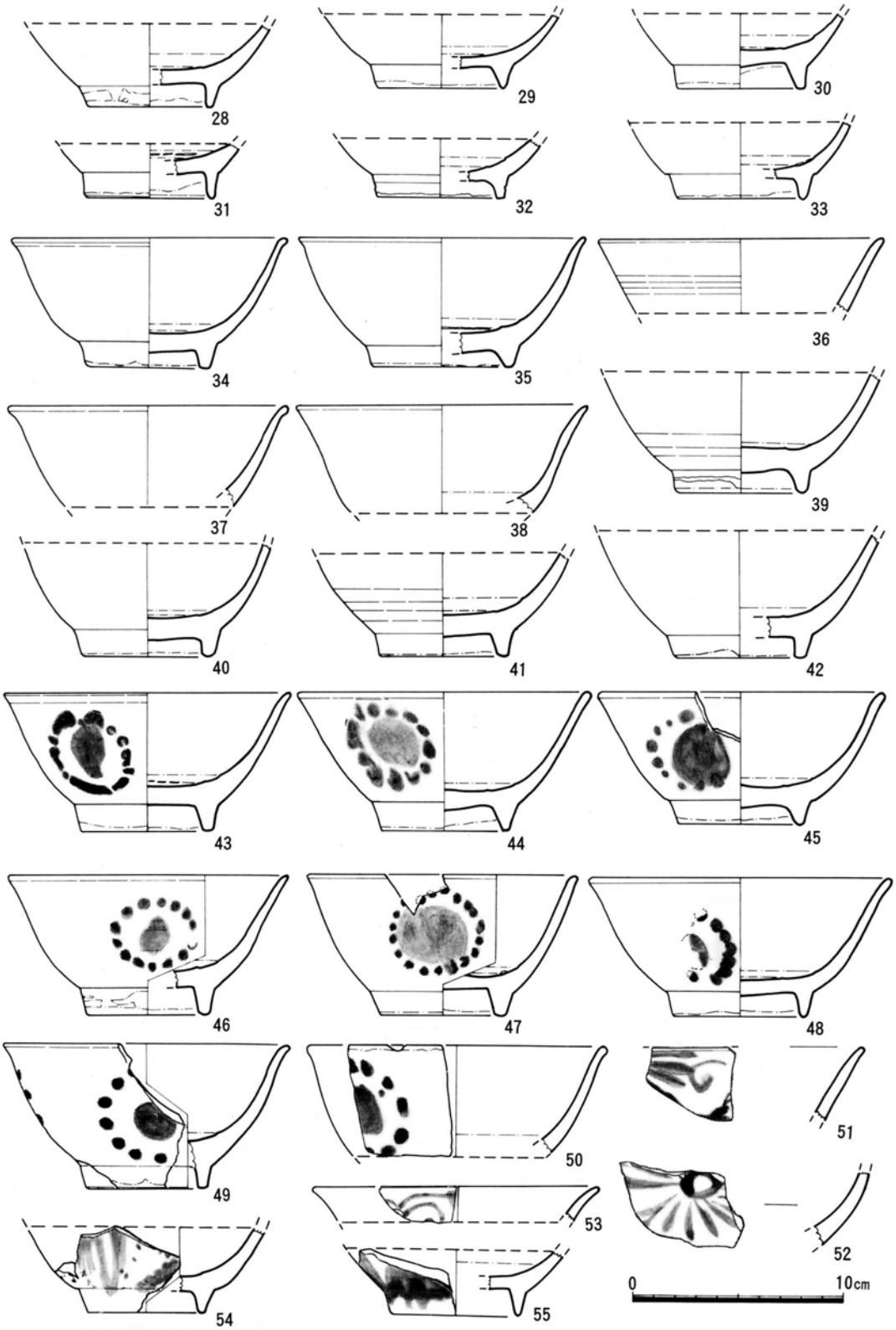
すべて成形した素地の器外面に飴釉を掛けたもので、全体にあまり焼き締められていない。釉の厚さによって発色が異なり、鉄色から褐色までの違いがある。194～198は器内部に突出した突起部の破片である。また、器外面の破片である200には線刻による図柄が見られ、201・202は把手であり、特に202は獣面把手である。

⑬土鍋（第46図203～210、図版68－203～210）

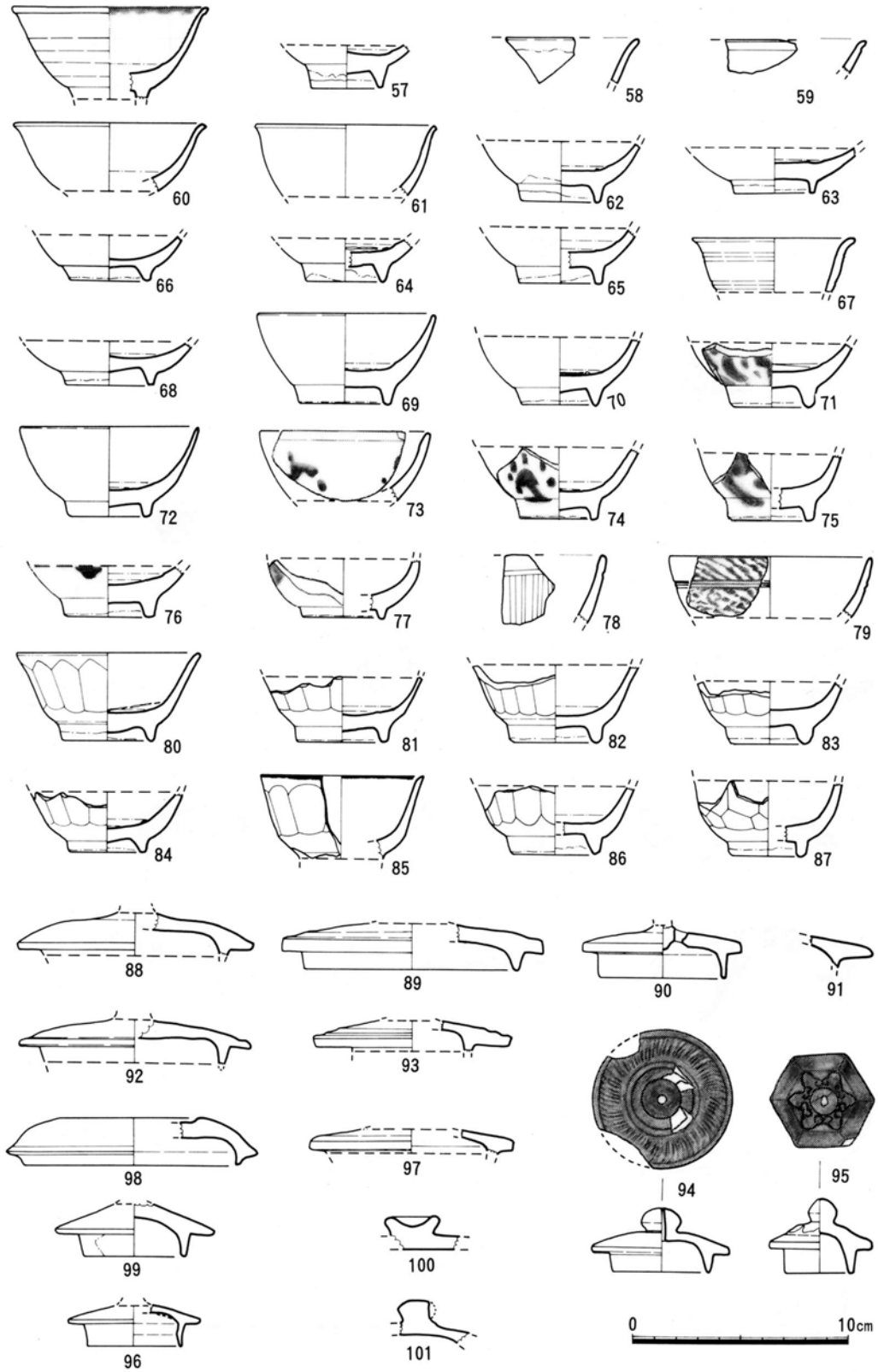
成形した素地に飴釉をかけたもので、個々の資料によって釉薬の掛けられた範囲や発色に違いが見られる。全体に薄手で、比較的固く焼き締められている。207・208は把手部片、209・210は蓋の破片である。



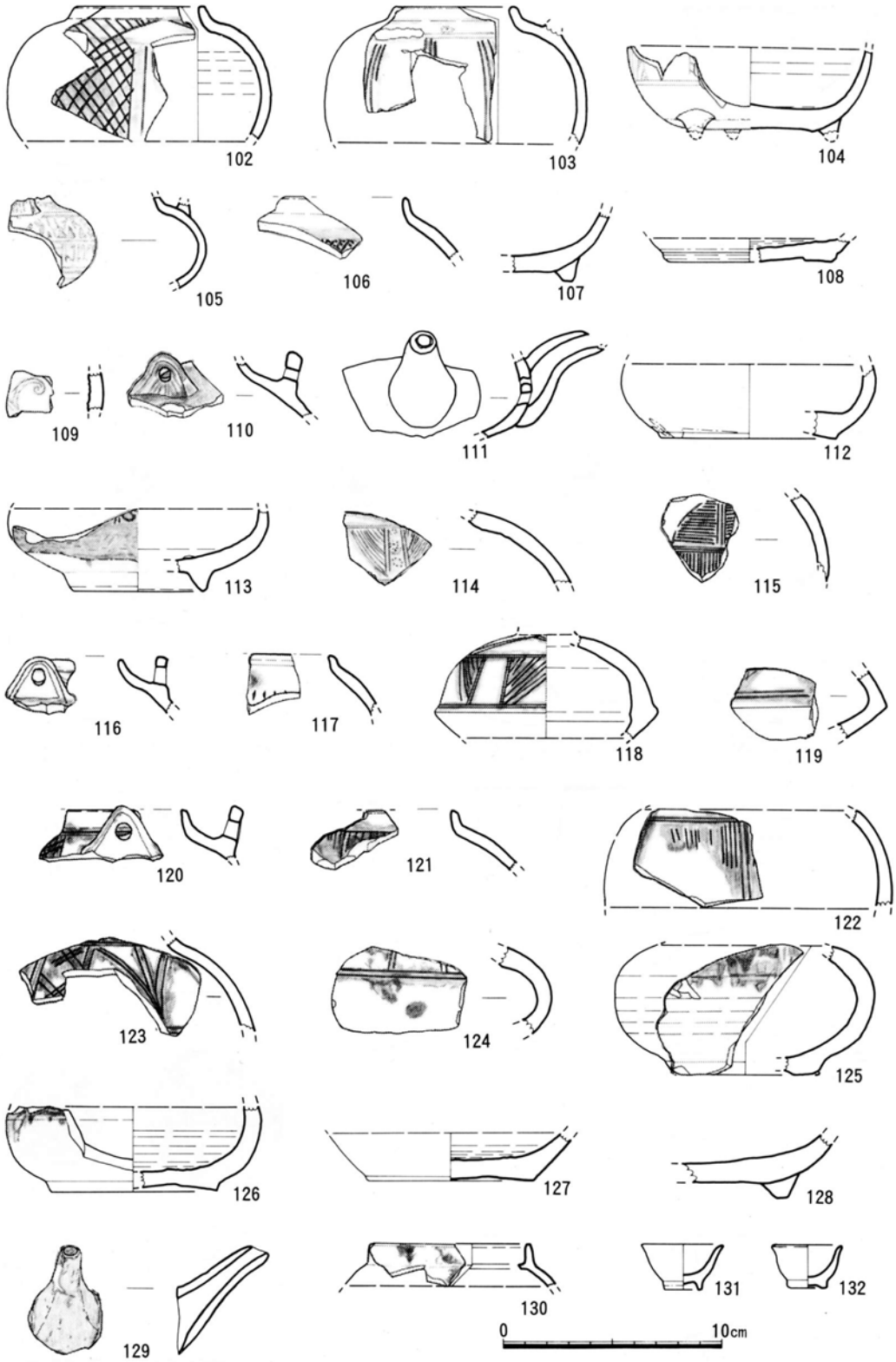
第40図　沖縄産施釉陶器　その1（碗）



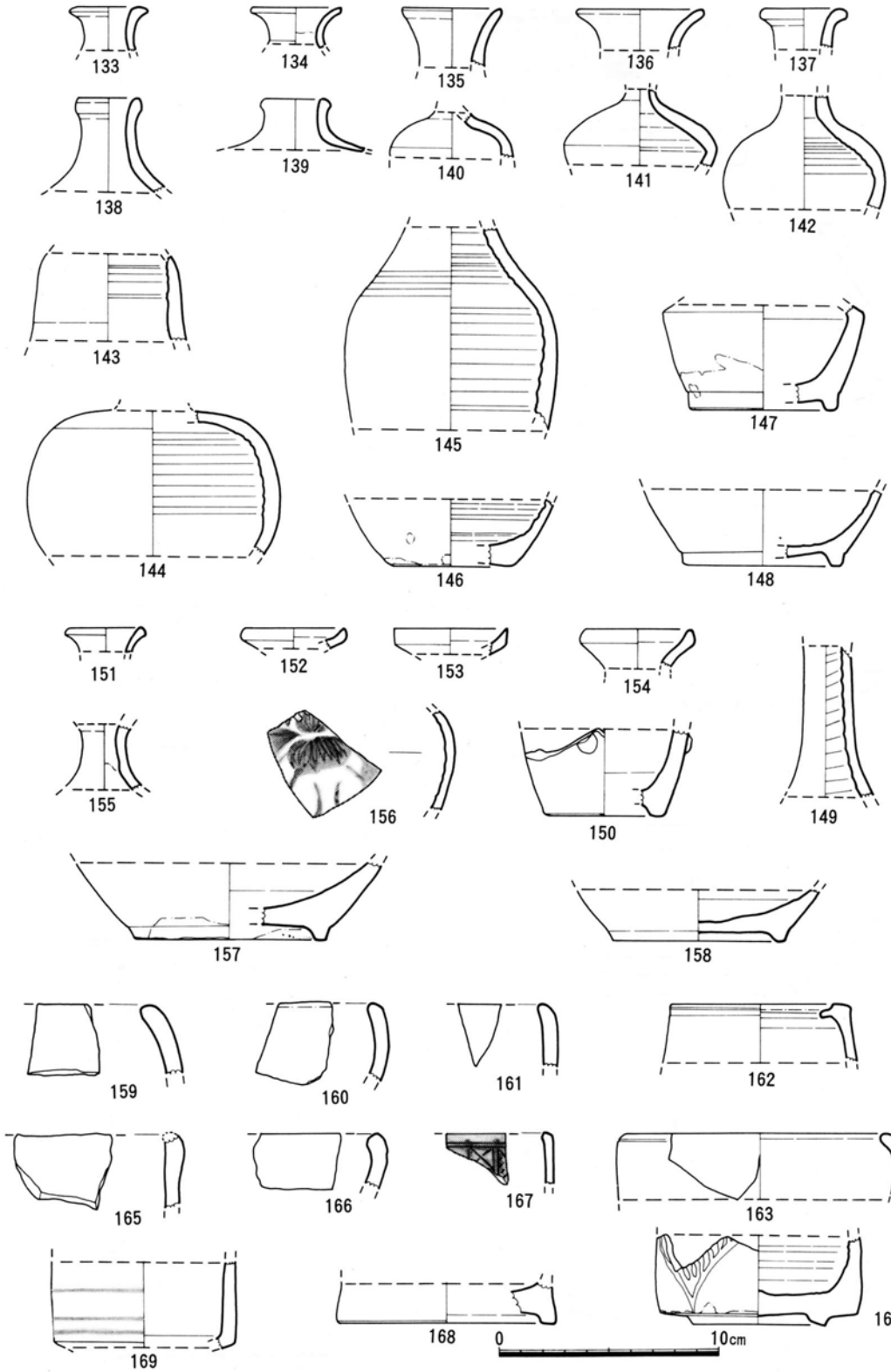
第41図　沖縄産施釉陶器　その2（碗）



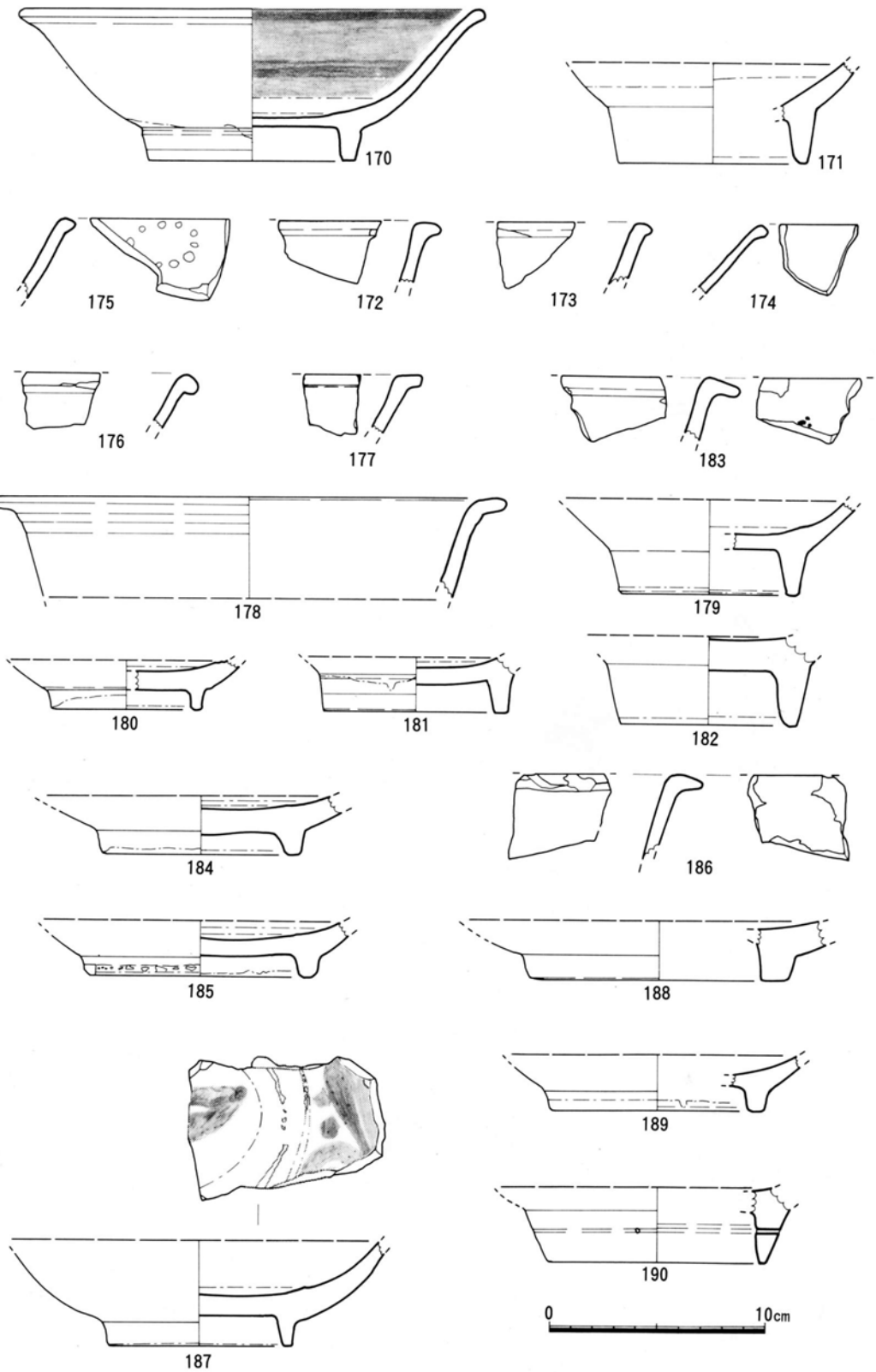
第42図　沖縄産施釉陶器　その３（小碗・角杯・蓋）



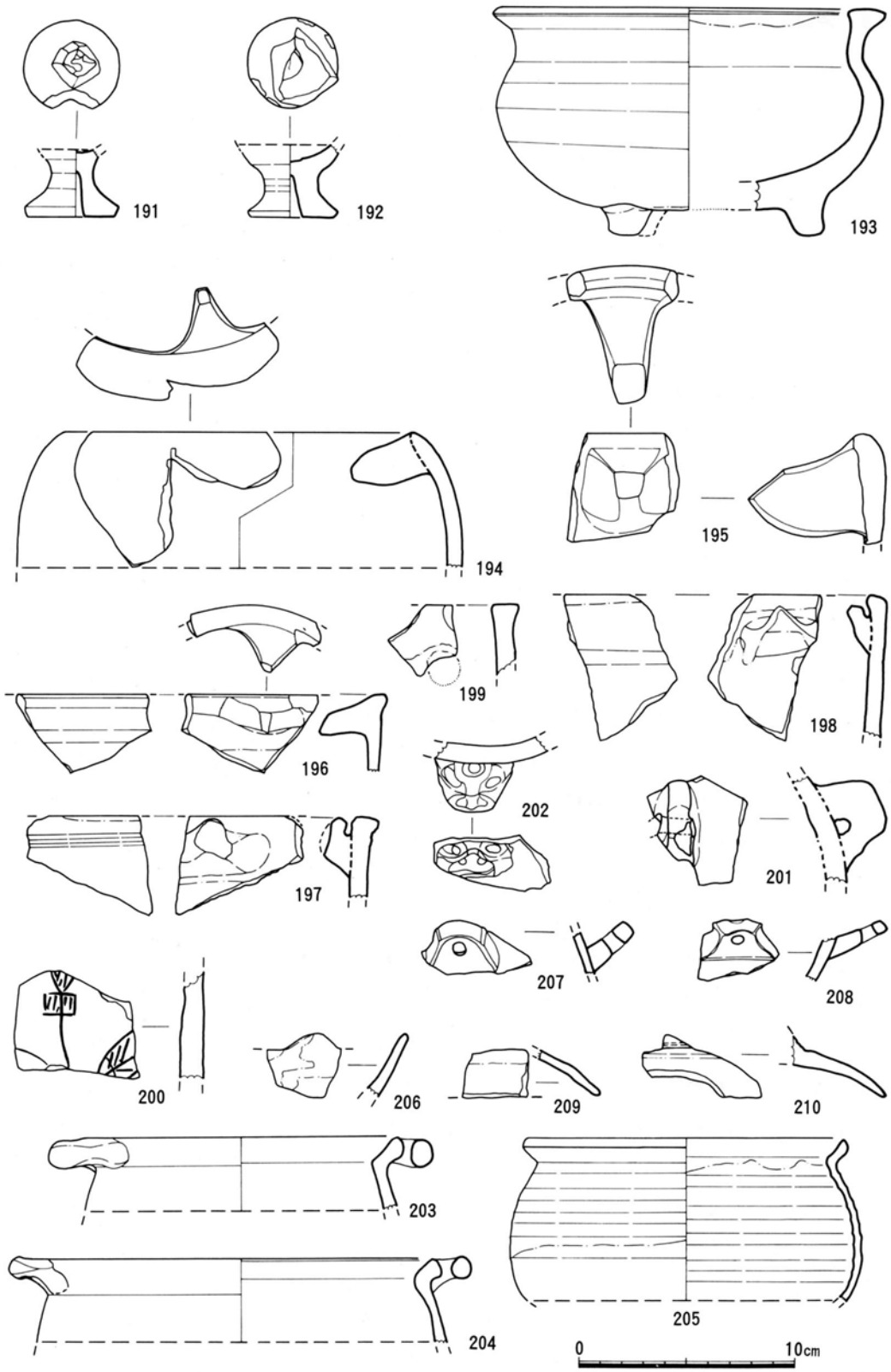
第43図　沖縄産施釉陶器　その4（急須・カラカラ・盃）



第44図　沖縄産施釉陶器　その５（瓶子・油壺・火取・香炉類）



第45図　沖縄産施釉陶器　その6（大鉢・大碗類）



第46図　沖縄産施釉陶器　その7（燭台・香炉・火鉢・土鍋・蓋）

9　沖縄産無釉焼き締め陶器（荒焼）

今回の調査で総数1327点が採集された。表土層からの出土がほとんどで、第Ⅱ・Ⅲ層から出土したものは僅かであった。得られた資料は甕、壺、鉢、摺鉢、炉、皿、蓋等で、破片が多く全形を窺える資料は少なかった。

①甕形（第50図）

大型の甕形陶器で、18点が採集されている。復元して全形の窺える資料はないが、口径の推算可能な資料については、口縁部のみの図上復元を行った。得られた資料は口縁部の器形から次の４種に分類された。

第１種　口縁部は逆三角形に肥厚し、頸部に横位の凸文とクシ描きの波状文を施すもの。

第２種　口縁部は頸部から口縁上部にかけて器壁が厚くなるもので、頸部に横位の凸文を施す。

第３種　口縁部が「歯ブラシ」状に肥厚し、肥厚部外面に横位の沈線文が施されるもの。

第４種　口縁部が「Γ」状の器形をなすもの。

以下、上記分類の順に記述することにする。

第１種

口縁部が逆三角形に肥厚するもので、第50図１に示す口縁部資料が得られている。文様は口縁部に凸帯状文様とクシ描きによる波状文を施す。前者は粘土帯を貼り付けるのではなく、調整工具を器面に押し当て、器面を凸状に整形するものである。胎土に若干の石灰質砂粒が散見できる。器色は橙褐色を呈する。Ｄ－23グリッドの出土。

２・３・４は本種の胴部資料と考えられるものである。２・３は破片の上部に凹線文、下部にクシ描きによる波状文を施し、波状文帯に円形粘土が貼り付けられる。２の器色は外面黄褐色、内面橙褐色を呈する。Ｃ－18グリッドの出土。

３の外面は自然釉のため暗褐色を呈し、内面は橙褐色である。Ａ地区Ｃトレンチ第Ⅱ層の出土。

４は沈線の施文された円形粘土を貼り付けるものである。胴部に凹線文が１条認められる。器色は橙褐色を呈する。Ｃ－24グリッドの出土。

第14表　甕形出土状況

出土グリッド	層		
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ｃ－16	1		
Ｃ－18	1		
Ｃ－24	1		
Ｃ－27	1		
Ｄ－23	1		
Ｄ－30	1		
Ｅ－30	1		
Ｆ－29	1		
Ｆ－30	1		
Ｍ－29	1		
Ｂ地区Ｄトレンチ		1	
不　　明	7		
合　　計	17	1	

第２種

口縁部が頸部から口縁上部にかけて器壁が厚くなるもので、第50図５～７に示す３点が得られている。

5は口径推算38.6㎝になるものである。口縁部の上位に横位の凸帯状文様を2条、下位に1条を描き、その間には直径1㎝の円形の貼り付け文を施す。器色は外面褐色、内面茶褐色を呈する。C－27グリッドの出土。

6は口縁部が若干外側に開くものである。文様は口縁部の上位に2条の凹線文、下位に1条の凸帯状文様が認められる。外面は自然釉のため暗褐色で、内面は茶褐色を呈する。D－30グリッドの出土。

7は口縁部文様が2と類似するもので、凸帯状文様を口縁部の上位に2条、下位に1条施している。器色は外面暗褐色、内面灰褐色を呈する。B地区Dトレンチの出土。

第3種

口縁部が「歯ブラシ」状に肥厚し、肥厚部外面に沈線文が施されるもので、10点が採集されている。その中で、口縁部資料3点を第50図8～10に示した。胴部資料については、本種の民俗資料の完形品から口縁部器形と胴部文様が関連することから、本種の胴部資料として把握し、本項で扱うことにする。

8・9はほぼ類似する器形になる。文様は2点とも肥厚部外面の下端に凹線文を施している。8は推算口径30.0㎝になるものである。器色は外面褐色、内面茶褐色を呈する。M－29グリッドの出土。

9は推算口径39.0㎝になるもので、器色は外面褐色、内面橙褐色を呈する。E－30グリッドの出土。

10は前2者より肥厚部の長いもので、文様は肥厚部外面の下端に2条の凹線文を施す。器色は外面黄褐色、内面橙褐色を呈する。表採資料である。

第4種

口縁部が「Γ」状の器形をなすもので、第50図11に示す1点が得られている。口縁部の張りだし部外面に2条の凹線文を施し、口縁部の下部に箆状工具による3条の幅広い凹線文がみられる。内面は使用のためか、滑らかな器面を呈する。器色は橙褐色である。表採資料である。

第15表　壺形分類別出土状況

分類＼層	出土層 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	不明	合計
第1種	39		2		41
第2種	7				7
第3種	21				21
第4種	10				10
第5種	1				1
第6種	7				7
合　計	85		2		87

②壺形（第51・52図）

壺形と考えられる口縁資料は87点が得られている。採集された資料は総て破片で、復元して全形を窺える資料はない。

壺形は大きさより大型品、中型品、小型品があるが、今回は区別せずに一括して口縁部器形から次の6種に分類した。

第1種　口縁部は「Γ」形に外側へ張り出し、頸部をほぼ垂直に作られ、肩部が張るもの。

第2種　口縁部の形態は第1種に類似するものの、頸上部から胴部に向かって脹らむもの。

第3種　口縁部は「朝顔」状に開き、頸部は弧状にくびれてから胴部へ脹らむもの。

第4種　口縁部が内側に湾曲する無頸の壺形。

第５種　口縁部の内側に張り出しを持つもの。

第６種　口縁上部が玉縁状に肥厚するもの。

以下、上記分類の順に記述していくことにする。

第１種

口縁部は「Γ」形に外側に張り出し、頸部はほぼ垂直に作られ、肩部が張るものである。本種に属する資料は41点が得られ、その中の10点を第51図１～９に図示した。

第51図１・２・３・４は小型品の資料である。１は口径推算が10.0㎝になるもので、口唇部は平坦に整形される。器色は内外面とも淡い黒褐色を呈する。

２は１と類似の器形になるもので、口径は推算10.4㎝である。外面の器色は褐色の自然釉で、内面は淡い褐色を呈する。Ｆ－30グリッドの出土。

３は口径の推算が9.8㎝になるもので、頸部と胴部の境界は微小な段が設けられる。器色は外面茶褐色、内面淡橙褐色を呈する。Ｂ地区北東部の出土。

４は口径推算が11.8㎝になるもので、平坦に整形された口唇部は内傾する。内外面とも自然釉がみられ、外面は褐色に発色するが、内面はくすんだ褐色を呈する。Ｂ－33グリッドの出土。

第16表　壺形出土状況

出土グリッド	個数
Ａ－25	1
Ａ－31	1
Ｂ－23	2
Ｂ－29	3
Ｂ－32	1
Ｂ－33	1
Ｃ－18	1
Ｃ－26	3
Ｃ－27	1
Ｃ－28	3
Ｃ－29	1
Ｃ－30	1
Ｃ－31	1
Ｃ－33	1
Ｄ－27	1
Ｄ－29	1
Ｄ－32	1
Ｄ－33	1
Ｅ－30	1
Ｅ－32	1
Ｆ－30	3
Ｇ－27	2
Ｇ－33	1
Ｇ－37	2
Ｋ－24	1
Ｋ－29	2
Ｌ－28	1
Ｌ－29	1
Ｍ－27	3
Ｍ－28	2
Ｍ－30	2
Ｎ－28	1
Ｐ－24	2
Ｐ－32	1
Ｑ－26	2
Ｑ－28	1
Ｑ－29	2
Ｒ－26	1
Ａ地区	2
Ｂ地区２トレンチ	5
Ｂ地区３トレンチ	3
Ｂ地区４トレンチ	1
Ｂ地区Ｃトレンチ	1
Ｂ地区Ｄトレンチ	1
Ｂ地区Ｅトレンチ	1
Ｂ地区北東部	7
Ｂ地区南東部	6
Ｂ地区南西部	3
合　　計	87

５は口径の推算が21.4㎝になるもので、頸部の長さは本種資料の中では最も短い資料である。頸部下に３条の沈線文が施される。胎土には橙褐色の鉱物粒の混入がみられる。器色は外面黒褐色、内面褐色を呈する。Ｆ－30グリッドの出土。

６・７は大型品の口縁資料と考えられるものである。口縁部の張り出しからみると鉢形に類似するものの、当該資料は器壁が厚いこと、器色が異なること、頸上部から口縁部張り出しが弧を描くこと等から本種に含めた。６の外面は自然釉のため褐色を呈し、口唇部と内面は淡い黒褐色である。口唇部に１条の凹線文が施される。Ｃ－26グリッドの出土。

７は内外面とも自然釉がみられ、外面は褐色、内面は淡い褐色を呈するが部分的に淡黄褐色になる部分もある。Ｃ－30グリッドの出土。

８は口径の推算が14.6㎝になるもので、口唇部は窯変のため波状をなす。平坦に整形された口唇部は内傾する。頸胴部の境には２条の沈線文が施される。器色は内面黒褐色、外面は黒褐色と褐色に分かれる。Ｂ地区南西部の出土。

９は外面が自然釉で淡い褐色を呈するもので、平坦に整形された口唇部は内傾する。内面の器色は茶褐色である。

第２種

口縁部の形態は第１種に類似するものの、頸上部から胴部に向かって脹らむもので、７点の資料が採集されている。第51図10～12に３点を図示した。

10は口径の推算が12.6㎝になるものである。胎土に石灰質の細礫をみることができる。器色は明橙色を呈する。表採資料である。

11は口径の推算が13.0㎝になるもので、口唇部と内面の接点は丸く仕上げられ、明瞭な稜は形成されない。器色は外面灰褐色、内面茶褐色を呈する。Ｍ－30グリッドの出土。

12は口径の推算が18.0㎝になるものである。頸下部には頸部と胴部の境界になる小さな段が認められる。胎土に橙褐色粒の混入がみられる。器色は内面茶褐色で、外面は褐色を呈する。Ｃ－33グリッドの出土。

第３種

口縁部は「朝顔」状に開き、頸部は弧状にくびれてから胴部へ脹らむものである。本種に属する資料は21点が得られ、その中の６点を第52図１～６に示した。

１は口径の推算が13.6㎝になるものである。口縁上部の器壁は比較的厚く、口唇部は尖状に整形される。器色は褐色を呈する。表採資料である。

２は内外面とも黒褐色の釉が施釉されるもので、口径の推算は17.0㎝になる。Ｋ－24グリッドの出土。

３は口径の推算が6.2㎝になるもので、口縁部は大きく外反する。内外面とも自然釉のため褐色を呈する。Ｂ地区２トレンチの出土。

４は口唇部を丸く仕上げるもので、口径の推算は6.4㎝になる。外面と内面の上部は自然釉のため褐色を呈し、内面の下部は灰褐色である。Ｄ－32グリッドの出土。

５は口縁部が肥厚するもので、口径は推算9.6㎝になる。頸部の器壁は約３㎜を測る薄手の資料である。器色は淡橙褐色を呈する。Ｂ地区北東部の出土。

６は口径の推算が12.6㎝になるもので、口縁部の上部は肥厚する。器色は暗褐色を呈する。Ｐ－24グリッドの出土。

第４種

口縁部が内側に湾曲する無頸の壷形で、10点が採集されている。第52図7･8に３点を図示した。

7･8は類似の器形をなすものである。７は胴上部が弧を描くもので、口唇部と外面は黒褐色、内面は褐色を呈する。胎土には橙褐色粒が認められる。Ｂ地区北東部の出土。

８の外面と口唇部は自然釉のため淡い褐色を呈し、内面は橙褐色である。Ｍ－27グリッドの出土。

第５種

口縁部の内側に張り出しを持つもので、第52図９に示す１点が得られている。平坦に整形された口唇部は内傾し、１条の凹線文が施文される。器色は外面黒褐色、内面灰褐色を呈する。

C－26グリッドの出土。

第６種

口縁上部が玉縁状に肥厚するもので、７点が得られている。頸部以下の器形は上記のいずれかに属するものであるが、口縁部の上部に特徴があることから本種で扱うことにする。

第52図10は口径の推算が17.4㎝になるもので、頸部から脹らむ器形である。肥厚部外面には１条の凹線文が施される。器色は橙褐色を呈する。B地区４トレンチの出土。

11は口径推算が15.6㎝になるものである。頸部は垂直で、頸下部から脹らむ器形である。胎土に１㎜前後の橙褐色粒の混入がみられる。器壁に無数の小孔が認められる。器色は外面褐色、内面茶褐色を呈する。G－37グリッドの出土。

12は小型品の口縁資料で、頸部はほぼ垂直に造られる。胎土に石灰質の細礫の混入が確認できる。器色は灰褐色を呈する。G－33グリッドの出土。

13は小型品の口縁部資料で、頸部以下の形状が第２種に類似する。肥厚部下位に１条の沈線文が施文される。器色は内外面とも淡褐色を呈する。Q－26グリッドの出土。

14は口縁部が朝顔状に開き、頸部が緩やかにくびれるものである。中型品の口縁部資料であろう。内外面にはマンガン釉が施釉され、黒褐色を呈する。Q－26グリッドの出土。

15は頸部から脹らむものである。外面は自然釉のため淡褐色を呈し、内面は茶褐色である。K－29グリッドの出土。

16は頸部から脹らむ器形で、玉縁状の肥厚部は器壁を逆「U」字に外側へ折り曲げて造られる。器色は外面淡褐色、内面茶褐色を呈する。表採資料である。

③鉢形（第53・54図）

口縁部が外側に張り出すもので、摺鉢とほぼ同器形をなすが、内面にクシ目の認められない資料を鉢形として扱うことにする。しかしながら、摺鉢の中には口縁上部にクシ目の施されない資料とクシ目が水挽きで消された結果、本類と摺鉢のいずれに属するのか判然としない資料がある。それらの資料については、取り合えず本項で取り扱うことにする。

今回の調査で鉢形に属する資料は、口縁部資料150点、底部資料30点の合わせて180点が確認された。接合して全形を窺える資料は得られてない。第53・54図に口縁部資料10点、底部資料４点を図示した。口縁部資料については、器形から次の３種に分類された。

第１種　胴部から口縁部にかけて外側に開く器形である。口縁部は外側へ張り出し、比較的幅の狭い口唇部を造る。

第２種　胴部から口縁部にかけては第１種より立ち気味の器形で、張り出した口唇部に沈線文を施すものもある。

第３種　胴上部から口縁部にかけてほぼ垂直に成形されるもので、張り出した口唇部は第１・２種よりも幅広いものが多い。口唇部には沈線文が施される。

以下、上記分類の順に略述していくことにする。第17表に分類別口唇部文様について、第18表に口唇部幅の計測値を示す。

第１種

本種は全体的に開き気味の器形をなすもので、19点が得られている。口唇部は比較的幅狭く成形され、最少1.2㎝、最大2.0㎝で、1.6㎝前後の資料が多い。また、口唇部に沈線文を施すものが３点あるが、他の16点は無文である。

第17表　分類別口唇部文様の有無

文様の有無		第１種	第２種	第３種	合　計
無　　文		16	5	3	24
有文	１条	3	13	33	49
	２条		3	4	7
合　　計		19	21	40	80

第53図１は口径の推算が24.2㎝になるものである。平坦に整形された口唇部は内傾する。器色は外面黒褐色、内面茶褐色を呈する。第９号石列からの出土。

２は推算口径が26.2㎝になるものである。口唇部は弧状に整形され、器色は内外面とも茶褐色を呈する。Ｂ地区北東部の出土。

第２種

口縁部が第１種より立ち気味の器形で、21点が採集されている。口唇部の幅は第１種より平均して大きく、最小1.6㎝、最大2.5㎝で、2.0㎝前後の資料が多い。口唇部の文様は沈線文でなされ、１条施すものは13点、２条施すものは３点で、無文は５点であった。本種に属する資料４点を第53図３～６に図示した。

３は口径推算37.0㎝になるもので、口唇部は無文である。内面に器面調整時の水挽きの稜が認められる。器色は外面黒褐色、内面橙褐色を呈する。Ｂ－25グリッドの出土。

４は口径の推算が33.6㎝になるもので、口唇部に１条の沈線文を施す、外面は自然釉のため黄褐色で、内面は褐色を呈する。Ｂ地区北東部の出土。

５は口径推算27.0㎝になるもので、口唇部に２条の沈線文を施す。内外面とも自然釉のため褐色を呈し、器壁の中央部分以外は極小の孔が認められる。Ｃ－18グリッドの出土。

６は推算口径30.2㎝を測るもので、胎土に石灰質の細礫の混入が認められる。平坦に整形された口唇部は内傾し、沈線文が１条施される。器色は内外面とも茶褐色である。Ｏ－27グリッドの出土。

第18表　鉢形分類別口唇部幅測定（㎝）

口唇部幅	第１種	第２種	第３種	合　計
1.2	3			3
1.3	1			1
1.4	2			2
1.5	4			4
1.6	3	1		4
1.7	2	1		3
1.8	3	1		4
1.9		3	1	4
2.0	1	4		5
2.1		3	7	10
2.2		2	1	3
2.3			1	1
2.4		1	4	5
2.5		4	5	9
2.6				
2.7			2	2
2.8				
2.9			2	2
3.0				
3.1			1	1
3.2			4	4
3.3				
3.4			1	1
3.5				
3.6			4	4
3.7				
3.8				
3.9				
4.0			1	1
4.1				
4.2			1	1
不　明		1	5	6
合　計	19	21	40	80

第３種

口縁部から胴上部にかけて垂直に成形され、口唇部は第１・２種より幅広く平坦に成形されるものである。本種に含まれるものは40点が確認された。

口唇部の幅についてみると、最小1.9㎝、最大4.0㎝で、2.5㎝前後の資料が多い。口唇部の文様は、無文（３点）と有文（37点）があり、後者は沈線文を１条施すもの（33点）と２条施すもの（４点）がある。本種に属する資料４点を第54図１～４に図示し、略述することにする。

１は口径の推算が25.4㎝になるもので、口唇部に１条の沈線文が施される。平坦に整形された口唇部はわずかに外傾する。器色は内外面とも橙褐色を呈する。表採資料である。

２は口径推算が37.0㎝になる大型の資料である。口唇部は１と同じく沈線文を１条施し、外傾する。器色は橙褐色を呈する。表採資料である。

３は口唇部の幅が3.4㎝になるもので、二叉状工具による沈線文を施している。口唇部の下面は自然釉のため、黄褐色を呈する。器色は内外面とも橙褐色である。Ｂ地区南東部の出土。

４は本類の中で口唇部の幅が最大のもので、4.0㎝を測る。口唇部は平坦に整形され、沈線文が１条施される。器色は茶褐色を呈する。Ｃ－36グリッドの出土。

底部

本類の底部資料は30点が採集され、その中の６点を第54図５～10に示した。

５・７は胴下部が緩やかな弧状をなすもので、口縁部分類の第３種の底部になるものかと思われる。５は内外面とも橙褐色である。第２号石列の出土。

７は外面の水挽き調整が比較的丁寧に行われるもので、器色は外面灰褐色、内面淡黒褐色を呈する。Ｋ－29グリッドの出土。６・８～10は外底面より直線的に開くもので、口縁部分類の第１種あるいは第２種の底部になるものかと考えられる。６は外面灰褐色、内面淡黄褐色を呈

第19表　鉢形出土状況

出土地区	個数
Ａ－26	1
Ａ－32	2
Ａ－33	2
Ａ－34	3
Ｂ－23	1
Ｂ－24	1
Ｂ－25	1
Ｂ－27	1
Ｂ－28	3
Ｂ－29	4
Ｂ－31	1
Ｂ－32	2
Ｂ－33	2
Ｃ－18	3
Ｃ－20	1
Ｃ－24	2
Ｃ－25	3
Ｃ－26	2
Ｃ－27	10
Ｃ－28	2
Ｃ－29	3

出土地区	個数
Ｃ－30	4
Ｃ－31	1
Ｄ－30	1
Ｄ－31	2
Ｄ－35	1
Ｄ－36	1
Ｅ－30	13
Ｆ－30	4
Ｇ－36	1
Ｇ－37	1
Ｋ－29	4
Ｌ－28	1
Ｌ－29	5
Ｍ－27	1
Ｍ－28	2
Ｍ－29	1
Ｍ－30	1
Ｎ－28	1
Ｎ－29	1
Ｏ－27	2
Ｐ－24	1

出土地区	個数
Ｐ－32	1
Ｑ－26	1
Ｑ－28	2
Ｑ－32	2
Ｒ－25	1
Ｒ－26	1
石列№2	1
Ｂ地区北東部	12
Ｂ地区南東部	20
Ｂ地区1トレンチ	1
Ｂ地区2トレンチ	2
Ｂ地区3トレンチ	1
Ｂ地区4トレンチ	1
Ｂ地区Ａトレンチ	1
Ｂ地区Ｂトレンチ	1
Ｂ地区Ｃトレンチ	5
Ｂ地区Ｄトレンチ	1
Ｂ地区Ｅトレンチ	1
不明	26
合計	180

するもので、L－29グリッドの出土。8は器壁に小さな間隙の認められるもので、外面は自然釉のため紫褐色を呈し、内面は褐色を呈する。本資料は摺鉢に重ねて焼成され、底下部にはクシ目の痕跡が認められる。K－29グリッドの出土。9は橙褐色を呈するもので、B－23グリッドの出土。10は外面に篦調整の痕跡の認められるもので、器色は橙褐色を呈する。C－29グリッドの出土。

④摺鉢（第55・56・57図）

摺鉢と確認できる資料は総数673点が採集されている。他の資料より量的に多いのは、内面にクシ目が確認できるためである。しかしながら、クシ目の施されない口縁上部とクシ目の消された口縁上部資料については、前記鉢形と明確に判別できない資料もある。そのため、判別できない資料については鉢形に含まれることになる。採集された資料は口縁部が外側に張り出す鉢形を基本形とするが、頸部及び胴部器形より次の4種に細分される。

第1種　全体的には口縁部が外側に開く鉢形で、頸部がくびれ、胴上部で「＜」状に屈曲し、屈曲部が凸帯状になるもの。

第2種　器形的には第1種に類似し、胴上部の屈曲部は頸部がくびれることにより整形され、稜として認められるもので、第1種のように凸帯状にならないもの。

第3種　基本形は第1・2種に類似するものの、口縁部の張り出しは他の3種より幅が頸部の「くびれ」も小さいもの。

第4種　口縁部の張り出しは他の3種より比較的広く、口縁部直下から胴上部にかけては垂直か若干開くもの。口唇部は1条の沈線文を施文するものが多い。

第20表　分類別口縁部出土状況

分類	第1種	第2種	第3種	第4種
個数	16	13	26	36

以下、上記分類の順に記述していくことにする。

第1種

第1種に分類できるものは16点が得られ、その中の4点を第55図1～4に示した。本種の特徴である胴上部における凸帯状の屈曲部は、整形の方法により①屈曲部の下位に凹線を施し、凸帯状にするもの、②屈曲部の下位をロクロで水挽きする際に器面を押圧し整形するものがあり、前者2点、後者11点、不明3点であった。本種の口唇部はわずかに弧状をなし、外傾するものが一般的である。

1は口径推算が25.6㎝になるもので、内外面に黒褐色の釉薬が施釉される。胴上部の屈曲部の整形は、屈曲部の下位に凹線を施すものである。内面のクシ目は6本単位で、間隔をおいてなされる。D－32グリッドの出土。

2～4は屈曲部の整形を押圧で凸帯状にするものである。2は外面黒褐色、内面褐色を呈する。B－27グリッドの出土。

3は胴上部の屈曲部下位の押圧の弱いものである。内面は口唇部直下1.7㎝に横位の沈線文を配し、沈線に接して6本単位のクシ目が間隔を開けて施される。器色は外面黒褐色、内面褐色を呈する。B地区北東部の出土。

4は口径の推算が34.8㎝になるものである。屈曲部の上位（頸部）と下位（胴上部）はかなり押圧され、下位は幅広の凹線をなす。内面に黒褐色の釉が施釉される。外面の器色は暗褐色を呈する。P－32グリッドの出土。

第2種

胴上部の屈曲部は頸部がくびれることにより稜として認められるもので、13点が得られている。その中の3点を第55図5～7に示した。本種の場合、内面のクシ目は口縁上部において一定の間隔を開けて施すものと、間断なく施すものがあるが、前者が多く見受けられる。

5は注口を持つ資料である。内面のクシ目は口縁部直下まで施され、その後水挽きされる。口唇部は自然釉で暗褐色になる。器色は内外面とも黒褐色を呈する。D－31グリッドの出土。

第21表　摺鉢出土状況

出土地点	個数
A－21	1
A－25	2
A－26	5
A－27	1
A－28	1
A－31	1
A－32	3
A－33	5
A－34	15
A－35	1
B－20	1
B－23	15
B－24	2
B－25	2
B－27	3
B－28	3
B－29	12
B－30	1
B－31	3
B－32	3
B－33	3
B－34	2
C－18	18
C－20	1
C－24	2
C－25	10
C－26	9
C－27	23
C－28	8
C－29	14

出土地点	個数
C－30	12
C－31	8
C－33	1
C－34	1
C－38	1
D－24	1
D－25	1
D－26	1
D－28	2
D－29	4
D－30	5
D－31	12
D－32	1
D－33	1
D－34	1
D－35	2
D－37	1
E－30	34
F－39	4
F－20	1
F－30	11
F－32	2
F－34	1
F－35	1
F－37	2
F－38	2
G－27	1
G－28	1
G－30	11
G－37	4

出土地点	個数
G－39	1
H－29	1
H－30	3
H－34	3
I－30	1
K－24	1
K－27	3
K－28	1
K－29	8
K－31	1
K－34	1
L－20	1
L－28	5
L－29	5
M－28	5
M－29	1
M－30	2
N－24	1
N－25	1
N－28	2
N－29	4
O－24	3
O－26	1
O－28	1
O－30	2
O－31	1
O－32	3
O－33	1
P－24	1
P－26	1

出土地点	個数
P－27	1
P－28	1
P－31	1
P－32	7
Q－27	6
Q－28	2
Q－29	1
Q－31	1
Q－32	7
Q－33	2
R－23	1
R－24	1
R－25	2
R－29	4
S－30	1
B地区南東部	57
B地区北東部	52
B地区1トレンチ	3
B地区2トレンチ	15
B地区3トレンチ	8
B地区4トレンチ	11
B地区5トレンチ	1
B地区Aトレンチ	2
B地区Bトレンチ	4
B地区Cトレンチ	11
B地区Dトレンチ	6
B地区Eトレンチ	1
B地区Fトレンチ	6
不　明	108
合　計	688

6は口径の推算が29.8㎝になるものである。内面のクシ目は8本単位の工具で、一定間隔を開けて施しているが、口縁部の上部は口唇下1.8㎝までは消される。器色は外面褐色、内面茶褐色を呈する。G－27グリッドの出土。

7は頸部の「くびれ」の強いものである。内面のクシ目は8本単位で右傾して施される。内面の口縁上部はクシ描き後、水挽きにより消される。器色は外面褐色、内面淡黒褐色を呈する。B地区北東部の出土。

第3種

基本的な器形は第1・2種と類似するが、口縁部の張り出しが小さく、頸部の「くびれ」が弱いものである。また、胴部から口縁部にかけては直線的に外側に開く。今回の調査では26点が採集され、その中の4点を第55図8・9と第56図1・2に図示した。

8は口唇部の幅が約1.5㎝を測り、頸部の器形が第2種に類似するものである。内面に施されるクシ目は8本単位で、口唇部近くまで間隔を開けて施されるが、口唇下約2.8㎝までは消されている。器色は外面茶褐色、内面橙褐色を呈する。南東部石列より出土。

9は口径の推算が33.4㎝になるものである。口唇部の端は尖状に整形される。内面のクシ目は6本単位で間隔を開けて施される。器色は外面の口唇部は自然釉のため灰褐色を呈し、胴部は黄褐色、内面は褐色である。H－34グリッドの出土。

第56図1は口径の推算が33.8㎝になるもので、内面のクシ目は間断なく施される。口唇部に1条の沈線文が施される。頸部の「くびれ」は口縁部の上位で行われる。器色は外面明橙色、内面は茶褐色を呈する。B地区Fトレンチ、表土層の出土。

2は器高の低い浅鉢形になると考えられるものである。内面のクシ目は口唇下1.0㎝まで間断なく施されるが、上部は水挽きにより消されている。器色は内外面とも橙褐色を呈する。K－29グリッドの出土。

第4種

口縁部の張り出しは他の3種より比較的広く、口縁部直下から胴上部にかけては垂直か若干開くもので、口唇部には1条の沈線文を施文するものが多い。今回の調査では36点が採集され、その中の5点を第56図3～7に図示した。

3は口縁部直下に1㎜の小さな段を造るものである。全面には焼成時に発生した気泡と小孔が認められる。クシ目は間断なく施される。器色は内外面とも自然釉により黄褐色を呈する。M－31グリッドの出土。

4は口径の推算が22.6㎝になるもので、本種の中では小型の部類に属するものであろう。内面のクシ目は口唇部近くまで施されるが、口唇下2.6㎝までは水挽きにより消されている。器色は橙褐色を呈する。B地区北東部の出土。

5は口径推算26.6㎝になるものである。内面のクシ目は口唇下約1.0㎝までは間隔を開けてなされ、その下2.0㎝以下では間断なくクシ目が施される。器色は外面が自然釉のため黄褐色

を呈し、内面は茶褐色である。L－29グリッドの出土。

6は口径の推算が28.2㎝になるもので、口縁部の張り出しは自然釉で黒褐色を呈する。器色は内外面とも橙褐色である。表採資料である。

7は唯一全形の窺える資料である。本種の典型的な資料で、口径31.4㎝、底径13.0㎝、器高15.3㎝である。口唇部の幅は3.4㎝で、沈線文が1条施される。内面のクシ目は間断なく口唇下1.0㎝まで描かれるが、上部は水挽きにより消されている。内底面は使用によりクシ目は磨耗し、滑面をなす。器色は内外面とも橙褐色を呈するが、口縁部の外面は自然釉のため淡黄褐色である。L－29グリッドの出土。

底部

底部資料は72点が採集され、そのうちの5点は脚台部の資料である。底部資料10点を第57図に図示した。底部資料と口縁部資料の関係については、底部資料の外底面から胴部への立ち上がり角度と内面のクシ目の観察から推察できるものと考えられるが、今回は保留し改めて検討してみたい。

1はクシ目の細かいもので、クシ目は右方向で描かれる。器色は内外面とも茶褐色である。C－26グリッドの出土。

2～4は外底面より外側に開く器形になるもので、内面に目の荒いクシ目が施される。2は外面黄褐色、内面褐色を呈する。表採資料である。

3は胴部にロクロによる水挽き時の稜を明瞭に残すものである。器壁には多くの間隙がみられ、内底面では器面が盛り上がる。器色は外面橙褐色、内面暗褐色を呈する。第2号石列よりの出土。

4は外面が自然釉のため黒褐色を呈するものである。胎土に石英質砂粒の混入がみられる。内面の器色は黄褐色である。G－30グリッドの出土。

5はクシ目の荒いもので、部分的に2ないし3㎜の段差ができている。器色は外面暗褐色、内面橙褐色を呈する。F－30グリッドの出土。

6・7は口縁部分類第4種の底部資料と考えられるものである。6は左方向にクシ目を施すもので、クシ目は使用により磨耗する。器色は橙褐色を呈する。表採資料。

7は外底面より脹らみをもちながら胴上部へ移行すると見られるものである。外面の仕上げは悪く、外底面近くは箆調整が行われる。器色は橙褐色を呈する。B地区Aトレンチの出土。

8～10は脚台部の資料である。8は底径の推算が13.0㎝になるもので、内外面橙褐色を呈する。B地区北東部の出土。

9は底径の推算が16.8㎝になるもので、器色は褐色を呈する。表採資料である。

10は外面に6条の凹線文を施すもので、底径は推算17.2㎝になる。器色は外面褐色、内面茶褐色を呈し、G－37グリッドの出土。

⑤浅　鉢（第58図）

器高の低い浅鉢形で、いわゆる「ミジクブサー」と呼称されるものである。54点の資料が得られたが、すべて破片で全形の窺える資料はない。特に底部資料については、他の小型陶器と明確に判別できないため提示していないが、現存する民俗資料から底径の比較的大きい平底になる。

本類は器高が低く、口縁部の内反する浅鉢形を基本形とするが、口縁部上部の形態から次の２種に分けられる。

第１種　内反した口縁部の上部は略「T」字状に整形され、口唇部は平坦で幅広い。口縁部にはクシ描きによる波状文が施され、無文の資料は見られない。平坦に整形された幅広い口唇部は僅かに内傾し、無文である。

第２種　内反した口縁部上部は舌状に整形される。有文と無文が認められ、前者が一般的である。文様は口縁部と胴部に見られ、波状文と横位の凹線を組み合わせて描かれる。

以上の２種で、第１種に属するもの23点、第２種に属するもの24点、小破片のため何れに属するか不明なもの７点である。

第１種

本種に属するもの７点を第58図１～７に示した。器形をみると、胴部の脹らむもの（４・５・７）と脹らまないもの（１～３・６）がある。頸部から胴部にかけては弧状を描きながら移行するものが一般的であるが、７は頸部下で明瞭な稜を形成する。

完形品がなく大きさは明らかにできないが、図上復元を行った４～７の口径についてみると４は16.8㎝、５は20.2㎝、６は22.2㎝、７は21.0㎝である。

文様の有無についてみると、本種に分類できるものは総て有文資料で、文様はクシ描きの波状文のみで施される。第２種にみられるような波状文と凹線を組み合わせる資料は認められない。施文部位はすべて頸部直下である。文様は器面を整えた後に施文されるものと思われるが、本種は波状文を施した後、その上下位が水挽きされ、波状文の山部はナデ消される。

施文具のクシ目は最少３本、最多９本で、４～６本のクシ目が多い。

第２種

本種に属するもの７点を第58図８～14に示した。本種は有文と

第22表　ミジクブサー出土状況

出土地点	個数
A－25	1
A－34	2
B－27	1
B－28	1
B－29	1
B－32	1
C－16	1
C－18	1
C－26	1
C－27	2
C－29	1
C－31	1
D－24	1
E－30	3
E－39	1
F－32	1
F－34	2
H－31	1
K－24	1
K－29	1
L－29	1
M－27	1
N－23	1
O－30	2
P－32	1
A地区Bトレンチ	2
B地区南東部	5
B地区北東部	2
B地区1トレンチ	1
B地区2トレンチ	1
B地区3トレンチ	1
B地区4トレンチ	1
B地区Aトレンチ	1
B地区Cトレンチ	1
不明	8
合計	54

無文があり、前者はクシ描きの波状文と凹線を組合せて施文される。

8・9は口縁部に波状文を施し、その上位の口縁上部に1条の凹線文が施されるものである。9は口縁部端が尖状に整形される。

10は口縁部全面に文様を施すものである。口縁部の上端から凹線文、波状文を施し、下位は凹線文で器面が占められる。

11は口縁部下部に波状文、その下位に1条の凹線文を施している。

12は胴上部に凹線文と波状文の施文されるもので、口縁部は無文である。

13・14は文様の施されない無文の口縁部資料である。

第23表　浅鉢観察表

挿図番号 図版番号	分類	出土地点 グリッド	層	口径	文様	櫛目本数	器色 外面	器色 内面	備考
第58図 1 図版77－1	A	B－32	表土	不明	波状文	X≧4	暗褐色	褐色	外面は暗褐色を呈するものの、失色している。
第58図 2 図版77－2	A	A地区 Bトレンチ	Ⅱ	不明	波状文	X≧5	黒褐色	黒褐色	内外面とも黒色の釉で施釉される。釉の発色は悪く、全体に貫入が見られる。
第58図 3 図版77－3	A	A地区 Bトレンチ	Ⅱ	不明	波状文	6	黒褐色	黒褐色	胎土に少量の石灰質細礫が混在する。波状文は丁寧に施文される。
第58図 4 図版77－4	A	表採	不	17.0	波状文	4	暗褐色	青灰色	外面は地釉で暗褐色を呈する。
第58図 5 図版77－5	A	表採	不	20.0	波状文	4	橙褐色	明橙色	波状文は長めの間隔で施される。少量の石灰質砂粒が混在する。
第58図 6 図版77－6	A	C－31	表土	22.2	波状文	7	暗褐色	赤褐色	外面は自然釉で暗褐色を呈する。また、釉の蒸発や気泡の破裂による小孔も見られる。
第58図 7 図版77－7	A	B地区 南東部	表土	不明	波状文	4	暗褐色	黄褐色	外面と内面の一部は自然釉で暗褐色を呈する。波状文は丁寧に施文にされる。
第58図 8 図版77－8	B	K－29	表土	不明	波状文 凹線文	4	橙褐色	淡黄褐色	胎土に石英質の微砂粒を混在する。
第58図 9 図版77－9	B	A－34	Ⅱ	不明	波状文 凹線文	6	橙褐色	橙褐色	外面の口縁部上部は黒色を呈する。
第58図 10 図版77－10	B	B－29	表土	不明	波状文 凹線文	7	暗褐色	黄褐色	
第58図 11 図版77－11	B	E－30	表土	不明	波状文 凹線文	7	黄褐色	橙褐色	外面は自然釉で暗褐色になる。
第58図 12 図版77－12	B	C－29	表土	不明	波状文 凹線文	5	暗褐色	橙褐色	口縁部は胴部に比べ肥厚する。外面は自然釉のため暗褐色になる。
第58図 13 図版77－13	B	C－27	表土	12.6	無文		橙褐色	褐色	
第58図 14 図版77－14	B	A－34	表土	不明	無文		黄褐色	橙褐色	外面に左回転ロクロによる線状痕を残す。

⑥火　炉（第59図）

比較的広い平底より斜めに立ち上がり、口縁部あるいは胴上部において屈曲し、口唇部の３ヵ所に弧状の抉りの見られるもので、口縁部に１ないし２条の横位の沈線文を施す。

今回の調査では20点が採集され、採集地区は総てＢ地区で、Ａ地区からの出土はない。また、層位的にはいずれも表土層からの出土である。

得られた資料は口縁部器形から次の３種に分類できる。

第１種　口縁部において内側に屈曲するもの。

第２種　胴上部において内側に屈曲するもの。

第３種　第１・２種と異なり、屈曲のみられないもの。

以下、上記分類の順に記述することにする。

第24表　火炉出土状況

出土地点	分類			外耳	合計
	第1種	第2種	第3種		
A－27		1			1
A－34	2				2
C－24	1				1
C－29		1			1
E－30		1			1
F－32	1				1
G－37			1		1
N－28		1			1
N－29				1	1
O－24	1				1
O－28		1			1
B地区南東部	1	1			2
B地区北東部	2	2		1	5
B地区Aトレンチ	1				1
B地区5トレンチ	1				1
合　計	10	8	1	2	21

第１種

本種は口縁部において内側に屈曲するもので、10点が得られている。採集資料の中から７点を第59図１～７に示した。

屈曲部は①外面では明瞭に「く」字状に内側に屈曲するものの、内面は弧状をなすものと、②内外面とも明瞭に「く」字状に内側に屈曲するものがある。また、①・②とも屈曲部より上部の器壁の厚さは、屈曲部下部より厚く造られる。

口唇部に抉りの見られる資料は１・６の２点で、他はそれ以外の資料である。

①に属するものは１・４・７、②に属するものは２・３・５である。３は他の資料に比べ、口縁部が厚く肥厚するものである。

文様は横位の沈線文でなされ、屈曲部の上位（口縁部）に施すものと、屈曲部の上位（口縁部）と下位（胴上部）に施すものがある。前者に属するものは６点、後者に属するは４点である。図示した資料の中で屈曲部の上位に文様を施すものは２～７の６点である。２～４は沈線文を２条施し、５～７は沈線文を１条施している。

屈曲部の上位（口縁部）と下位（胴上部）に沈線文を施すものは１に示すものである。図示していない資料も含めてみると、屈曲部の上・下位に沈線文各１条を施文するものは３点、屈曲部の上位に２条、下位に１条施すものは１点である。

第２種

胴上部において内側に屈曲するものは８点で、その中の６点を第59図８～13に図示した。

９を除く他の５点については屈曲部のない口縁部資料であるが、８に類似して口縁部が内側に傾き、内傾する比較的幅広い口唇部を有すること、口縁部の上位と下位に横位の沈線文の施されることから本種に分類できるものである。

9は口縁から屈曲部までの器形の窺えるもので、口縁部外面は直線的であるが、内面は弧状を描きながら比較的器壁の厚い口縁上部へ至る。口唇部は平坦に整形され、内傾する。文様は口縁部の上位と屈曲部の上・下位に各1条の沈線文を施す。

8は屈曲部近くの口縁資料で、口縁部の上位に1条、下位に2条の沈線文が認められる。口縁上部の器壁は厚く作られる。10〜13は口縁部の資料で、いずれも口縁上部の器壁は厚くつくられる。また、口縁部の上位に沈線文を各1条施文される。

8〜11・13は胎土に白色の微砂粒を混入するが、12は石英細礫、赤色粒を混入している。

第3種

胴部から口縁部にかけて直線的な器形をなすもので、第59図14に示す1点が得られている。本資料は炉としての基本形ではないが、口縁上部の器壁が厚く、内傾する口唇部に弧状の抉りが見られ、口縁部の上下に沈線文を施すことなどから炉として把握し、本類で扱うことにする。

第25表　火炉観察表

挿図番号 図版番号	分類	出土地点		口径	文様		器色		備考
		グリッド	層		口縁部	胴上部	外面	内面	
第59図 1 図版78－1	1	B地区 北東部	表土	14.0	1条	1条	黒褐色	黒褐色	口唇は弧状の抉り部の見られる資料である。
第59図 2 図版78－2	1	C－29	表土	12.6	2条	無文	橙褐色	橙褐色	素地に白色の微砂粒が混入する。屈曲部は内外面においても明瞭である。
第59図 3 図版78－3	1	A－34	表土	不明	2条	不明	橙褐色	橙褐色	口縁部は屈曲部より漸次厚さを増し、口唇部近くでは1.5㎝の器壁になる。
第59図 4 図版78－4	1	B地区 南東部	表土	不明	1条	不明	橙褐色	橙褐色	屈曲部外面はヘラ調整させ、断面からみると凸帯状をなす。
第59図 5 図版78－5	1	A－34	表土	不明	1条	不明	橙褐色	橙褐色	胴部は外耳の取り付け部分である。
第59図 6 図版78－6	1	O－24	表土	不明	1条	無文	暗褐色	褐色	口唇部は弧状の抉り部の見られる資料である。外面は地釉のため、暗褐色を呈する。
第59図 7 図版78－7	1	B地区 北東部	表土	不明	1条	無文	橙褐色	橙褐色	屈曲部から上位は、胴部の器壁より厚く作る。
第59図 8 図版78－8	2	B地区 北東部	表土	不明	1条　2条	不明	橙褐色	橙褐色	口縁上部の器壁は厚く作られる。
第59図 9 図版78－9	2	C－24	表土	不明	1条　2条	1条	橙褐色	橙褐色	屈曲部の上下位に沈線文を施すため、外面の屈曲部は凸状を呈する。
第59図 10 図版78－10	2	O－28	表土	不明	1条　不明	不明	褐色	橙褐色	口唇部に凹線文が施される。
第59図 11 図版78－11	2	B地区 南東部	表土	不明	1条　不明	不明	淡橙褐色	淡橙褐色	素地に少量の石灰質の砂粒が混入する。
第59図 12 図版78－12	2	N－28	表土	不明	1条　不明	不明	灰褐色	灰褐色	素地は粗く、石英細礫を混入する。
第59図 13 図版78－13	2	A－27	表土	不明	1条　不明	不明	橙褐色	灰褐色	外面は外耳の取り付け部である。素土に白色の微粒子が混入する。
第59図 14 図版78－14	3	G－37	表土	不明	1条	1条	灰褐色	灰褐色	素土は粗く、器面調整は雑である。
第59図 15 図版78－15		B地区 北東部	表土				暗褐色		全体的に自然釉のため暗褐色を呈する。

本資料は第１・２種と同じく、口縁上部は厚く作られる。文様は口縁部の上位に幅約４㎜の施文具による沈線文、下位には幅約１㎜の施文具による沈線文が施される。

外　耳

本類の屈曲部の直下に貼り付けられる外耳が２点得られ、第59図15・16に示した。

⑦底　部（第60・61図）

総数で194点の底部資料が得られている。器種が明らかでないために一括して取り扱い、特徴的な19点を第60・61図に図示する。

第60図１～７に示すものは中・大型品の壷形あるいは甕形の底部資料と考えられるものである。１は底径の推算が13.0㎝になるもので、底部の厚さは胴部器壁より厚く作られる。器色は外面黒褐色、内面茶褐色である。Ｃ－27グリッドの出土。

２は底径の推算が13.2㎝になり、胴部の立ち上がりは１より開くものである。素地には橙褐色粒がみられる。器色は外面から約３㎜の器壁は灰褐色で、内面は茶褐色である。Ｇ－37グリッドの出土。

３は中型品の底部資料と考えられるもので、底径の推算は19.0㎝になる。内面は自然釉のため黒褐色を呈するが、くすんだ色合をなす。外面及び外底面は黒褐色である。素地に石灰質の細礫が散見される。Ａ－21グリッドの出土。

４は底径の推算が20.6㎝になるものである。内面はロクロによる水挽き調整され、外面は箆状工具により器面調整される。器色は内面橙褐色、外面は自然釉のため褐色を呈する。Ｂ地区北東部の出土。

５は底径の推算が22.0㎝になるもので、外面の一部に黄褐色の自然釉がみられる。外底面と胴部の境界は箆削りされる。内面の調整は雑で、ロクロ調整時の残土を残す。器色は外面淡黄褐色、内面茶褐色を呈する。Ｐ－33グリッドの出土。

６は胴部の立ち上がりが比較的外側に開くもので、底径の推算は19.0㎝になる。器色は内面灰褐色で、外面は黒褐色と淡い褐色を呈する。Ｃ－29グリッドの出土。

７は器壁の厚さが2.1㎝の資料で、底径の推算は25.2㎝である。外面下部と外底面は黄褐色の自然釉がみられる。器色は外面褐色、内面茶褐色である。Ｃ－30グリッドの出土。

第61図１～９は小型の壷形の底部資料と考えられるものである。１は底径の推算が10.0㎝になるもので、内面は器面調整時の水挽き痕を明瞭に残す。器色は内面黒褐色、外面は胴下部と外底面は淡黄褐色を呈し、胴上部は褐色である。表採資料である。

２は外面が自然釉のため茶褐色になるもので、底径の推算は12.0㎝である。外底面の仕上げは悪く、全体的に凹凸をなす。内面は器面調整時の水挽き痕を残し、器色は灰褐色である。Ｍ－30グリッドの出土。

３は外底面から胴部への立ち上がり部の器壁が厚いもので、底径の推算は10.0㎝である。外

底面は１・２・４と同じく仕上げは悪い。内底面の直径は4.0㎝になる。器色は外面褐色、内面橙褐色を呈する。Ａ－34グリッドの出土。

４は底径の推算が11.0㎝になるもので、外面は自然釉のため褐色を呈する。内面の器色は黒褐色を呈する。外底面の仕上げは悪い。Ｄ－31グリッドの出土。

５は自然釉が外面全体にみられ、黄色を帯びた黒褐色を呈する。内面に器面調製時の水挽き痕を明瞭に残し、器色は淡い褐色である。Ｅ－30グリッドの出土。

６は底径の推算が、7.0㎝になるもので、外面は自然釉で褐色ないし黄褐色を呈する。内面の器色は褐色である。Ｌ－29グリッドの出土。

７は外面が自然釉のため茶褐色を呈するもので、底径の推算は10.2㎝になる。内面に水挽き痕を明瞭に残し、器色は黄褐色である。Ａ－25グリッドの出土。

８は内外面とも橙褐色を呈するもので、底径の推算は7.2㎝である。外底面の仕上げは悪い。Ａ－36グリッドの出土。

９は底径の推算が10.0㎝になるもので、器面の調整は良好である。器色は内面橙褐色、外面は黄色を帯びた褐色である。Ｎ－31グリッドの出土。

10は脚を有するもので、素地に白色粘土が練り込まれている。外面は篦状工具で調整された後に黒褐色釉が施釉される。器色は淡い黒褐色を呈する。Ｑ－32グリッドの出土。

11は火取等の円筒形の底部資料で、外面上部には黒褐色の釉が施釉される。底径の推算は9.5㎝である。器色は外面下部は暗褐色、内面は褐色を呈する。Ｄ－32グリッドの出土。

12は搬入品と考えられるものである。素地は多量の鉱物粒を含んだ砂質的なもので、そのた

第26表　器種不明底部出土状況

グリッド	出土層 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	合計
Ａ－25	1			1
Ａ－27	1			1
Ａ－28	1			1
Ａ－32	2			2
Ａ－34	6			6
Ａ－36	1			1
Ｂ－23	1			1
Ｂ－27	1			1
Ｂ－28	2			2
Ｂ－29	7			7
Ｂ－31	2			2
Ｂ－32	1			1
Ｂ－33	2			2
Ｂ－34	1			1
Ｃ－18	4			4
Ｃ－24	1			1
Ｃ－25	4			4
Ｃ－26	2			2
Ｃ－27	5			5
Ｃ－29	6			6
Ｃ－30	6			6
Ｃ－32	3			3
Ｃ－34	1			1
Ｄ－31	1			1
Ｄ－32	1			1

グリッド	出土層 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	合計
Ｄ－35	1			1
Ｄ－37	1			1
Ｅ－30	11			11
Ｅ－32	1			1
Ｅ－36	1			1
Ｆ－29	1			1
Ｆ－30	2			2
Ｆ－31	1			1
Ｇ－27	1			1
Ｇ－30	5			5
Ｇ－37	2			2
Ｈ－30	2			2
Ｈ－34	1			1
Ｋ－29	2			2
Ｌ－27	1			1
Ｌ－29	5			5
Ｍ－28	1			1
Ｍ－30	1			1
Ｍ－31	1			1
Ｍ－51	1			1
Ｎ－28	3			3
Ｎ－29	1			1
Ｎ－31	2			2
Ｏ－24	2			2
Ｏ－27	1			1

グリッド	出土層 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	合計
Ｏ－28	1			1
Ｐ－27	2			2
Ｐ－31	1			1
Ｐ－32	3			3
Ｐ－33	1			1
Ｑ－25	1			1
Ｑ－27	2			2
Ｑ－28	1			1
Ｑ－32	2			2
Ｑ－33	2			2
ア－38	1			1
Ｂ地区南東部	22			22
Ｂ地区北東部	13			13
Ｂ地区２トレンチ	5			5
Ｂ地区３トレンチ	2		1	3
Ｂ地区４トレンチ	1			1
Ｂ地区Ａトレンチ	3			3
Ｂ地区Ｂトレンチ	1	1		2
Ｂ地区Ｃトレンチ	4			4
Ｂ地区Ｄトレンチ	1			1
Ｂ地区Ｆトレンチ	1			1
不明	26			26
合計	210	1	1	212

め、器面には調整時に鉱物を引きずった痕跡がみられる。外底面は他の資料に比較して凹凸は目だたない。器色は外面淡褐色で、内面は灰白色である。底径の推算は19.4㎝である。C－26グリッドの出土。

⑧蓋

採集された蓋は第62図1・2に示す2点である。

1は直径15.8㎝になるもので、内外面にはマンガン釉が施釉される。E－30グリッドの出土。

2は鍋の蓋と考えられるものである。外面は自然釉で黄色を帯びた黒褐色を呈し、内面の器色は橙褐色である。P－32グリッドの出土。

⑨水注

水注は第62図3・4に示す2点が得られている。

3は口径の推算が11.0㎝になるもので、外面と内面上部は自然釉のため黒褐色を呈する。内面の器色は灰褐色である。C－30グリッドの出土。

4は口径の推算が9.0㎝になるものである。器色は灰褐色を呈する。A－27グリッドの出土。

⑩小壷

第62図5に示す1点が得られている。口縁上端は外側に折り曲げられ、胴部はほぼ直線的である。器色は内面と外面下部は灰褐色で、外面上部は淡橙褐色である。D－33グリッドの出土。

⑪瓶

瓶と考えられるものは第62図6に示す1点が採集されている。口径の推算が3.8㎝になるもので、外面は自然釉のため暗褐色を呈する。内面は水挽き痕を残し、器色は淡い黒褐色である。E－30グリッドの出土。

⑫皿

5点が採集され、第62図7～11に示した。

7～9は平底になるものである。7は全形の窺えるもので、口縁部はわずかに外反し、胴上部と胴下部で明瞭な稜を形成する。口径推算9.4㎝、底径推算4.0㎝、高さ2.5㎝である。B地区北東部の出土。

8は底径の推算が5.2㎝になるものである。器色は内面褐色、外面は黒褐色と自然釉で褐色を呈するところがある。F－30グリッドの出土。

9は底径の推算が3.8㎝になるもので、外面に器面調整時の水挽き痕を残す。器色は外面灰褐色、内面は自然釉のため黄色を帯びた褐色を呈する。

10・11は高台を有するものである。10は内外面に黄色を帯びる自然釉のみられるもので、底径は推算5.8㎝である。表採資料である。

11は比較的大きい皿の底部資料と考えられるもので、外面から高台の外側は暗褐色の自然釉が見られる。内面は無釉で、器色は橙褐色である。表採資料。

⑬納骨器

今回の調査で厨子甕の破片が80点採集された。城間遺跡内に墓は認められないものの、本遺跡の西側の石灰岩台地斜面には城間古墓群が位置し、また、戦前において城間古墓群を含む西側一帯は墓域であることから、土地造成等により遺跡内に入ってきたものであろう。

第27表　納骨器部位別出土状況

部位	口縁部	胴部	底部	蓋	合計
個数	2	72	2	4	80

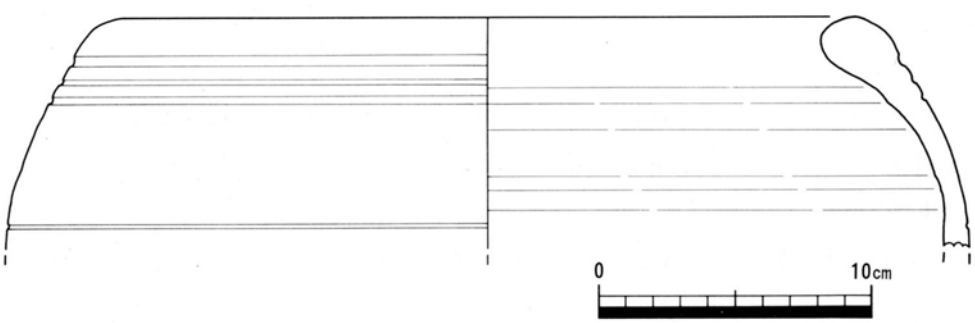
部位別に出土資料をみると、甕形厨子甕の口縁部２点、甕形厨子甕の蓋４点、胴部資料72点、底部資料２点である。比較的保存の良い甕形厨子甕の口縁部と蓋３点を第47・48図に図示し、略述することにする。

第47図に示したものは口径の推算が27.0㎝になる甕形厨子甕で、ボージャーと称されるものである。口縁部の上部は玉縁状に肥厚させる。口縁部の外面には３条の凹線文が施され、胴上部にも凹線文が施文される。内面の上部には製作時の粘土帯の継目が確認できる。器色は外面褐色、内面灰褐色を呈する。M－27グリッドの出土。

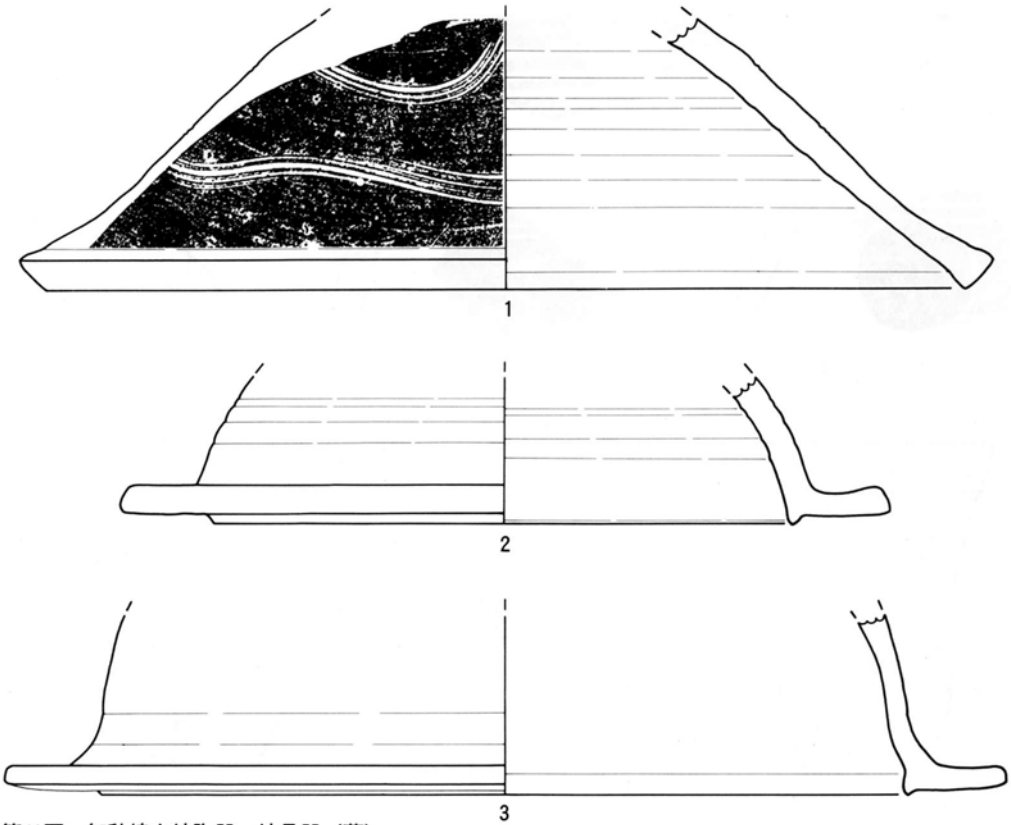
第48図１はいわゆる「ボージャー」と呼称される甕形厨子甕の蓋で、外面に３本単位のクシ描きの波状文が施される。器色は外面暗褐色、内面茶褐色を呈する。O－26グリッドの出土。

２・３はマンガン掛け甕形厨子甕の蓋である。２は内径16.6㎝を測るもので、外面にマンガン釉が施釉される。鍔の下側は自然釉のため褐色で、内面は茶褐色を呈する。鍔の下側及び内面に銘書は認められない。G－37グリッドの出土。

３も外面にマンガン釉の施釉されるもので、銘書はみられない。鍔部分の内径は23.6㎝を測る。器色は鍔の下部が淡黄褐色、内面が茶褐色を呈する。G－37グリッドの出土。



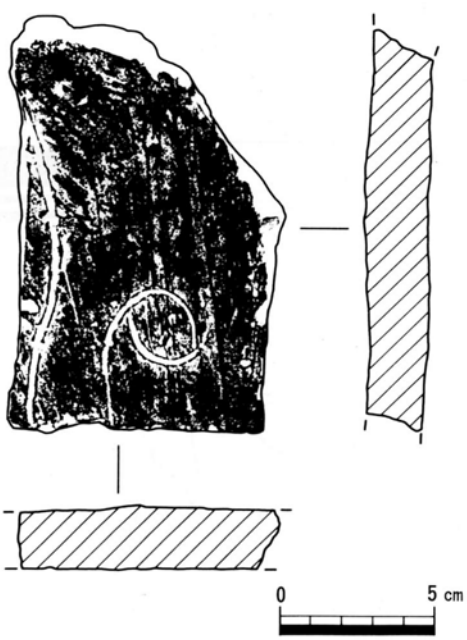
第47図　無釉焼締め陶器　納骨器（口縁部）



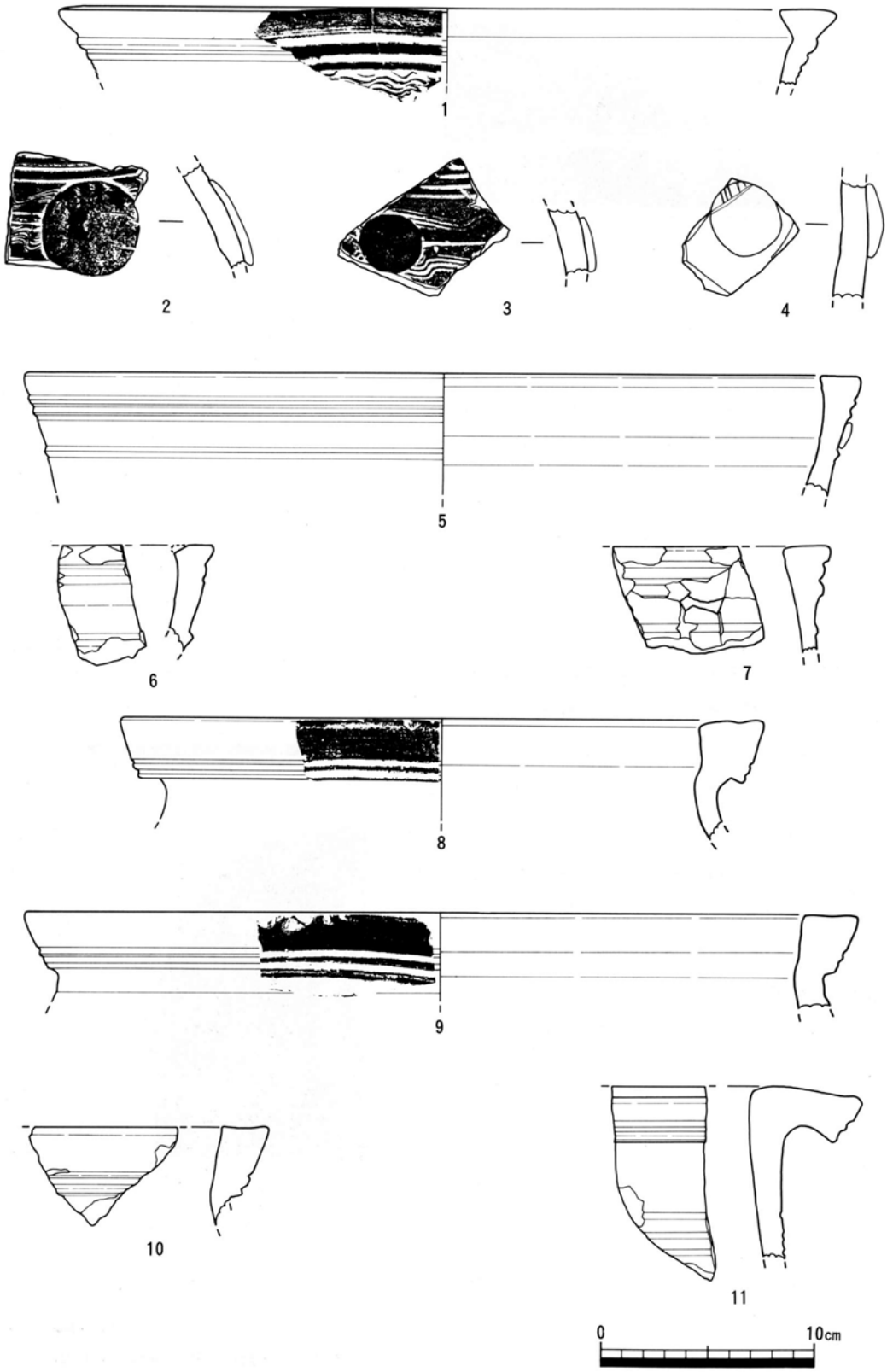
第48図　無釉焼き締陶器　納骨器（蓋）

⑭その他

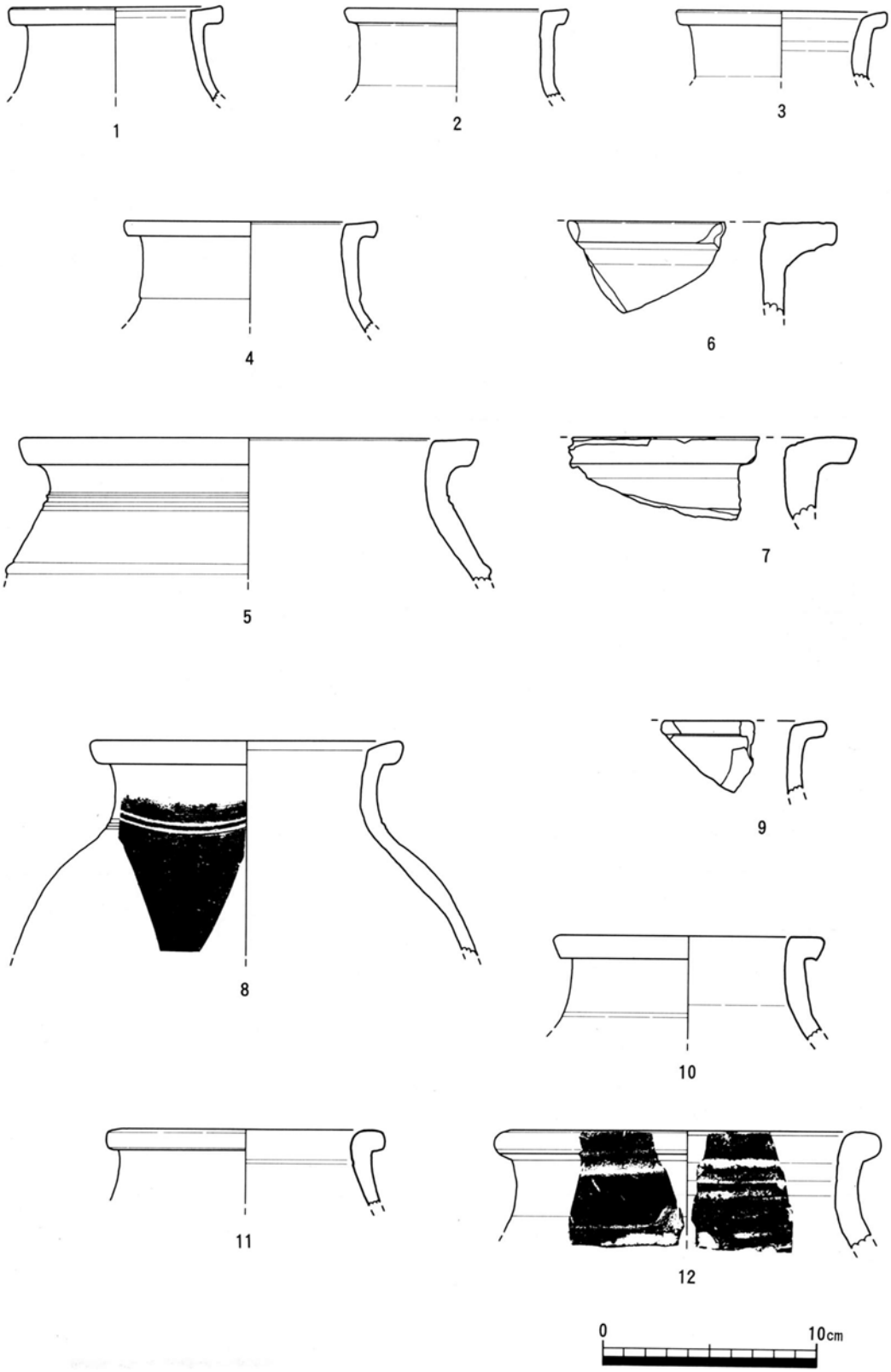
器物以外の無釉焼き締めによる陶製品で、第49図に示す磚状の製品が１点得られている。素地に籾殻を混和材として混入している。内外面とも、水挽き調整されるが、その際に籾殻を引きずった痕跡を残す。表面の下部に円文、左側には沈線が描かれる。器色は明橙色を呈する。R－25グリッドの出土。



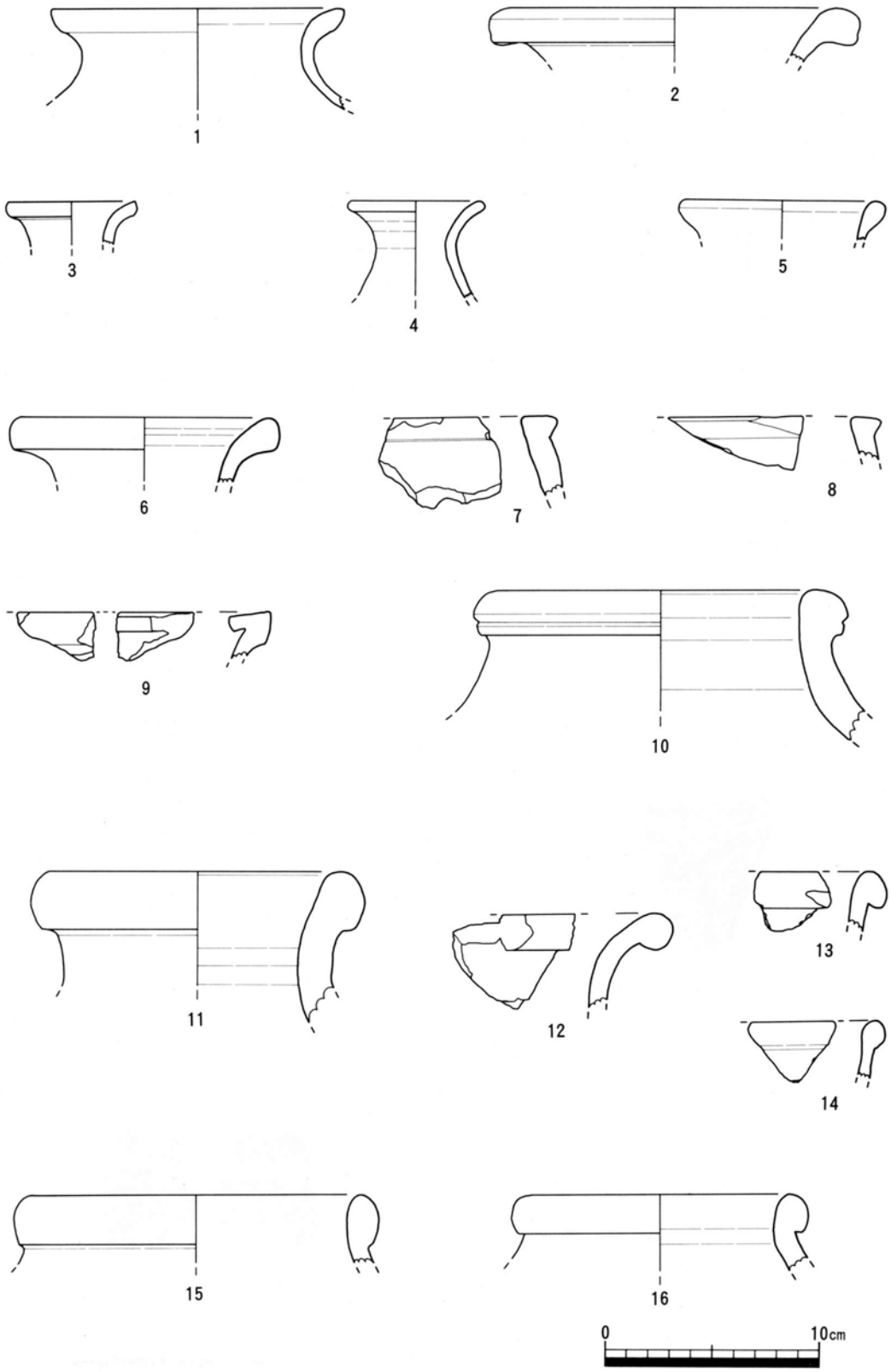
第49図　無釉焼き締め陶器（その他）



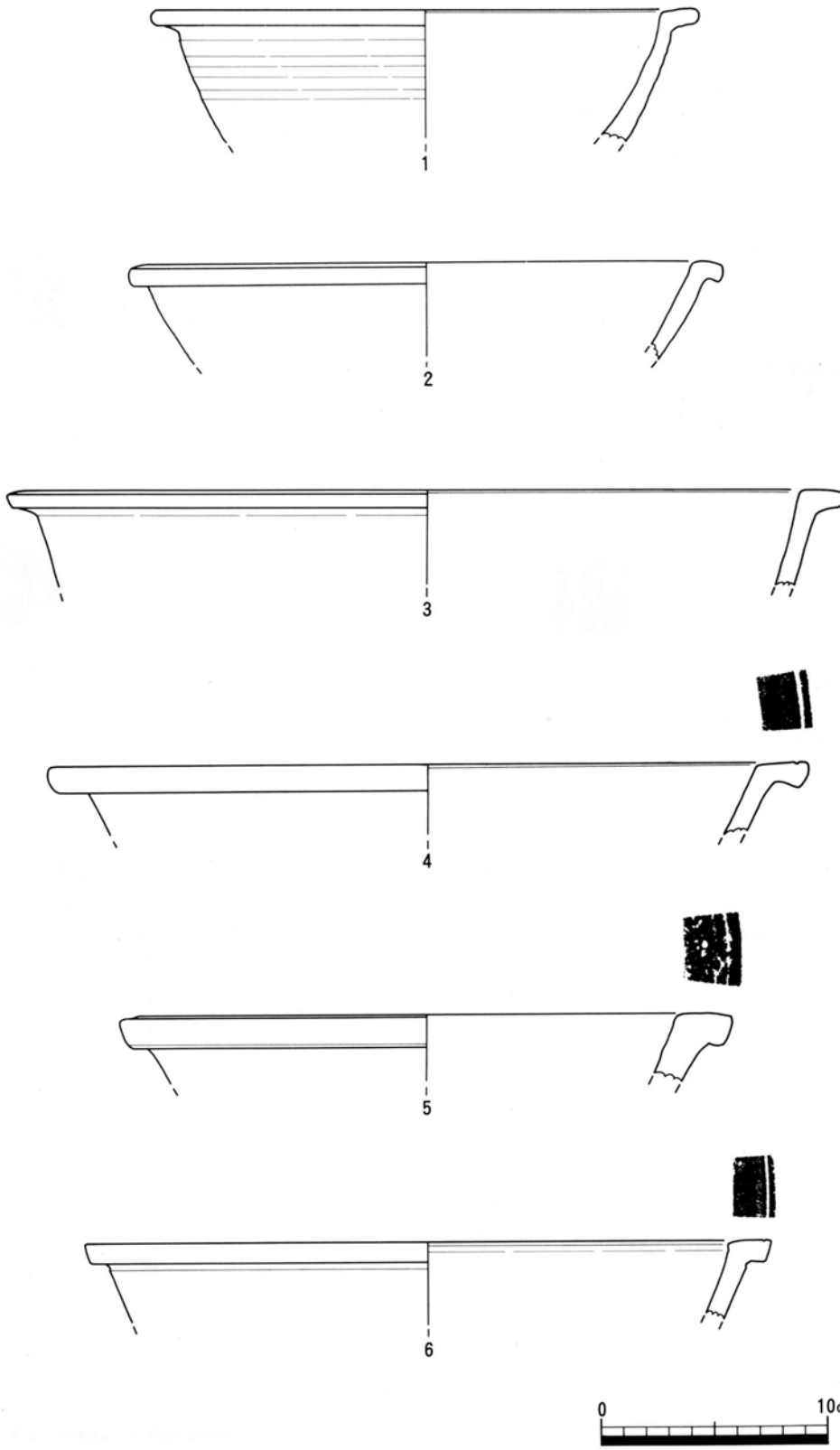
第50図　無釉焼き締め陶器（甕形）



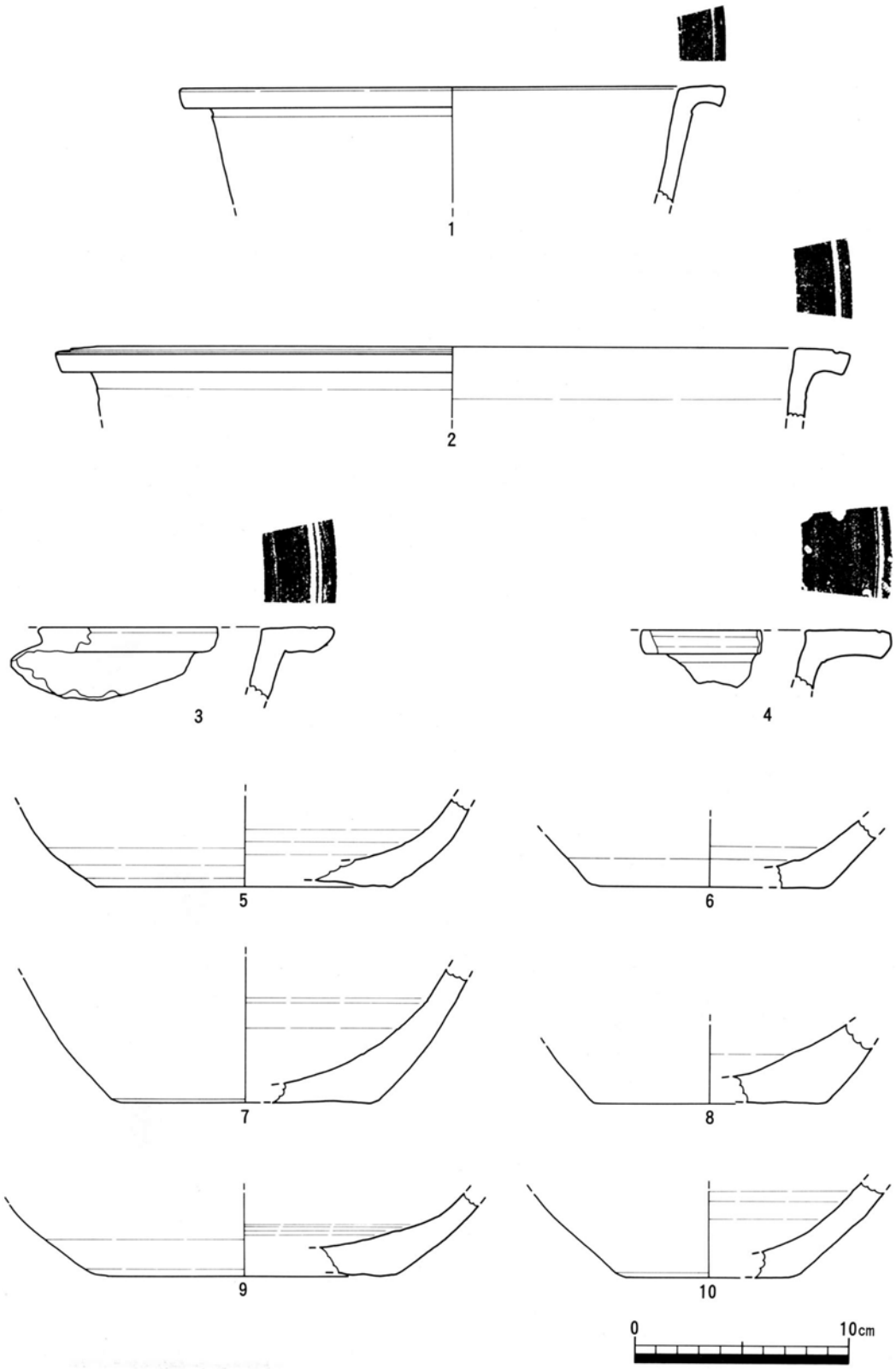
第51図　無釉焼締め陶器（壺形）



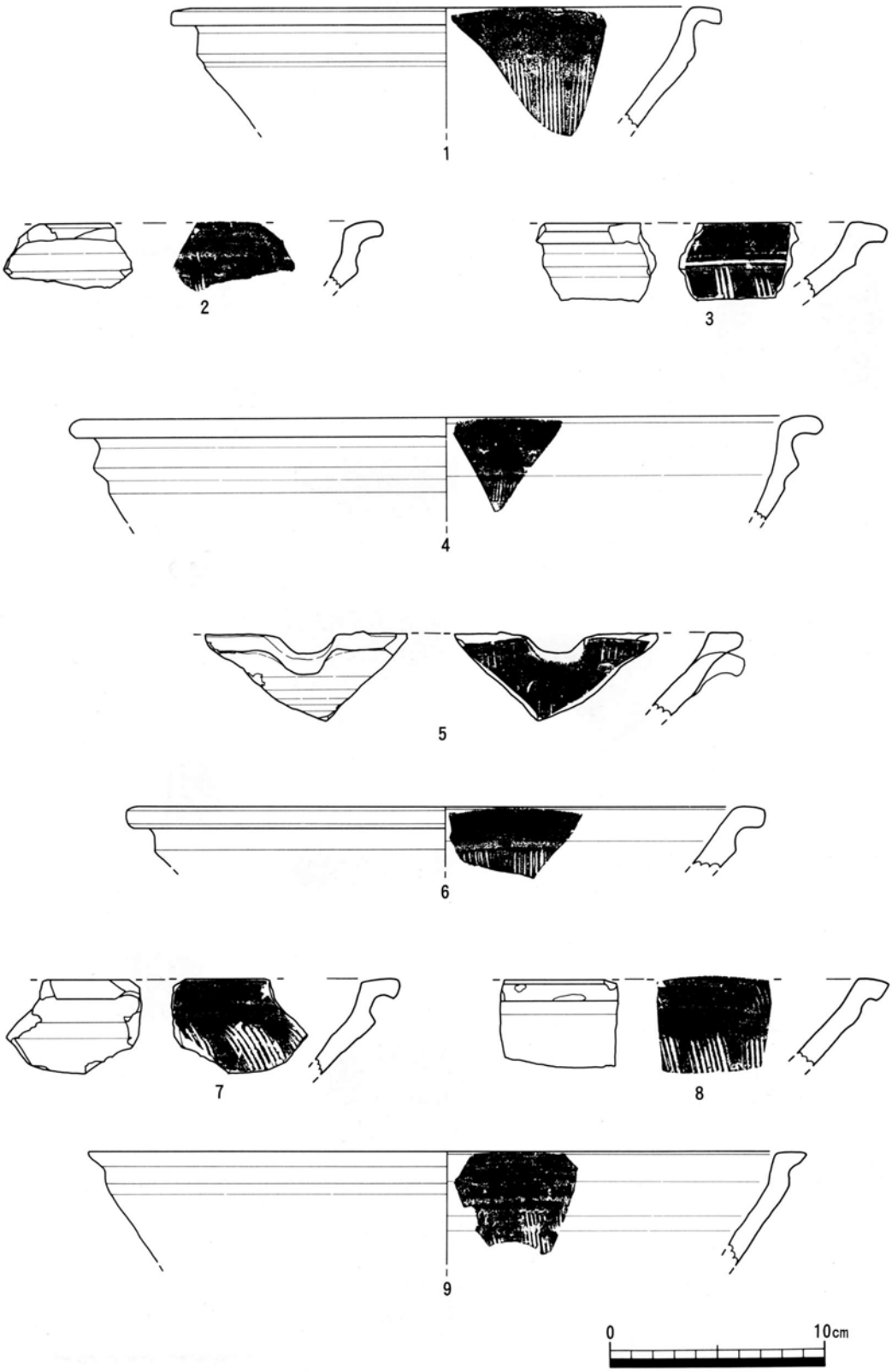
第52図　無釉焼締め陶器（壺形）



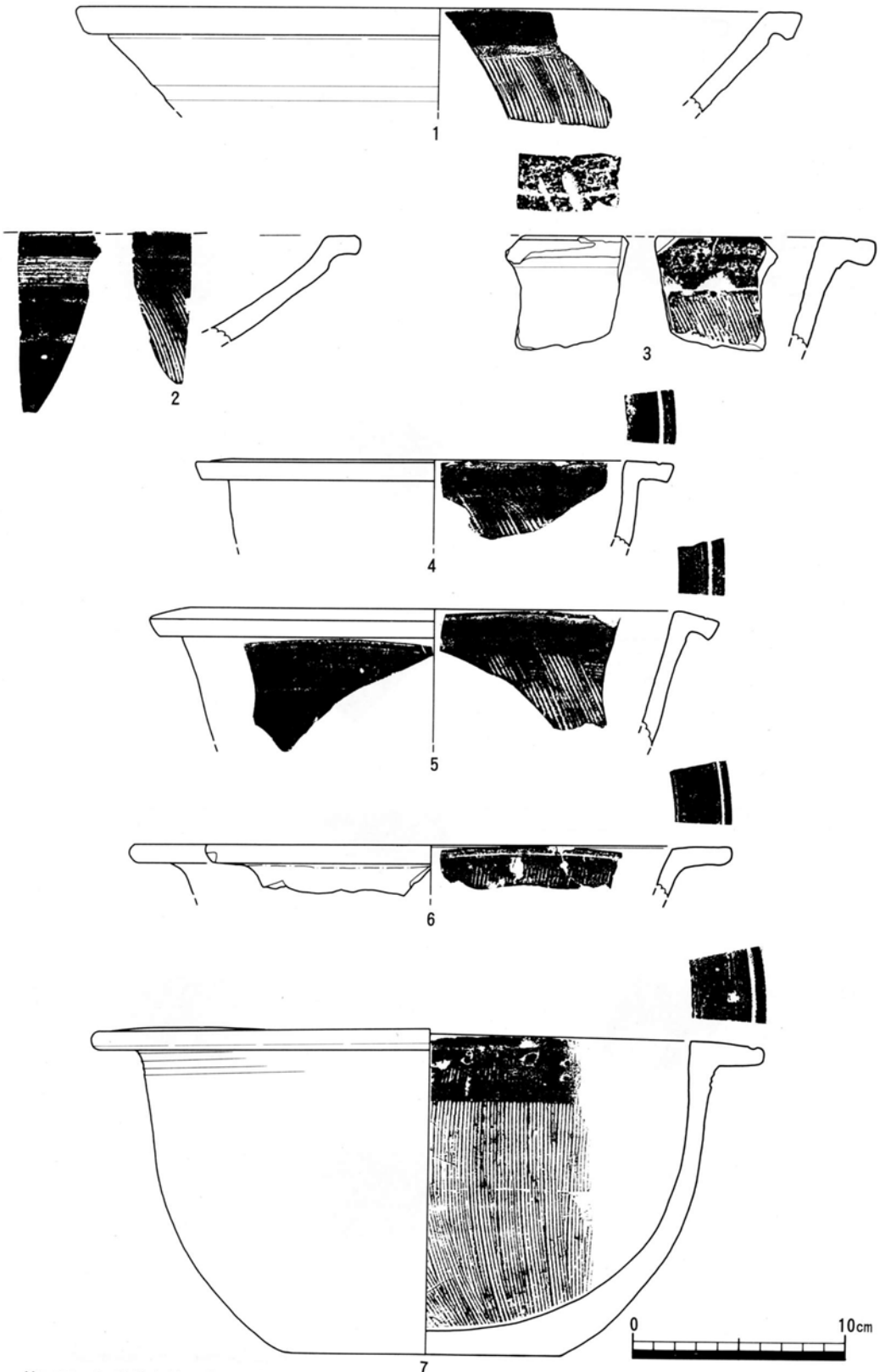
第53図　無釉焼き締め陶器（鉢形）



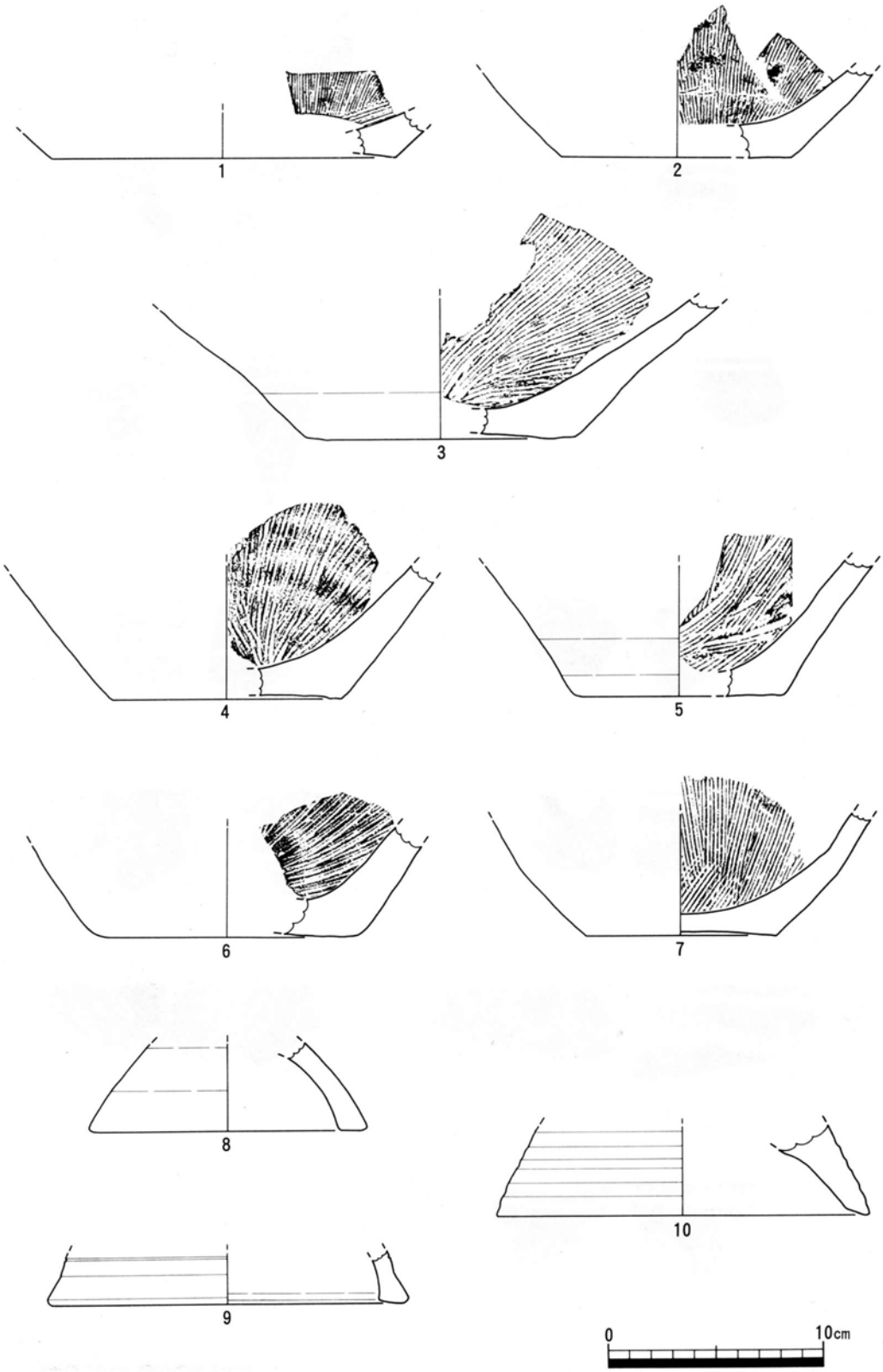
第54図　無釉焼き締め陶器（鉢形）



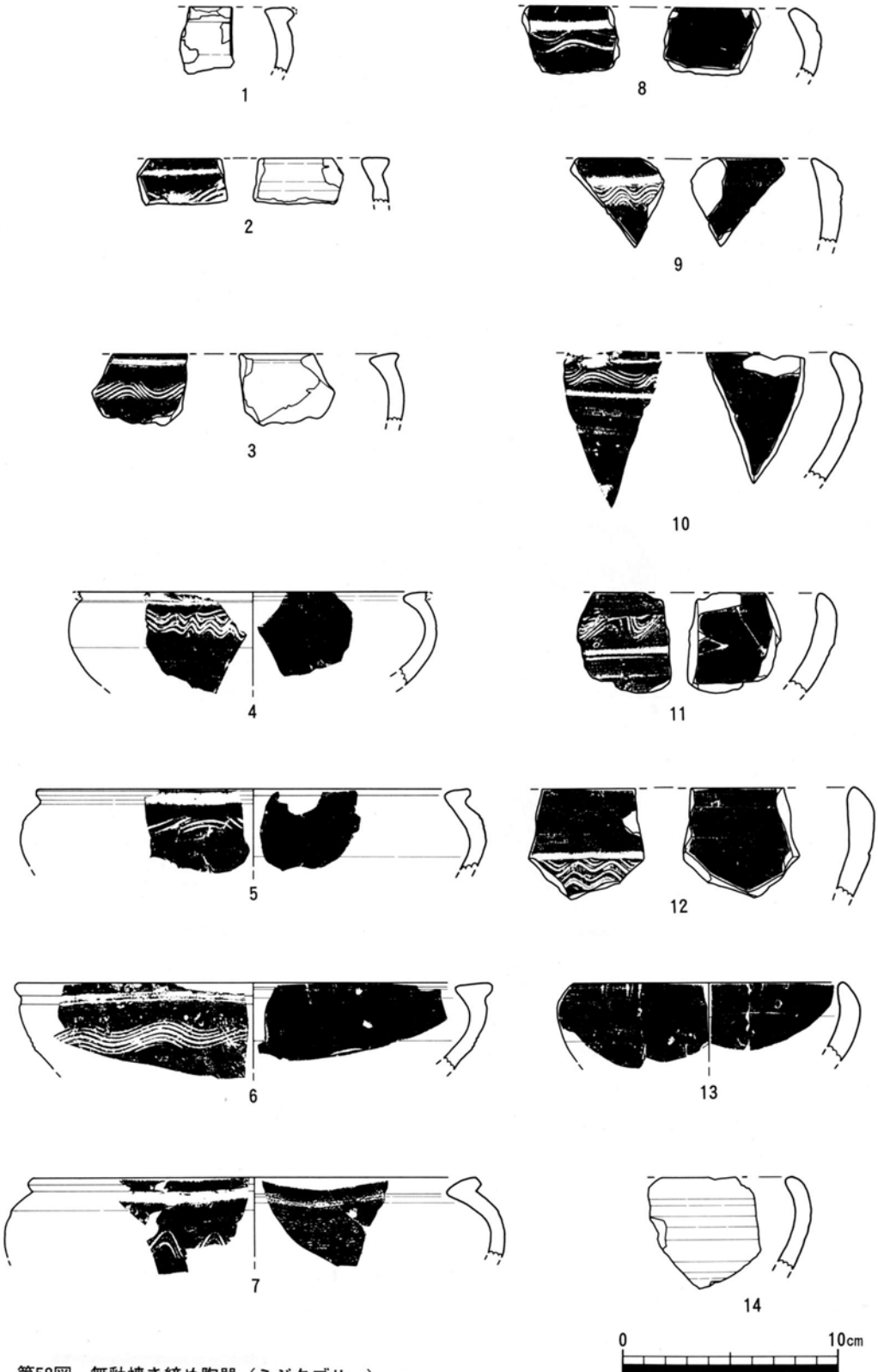
第55図　無釉焼き締め陶器（摺鉢）



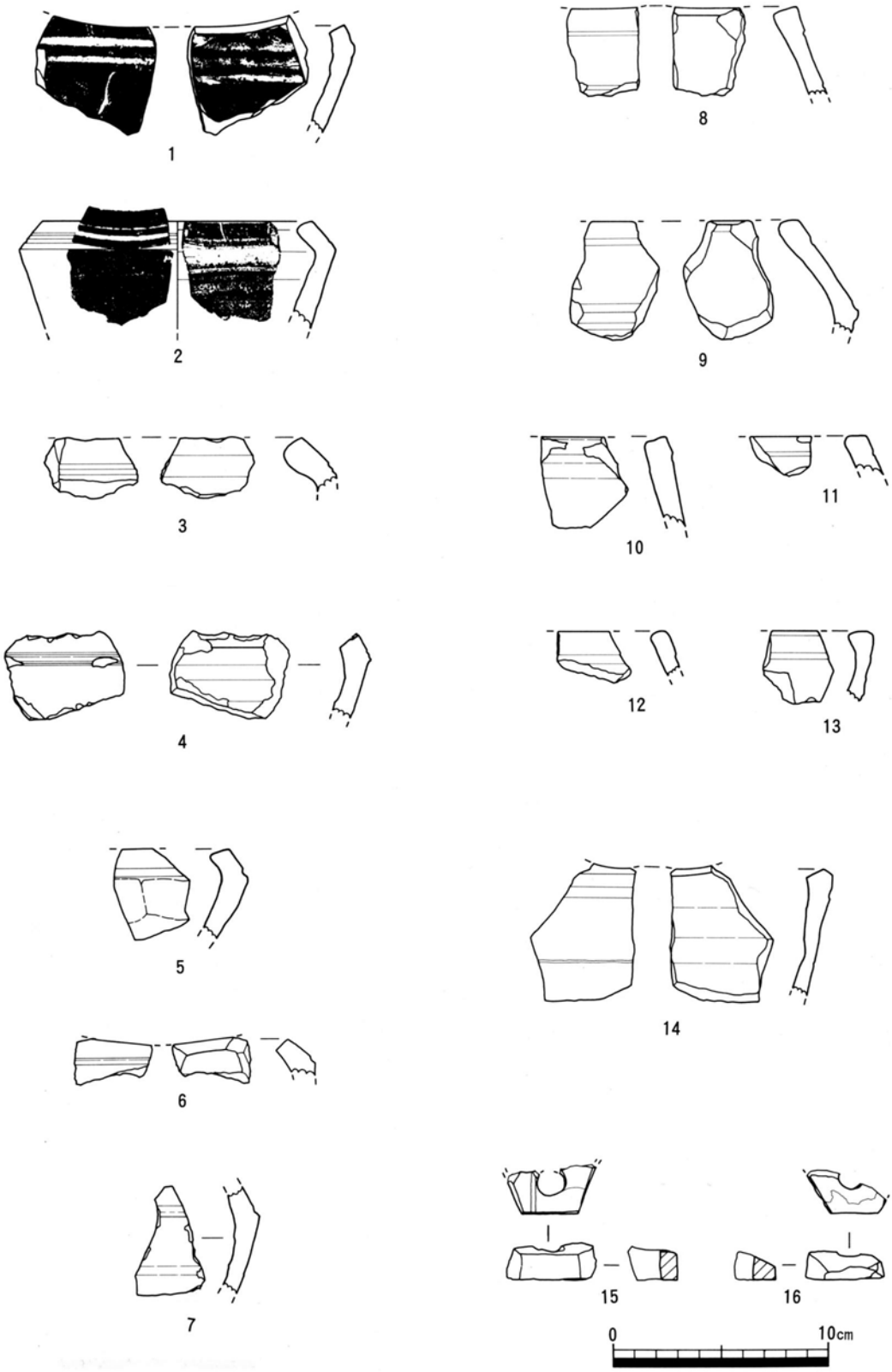
第56図　無釉焼き締め陶器（摺鉢）



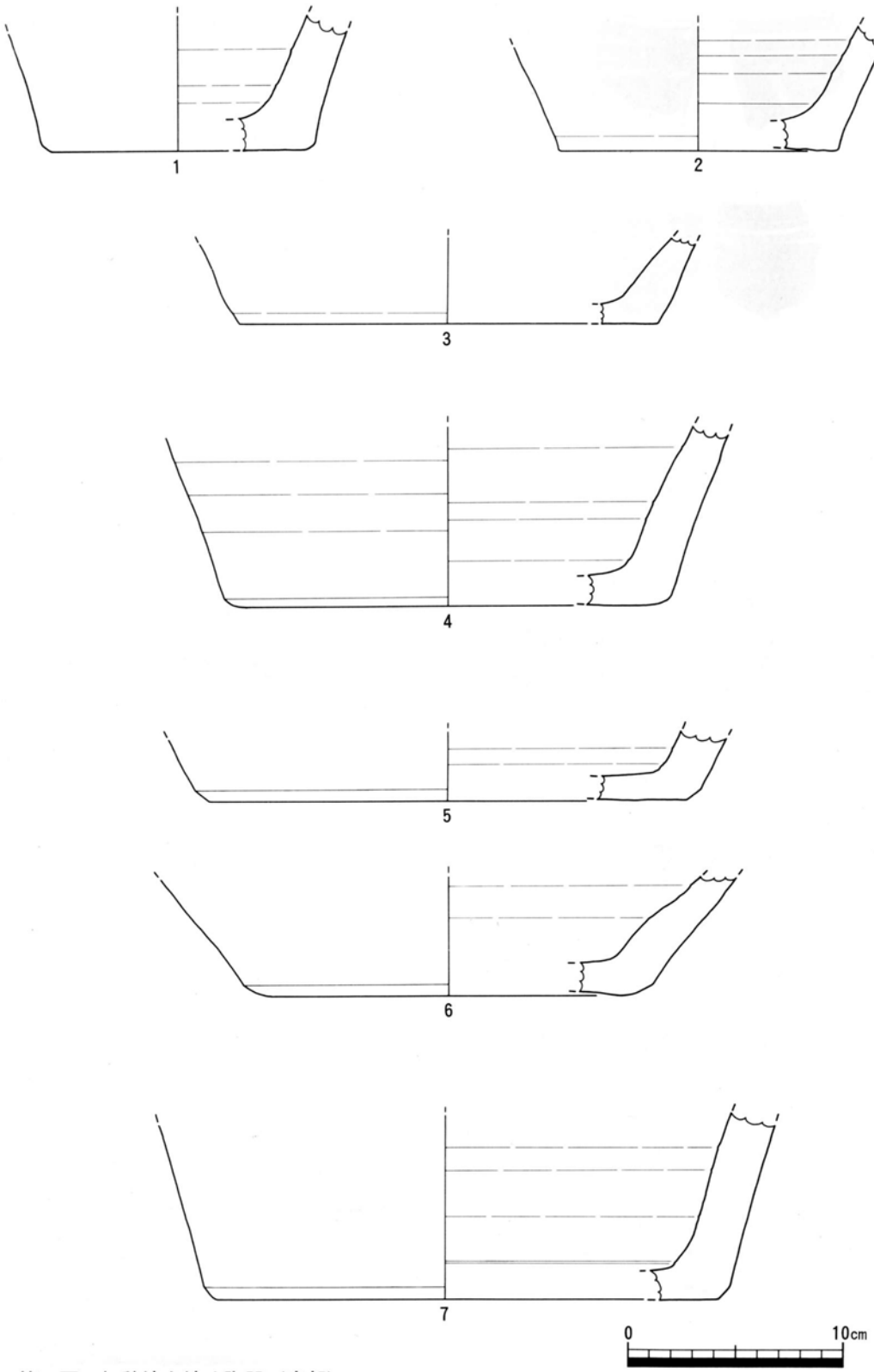
第57図　無釉焼き締め陶器（摺鉢）



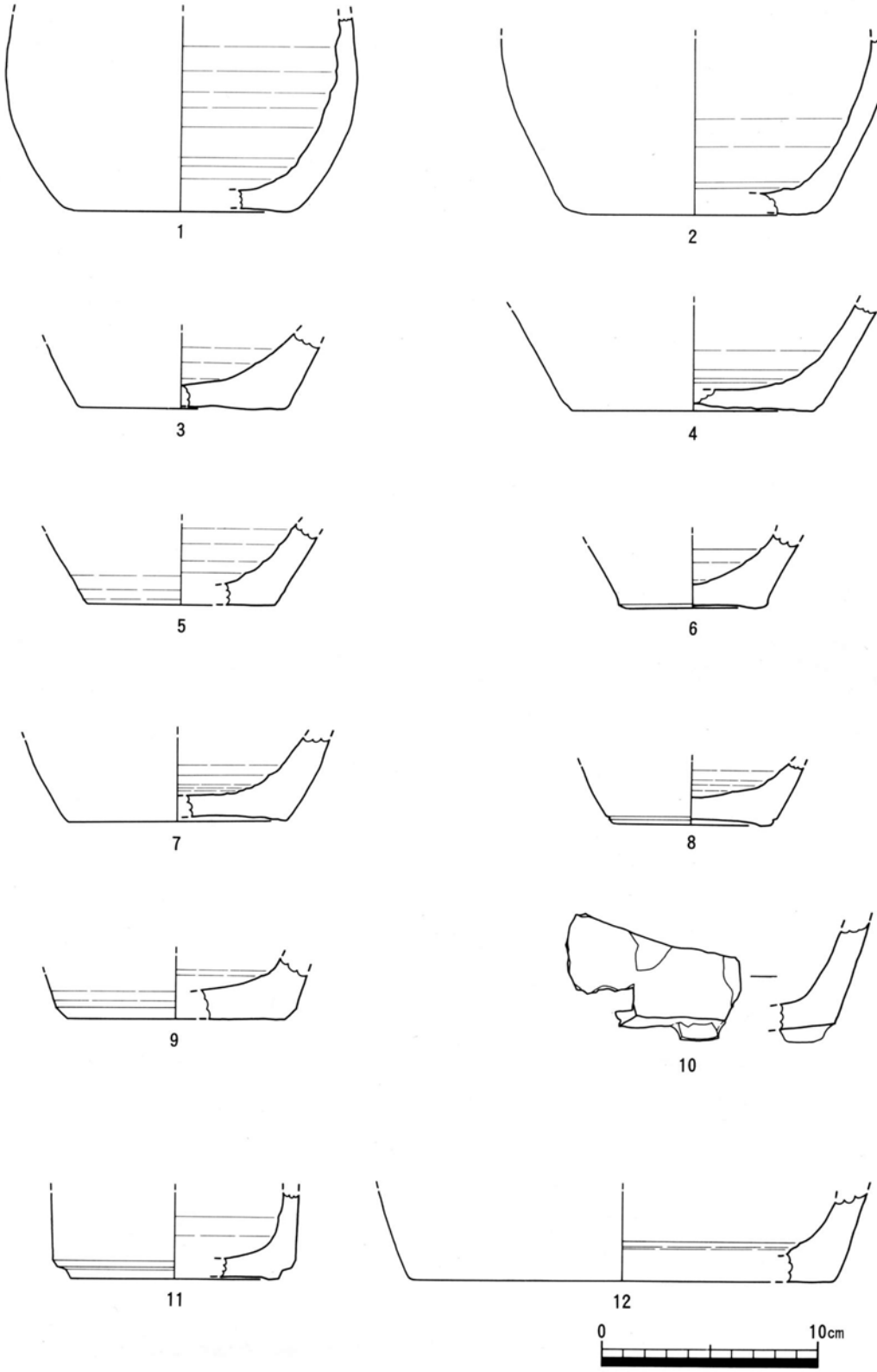
第58図　無釉焼き締め陶器（ミジクブサー）



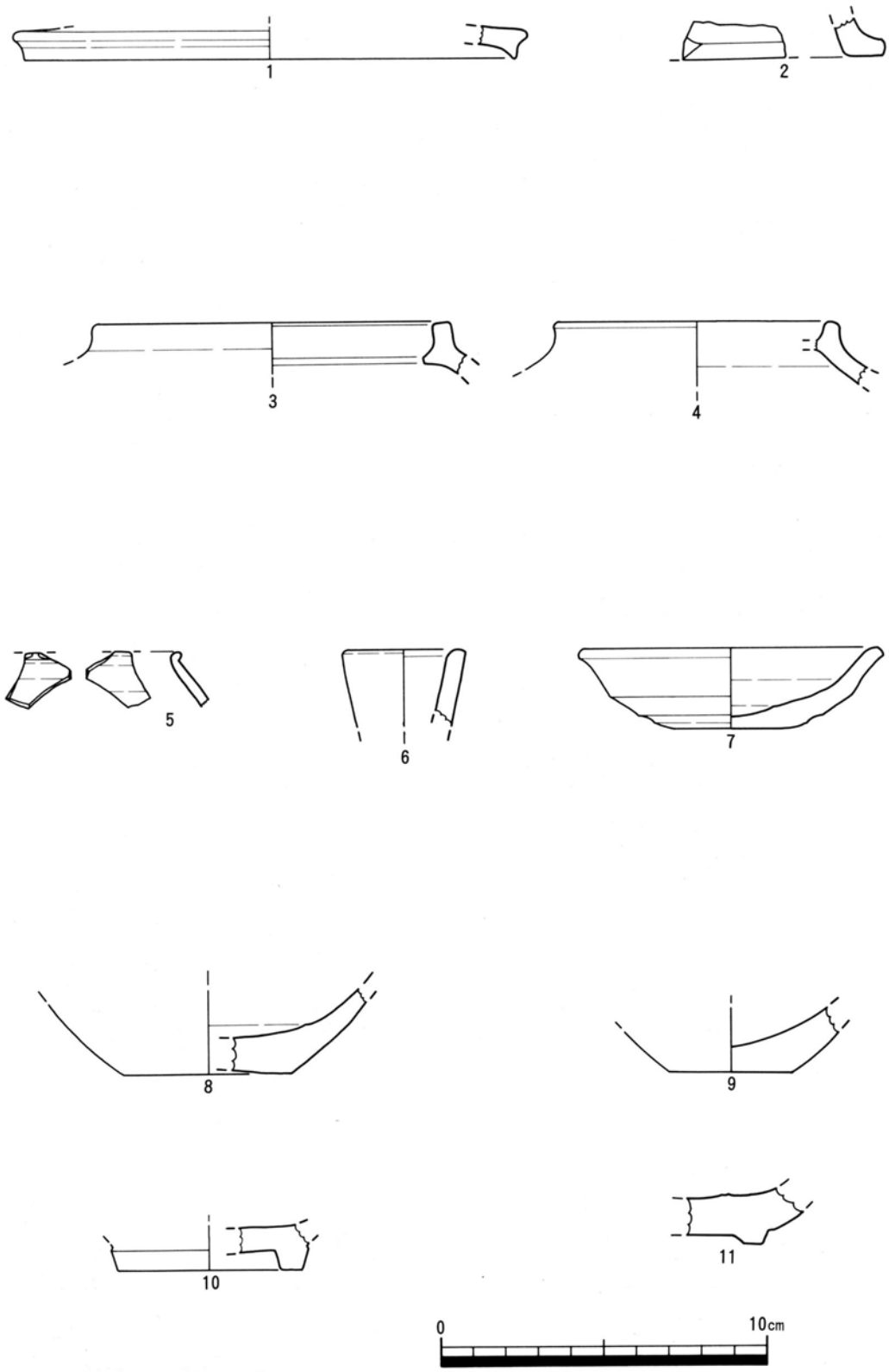
第59図　無釉焼き締め陶器（火炉）



第60図　無釉焼き締め陶器（底部）



第61図　無釉焼き締め陶器（底部）



第62図　無釉焼き締め陶器（蓋１・２，水注３・４，小壺５，瓶６，皿７～11）

10　軟質陶器

ここで報告する資料は、那覇市壺屋で「アカムヌー」（註１）と呼ばれる焼物の一群で、県内の発掘調査報告書においては従来、「陶質土器」の名称で扱われているものである。本報告書では本土で呼ばれる「陶質土器」（註２）と混同を避けるため、「軟質陶器」の名称で紹介する。

軟質陶器は、胎土は精選され細かく、成形はほとんどろくろ引きで、焼成は窯を使用、器色は橙褐色を基調とするのが一般的な特徴といえよう。

今回出土した資料について、胎土および混入物の観察をおこなった結果、概ね次の４種が認められた。

Ａ：胎土は精選され細かい。器面の手触りはざらざらするものが多く、中には手に胎土粉末が付くものもある。混入物は微細で、うんも、石英、赤色粒などがみられる。

Ｂ：胎土はＡに類似するが、胎土混入物にさらに籾がらが加わる点で特徴を異にする。

Ｃ：胎土は泥胎質で、Ａ・Ｂにみられるような器面のざらつきや、胎土粉末の指への付着はない。混入物はＢと類似する。

Ｄ：胎土はＡに類似するが、粗い石英粒を多量混入する点が特徴である。

上記４種のうち最も多いのはＡで、軟質陶器の主流となっている。籾がらの含まれるＢ・Ｃは僅少で、大型の製品に限られている。Ｄは底部資料１点のみの出土であった。

器種には鍋、浅鉢、鉢、壺、注口、皿、蓋などが認められる。そのほとんどが小破片で、全形の窺えるものは少ない。器種別の出土状況は第28表に示した。以下、器種別に記述するが、実測図については代表的な資料のみを掲載した。

第28表　軟質陶器器種別出土表

器種／部位	鍋	浅鉢	鉢	壺	注口	皿	蓋	器種不明	計
口縁部	230	53	72	9		1	33	98	496
胴部				1	17			2,189	2,207
底部								336	336
把手	38		26		20			1	85
注ぎ口					21				21
計	268	53	98	10	58	1	33	2,624	3,145

①鍋

鍋形に分類可能なものは口縁部資料のみで、全形の窺えるものは得られていない。豊見城村の伊良波西遺跡出土資料（註３）や、本部町にある沖縄館の収蔵品（註４）をみると、鍋形は底部は丸底で、胴部はやや膨らみをもち、口縁部は「く」の字状に屈折する器形を有する。口縁外面には粘土紐を半円状にまげてつくられた把手が一対つくようである。本遺跡の資料もこれらとほぼ同様の器形が考えられる。

今回出土した口縁部資料について、口縁内面（蓋受け部）の形状に着目すると、下記の３種類が認められた。なお、鍋形の胎土はすべて上記分類のＡに属する。

Ⅰ類：蓋受け部が平坦ないしゆるやかな凸面を呈するもの。

Ⅱ類：蓋受け部がゆるやかな凹面を呈するもの。

Ⅲ類：蓋受け部は平坦で、口縁端部はつまみあげたように上位へ突出するもの。

Ⅰ類

第63図１は蓋受け部がゆるやかな凸面を呈するものである。同部の幅は短く、外面には把手がみられる。口縁の屈折が比較的弱いため、把手はほぼ水平となる。器色は橙褐色だが、蓋受け部の途中から器内面にかけては赤褐色に変色している。口径は推算で16㎝。Ａ－34グリッド出土。

２は蓋受け部が平坦なものである。残存部から察すると、胴部の膨らみは弱くなるもようである。口縁端部は媒けて灰褐色を呈する。口径は推算18.8㎝。Ａ－34グリッドの出土。

Ⅱ類

３・４に示すものである。蓋受け部の湾曲は４はやや強く、３は微弱である。３・４ともに外面には把手がみられ、いずれの場合にも口縁外面と把手に媒けた部分が見受けられる。口径は３が推算23.4㎝、４が推算23.6㎝である。３はＫ－29グリッド、４はＣ－29グリッドの出土。

Ⅲ類

５・６の資料である。口縁端部の上位への突出は５は強く、６は微弱なものである。６の外面には把手の破損部が残る。現存資料からすると、６は胴の膨らみが弱くなる様子である。口径は推算可能な６についてみると21.2㎝を測る。５はＡ－34グリッド、６はＯ－31グリッドより出土。

②浅　鉢

沖縄地方の方言で「ミジクブサー」と呼ばれるもので、手水鉢の一種である。

今回得られたものは、すべて口縁部のみの資料で、いずれも内彎の器形を示す。内彎の状況をみると、概ね次の２種類に分けられる。

Ⅰ類：口縁部が屈折するかのように強い内彎を示すもの。

Ⅱ類：胴上部から口縁部へスムーズに移行し、口縁部はゆるやかな内彎を示すもの。さらに

口縁端部や口唇部の形状によって、それぞれ２種類に細分される。

ａ：口縁端部には特別な成形はみられず、口唇部は舌状か丸みを帯びる。

ｂ：口縁端部は外面へ肥厚させ、口唇部は平坦かつ幅広く成形する。

浅鉢には有文と無文がある。有文資料についてみると、文様は沈線文と波状文がみられ、それぞれが単独で描かれるものと、両者の組合せによって構成されるものがある。波状文は櫛描きによるもので、数条を一組としている。文様を施す部位は口縁上部に限られるようである。

胎土はすべて前記分類のＡ。以下、図示した浅鉢の資料について器形分類別に記述する。

第29表　浅鉢の口縁形状と文様別の出土状況

口縁器形＼文様							不明	計
Ⅰ類	a	4		12			13	29
	b		1				1	2
Ⅱ類	a		1	1	1	4		7
	b		1					1
不明				1			13	14
計		4	3	14	1	4	27	53

Ⅰ類ａ

第63図７は一条の沈線を口縁上部に囲繞させるものである。口縁部はわずかに膨らみを有し、口唇は舌状を呈する。口径は推算20㎝。Ｃ－38グリッドの出土。

８は口縁上部に５条一組の波状文を施し、その上位に１本の沈線を横走させるものである。波状文の下端はなで消される。口縁端部はわずかに膨らみ、口唇はやや丸みを帯びる。口径は推算17㎝。Ｃ－27グリッドの出土。

Ⅰ類ｂ

９は５条一組の波状文が施される資料である。口縁端部を三角形状に肥厚させ、口唇は水平に幅広く成形する。口唇部の幅は1.2㎝。Ｂ－28グリッドの出土。

Ⅱ類ａ

10は７条一組の波状文が描かれるものであるが、波状文の上端はなで消される。口縁部の内彎は弱く直口に近い形状を示す。口唇部は尖る。表採資料。

11は口縁上部に波状文を施し、その上位に１本の横位沈線を繞らせる資料である。波状文は４ないし６条を一組とするようだが、器面の保持が悪く判然としない。Ｂ地区北東部から出土した。

12は２本の沈線を口縁部に繞らし、その間を波状文で埋めるものである。小破片のため、波状文の明確な条数は判然としないが、少なくとも４条は確認できる。口縁部の内彎は微弱で、直口に近い。口唇部は舌状を呈する。Ｋ－29グリッドの出土。

13は無文の浅鉢である。内外面に成形時のろくろ回転痕が観察される。口唇部は舌状を呈する。Ｂ地区４トレンチ撹乱の出土。

Ⅱ類ｂ

14は８条一組の波状文が施される資料であるが、波状文は上下端がそれぞれなで消される。

口縁部の内彎は弱い。口縁端部は外面へ微弱に肥厚させ、口唇部は水平に幅広く成形する。口唇部の幅は1.6㎝。K－29グリッドの出土。

③鉢

全形の知り得るものは出土していない。口縁部資料でみる限り、鉢形の器形や大きさにはバラエティーがあり、下記の6種類がみられた。これらは火炉、あるいは火鉢などが考えられる。

Ⅰ類：口縁部がゆるやかに内彎する器形。

Ⅱ類：口縁部が内側へ屈折する器形。

Ⅲ類：口縁部が外反を示す器形。

Ⅳ類：胴上部から口縁部にかけてほぼ直立する器形。

Ⅴ類：他の資料に比べ大型で胴上部から口縁部にかけて内傾する器形。

Ⅵ類：他の資料に比べ大型で胴部から口縁部にかけて花鉢状に開く器形。

以下、上記の順に記述する。

Ⅰ類

この種の器形は、糸満市の阿波根古島遺跡で全形の窺える資料が得られている（註5）。実測図からみると、底部は高台を有し、胴部は膨らみをもち、口縁部は内彎する器形を示しており、外面には一対の把手がつくようである。本遺跡の資料も基本的にこのような形状を示すものとみられる。胎土はすべて前記分類のAに属する。

第64図1は口縁内面に突起を有するものである。突起は上面観が三角形状を呈し、先端部は平坦に仕上げている。口縁端部はわずかに膨らみをもつ。突起先端と口縁内面に媒けて黒ずんだ部分がみられる。口径は推算15.6㎝。B地区南東部より出土。

2は外面に帯状の白線が観察される例である。白線は大部分が消えかかり不鮮明であるが、横方向に数本施されていたようである。口縁内面には突起を有するが、突起の先端部は欠ける。口縁部はわずかに膨らみ、口唇部は舌状を呈する。口縁部と突起には媒けた部分がみられる。口径は推算15.2㎝。M－28グリッドの出土。

3は推算口径が11.8㎝の小型の資料である。内面の突起も1・2に比べ小さく、華奢なつくりである。口唇部は丸みを帯びる。K－29グリッド出土。

4は外面に有孔の把手をもつもので、胴の最大径の部位につく。把手は大部分が破損しているが、これまでの出土例からすると、5に示すような上面観が台形状のやや重厚なつくりのものとみられる。口縁端部は微弱に膨らみ、口唇部は舌状。口唇部に媒けた箇所がみられる。表採資料である。5はA－34グリッド出土。

Ⅱ類

屈折する部位によって2種に細分される。胎土は前記分類Aに含まれる。

a：口縁上部で屈折するもの（屈折部が短い）。

b：胴上部で屈折するもの（屈折部が長い）。

aの資料は6・7に示すものである。この種の製品も阿波根古島遺跡で良好な資料が出土している（註5）。図をみると、底部は平底で、やや開きながらストレートに立ち上がり、口縁部は内側へ屈折する器形を示す。

6は外面に有孔の把手をもつ資料で、口縁部よりわずかに下がった部位につく。把手は1／3ほどしか残ってないが、重厚で、上面からみると方形か、あるいは台形状のものとみられる。口縁外面（傾斜部）には沈線が1本横走する。口縁部内面から口唇部にかけて媒けた部分が見受けられる。口径は推算14㎝。客土から採取した。

7も有孔の把手をもつもので、口縁部の傾斜に合わせて付けられている。重厚な把手で、わずかに破損しているが、上面観は台形状を呈するものとみられる。口縁外面の傾斜部には2本の沈線が繞る。B－25グリッドの出土。

bの資料は8に示すものである。口縁部にはゆるやかなカーブをえがく大きな抉りを設ける。破損のため明確ではないが、抉りは半円状を呈していたものと思われる。口縁外面をみると上下端にそれぞれ横位の沈線が認められる。沈線は上位に1本、下位に2本ほどこされるが、後者は不明瞭である。口唇部は媒けて黒ずんでいる。口径は推算15.4㎝。F－30グリッドの出土。

Ⅲ類

9に示す口縁部資料で、現存部からすると胴部は膨らみのある器形が想定される。口縁内面につの状突起をもち、突起上端はわずかに欠ける。突起の直下には器面を貫通する孔が認められる。胎土は前記分類のAに属する。器色は内外面とも灰褐色。表採品である。

Ⅳ類

10の資料である。本標品は胴上部から口縁部にかけて、ほぼ直立する器形であるが、口縁部においてはわずかなくびれを示す。くびれと胴上部との境は微弱な段をなす。口縁上端は膨らみを有し、口唇部は丸みを帯びる。内面には突起がつくが、大部分が破損。口唇の一部に煤けた部分がみられる。口径は推算で17.4㎝。胎土は前記分類のA。B地区南東部から検出された。

Ⅴ類

第65図1～3に示すもので、いずれも口縁部が内傾する大型の鉢である。口唇部は幅広くつくられる。

1は推算口径が28㎝を測る資料である。口唇部が内側へ張り出した器形である。胎土は分類のAに属する。C－25グリッド出土。

2は口縁外面に沈線を繞らすものである。沈線は3本認められる。口縁上部は三角形状にわずかに肥厚する。口縁内面から口唇部は一部煤けている。本資料は胎土中に混和材として籾がらを混入する点に特徴がある。胎土分類のCに属する。B地区Eトレンチ撹乱より検出。

3は内面に突起を有する資料である。突起は大きく重厚で、上面観は三角形状を呈する。胎土は分類のA。E－30グリッドの出土。

Ⅵ類

4～7の資料である。口縁部の形態をみると次の2種に大別され、口唇部は前記V類と同様、幅広く成形される。

a：口縁部が三角形に肥厚するもの。

b：口縁部が「L」字状に屈折するもの。

aに属する資料は4～6である。

4は肥厚部の外面がわずかに膨らみ、やや丸みを帯びるものである。口唇部はわずかに内傾し、内器面より内側に張り出している。張り出し部は煤けている。口径は推算25.2㎝。胎土は分類のA。E－30グリッドより出土。

5は大型の資料で、胎土に籾がらを混ぜるものである。内面には重厚な突起を有し、その上面観は台形状を呈する。口唇部は水平に成形される。胎土は分類のB。撹乱部から検出した。

6は肥厚部の下端に段を設ける資料である。口唇部は微妙に内傾し、内側へわずかに張り出している。胎土は分類のA。第7号石列から出土。

bの資料は7に示すものである。内面には重厚な突起を有していたようだが、大部分は欠落している。口唇部は水平に成形され、同部には2本の沈線が施される。胎土中に籾がらを混ぜるもので、胎土分類はC。N－28グリッドの出土。

④壷

4種類の器形が出土している。胎土はすべて前記分類のAである。

第66図1の資料は、胴部の張りが弱く、口縁部は直立するものである。口唇部は平坦に成形される。口径は推算11.8㎝。E－36グリッドより出土。

2は頸部資料である。長頸の壷か、あるいは瓶の可能性もある。内面にはろくろの回転痕が明瞭に観察される。K－29グリッドの出土。

3は張りの強い肩部に、直立する口縁をもつ資料である。上方からみると、口縁部にはゆるいコーナーがみられることから、口縁部は上面観が方形状を呈していたと思われる。厚手で大型の資料である。H－34グリッドの出土。

4・5は球体状の器形が考えられる資料で、微弱な口縁部がつく。2点とも器壁は薄い。口径は推算で4が7.5㎝、5が7.3㎝を測る。4はB地区北東部、5はR－33グリッドの出土。

⑤注　口

第66図6に示す、底部から胴部にかけての資料である。底部は鍋底状で、ゆるやかなカーブを描きながら立ち上がり、途中、胴部において「く」の字状に屈折し、屈折部から胴上部へはわずかな反りをみせながら移行する。この種の製品で、完全形に近い良好な資料が宜野座村教育委員会収蔵品の中にある（註7）。器形をみると、胴上部から上位は、わずかに張り出した肩部へ移行し、直立する口縁部がつく。また、屈折部に接して7に示すような注ぎ口がつき、

その上位（胴上部）には８のような縦長の把手が一対つく。本標品もこれと同様の器形を示していたとみられる。

底部外面には煤が付着し、同内面には石灰分が満面に付着していることから、「やかん」として使用していたことが窺える。屈折部の直径は推算17.4㎝。胎土は前記分類のＡ。６はＢ地区１トレンチ撹乱、７はＣ－31グリッド、８はＫ－29グリッドの出土である。

⑥皿

明らかに皿形といえるものは第66図９の燈明皿１点だけであった。全形の知り得る資料である。底部は平底で、立ち上がり部から口縁部にかけて、ほとんど直線的に開く器形である。口唇部は丸みを帯びる。底面には糸切りの痕跡が明瞭に観察される。口縁端部に煤の付着がみられることから燈明皿と解される。サイズは推算によると口径11.6㎝、底径5.4㎝、器高2.0㎝を測る。胎土は分類のＡ。Ｂ地区北東部の出土。

⑦蓋

蓋は形状の違いにより３種類が認められた。

Ⅰ類：高台状のつまみを有し、つまみの脇からゆるやかなカーブを描きながら口縁部へ移行するもの。

Ⅱ類：内側に「かえし」をつくり、鍔を有するもの。

Ⅲ類：大型の資料で上面観が四角形となるもの。

Ⅰ類

これに属する資料は天地を逆にすると、あるいは皿形とも解されるもので、蓋か、皿か判別が困難である。そこで今回は次のうち、いずれかの特徴を有するものを蓋として扱った。多くは前述した鍋の蓋と推察される。

ａ：つまみが逆「ハ」の字形に開き、指のかかりを易くするための工夫が成されているもの。

ｂ：口唇部に身との摩擦痕が観察されるもの。

ａに含まれる資料は第66図10・11である。

10は復元可能なもので、推算によるとサイズは口径が16.4㎝、つまみの径が5.9㎝、器高が５㎝を測る。外面はろくろ回転痕が明瞭である。Ｇ－30グリッド出土。

11はつまみ部の資料である。つまみ上端は平坦で、かすかに糸切り痕が観察される。つまみの外面から脇にかけては、ヘラ削りによる粗雑な調整が行われている。つまみの径は推算5.6㎝。Ｅ－30グリッドから出土。

ｂの資料は12～14である。

12は復元可能なものである。サイズは推算で口径16.2㎝、つまみの径が5.8㎝、器高が4.5㎝

である。つまみは断面が三角形状を呈する。G－30グリッドの出土。

13・14は口縁部の資料で、14は口唇部の擦れが顕著な例である。口径は13が推算16.2㎝、14は12.8㎝で、後者の場合は他資料に比べ小さなサイズとなっている。13はA－33グリッド、14はK－29グリッドの出土。

Ⅱ類

15～20に示すものである。壷、あるいは注口等の蓋とみられる。

15・16は甲の盛り上がりが顕著で、鍔との境が強く屈折するものである。15は鍔の下面が煤けて灰褐色を呈し、16は内面全体が灰褐色である。また、15の場合、外面に赤色の顔料が施されている。15はN－28グリッド、16はE－30グリッドから出土。

17・18は甲の盛り上がりがゆるやかで、鍔との境にみられる屈折は弱いものである。17はかえしが微弱で、18は鍔の先端がわずかながら下方に曲がる。18はかえしと鍔の先端が煤けている。17はB地区北東部、18はO－28グリッドの出土。

19・20は甲の盛り上がりがなく、鍔との境には屈折がみられないものである。19は甲から鍔までほぼ直線的であるが、20は鍔が微弱な湾曲を示す。かえしはいずれも尖り気味である。20の甲には沈線文がみられる。かえしの径は推算で19が7㎝、20が5.6㎝を測る。19はE－30グリッド、20はB地区北東部から出土。

21は宝珠状のつまみを有するものである。阿波根古島遺跡の出土例（註8）からすると、本類に属する資料とみなされる。K－29グリッド出土。

Ⅲ類

2点出土したうちの1点は屋根瓦を表現した装飾を施すもので、家形厨子甕の蓋とみられる資料である。小破片のため、今回は図示および記述を割愛した。以下、他の1点について略述する。

第67図1は上面観を想定すると、方形ないし長方形が考えられ、全形は家の屋根に似た形状を呈していたと思われる。それからすると本標品も家形厨子甕の蓋の可能性がある。上面は平坦につくられる模様である。器面の保持が悪く凸凹した部分がみられ、内面にはわずかながら煤けて黒ずんだ箇所も見受けられる。胎土は分類のB。O－28グリッド出土。

⑧底部資料

形状の違いにより、次の3種に大別される。

Ⅰ類：高台を有するもの

Ⅱ類：平底のもの

Ⅲ類：丸底のもの

Ⅰ類

第67図2～7の資料である。胎土は分類のAに含まれる。

2・3は高台脇からゆるやかなカーブを描きながら立ち上がるものである。2は外面に帯状の白線が3条観察されるが、ほとんど消えかかり不鮮明。3の内面にはろくろ回転痕がみられる。高台径の推算は2が8.3㎝、3が8.6㎝である。いずれも先述の鉢Ⅰ類の底部とみられる。2はC－29グリッド、3はG－30グリッドの出土。

4・5は高台径が大きく、立ち上がりの開きが強いものである。高台径の推算は4が10.6㎝で、5は14.8㎝を測る。高台は4が低平なつくりであるのに対し、5は重厚で安定感がある。4の畳付には糸切り痕がみられる。いずれもB地区北東部より出土。

6・7は高台を碁笥底状につくるもので、立ち上がりは2点とも直線的である。6は畳付が平坦で、高台径は推算7.6㎝を測る。7は尖り気味の畳付けを有し、外底は段をなす。高台径は推算9.2㎝である。6はB－28グリッド出土。7はA－34グリッドの出土。

Ⅱ類

8～11に示すもので、11は胎土分類のDに属する唯一の資料である。他はすべて分類A。

8・9は立ち上がりがほぼ直線的に開くものである。8は推算底径5.5㎝で、外面には白色の化粧土？が施されている。C－25グリッド出土。9は底径の推算が7.2㎝で、外底は糸切り痕が明瞭。C－29グリッド出土。

10・11は外面下端を斜めに面取りする資料である。立ち上がりの開きは弱く、ほぼ垂直にのびるようである。他資料に比べやや厚手。10は底径の推算が11㎝を測る。10はB地区4トレンチ撹乱、11はB地区南東部より検出された。

Ⅲ類

12・13の資料である。薄手で、2点とも外底には煤が付着する。鍋か、あるいはやかんの底部と考えられる。胎土は分類のA。12はC－30グリッド、13はR－25グリッドの出土。

⑨把　手

把手のみの資料は形態上5種類がみられる。その中の3種類はそれぞれ鍋、鉢Ⅰ・Ⅱ類、注口に付随するもので、すでに紹介したものである。したがって、ここでは他の2種類について記述する。胎土はいずれも分類A。

第67図14は横長で上面観が三日月状を呈する把手である。成形はやや雑で、全体的に薄い。華奢な感じを受ける。中央付近に孔を穿つが、孔から左半部は破損している。器種は鉢か？。K－29グリッドの出土。

15は器内面につく例である。破損のため形状は明確ではないが、現存資料からすると上面観は台形に近いとみられる。直径1.5㎝前後の孔が隣接して2つ施される。重厚で丁寧なつくりである。大型の資料につくものか？。L－29グリッド出土。

⑩器種不明

第68図１・２は脚を有する資料である。２点とも直角に近いコーナー部をつくることから、上面からみると方形か、あるいは長方形などの形状が想定される。ただし、１については一辺が途中でわずかな反りをみせており、別の形状も考えられる。いずれも上面はくぼみ、周囲には幅2.5㎝ほどの平坦な縁を設けており全形は「膳」のような形態が推察される。胎土は分類のＢ。１はＣ－31グリッド、２はＣ－27グリッド出土。

註

１：沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』1983年

２：陶質土器「…日本の須恵器や朝鮮の新羅焼がこれにあたる。…」『図解考古学辞典』水野清一・小林行雄編　1959年

３：豊見城村教育委員会『伊良波西遺跡』豊見城村文化財調査報告書第１集1986年３月

４：沖縄県教育委員会『県内漆器・陶器遺品調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第26集昭和55年３月

５：沖縄県教育委員会『阿波根古島遺跡』沖縄県文化財調査報告書第96集1990年３月

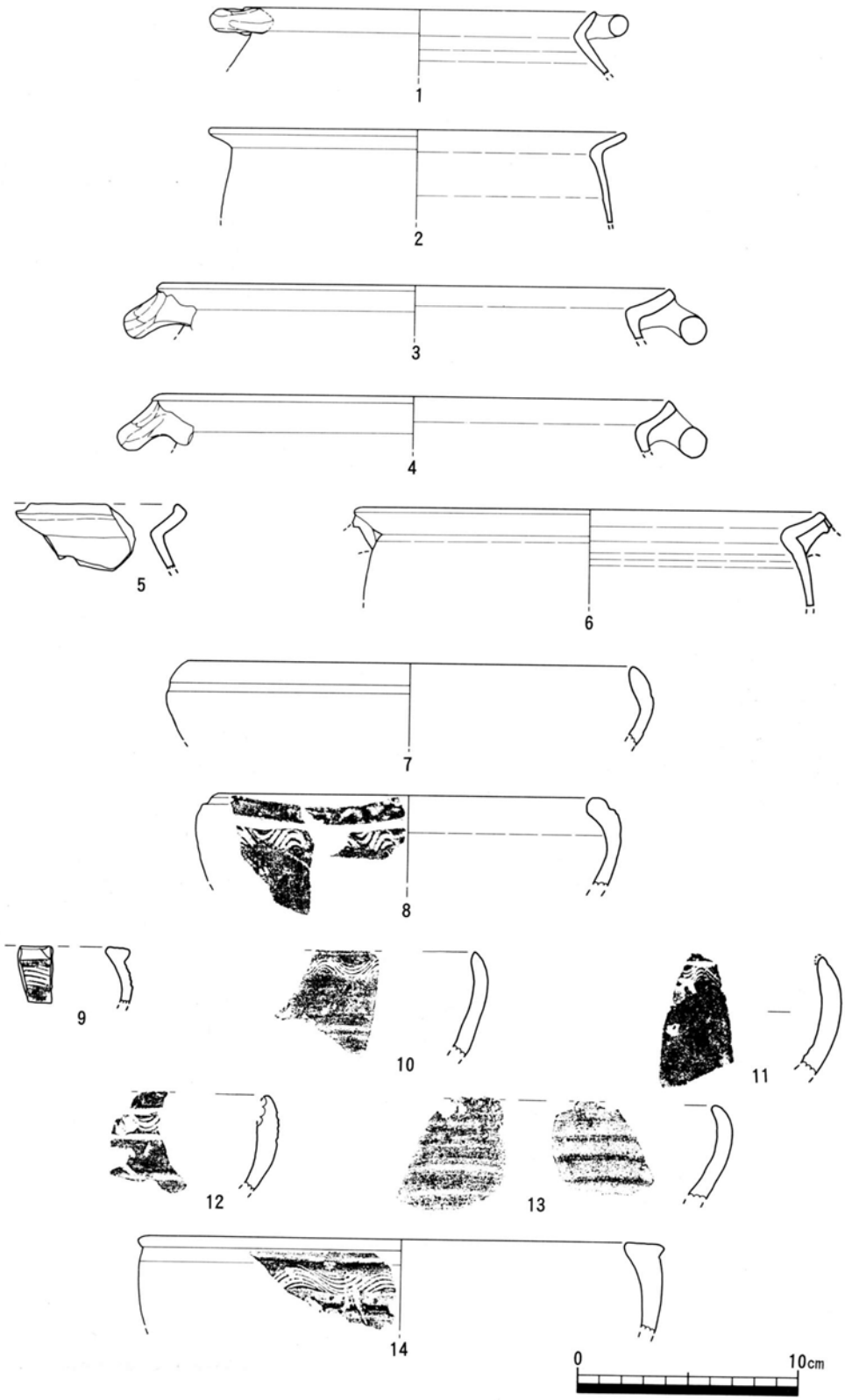
６：註５に同じ

７：宜野座村教育委員会の知名定順氏のご好意により、実見させて頂いた。旧久志村大浦山中で採集した資料という。

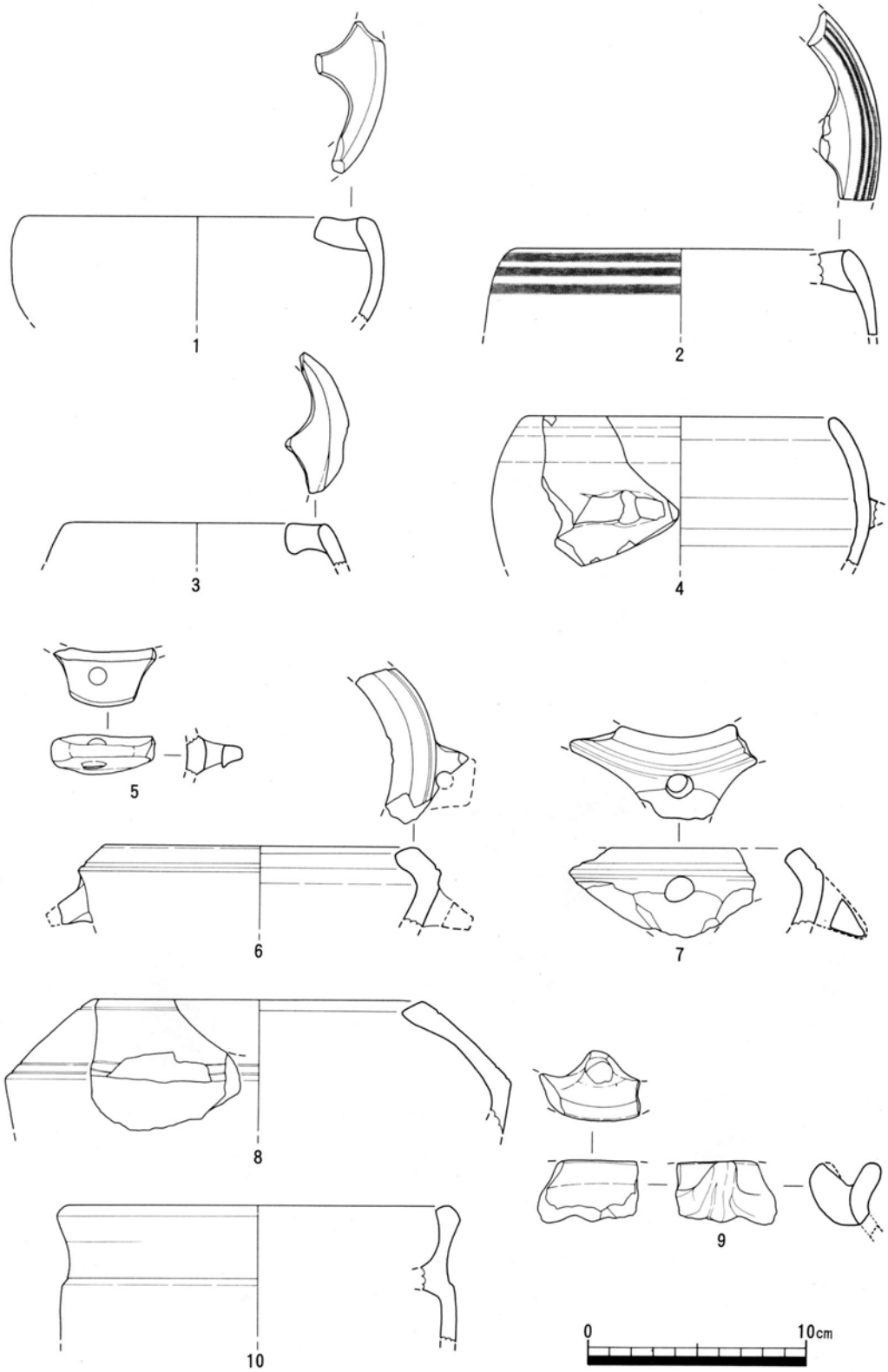
８：註５に同じ

⑪　搬入陶製品

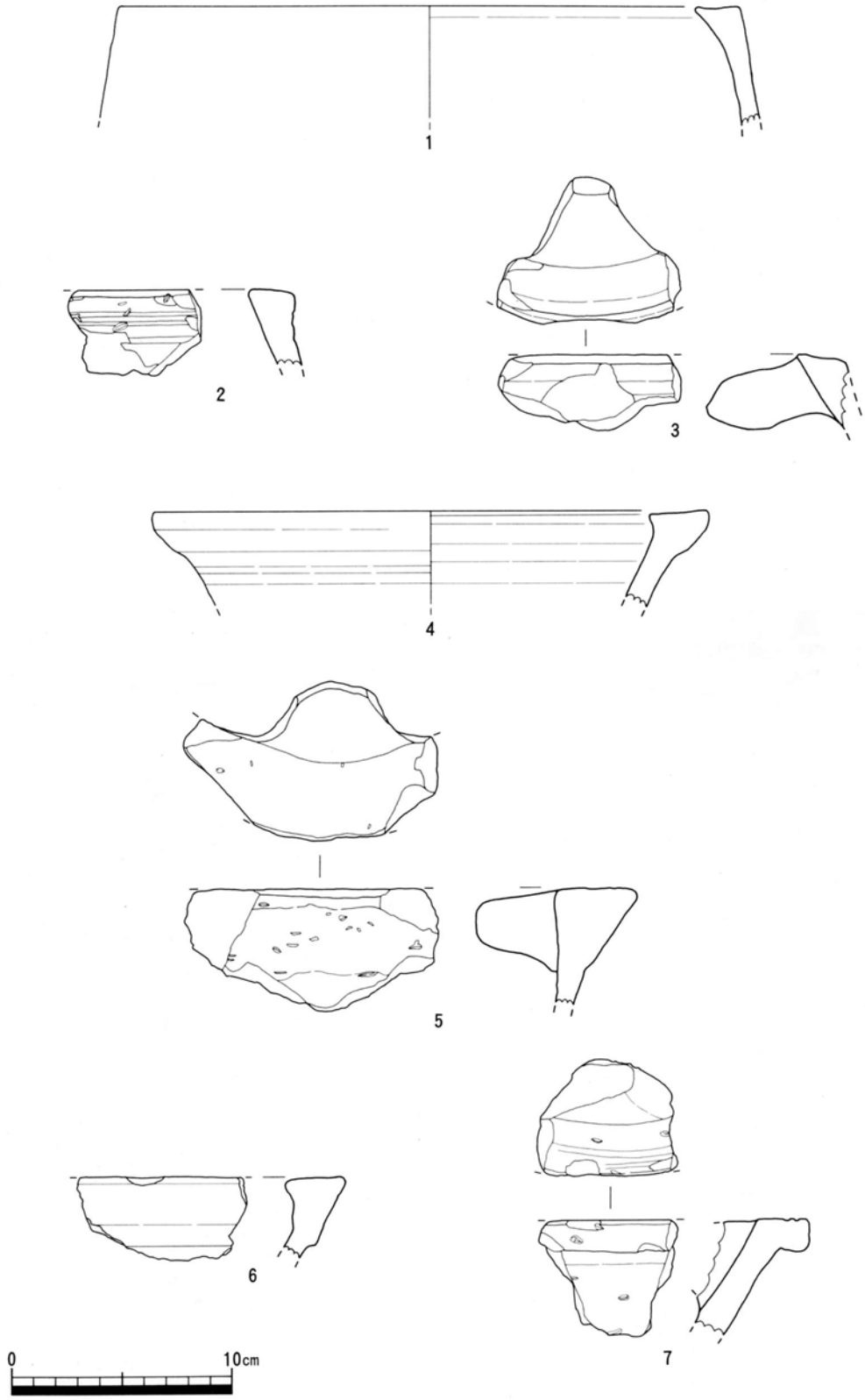
第68図３・４は箱形の無釉陶製品で、しちりんと考えられる資料である。大部分は破損する。側面下端部にアーチ状の抉りを施すことによって、コーナー部に脚をつくりだしている。側面には引戸式の火窓とみられる加工がわずかに認められ、３は引戸の一部と考えられる。３の外面には「…河陶器工商…組合員」の文字スタンプが施されており、本製品の製作地を探る上で有力な資料である。胎土は精選され、石英とみられる白色鉱物と、金色を呈する雲母片が多量混入されるのも本標品の特徴である。高さは約22.5㎝で、器壁の厚さは１㎝強。Ｍ－29グリッド出土。



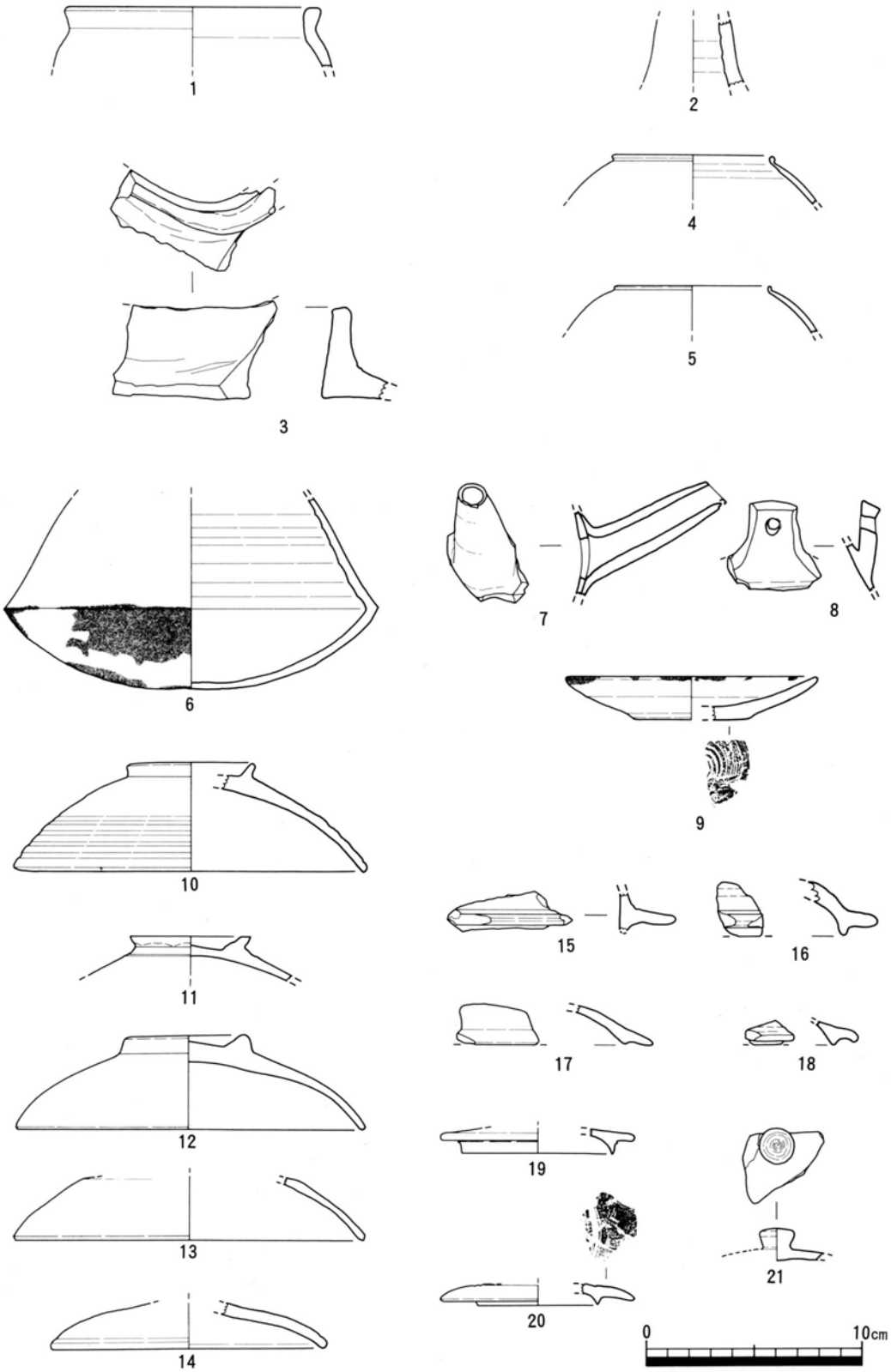
第63図　軟質陶器（1～6鍋，7～14浅鉢）



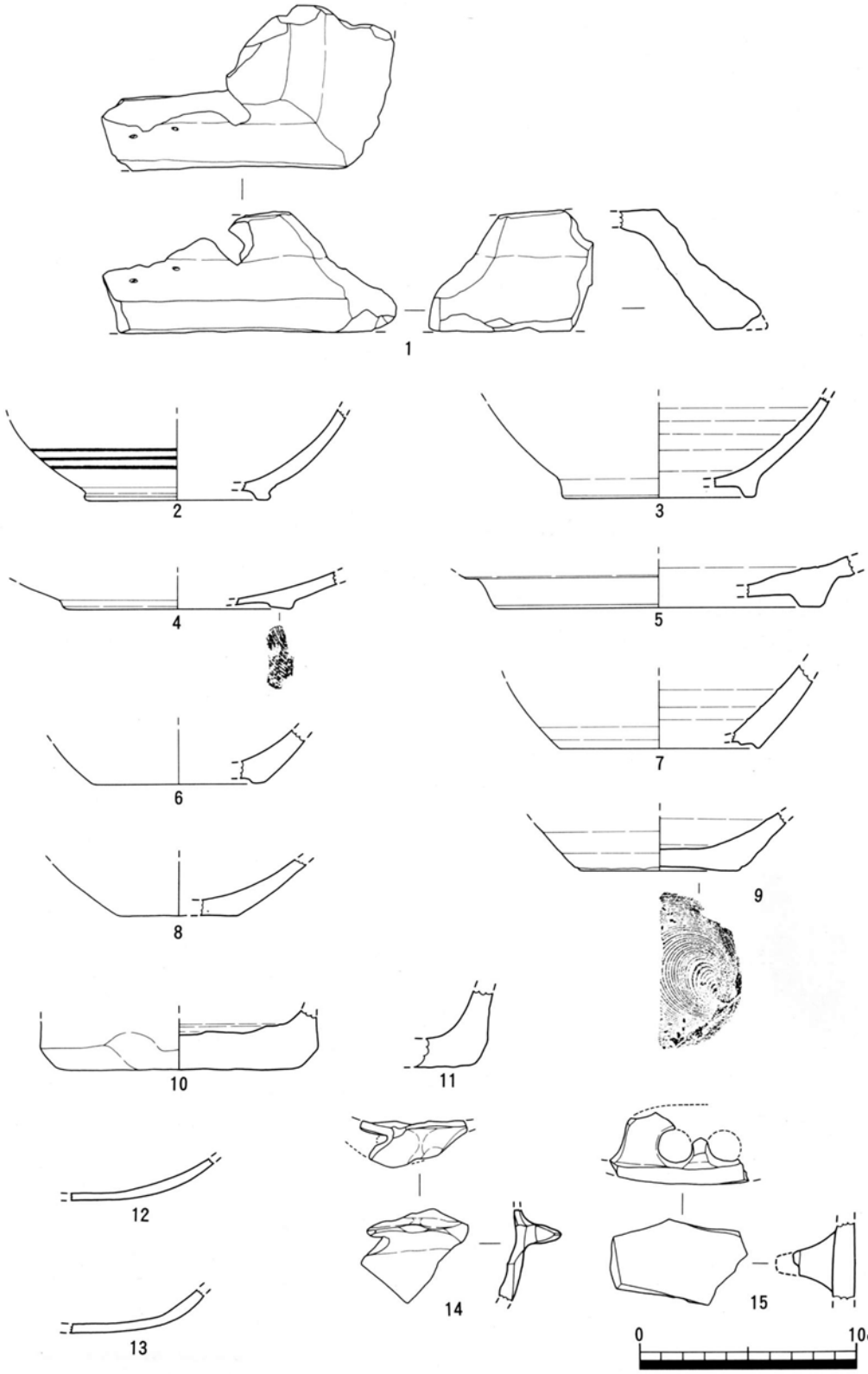
第64図　軟質陶器（鉢）



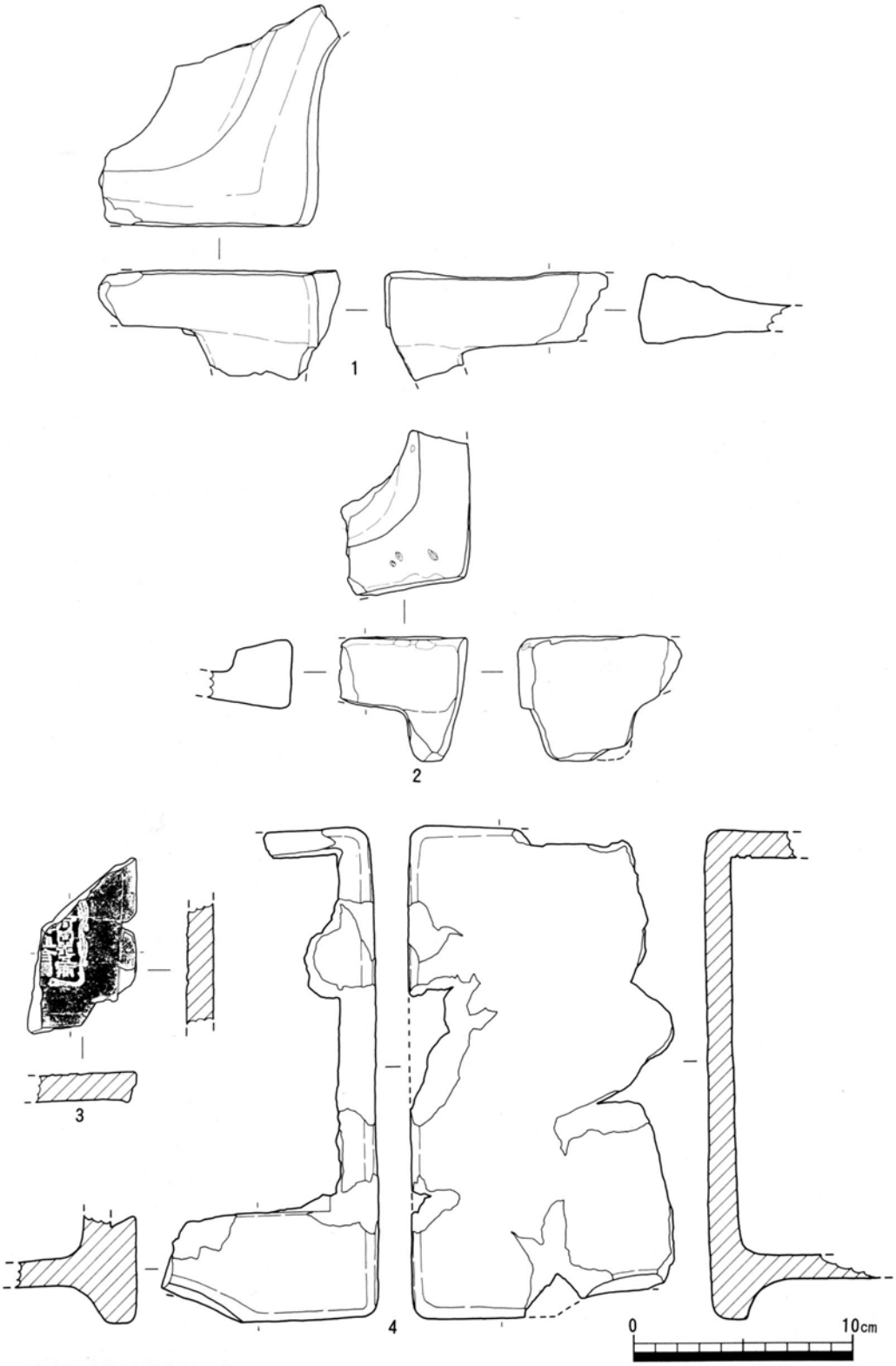
第65図　軟質陶器（鉢）



第66図　軟質陶器（1～5壺，注口，9皿，10～21蓋）



第67図　軟質陶器（1蓋，2～13低部，14・15把手）



第68図　1・2　軟質陶器（器種不明），3・4　移入陶製品

⑫　円盤状製品

陶磁器や瓦などの破片を、打割によって円盤状に加工した製品である。本種製品については玩具・遊具との見方がなされている（註）。今回の調査では236点検出された。

素材についてみると中国産・本土産の磁器や、上焼・荒焼・軟質陶器・赤瓦などの沖縄製陶器のほか、わずか１点の出土ではあるがガラス製が得られている。最も多く出土しているのは荒焼を利用したもので、全体の66.9％を占め、上焼の13.1％がこれに次ぐ。

器物を素材とする資料について、その使用部位をみると磁器、陶器と限らず胴部破片を利用するものが圧倒的に多い（88％）。逆に少ないのは口縁部利用のもので、わずか２点（いずれも本土産近代磁器）である。底部利用のものは上焼に多い。

加工はほとんどが打割によるものであるが、前述のガラス製は丁寧な押圧剥離によって成形される。

打割の方法は外面から打ち欠くのが主流で、中にはさらに内面からも調整を加えるものなどもある。打割を内面から主に行う例は稀である。底部利用の場合には高台脇を打ち欠くものが一般的で、さらに高台を除去し、外底を平にする例もみられる。一方、ある程度、打割を行った後、最終的に研磨によって円形状に仕上げるものもあり、これらは瓦や軟質陶器といった比較的軟質の素材に限って見受けられる。瓦については大きさもほぼ一定（約４㎝）につくられるようである。

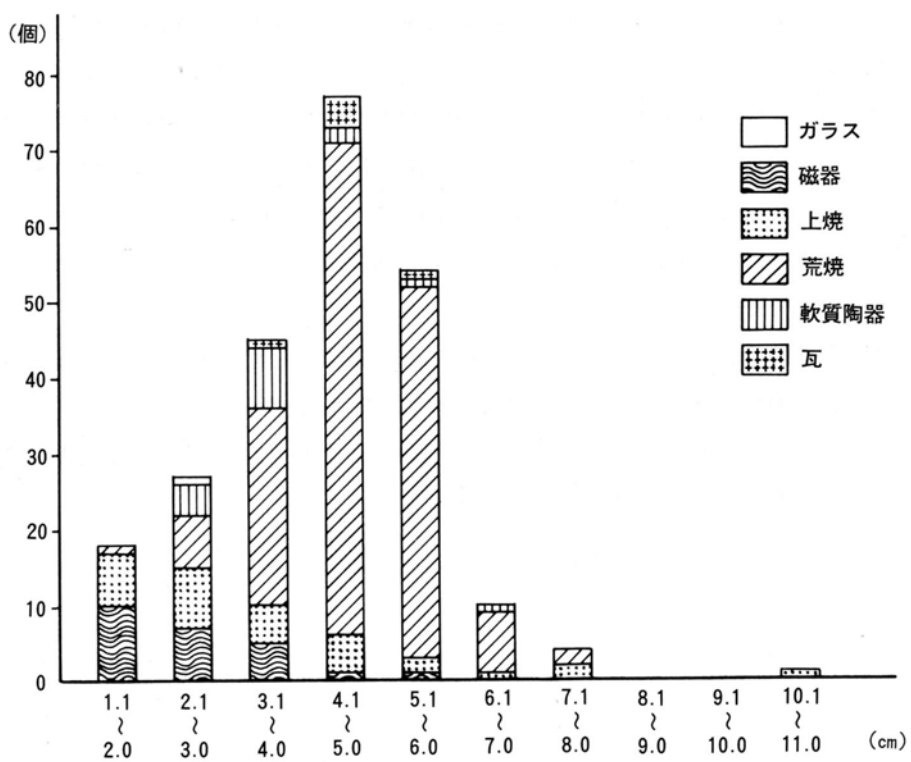
サイズについてみると、最も多いのは4.1～5.0㎝のもので、そのほとんどが荒焼製で占めている。素材別にみると、磁器や上焼など、小ぶりの素材を利用するものは２㎝以下に多く、サイズが大きくなるに従ってその数は漸減する。逆に大型製品の多い荒焼を素材とするものは４㎝台をピークに３～６㎝にほぼ収まっている。軟質陶器は２～４㎝に多い。最小は近代磁器の1.5㎝（第70図４）、最大は上焼の底部を利用したもので、10.6㎝を測る（同図12）。後者の場合には、その大きさ、重量などを考え合わせると、他と同様に遊戯具として捉えて良いものかどうか一考を要する資料である。

出土した円盤状製品の素材・サイズ別の出土状況は第30表に示した。また、代表的な資料については実測図を掲載し、これらについては第31表で以て、個別の観察を記した。

註：上原　静「グスク時代・近世出土の同盤状製品」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第10号1986年読谷村教育委員会歴史民俗資料館

第30表　円盤状製品の素材およびサイズ別出土状況

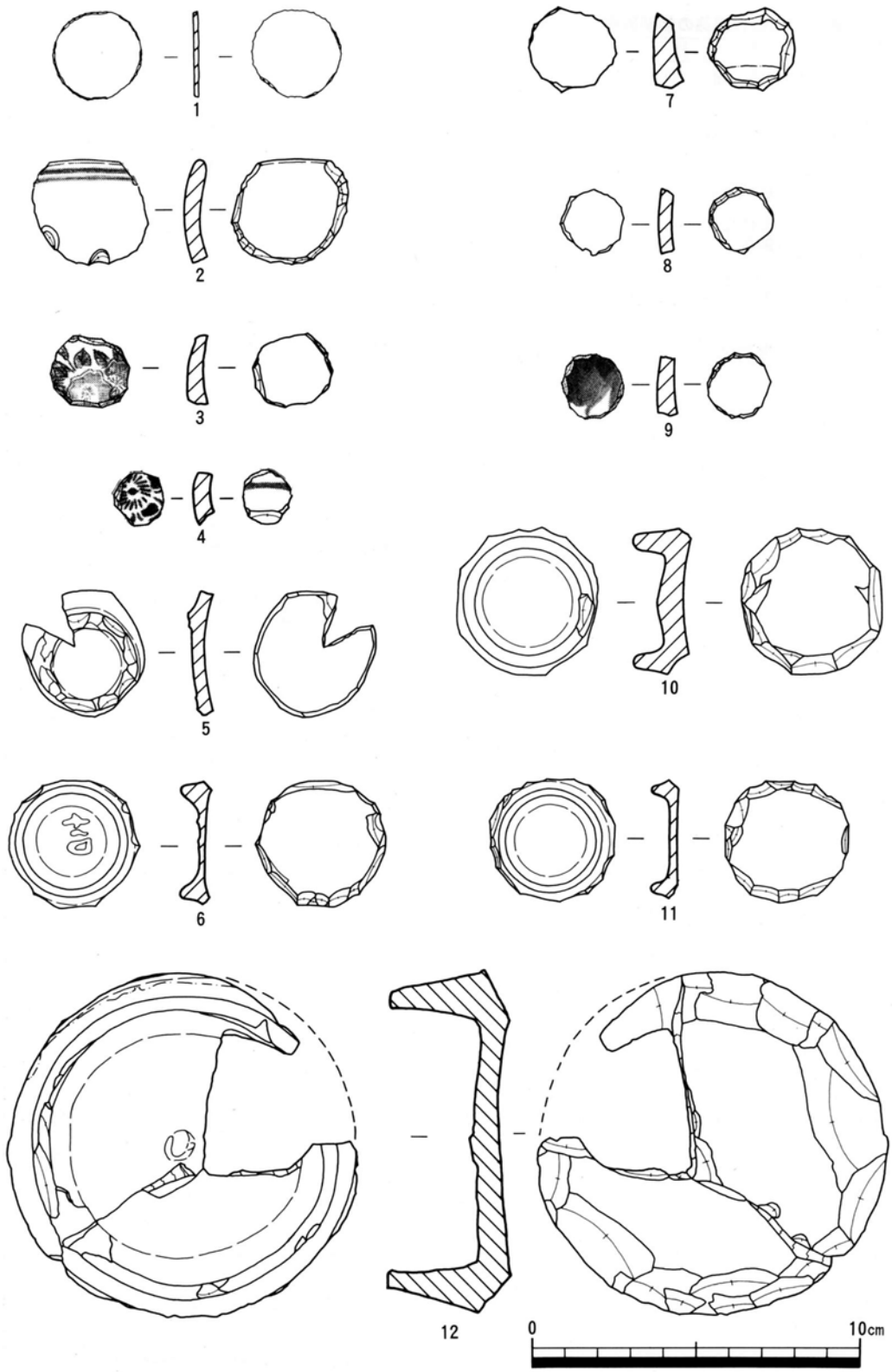
素材 / 最大長(cm)	ガラス	磁器									陶器									瓦	計
		中国産			日本産						上焼			荒焼			軟質陶器				
					近世			近代													
		口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底		
1.1～2.0			2					1	6	1		7			1						18
2.1～3.0	1		1						6			8			7			4			27
3.1～4.0				1			1	1		2		1	4		26			8		1	45
4.1～5.0							1						5		65			1	1	4	77
5.1～6.0				1									2		48	1		1		1	54
6.1～7.0													1		8				1		10
7.1～8.0													2		2						4
8.1～9.0																					0
9.1～10.0																					0
10.1～11.0													1								1
計	1	0	3	2	0	0	2	2	12	3	0	16	15	0	157	1	0	14	2	6	236



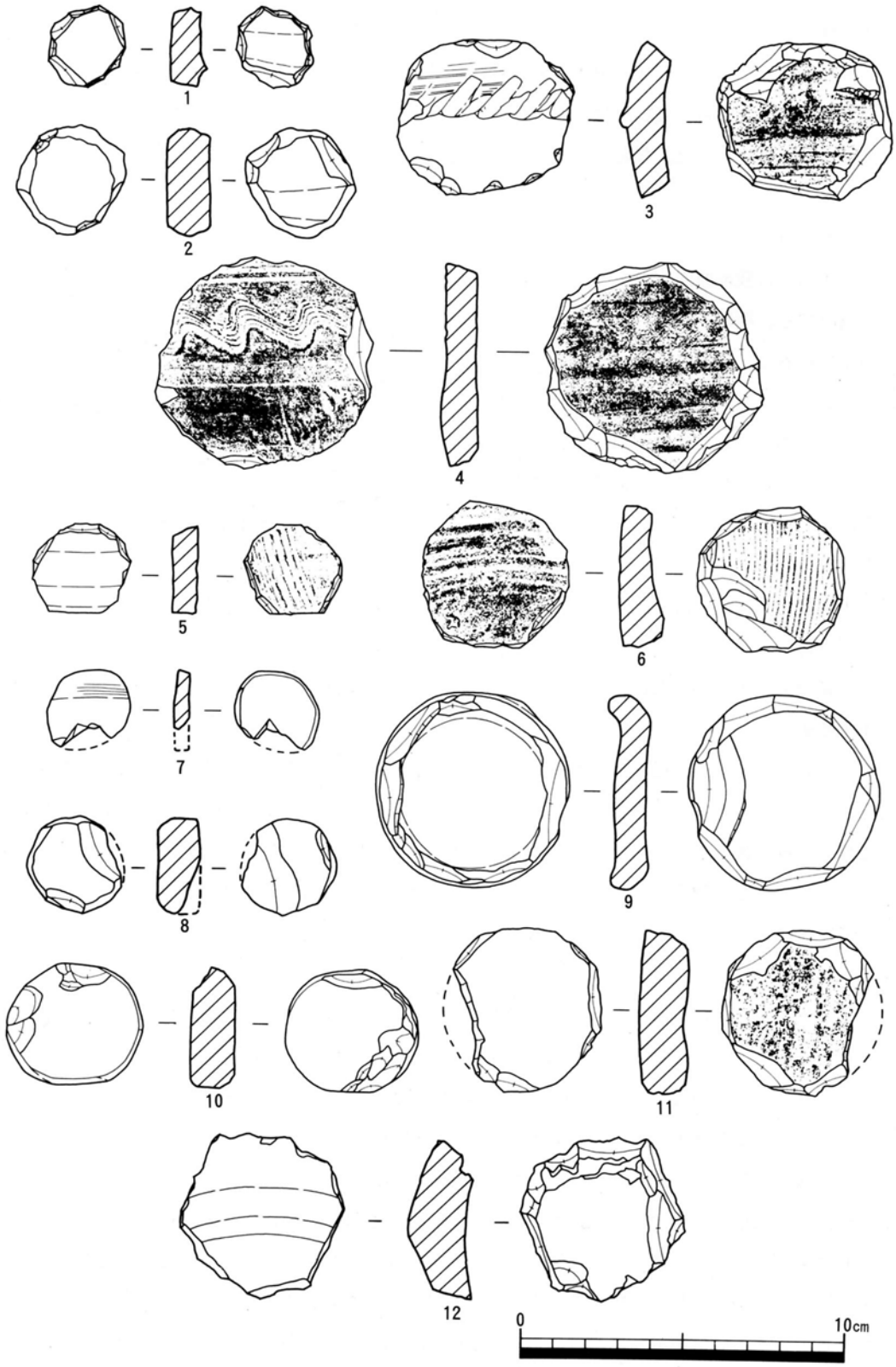
第69図　円盤状製品の素材およびサイズ別の数量グラフ

第31表　円盤状製品の個別観察　単位　cm／g

挿図番号	素材		法量				備考	出土地点
	種類	部位	最大長	最大幅	厚さ	現重量		
第70図1	ガラス	－	2.7	2.6	0.14	2	透明のガラス板を利用。丁寧で細かい押圧剥離を両面から施し、円形に整える。	C－30
〃 2	近代磁器	口	3.8	3.4	0.4	10	外面より打割する。口唇部は未加工。楕円形。	あ－25
〃 3	近代磁器（銅版刷り）	胴	2.4	2.1	0.5	4	主に内面から打割する。やや楕円形。	表採
〃 4	近代磁器（型紙刷り）	〃	1.5	1.5	0.5	3	主に外面から打割する。やや楕円形状。出土資料の中で最小。	E－30
〃 5	近代磁器	底	3.9	3.5	0.7	12	高台脇を外面から打割。一部、腰部を残す。高台は除去する。一部破損。	Q－27
〃 6	中国磁器	〃	4.0	3.9	1.0	16	高台脇を外面から打割。ほぼ円形。型づくりの腕で、外底に「吉」の陽刻。	B地区北東部
〃 7	上焼	胴	2.6	2.4	0.7	6	主に外面より打割する。楕円に近い。内外面とも白化粧の後、透明釉を施釉。	N－28
〃 8	〃	〃	2.1	2.0	0.4	3	主に外面より打割する。楕円に近い。外面は鉄釉。内面は白化粧の後、透明釉を施釉。	B－23
〃 9	〃	〃	2.0	1.8	0.5	3	内外両面より打割、円形に近い。白化粧の後、透明釉を施す。外面にコバルトの文様あり。	B地区南東部
〃 10	〃	底	4.5	4.5	1.7	32	高台脇を外面より打割、ほぼ円形。外面は鉄釉で、内面は白化粧の後、透明釉を施釉。	A－34
〃 11	〃	〃	3.9	3.9	0.9	12	高台脇を外面より打割、ほぼ円形、内外面とも透明釉を施す。	M－29
〃 12	〃	〃	10.6	10.1	4.5	224	高台脇を外面より打割、円形状、外面一部に灰釉の釉垂れあり、出土中最大。一部破損。	C－25
第71図1	荒焼	胴	2.6	2.3	1.0	9	内外両面より打割、やや楕円形。荒焼の中では小型の資料。	P－24
〃 2	〃	〃	3.5	3.3	1.3	22	内外両面より打割、隅丸方形に近い。打割面はかどがとれている。	C－31
〃 3	〃（甕）	〃	5.6	4.8	1.1	48	外面より打割する。楕円形に近い。外面に縄目状の文様がみられる。褐色の釉を施す。	G－37
〃 4	〃（〃）	〃	6.7	6.4	1.0	67	外面より打割、ほぼ円形。外面に櫛描きの波状文がみられる。	H－30
〃 5	〃（すり鉢）	〃	3.0	2.8	0.7	10	内外両面より打割する。やや円形、内面には櫛目がみられる。	B地区南東部
〃 6	〃（〃）	〃	4.8	4.4	1.1	34	外面より打割する。ほぼ円形。内面には櫛目がみられる。	C－28
〃 7	軟質陶器	〃	2.9	2.4	0.4	4	側面を研磨によって仕上げる。やや楕円形。薄手の資料である。一部破損。	Bトレンチ撹乱
〃 8	〃	〃	3.0	2.3	1.3	11	側面を研磨によって仕上げる。ほぼ円形。一部破損する。	B地区北東部
〃 9	〃	底	6.2	6.0	1.4	46	高台脇を外面より打割したとみられる。高台は除去する。全体的に摩耗している。円形状。	F－30
〃 10	瓦	－	4.2	3.9	1.4	27	外面を研磨によって仕上げる。円形状を呈する。	Aトレンチ撹乱
〃 11	〃	－	5.1	4.8	1.5	44	主に外面より打割する。円形状を呈する。一部破損。内面に布目痕がみられる。	C－18
〃 12	荒焼	底	5.5	5.1	1.7	58	底から立ち上がり部にかけてを利用。主に外面より打割する。多角形を呈する。	客土



第70図　円盤状製品（1ガラス製、2～6磁器製、7～12上焼製）



第71図　円盤状製品（1～6・12荒焼製、7～9軟質陶器製、10・11瓦製）

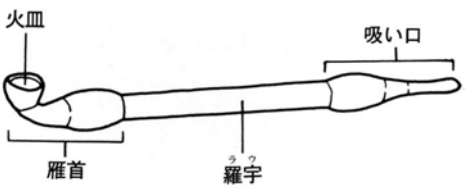
⑬ 煙　管（第73図）

雁首が15点、吸い口が４点出土している。いずれもその材質によって陶製と金属製とに大別される。以下、雁首、吸い口についてそれぞれ材質別に概略を記すが、陶製については個別の詳細を観察表に示した。なお、実測図は比較的良好な資料のみを掲載した。

(1) 雁　首

石川市の古我地原内古墓や、糸満市の阿波根古島遺跡など、種類、量ともに豊富に出土している遺跡をみると、いずれもその形態から柱状型、釣鐘型、パイプ型の３種類に分類し報告されている。

この分類に準じ、本遺跡出土の雁首についてみると、すべてがパイプ型の範疇におさまるもので、他の二者は得られていない。



第72図 煙管の各部名称
㈶たばこ産業弘済会『たばこと塩の博物館』ガイドイドブックより転載。

陶　製

上焼製と荒焼製があり、両者には下記のように形状の違いが明確に認められる。

上焼製：羅宇接続部に膨らみをもち、同部から丸みを帯ながら火皿へ移行する。

荒焼製：羅宇接続部は直線的でスマート。火皿との境は屈折する。

①上焼製

７点の出土である。釉薬は緑色系のものが多く、他に淡灰色やるり色を呈するものもあり、発色にはバラエティーがみられる。施釉範囲の窺える資料からすると、釉は外面から火皿奥まで施し、羅宇接続部の内面から同部外面縁辺までを露胎とするのが一般的のようである。

素地はすべて白色系で、青白色を呈するものは他に比べ緻密で、一見磁器のようにもみえる。

サイズについてみると、長さは３㎝前後で、火皿、羅宇接続部ともに内径は１㎝前後である。

②荒焼製

６点出土した。これらは外面を丁寧な削りによって仕上げるもので、断面が八角形に面取りされるものと、削りを数回くりかえすことにより、断面が円形状をなすものとがある。

サイズについてみると、全長の明確なものは第73図10のみで3.8㎝を測る。これまでの報告事例をみてもこの種の製品は４㎝前後のものが一般的のようである。しかし、同図８の場合には羅宇接続部が短くつくられ、これに準じて全長も短くなるようである。火皿および羅宇接続部の直径（内径）については、前者が平均1.4㎝で、後者はいずれも１㎝弱である。

荒焼製の雁首は他の遺跡の出土例をみると無釉とするのが多い。本遺跡の場合にもその例にもれず、釉薬のみられる資料は第73図９のみである。ただし、本資料についても釉薬の状況からすると、あるいは焼成時における自然釉との見方もでき、直ちに施釉陶製と判断し得るものではない。どの資料も色調は茶褐色ないし灰褐色を呈する。

第32表　陶製雁首の個別観察　　単位：cm／g　　＊は推定値

挿図番号	種類	全長	火皿		羅宇接続部		現重量	観察事項	出土地点
			内径	外径	内径	外径			
第73図1	上焼	3.3	1.1	1.5	＊1.1	＊1.5	10.8	釉は灰緑色を発し、全体に細かい貫入あり。胎土は灰白色。羅宇接続部の上半部は欠ける。	L－29
〃　2	〃	3.0	1.1	1.6	＊1.0	＊1.4	5.9	釉は淡緑色。全体に細かい貫入あり。素地は黄白色。火皿と羅宇接続部はそれぞれ半欠。	H－30
〃　3	〃	＊2.9	－	－	1.0	1.6	9.1	釉は灰白色で透明感があり、下半部に貫入あり。素地は灰白色。外面に砂の容着がみられる。火皿は欠く。	B地区北東部
〃　4	〃	2.8	1.0	1.3	＊0.9	＊1.3	4.5	釉は淡灰色を基調とするが、火皿半分は白色。貫入はみられるが目立たない。素地は灰白色。羅宇接続部は半欠。	B地区北東部
〃　5	〃	－	－	－	1.0	1.4	4.5	釉はるり色で、貫入はみられない。素地は灰白色。羅宇接続部の断面は楕円形状気味。火皿は欠失。	3トレンチ撹乱
〃　6	〃	－	0.9	1.1	－	－	1.4	火皿のみの資料で、同部の容積は小さい。釉は緑色で貫入はみられない。素地は青白色で緻密。	B地区北東部
〃　7	荒焼	－	－	－	0.8	1.4	7.5	羅宇接続部を八面に加工する。火皿も面取りを施すが、欠失するため何面かは不明。一部に自然釉あり。茶褐色を呈する。	A－27
〃　8	〃	－	－	－	－	－	1.7	羅宇接続部を短くつくる。面取りは八面とみられる。茶褐色を呈する。	不明
〃　9	〃	－	－	－	＊0.8	＊1.4	1.2	羅宇接続部がわずかに残るもので、外面に黒褐色の釉がみられる。面取りは八面か。素地は茶褐色を呈する。	Q－27
〃　10	〃	3.8	1.3	1.7	0.9	1.5	6.9	外面に無数の削り痕が観察される。火皿、羅宇接続部ともに横断面は円形を示す。茶褐色を呈する。	表採
図示省略	上焼	－	－	－	0.8	1.2	2.1	羅宇接続部の1／2資料である。釉は緑色で、細かい貫入がみられる。素地は青白色で緻密。	F－30
〃	荒焼	－	1.5	－	－	－	1.9	火皿1／3ほどの資料で、外面を面取り加工する灰褐色を呈する。	F－36
〃	〃	－	1.4	－	－	－	1.9	火皿1／3どほの資料で、外面を面取り加工する。暗褐色を呈する。	不明

金属製

2点出土した。そのうち1点は、資料の有する諸特徴より現代に属するものとみなされることから今回は記述を割愛した。他の1点について略述する。

第73図11は羅宇接続部から首部へ直線的にすぼまり、首部において弱い湾曲を示し火皿に移行する。火皿は半球状。羅宇接続部から首部にかけては一枚の薄い金属板を管状に巻いてつくる。羅宇接続部がわずかに破損しているが全長は5.5cm程度とみられる。同部中央の直径は約0.8cmで、火皿は径1.2cm。素材は青銅製と思われる。現重量5.5g。C－33グリッド出土。

(2)　吸い口

出土した4点のうち、3点は陶製で、他の1点は金属製である。

陶　製

3点とも上焼製で、前述の上焼製雁首とセットと考えられる吸い口である。羅宇接続部で膨らみをもち、吸い口へすぼまる形状を示す。吸い口の端部ではわずかな肥厚をみせ、全形は丁度、ビールビンの上半部のかたちに似る。

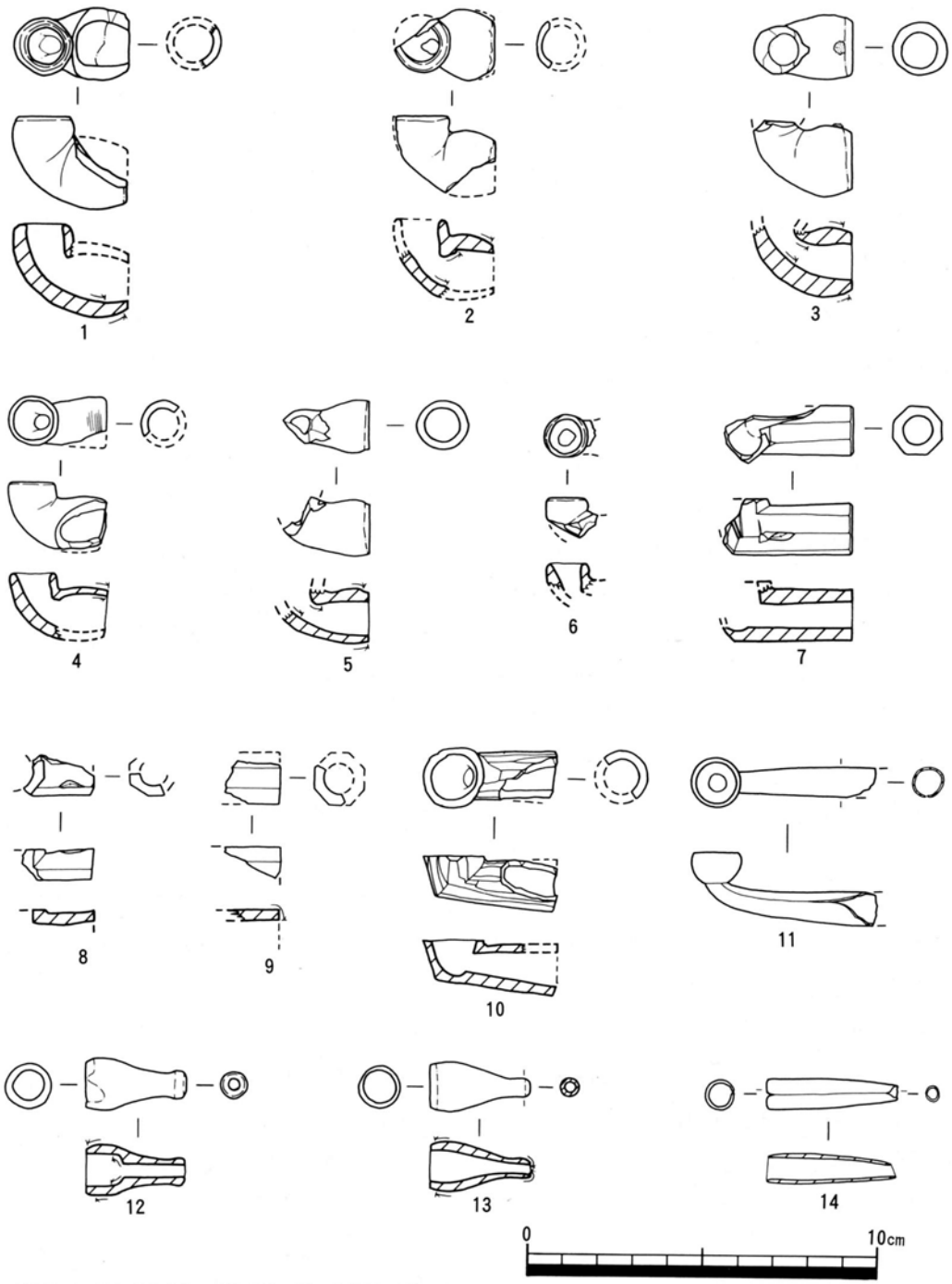
施釉範囲についてみると、第73図12は羅宇接続部の外面縁辺から同部内面まで露胎とし、13は内面全体が露胎である。釉色およびサイズについては観察表に記した。

第33表　陶製扱い口の個別観察　　単位：cm／g　　＊は推定値

挿図番号	全長	扱い口		羅宇接続部		現重量	観察事項	出土地点
		内径	外径	内径	外径			
第73図12	2.9	0.3	0.6	0.8	1.3	4.0	羅宇接続部の内面に段を作り、羅宇受けとする。釉は白色で、貫入あり。素地は乳白色。	C－18
〃　〃13	2.9	0.3	0.5	0.9	1.2	3.8	扱い口の肥厚は微弱。釉は灰緑色で、貫入あり。素地は青白色で緻密。	E－39
図示省略	－	－	－	＊1.0	＊1.4	1.0	羅宇接続部1／3ほどの資料。釉は灰緑色で、細かい貫入あり。素地は黄白色。	B地区南東部

金属製

第73図14の資料である。薄い金属板を管状に巻いてつくられており、中央から吸い口にかけて次第にすぼまる形状を示す。長さは3.8㎝、吸い口の直径0.3㎝、羅宇接続部の直径は0.6㎝である。重量は4.7ｇ。青銅製とみられる。Ｂ－31グリッドの出土。



第73図　煙　管（１～11雁首、12～14吸い口）

14　かんざし（第74図）

27点出土している。頭部の形態によって下記のとおり２種に分類したが、頭部を欠失し、いずれに属するか不明な資料は別に扱うことにした。なお、比較的良好なものについては実測図を掲載し、それらの個別観察を第35表に示した。また、かんざしの部分名称は「那覇市史」資料編第２巻中の７（那覇市役所，1979年）に拠った。

Ⅰ類：頭部は丸形で、スプーン状を呈するもの。

Ⅱ類：頭部は細長の楕円形で、耳かき状を呈するもの。

Ⅰ類

３点得られた。いずれも頭部は竿に対してほぼ直角に屈折する。竿は面取り加工され、断面は六角形となるが、首部との境で面をずらしている。竿の先端は角錐状。全長は長いもので12㎝、短いもので約９㎝を測り、短いものほど頭部は小さくつくられている。重さは全長に準じ、最も重いもので約11ｇ、軽いものでは2.4ｇである。素材はいずれも青銅製とみられる。

Ⅱ類

14点の出土。前記したように、頭部は耳かき状にゆるやかなカーブを示すが、第74図８の資料は頭部が平坦かつ直線的に再加工され、他と形状を異にする。

竿についてみると、その断面形が首部は円形、他は面取りによって六角形となるように加工されるものが主流である。しかし、中には竿を六角形とせず板状につくるものや、Ⅰ類と同じように竿全体を面取り加工するもの、面取りを全く行わず断面は竿全体にわたり円形となるものなどもある。先端部は角錐状を呈するものが多く、他に丸みをもつものから尖るものまでみられる。

全長は長短さまざまあるが、概ね６～９㎝の短いグループと12～16㎝の長いグループの２組にわけられる。頭部だけの長さをみるとほとんど１～2.5㎝に収まるものであるが、中には１㎝に満たない短いものもある。重量は最大が9.1g、最小が1.7g。素材はいずれも青銅製とみられる。

分類不能の資料

頭部が欠落するため、分類不可能の資料をここで扱う。

10点のうち特徴的な２点を図示した。いずれも竿の形態が上記Ⅰ・Ⅱ類と異なるものである。他の８点はほとんどがⅠかⅡに属するものであるが、いずれに含まれるかは分別不能である。これらについては記述を割愛し、図示した２点について略述する。

第74図10は首、捩（ねじれ）、竿からなり、断面はそれぞれ六角形、円形、四角形を呈する。先端は四角錐。これまでの出土事例（註１）や、民具例（註２）を参考にすると、頭部には花

弁状の装飾があったものと思われる。素材は青銅製とみられる。G－30グリッド出土。

同図11はかんざしの竿を棒状に再加工したものである。断面の形態から前記の同図10と同類のかんざしを利用したものとみられる。先端は原形のまま四角錐で、一方、捩との破損面は研磨によって尖らせている。素材は銀を主体とする合金（註３）。本標品は再加工後もかんざしとして使用していたものか明確でないが、今回はとりあえず本項で扱った。C－26グリッド出土。

註

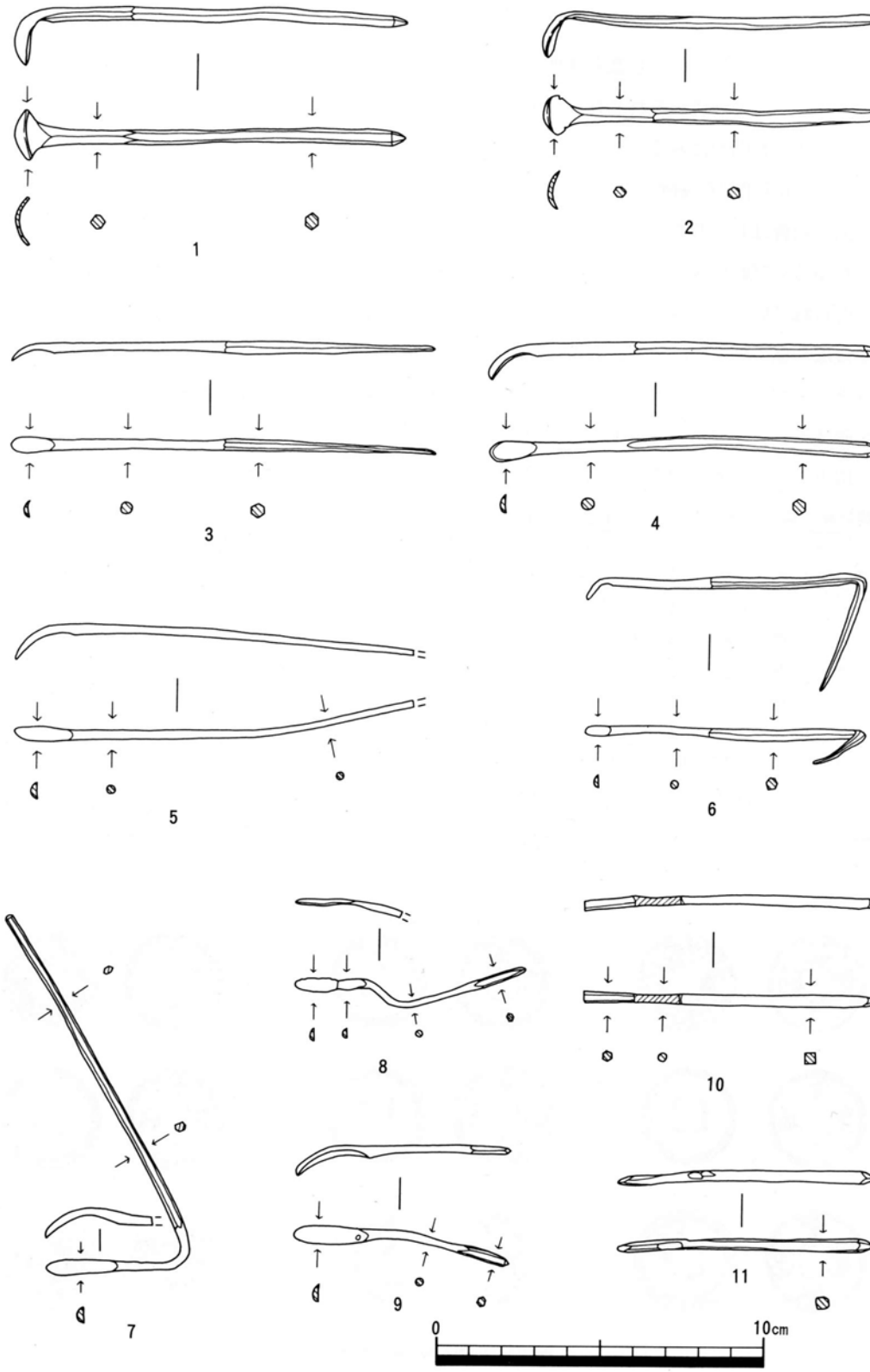
１：沖縄県教育委員会「古我地原内古墓」沖縄県文化財調査報告書第85集1987年

２：諸見民芸館（沖縄市在）の展示品を参考にした。

３：沖縄県工業試験場で分析して頂いたところ、銀を主体とし、他に銅と鉄が少量含まれるとの結果をいただいた。

第34表　かんざし個別観察表　　単位cm／g

挿図番号	分類	全長	頭長	現重量	先端形状	観　察　事　項	出土地点
第74図 1	Ⅰ	12.0	1.5	11.3	角錐状	比較的重厚なつくりである。	P－32
〃 2	Ⅰ	10.4	1.4	7.3	角錐状	比較的重厚なつくりである。先端は摩耗し、角がとれる。	表　採
〃 3	Ⅱ	13.0	1.4	5.9	尖　る	竿は先端部へ細くなる。	西部石列
〃 4	Ⅱ	12.1	1.5	9.1	角錐状	比較的重厚なつくりである。竿は先端部へ太くなる。先端はやや摩耗する。	Q－25
〃 5	Ⅱ	－	1.9	3.8	－	竿は先端部へ細くなる。先端は欠失。竿の面取りはみられず、断面は円形。	B－35
〃 6	Ⅱ	12.0	0.9	5.0	尖　る	竿は先端部へ細くなる。頭部は短い。	表　採
〃 7	Ⅱ	16.0	2.2	6.6	丸　み	竿は先端部へわずかに細くなる。	K－29
〃 8	Ⅱ	8.0	2.1	2.2	角錐状	頭部は再加工され扁平。竿の面取り部分は短い。	E－31
〃 9	Ⅱ	6.6	2.4	3.3	角錐状	出土資料中、最も短い。特に竿の面取り部分は短くつくられる。	Q－27
〃 10	－	－	－	5.8	四角錐	頭部を欠く、捩の部分に斜線が認められる。	G－30
〃 11	－	7.8	－	6.1	四角錐	再加工品である。全面、銀色を呈する。	G－26



第74図　かんざし

⑮ 銭　貨（第75図）

10点出土した。そのうち寛永通寶が７点で過半数を占め、他は開元通寶、大正年間の通貨、アメリカドルの硬貨がそれぞれ１点ずつである。

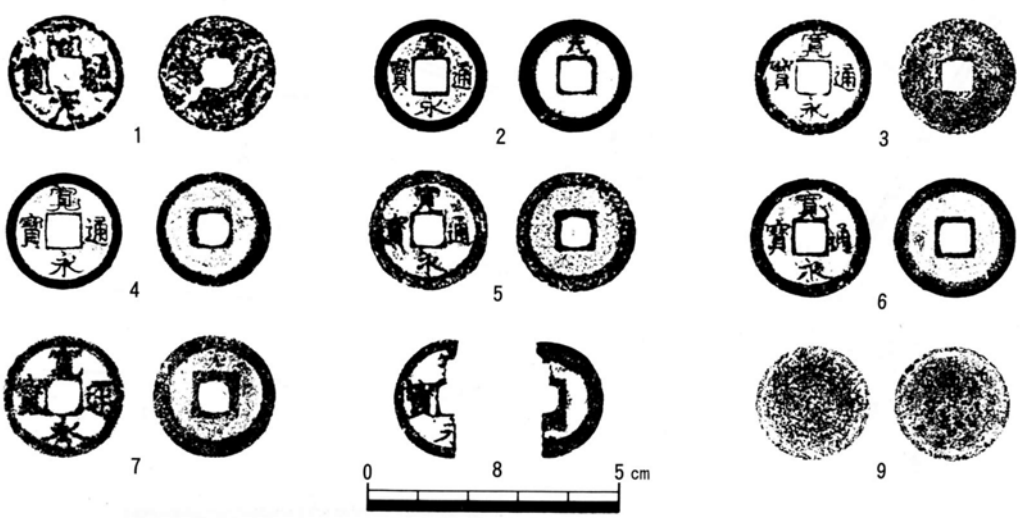
出土状況を面的にみるとＣ－18グリッドにおいての検出が目だち、寛永通寶３点と、時代は下るが大正年間の一銭が出土している。

開元通寶はＰ－27グリッドで検出された。本グリッドを含めた周辺一帯は、貝塚時代後期のいわゆるくびれ平底の土器が出土する層が良好に残っており、開元通寶はこれらの土器とともに得られている。これまで貝塚時代後期の遺跡において開元通寶が出土した例は、久米島の北原貝塚や嘉手納町野国貝塚Ａ地点などで知られ、後期遺跡の絶対年代を探る上で重要な遺物のひとつとなっている。前述のように、本遺跡においても貝塚時代後期土器と開元通寶との共存が確認され、類似遺跡を追加する結果となった。

以下に銭貨の個別観察を第35表に示したが、アメリカドルの硬貨については割愛した。

第35表　銭貨の個別観察　　単位cm／g

挿図番号	銭貨名	鋳造国	時代	初鋳造年	直径	現重量	備　　考	出土地点
第75図１	開元通寶	中国	唐	621	2.3	3.0	腐食がやや進行する。	Ｐ－27Ⅱ層
〃　２	寛永通寶	日本	江戸	1636	2.2	1.9	裏に「元」の文字あり。	Ｅ－27
〃　３	寛永通寶	日本	江戸	1636	2.3	2.8		Ｃ－18
〃　４	寛永通寶	日本	江戸	1636	2.3	3.0		Ｃ－18
〃　５	寛永通寶	日本	江戸	1636	2.4	3.0		表　採
〃　６	寛永通寶	日本	江戸	1636	2.4	2.7		不　明
〃　７	寛永通寶	日本	江戸	1636	2.5	3.4		Ｅ－27
〃　８	寛永通寶	日本	江戸	1636	2.3	1.7	右半分は欠失する	Ｃ－18
〃　９	一　　銭	日本	大正	大正５年	2.3	3.7	石灰分が付着し文字が見えづらい。	Ｃ－18



第75図　銭貨

第４節　自然遺物

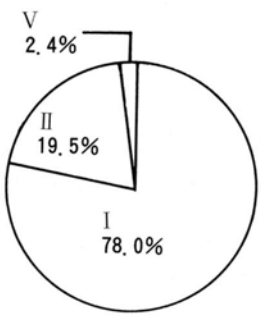
１貝類遺存体

本遺跡は開発事業の都合上、２地区に分けて発掘調査を行った。便宜上、調査地区順にＡ地区、Ｂ地区と名付け、記述はそれぞれに分けて行った。

Ａ地区

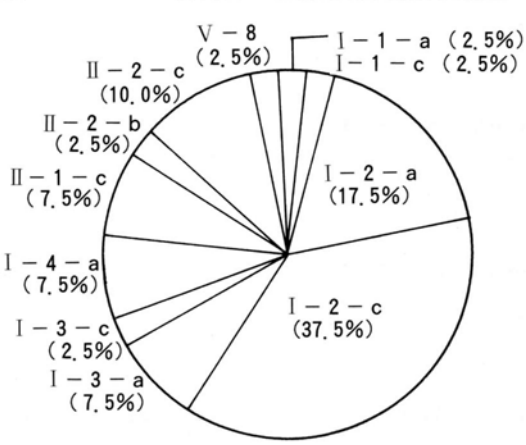
本地区から出土した貝は最小個体数216点と少なく、巻貝12科38種、一枚貝１科１種、二枚貝８科14種、計21科53種が得られた。棲息域別では海産貝20科52種、陸産貝１科１種で、汽水産貝、淡水産貝の出土は認められなかった。

第36表にグリッド別における貝類の出土状況を示した。最小個体数の算出は次の方法で行った。巻貝は完形又は殻頂部を有するものを１個体とした。カンギク、チョウセンサザエ、ヤコウガイ等の蓋を有する貝は殻、蓋のうちの数量が多い方を最小個体数とした。二枚貝は殻頂を左右に分け、数量の多い方を最小個体数とした。又、これらの条件を満たさなくても、そのグリッドにおいて１点しか得られていない場合においては１個体として扱った。



第76図　Ａ地区棲息域別出土構成

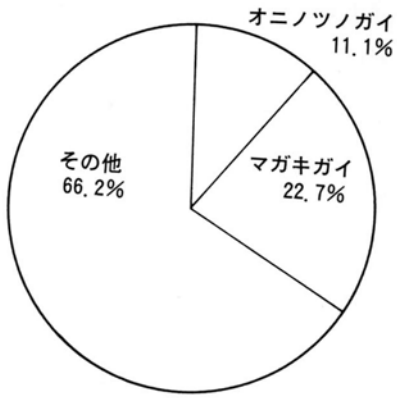
棲息域分布、棲息地分布、底質区分については前回報告した嘉門貝塚Ａ（註１）の分析方法に基づいて行った。棲息域は外洋・サンゴ礁域（以後、Ⅰと記す。）、内湾・転石地域（以後、Ⅱと記す。）、河口・マングローブ域（以後、Ⅲと記す。）、淡水域、陸域（以後、Ⅴと記す。）の５つに大別できる。本地区の貝類棲息域はⅠ約78.0％、Ⅱ19.5％、Ⅴは2.4％である（第76図）。次にⅠ、Ⅱ域における貝類の棲息地は、潮間帯上部、潮間帯中下部（以後、１と記す。）、亜潮間帯上縁部（以後、２と記す。）、干瀬〈リーフ〉（以後、３と記す。）、礁斜面及びその下部（以後、４と記す。）に分けられる。陸域における貝類の棲息地は林内、林内・林縁部、林縁部、海浜部に分けられる（第77図）。底質区分はⅠ～Ⅲまでに適応する。区分はそれぞれ岩盤地帯（以後、ａと記す。）、転石地帯（以後、ｂと記す。）、泥・砂・礫底（以後、ｃ



第77図　Ａ地区棲息地別出土構成

と記す。）これらをまとめて貝類の出土数みると、Ⅰ－２－ｃが多く、全体の約37.5%を占める。最も出土量の多い貝はマガキガイ22.7%、次に多いのがオニノツノガイ11.1%である（第78図）。

本地区は「Ｃ－11」、「Ｃ－18」、「Ｃ－16～23」、「13トレンチＥ」、「13トレンチＳ」、「客土」、「表採」の７つのグリッドに区分される。各ダリッドにおける貝類出土状況について記述した。



第78図　Ａ地区会類出土構成

Ｃ－11グリッド

カワラガイ１点のみの出土である。この貝は主に内湾・転石域の砂地に棲息する。

Ｃ－18グリッド

最小個体数は33点で、最も多い貝はマガキガイで、11点出土している。これらの貝はいずれも外洋・サンゴ礁域の砂地に棲息する。

Ｃ－16～23グリッド

最小個体数17点で、特に出土量の多い貝は見られない。

13トレンチＥ

最小個体数16点で、特に出土量の多い貝は見られない。

13トレンチＳ

最小個体数19点で、特に出土量の多い貝は見られない。

客土

最小個体数38点で、上述した出土地点に比べて、出土量が多い。しかし、特に出土量の多い貝は見られない。

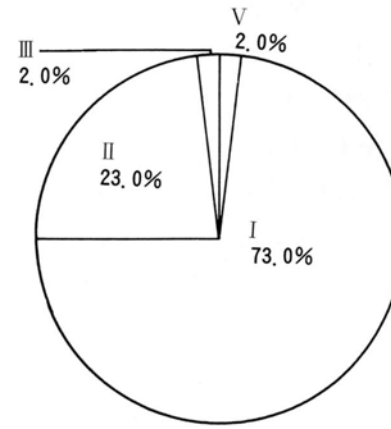
表採

最小個体数92点で、最も出土量の多い貝はマガキガイで22点出土している。

以上、各地区について述べた。出土量についてみると、表採が最も多く、43.1%で、次いで客土の18.1%、C－18グリッドの15.31%、13トレンチS8.81%、C－16～23グリッドの7.9%、13トレンチE7.41%、C－11グリッドの0.46%となっている。全体的に貝種および出土量ともに少ないのは遺跡の端部に位置するためとおもわれる。

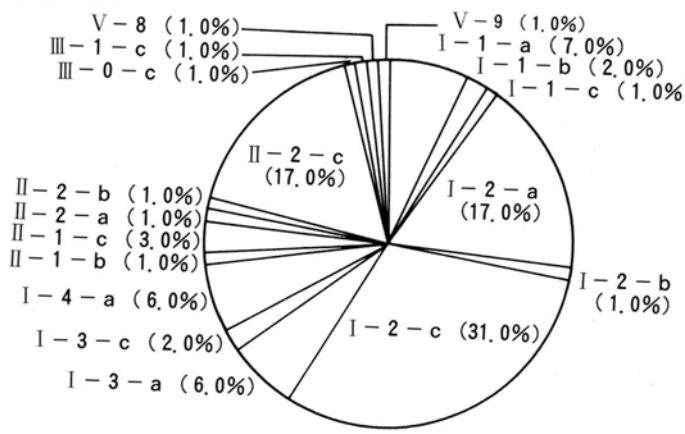
B地区

B地区は貝類の最小個体数3702点とA地区に比して出土量が多い。巻貝26科98種、二枚貝19科47種、計45科145種が得られた。棲息域別の内訳は海産貝40科141種、汽水産貝1科1種、陸産貝3科3種である。本地区でも淡水産貝の出土は認められなかった。第37表に地区別における貝類の出土状況を示した。最小個体数の算出、棲息地分布、底質区分は前に述べたとおりである。本地区の貝類棲息域はⅠ、Ⅱ、Ⅲ、VとA地区のⅠ、Ⅱ、Vに比べて、棲息範囲が広いことが分かる（第79図）。



第79図　B地区棲息域別出土構成

本地区の貝類棲息地、底質区分はA地区と同様である。これらをまとめて貝類棲息地別における貝類の出土数を見ると、Ⅰ－2－cが31種と多く、全体の31.0%を占めており次いでⅠ－2－a、Ⅱ－2－cがともに17種17.0%である（第80図）。特に多い貝はマガキガイ、マスオガイ（ピンク）、リュウキュウマスオガイ、オニノツノガイ、ハナビラタカラガイ、ホソスジイナミガイ、サラサバテイ、クモガイの8種で、貝種別の出土状況をみてみると、特にマガキガイの出土が目立ち、全体の28.7%を占める。次いでマスオガイ（ピンク）は14.0%、リュウキュウマスオガイは10.6%で残りの5種は10%に満たない(第81図)。

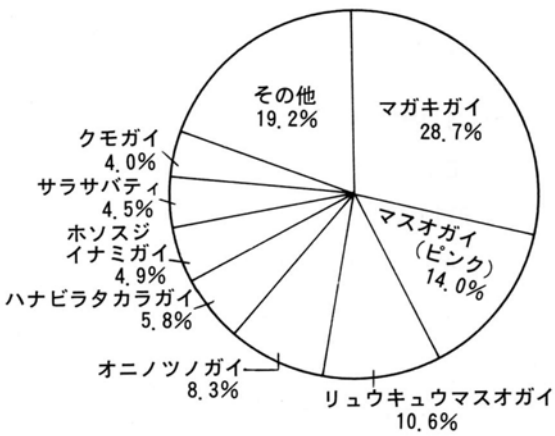


第80図　B地区棲息地別出土構成

次に地区別における貝類出土状況について述べたい。「北東部」、「南東部」、「南西部」「西部」、「中央部」の5地区に分かれる。尚、南西部は便宜上、「P・Q－25・26グリッド」、「O・N－23・24グリッド」、「R・Q－23・24グリッド」とした。それぞれの地区について略述する。

北東部

5地区中、最も貝類の科別、種別ともに出土量が多い。巻貝20科67種、二枚貝12科30種の32科97種で、全出土貝の科別、種別の半数以上を占める。出土量の多い貝はマスオガイ（ピンク）リュウキュウマスオガイ、オニノツノガイ、サラサバティ、クモガイ、ハナビラタカラガイで特にマスオガイ（ピンク）（15.74%）、リュウキュウマスオガイ（15.3%）の出土が目立つ。この2種で全体の30%以上を占める。これらはいずれも内湾・転石地域の潮間帯中・下部、亜潮間帯上縁部の砂泥砂礫底に棲息する。



第81図　B地区貝種別構成比較

南東部

出土量の多い貝はマガキガイ・オニノツノガイで、特にマガキガイが多く、662点中262点出土している。

南西部

a．P・Q－25・26グリッド

出土量の多い貝はマガキガイで、280点中92点出土している。二枚貝の出土量はマガキガイの出土量より少ない。

b．O・N－23・24グリッド

出土量の多い貝はマガキガイ・マスオガイ（ピンク）で、それぞれ108点中31点、28点出土している。

c．R・Q－23・24グリッド

マガキガイが85点中15点出土している。

西部

北東部の次に貝の出土量が多く、特にマガキガイが目立ち、760点中282点を占める。次に出土量の多い貝はマスオガイ（ピンク）で82点出土している。

中央部

貝の出土量は５地区中最も少ない。その中でマガキガイ、リュウキュウマスオガイがそれぞれ70点中13点、12点出土している。

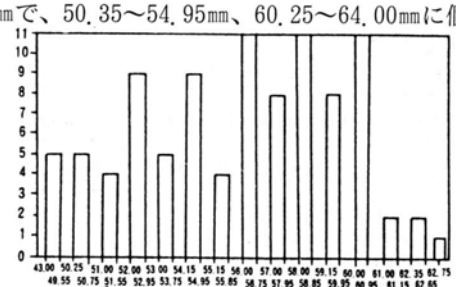
表採

出土量の多い貝はマガキガイで、219点中81点を占める。

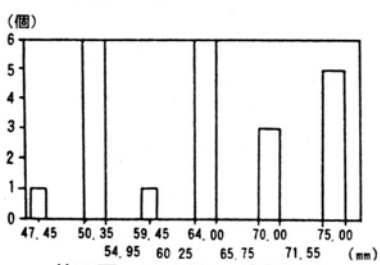
以上、各地区について述べた。貝の出土量を見ると北東部が最も多く、最小個体数1518点で全体の41.0％を占める。次に多い地区は西部で760点で20.5％、南東部は662点で18.1％、南西部は7.11％で各地区ごとに見ると、川北側区280点で7.56％、南側上地区は108点で2.92％、同下地区は85点で2.3％、中央部は70点で1.89％、表採は219点で5.92％である。特に多い貝は殆ど同じだが、その出土比率は地区によって多少の変化が見られる。マガキガイ、ヒメジャコ、イソハマグリの殻長又は殻高の計測を行い、それぞれについて度数分布を示した。その結果、マガキガイは最大殻高63.75㎜、最小殻高43.00㎜で56.00～56.75㎜、58.00～58.85㎜、60.00～60.95㎜に個体が集中している（第82図）。

ヒメジャコは最大殻長75.00㎜、最小殻長47.45㎜で、50.35～54.95㎜、60.25～64.00㎜に個体が集中している（第83図）。イソハマグリは最大殻長29.45㎜、最小殻長16.00㎜で、20.35～25.00㎜に個体が集中している（第84図）。

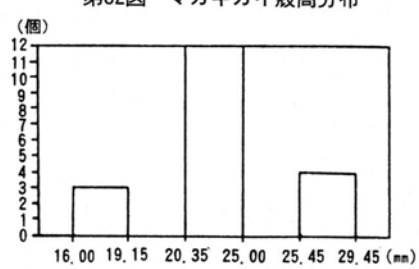
今回は先史時代から近世に時期がまたがるため、時期別の記述は割愛し、貝の出土状況の記述にとどめた。



第82図　マガキガイ殻高分布



第83図　ヒメジャコ殻長分布



第84図　イソハマグリ殻長分布

参考図鑑

１．波部忠重・小管貞男共著「標準原色図鑑全集第３巻『貝』」保育社　昭和52年

２．白井祥平著『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星図書　1977年

註１．沖縄県浦添市教育委員会『嘉門貝塚Ａ』－牧港補給基地地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ－「浦添市文化財調査報告書第18集」1991年３月

城間遺跡貝類遺存体

軟体動綱物部門　MOLLUSCA
腹足綱　GASTROPODA
アクキガイ科　Muricidae
1. アカイガレイシガイ
Drupa spathilifera(BLAINVILLE)
2. ガンゼキボラ
Chicoreus (Triplex) brunneus(LINK)
3. ツノレイシガイ
Menathais tuberosa(RÖDING)
アマオブネガイ科　Neritidae
4. アマオブネガイ
Theliostyla albicilla(LINNÉ)
5. ニシキアマオブネ
Amphinerita polita(LINNÉ)
6. マキミゾアマオブネ
Theliostyla exuvia (LINNÉ)
フデガイ科 Mitridae
7. オオミノムシ
Vexillum Plicarium(LINNÉ)
8. キバフデガイ
Nebularia puncticulata LAMARCK
9. コデフデガイ
Chrysame eremitarum(RÖDING)
10. チョウセンフデガイ
Mitra mitra (LINNÉ)
11. ヒメチョウセンフデガイ
Mitra episcopalis LINNÉ

フジツガイ科　Cymatiidae
12. シオボラ
Gutturnium muricium(RÖDING)
13. ホラガイ
Charonia tritonis (LINNÉ)
14. ミツカドボラ
Cymation nicobaricus (RÖDING)

オキニシ科　Bursidae
15. オオナルトボラ
Tutufa lissostoma (SMITH)
16. オキニシ
Bursa dunkeri KIRA

イモガイ科　Conidae
17. アカシマミナシ
Leptoconus generalis(LINNÉ)
18. アジロイモガイ
Darioconus praelatus BRUGUIÈRE
19. アンボイナガイ
Gastridium geographus(LINNÉ)
20. アンボンクロザメガイ
Lithoconus litteratus (LINNÉ)
21. イボカバイモガイ
Virgiconus distans(HWASS)
22. イボシマイモガイ
Virgiconus lividus(HWASS)
23. カバミナシガイ
Rhizoconus vexillum(GMELIN)
24. キヌカツギイモガイ
Virgiconus flavidus (LAMARCK)
25. クロザメガイモドキ
Lithoconus ebruneus(BRUGUIÈRE)
26. クロフモドキガイ
Lithoconus litteratus pardus 〔RÖDING〕
27. クロミナシガイ
Conus marmoreus LINNÉ
28. コマダライモガイ
Virroconus chaldeus(RÖDING)
29. ゴマフイモガイ
Puncticulis pulicarius(HWASS)
30. サヤガタイモガイ
Virroconus fulgetrum(SOWERBY)
31. サラサミナシガイ
Rhizoconus capitaneus(LINNÉ)
32. サラサミナシガイモドキ
Dauciconus vitilinus (HWASS)
33. シロマダライモ
Hermes nussatella (LINNÉ)
34. タガヤサンミナシガイ
Darioconus taxtile (LINNÉ)
35. ニシキミナシガイ
Strioconus striatus (LINNÉ)
36. マダライモガイ
Virroconus ebraeus(LINNÉ)
37. ミカドミナシガイ
Rhombus imperialis (LINNÉ)
38. ヤキイモガイ
Pionoconus magus (LINNÉ)
39. ヤセイモガイ
Viragiconus emaciatus (REEVE)
40. ヤナギシボリイモガイ
Rhizoconus miles (LINNÉ)

イトマキボラ科　Fasciolariidae
41. イトマキボラ
Pleuroploca trapezium (LINNÉ)
42. チトセボラ
Fusinus nicobaricus (RÖDING)
43. ナガイトマキボラ
Pleuroploca filamentosa(RÖDING)

マクラガイ科　Olividae
44. ジュドウマクラガイ
Oliva miniacea (RÖDING)

ナツメガイ科　Bullidae
45. ナツメガイ
Bulla cruentata vernicosa GOULD

オニコブシガイ科　Vasidae
46. オニコブシ
Vasum ceramicus (LINNÉ)
47. コオニコブシ
Vasum turbinellus (LINNÉ)

オニノツノガイ科　Cerithiidae
48. オニノツノガイ
Cerithium nodulosum BRUGUIÈRE
49. クワノミカニモリガイ
Clypeomorus chemnitzianus(PILSBRY)

オリイレヨフバイ科　Nassariidae
50. オリイレヨフバイ
Nassarius arcularius (LINNÉ)
51. チビムシロ
Reticunassa chibi HABE

トウカムリガイ科　Cassidae
52. ヒナツルガイ
Casmaria erinacea (LINNÉ)

タモトガイ科　Pyrenidae
53. フトコロガイ
Euplica scripta(LAMARCK)
54. マツムシガイ
Pyrene testudinaria (LINK)

リュウテンサザエ科　Turbinidae
55. カンギク
Lunellacoeonata glanulata(GMELIN)
56. チョウセンサザエ
Marmarostoma argyrostomum(LINNÉ)
57. ヤコウガイ
Lunatica marmorata (LINNÉ)

ニシキウズガイ科　Trochidae
58. オキナワイシダタミガイ
Monodonta labio (LINNÉ)
59. ギンタカハマガイ
Tectus pyramis (BORN)
60. サラサバテイ
Tectus Rochia maximus(PHILIPPI)
61. ニシキウズガイ
Trochus maculatus LINNÉ

ソデガイ科　Strombidae
62. イボソデガイ
Lentigo lentiginosus(LINNÉ)
63. クモガイ
Lambis lambis (LINNÉ)
64. ゴホウラ
Tricornis latissimus(LINNÉ)
65. スイジガイ
Harpago chragra (LINNÉ)
66. ネジマガキガイ
Gibberulus gibberulus gibbosus (RÖDING)
67. ベニソデガイ
Euprotomus bulla(RÖDING)
68. マガキガイ
Conomurex luhnanus (LINNÉ)
69. ムカシタモトガイ
Canarium mutabilis (SWAINSON)
70. ラクダガイ
Lambis truncata(LIGHTFOOT)

タカラガイ科　Cypraeidae
71. クチムラサキダカラガイ
Ponda carneola (LINNÉ)
72. シボリダカラガイ
Staphylaea limacina (LAMARCK)
73. ナツメガイモドキ
Errona errona (LINNÉ)
74. ナツメダカラガイ
Erronea ovum (GMELIN)
75. ハナビラタカラガイ
Monetaria (Ornamentaria) annulus (LINNÉ)
75. ハナマルユキガイ
Revitrona caputserpentis (LINNÉ)
77. ヒメホシダカラガイ
Cypraea(Lyncina)lynx LINNÉ

城間遺跡貝類遺存体

78. ホシキヌタガイ
Ponda (Mystaponda) vitellus (LINNÉ)
79. ホシダカラガイ
Cypraea tigris (LINNÉ)
80. ホソヤクシマダカラガイ
Arabica eglantinacourureri(VAYSSIÈRE)
81. ヤクシマダカラガイ
Arabica arabica (LINNÉ)

タマガイ科　Naticidae
82. トミガイ
Polinices pyriformis(RÉCLUZ)
83. ホウシュノタマガイ
Tectonatica lurida (PHILIPPI)
84. リスガイ
Mammilla opaca (RÉCLUZ)

タケノコガイ科　Terebridae
85. タケノコガイ
Terebra subulaia (LINNÉ)
86. ベニタケガイ
Subula dimidata (LINNÉ)
87. リュウキュウタケガイ
Oxymeris maculatus (LINNÉ)

ウミニナ科　Potamididae
88. ウミニナ
Batillaria mnltiformis (LISCHKE)

ヤツシロガイ科　Tonnidae
89. ウズラガイ
Tonna perdix (LINNÉ)
90. スクミウズラガイ
Tonna cepa (RÖDING)

アメフラシ科　Aplysiidae
91. タツナミガイ
Dolabella auricularia(LIGHTFOOT)

アフリカマイマイ科　Achatinidae
92. アフリカマイマイ
Achatina fulica(BOWDICH)

ニッポンマイマイ科　Camaenidae
93. シュリマイマイ
オナジマイマイ科　Bradybaenidae
94. パンダナマイマイ
Bradybaena circulus (PFEIFFER)
斧足綱 PELECYPODA
バカガイ科　Mactridae
95. リュウキュウバカガイ
Mactra maculata (GMELIN)

フネガイ科　Arcidae
96. エガイ
Barbatia (Abarbatia) decussata (SOWERBY)
97. オオタカノハガイ
Arca ventricosa LAMARCK
98. リュウキュウサルボウガイ
Anadara antiquata(LINNÉ)

イガイ科　Mytilidae
99. リュウキュウヒバリガイ
Modiolus agripeta IREDALE

イタヤガイ科　Pectinidae
100. ヒオウギガイ
Chlamys (Mimachlamys) nobilis (REEVE)

マルスダレガイ科　Veneridae
101. アラスジケマンガイ
Gafrarium tumidum 〔RÖDING〕
102. アラヌノメガイ
Periglypta reticulata(LINNÉ)
103. オイノカガミガイ
Bonartemis histrio(GMELIN)
104. カノコアサリ
Glycydonta marica(LINNÉ)
105. サラサガイ
Lioconcha fastigiata(SOWERBY)
106. シラオガイ
Circe scripta (LINNÉ)
107. チョウセンハマグリ
Meretrix lamarcki DESHAYES
108. ヌノメガイ
Periglypta puerpera (LINNÉ)
109. ヒメリュウキュウアサリ
110. ホソスジイナミガイ
Gafrarium pectinatum (LINNÉ)
111. マルオミナエシガイ
Lioconcha castrensis (LINNÉ)
112. マルスダレガイ
Venus(Ventricolaria)toreuma GOULD
113. ユウカゲハマグリ
Pitar (Pitarina) striatum(GRAY)

ニッコウガイ科　Tellindae
114. サメザラガイ
Scutarcopagia scobinata(LINNÉ)
115. ニッコウガイ
Tellinella viragata(LINNÉ)
116. ヒメニッコウガイ
Tellinella staurella (LAMARCK)
117. リュウキュウシラトリガイ
Quidnipagus platam IREDALE

リュウキュウマスオガイ科　Asaphidae
118. マスオガイ
Psammotaea elonggata LAMARCK
119. リュウキュウマスオガイ
Asaphis dichotoma(ANTON)

シャコガイ科　Tridacnidae
120. シャゴウ
Hippopus hippopus(LINNÉ)
121. シラナミ
Tridacna(Vulgodacna)maxima(RODING)
122. ヒメジャコ
Tridacna(chametrachea)crocea LAMARCK
123. ヒレジャコ
Tridacna squamosa LAMARCK
シジミガイ科　Corbiculidae
124. シレナシジミガイ
Geloina papua (LESSON)

チドリマスオガイ科　Mesodesmatidae
125. イソハマグリ
Atactodea striara (GMELIN)

タマキガイ科　Glycymeridae
126. ソメワケグリガイ
Glycymeris (Veletuceta) reevei (MAYAER)

ツキガイ科　Lucinidae
127. ウラキツキガイ
Codakia paytenorum (IREDLE)
128. カブラツキガイ
Anodonria edentula(LINNÉ)
129. ツキガイ
Codakia tigerina (LINNÉ)
130. ヒメツキガイ
Ctena divergens(PHILIPPI)

ウミギクガイ科　Spondylidae
131. ウミギクガイ
Spondylus barbatus REEVE

ウグイスガイ科　Pteriidae
132. クロチョウガイ
Pinctada margaritifera(LINNÉ)
シュモクアオリガイ科　Isognomonidae
133. カイシアオリガイ
Isognomon perna(LINNÉ)

ザルガイ科　Cardiidae
134. カワラガイ
Fragum unedo (LINNÉ)
135. リュウキュウザルガイ
Vasticardium(Regozara)flavum (LINNÉ)

ミノガイ科　Limidae
136. ミノガイ
Lima sowerdyi DESHAYES

第36表　A地区　貝類遺存体出土状況

分類番号	出土グリッド / 貝類	c－11 最小個体数	c－18 最小個体数	c－16～23 最小個体数	13トレンチE 最小個体数	13トレンチS 最小個体数	客土 最小個体数	表採 最小個体数	棲息地	貝種別合計
10	チョウセンフデガイ						1		Ⅰ－2－c	1
14	ミツカドボラ						1			1
17	アカシマミナシガイ					1			Ⅰ－2－c	1
20	アンボンクロザメ			1					Ⅰ－2－c	1
21	イボカバイモ			1					Ⅰ－2－c	1
23	カバミナシガイ				1					1
25	クロザメガイモドキ						1		Ⅰ－2－c	1
26	クロフモドキ					1		1		2
29	ゴマフイモガイ			1	1				Ⅰ－2－c	2
30	サヤガタイモガイ		1	1		1	1		Ⅰ－1－a	4
32	サラサミナシガイモドキ							1		1
35	ニシキミナシガイ							1		1
40	ヤナギシボリイモガイ				1			1	Ⅰ－3－a	2
42	イトマキボラ				1			1	Ⅰ－2－a	2
44	ナガイトマキボラ	1	1					1	Ⅰ－2－a	3
50	オニノツノガイ	5	2	1	2	5		9	Ⅰ－2－c	24
99	ヨコワカニモリガイ							1	Ⅰ－2－c	1
56	フトコロガイ							1	Ⅱ－2－c	1
100	オオウラウズガイ							1		1
58	カンギク				1				Ⅱ－2－b	1
59	チョウセンサザエ						1	1	Ⅰ－3－a	2
60	ヤコウガイ						1	2	Ⅰ－4－a	3
62	ギンタカハマ						2	1	Ⅰ－4－a	3
63	サラサバテイ	1	1			1		1	Ⅰ－4－a	4
64	ニシキウズガイ							1	Ⅰ－2－a	1
101	ムラサキウズガイ							1		1
65	イボソデガイ						1		Ⅰ－2－c	7
66	クモガイ	2	1				4		Ⅰ－2－c	7
67	クモガイ（幼貝）	1								1
71	ベニソデガイ	1								1
72	マガキガイ	11	3	4	4	5	22		Ⅰ－2－c	49
102	キイロダカラガイ				1					1
76	シボリタカラガイ							1	Ⅰ－2－a	1
79	ハナビラタカラガイ	1		1				3	Ⅰ－1－a	5
80	ハナマルユキ						1	2	Ⅰ－3－a	3
83	ホシダカラガイ	1	1						Ⅰ－2－c	2
88	リスガイ				1				Ⅰ－2－c	1
98	バンダナマイマイ							1	V－8	1
103	巻貝不明		2	2	2	6	8			20
巻貝小計		25	15	13	14	30	63			160
104	オオベッコウカサガイ						1			1
一枚貝小計							1			1
108	リュウキュウサルボウ	1					3		Ⅱ－2－c	4
112	アラヌノメガイ				1		3		Ⅰ－3－c	4
118	ヌノメガイ	1			1	2	4		Ⅱ－2－c	8
120	ホソスジイナミガイ			1			3		Ⅱ－1－c	1
124	サメザラガイ				1				Ⅱ－2－c	1
127	リュウキュウシラトリガイ						1		Ⅱ－1－c	1
129	マスオガイ（紫）						1		Ⅱ－1－c	1
131	シャゴウ						1		Ⅰ－2－a	1
132	シラナミ		1						Ⅰ－2－a	5
133	ヒメジャコ		1		1			3	Ⅰ－2－a	5
134	ヒレジャコ	1				1		1	Ⅰ－2－c	3
136	イソハマグリ			1					Ⅰ－1－c	1
144	メンガイの一種							1		1
147	カワラガイ	1							Ⅱ－2－c	1
152	二枚貝不明		5		1	1	5	7		19
二枚貝小計		1	8	2	3	5	8	28		55
グリッド別合計		1	33	17	16	19	38	92		216
最小個体数総合計									216	216

第37表　B地区　貝類遺存体出土状況

分類番号	出土地区 / 貝種	北東部 最小個体数	南東部 最小個体数	南西部P・Q-25・26 最小個体数	南西部O・N-23・24 最小個体数	南西部R・Q-23・24 最小個体数	西部 最小個体数	中央部 最小個体数	表採 最小個体数	棲息地	貝類別合計
1	アカイガレイシガイ	2	2			1	1			Ⅰ－3－a	6
2	ガンゼキボラ	3	1				1			Ⅰ－4－a	5
3	ツノレイシガイ	16	6	1			1			Ⅰ－3－a	24
4	アマオブネガイ	32	1	2	1		2	1		Ⅰ－1－b	39
5	ニシキアマオブネガイ			1							1
6	マキミソアマオブネ	1									1
7	オオミノムシガイ	1								Ⅱ－2－c	1
8	キバフデガイ		1								1
9	コゲフデガイ		1								1
10	チョウセンフデガイ	1	1							Ⅰ－2－c	2
11	ヒメチョウセンフデガイ	2	1							Ⅰ－2－c	3
12	シオボラ	2	1	3			3			Ⅰ－2－a	9
13	ホラガイ	1					1		1	Ⅰ－4－a	3
14	ミツカドボラ						1				1
15	オオナルトボラ					1					1
16	オキニシ	5	7			1	1			Ⅰ－3－a	14
17	アカシマミナシガイ	2		3						Ⅰ－2－c	5
18	アジロイモガイ	1	1	1			1	1	1	Ⅱ－2－c	6
19	アンボイナガイ						1		1	Ⅰ－2－c	2
20	アンボンクロザメガイ	9	2	3			1		1	Ⅰ－2－c	16
21	イボカバイモガイ	1								Ⅰ－2－c	1
22	イボシマイモガイ	10	8	3		1	6		1	Ⅰ－2－a	29
23	カバミナシガイ								1		1
24	キヌカツギイモガイ	5	3	2			4	1		Ⅰ－2－a	15
25	クロザメガイモドキ	1					1			Ⅰ－2－c	2
26	クロフモドキ						1				1
27	クロミナシガイ	1	2	1	1		2			Ⅰ－2－c	8
28	コマダライモガイ							1		Ⅰ－1－a	1
29	ゴマフイモガイ	3	3	1	1		1	1	1	Ⅰ－2－c	11
30	サヤガタイモガイ	4	15	3			8			Ⅰ－1－a	30
31	サラサミナシガイ	15		1	1		1	1	1	Ⅰ－2－c	20
32	サラサミナシガイモドキ		1								1
33	シロマダライモガイ			1			1			Ⅰ－2－c	2
34	タガヤサンミナシガイ	1	1							Ⅰ－2－c	2
35	ニシキミナシガイ				1		1				2
36	マダライモガイ	14	7		1		7	1	1	Ⅰ－1－a	31
37	ミカドミナシガイ	1					1			Ⅰ－2－c	2
38	ヤキイモガイ	2	1	1					1	Ⅰ－2－c	5
39	ヤセイモガイ	1					1			Ⅰ－2－b	2
40	ヤナギシボリイモガイ	14	11	2	1	1	2	1	1	Ⅰ－3－c	33
41	ヤナギシボリイモガイ(幼貝)	6	1			1	3		1		12
42	イトマキボラ	34	8	1		1	1		1	Ⅰ－2－a	46
43	チトセボラ	2	3					1	1	Ⅱ－2－c	7
44	ナガイトマキボラ	1								Ⅰ－2－a	1
45	ジュドウマクラガイ					1					1
46	ナツメガイ（小）	1	1				1			Ⅰ－2－c	3
47	ナツメガイ（大）	1		1						Ⅰ－2－c	2
48	オニコブシ	7	5				2			Ⅰ－2－a	14
49	コオニコブシ	32	19	3			4			Ⅰ－3－a	58
50	オニノツノガイ	92	58	11	1	6	46	1	9	Ⅰ－2－c	224
51	クワノミカニモリガイ	1	2				1			Ⅰ－1－a	4
52	クワノミカニモリガイ(幼貝)						3				3
53	オリイレヨフバイ	4									4
54	チビムシロガイ					2				Ⅱ－2－c	2
55	ヒナツルガイ						1				1

分類番号	土地地区 / 貝種	北東部 最小個体数	南東部 最小個体数	南西部 P・Q 25・26 最小個体数	南西部 O・N 23・24 最小個体数	南西部 R・Q 23・24 最小個体数	西部 最小個体数	中央部 最小個体数	表採 最小個体数	棲息地	貝種別合計
56	フトコロガイ	2		1						Ⅱ－2－a	3
57	マツムシガイ	1								Ⅰ－2－a	1
58	カンギク	2	2	2		2	2			Ⅱ－2－b	10
59	チョウセンサザエ	52	12	4		2	9		1	Ⅰ－3－a	80
60	ヤコウガイ	1	1				1		1	Ⅰ－4－a	4
61	オキナワイシダタミガイ	1	1							Ⅲ－1－b	2
62	ギンタカハマガイ	24	1			1	3		1	Ⅰ－4－a	30
63	サラサバテイ	77	9	8	1	4	16	1	5	Ⅰ－4－a	121
64	ニシキウズガイ	12	2			1	9		1	Ⅰ－2－a	25
65	イボソデガイ	11	2						1	Ⅰ－2－c	14
66	クモガイ	65	9	5	2	1	17	3	7	Ⅰ－2－c	109
67	クモガイ（幼貝）	26	3	4			9	1	3		46
68	コボウラ						1	1	1		3
69	スイジガイ	1	1							Ⅰ－2－c	2
70	ネジマガキガイ	9	7	4		1	7	11	12	Ⅱ－2－c	51
71	ベニソデガイ		1								1
72	マガキガイ		262	92	31	15	282	13	81		776
73	ムカシタモトガイ	16					2			Ⅰ－2－c	18
74	ラクダガイ		1								1
75	クチムラサキダカラガイ	1					1				2
76	シボリダカラガイ	2								Ⅰ－2－a	2
77	ナツメガイモドキ		1								1
78	ナツメダカラガイ	4								Ⅰ－2－a	4
79	ハナビラタカラガイ	54	44	17	1	3	18		20	Ⅰ－1－a	157
80	ハナマルユキガイ	28	12	4		1	6	1	3	Ⅰ－3－a	55
81	ヒメホシダカラガイ			1	1					Ⅰ－2－a	2
82	ホシキヌタダカイ	2	4	1			5		1	Ⅰ－2－a	13
83	ホシダカラガイ	3		1			1	1	1	Ⅰ－2－c	7
84	ホソヤクシマダカラガイ			1							1
85	ヤクシマダカラガイ	15	1		1	1	2		1	Ⅰ－2－c	21
86	トミガイ		2								2
87	ホウシュノタマガイ			1							1
88	リスガイ	4	4	2			2.			Ⅰ－2－c	12
89	タケノコガイ								1		1
90	ベニタケガイ	1	1	1						Ⅰ－2－c	3
91	リュウキュウタケガイ	1	1		3				1	Ⅰ－2－c	6
92	ウミニナ		7	7			3			Ⅰ－1－b	17
93	ウズラガイ						1			Ⅰ－2－c	1
94	スクミウズラガイ						2				2
95	タツナミガイ	1	2	1		4				Ⅰ－1－a	8
96	アフリカマイマイ			2			1	1		V－9	4
97	シュリマイマイ		1								1
98	パシダナマイマイ	2	2	1						V－8	5
103	巻貝不明	53	7	22		1	5	1			89
	巻貝小計	804	577	227	45	56	518	44	165		2436
105	リュウキュウバカガイ	2				1	1			Ⅱ－2－c	4
106	エガイ	2	3	1			2		1	Ⅰ－2－a	9
107	オオタカノハガイ	7	1				2			Ⅱ－2－c	10
108	リュウキュウサルボウガイ	7	3	2			1		3	Ⅱ－2－c	16
109	リュウキュウヒバリガイ	3				1	4	1		Ⅰ－1－a	9
110	ヒオウギガイ								1		1
111	アラスジケマンガイ	1	1	1			1			Ⅲ－1－c	4
112	アラヌノメガイ								1	Ⅰ－3－c	2
113	オイノカガミガイ					1				Ⅱ－2－c	1
114	カノコアサリ	1					1				2
115	サラサガイ			1							1
116	シラオガイ					1	1				2
117	チョウセンハマグリ			1							1
118	ヌノメガイ	23	5	2	1		6	1	3	Ⅱ－2－c	41
119	ヒメリュウキュウアサリ		1								1
120	ホソスジイナミガイ	78	12	13	6	4	13	3	3	Ⅱ－1－c	132
121	マルオミナエシガイ		1				1				2
122	マルスダレガイ	1	1	2					1		5
123	ユウカゲハマグリ		2	1		1	6				10
124	サメザラガイ	7	1	1	9				1	Ⅰ－2－c	19
125	ニッコウガイ								1		1
126	ヒメニッコウガイ		1								1
127	リュウキュウシラトリガイ	22	3	1	9	3	39	3	7	Ⅱ－1－c	87
128	マスオガイ（ピンク）	239	4	6	28		82	1	17	Ⅱ－2－c	37
129	マスオガイ（紫）	2	1				9			Ⅱ－2－c	12
130	リュウキュウマスオガイ	232	12	1	6	1	17	12	5	Ⅱ－1－c	286
131	シャゴウ	1	3		1	1			1	Ⅰ－2－a	7
132	シラナミ	18	3	4	1	3	17	1	1	Ⅰ－2－a	48
133	ヒメジャコ	13	5	2	1	1	9		3	Ⅰ－2－a	34
134	ヒレジャコ	1	1							Ⅰ－2－c	2
135	シレナシジミガイ		1			1					2
136	イノハマグリ	6	4	4		2	6		1	Ⅰ－1－c	23
137	ソメワケグリガイ		1							Ⅰ－2－c	1
138	ウラキツキガイ	3	2	1	1	1				Ⅱ－2－c	8
139	カブラツキガイ（平型）	1	3			1	1				1
140	カブラツキガイ（膨型）								1	Ⅰ－2－c	1
141	ツキガイ	1								Ⅱ－2－c	1
142	ヒメツキガイ	1	1							Ⅱ－2－c	2
143	ウミギクガイ	1								Ⅰ－2－a	1
144	メンガイの一種	10	3	2		1	5		1		22
145	クロチョウガイ							1		Ⅰ－4－a	1
146	カイシアオリガイ		1	1		1	8		1		12
147	カワラガイ	11	2	2		4	5	2		Ⅱ－2－c	26
148	リュウキュウザルガイ			1						Ⅱ－2－c	4
149	ミノガイ						3				3
150	カキの一種	1	3					1			5
151	ヒザラガイの一種			1					1		2
152	一枚貝不明	15		2			2				19
	一枚貝小計	714	85	53	63	29	242	26	54		1266
	合計	1518	662	280	108	85	760	70	219		3702
	最小個体数総合計										3702

貝の棲息場所

Ⅰ. Ⅱ. Ⅲ.	外洋・サンゴ礁域 内湾・転石域 河口干潟・マングローブ域	0 1 2 3 4	潮間帯上部 潮間帯中下部 亜潮間帯上緑部 干瀬 礁斜面及びその下部	Ⅰではノッチ, Ⅲではマングローブ 礁池内　イノー内 Ⅰにのみ適応	a. b. c. d. e.	岩盤 転石 泥・砂・礫底 マングローブ植物上 河川礫底
Ⅳ.	淡水域	5 6	止水 流水			
Ⅴ.	陸域	7 8 9 10	林内 林内・林縁部 林縁部 海浜部			
Ⅵ.	その他	11 12	打ち上げ物 化石			

2　城間遺跡出土の動物遺体

金子　浩昌

本遺跡の調査で出土した動物遺骸は量的にも少なく、種類も限られた。また時期的にも新しいものが混在するようであって、今後の検証が必要のようである。

Ⅰ．棘皮動物

棘皮動物ではウニ類棘片を多数出土している。このような出土は例が少ない。

第38表　ウニ部位別出土状況

出土地点	棘（g）	殻（g）
P－32	－	－
TP8ピット1	40	28
TP8ピット2	35	21
TP8ピット3	34	22
TP8ピット5	19	10
TP8ピット6	44.5	27
TP8ピット7	40.6	30
TP8ピット8	48	26
TP8ピット9	54	26
TP8ピット10	66	34
TP8ピット11	60	24
B地区		
Aトレンチ	－	－
不　明	－	－
計	441.1	248

第39表　棘皮動物出土状況

出土地点	層　序	個　数
TP8ピット1	第Ⅱ層	95
TP8ピット2	第Ⅱ層	12
TP8ピット3	第Ⅱ層	20
TP8ピット5	第Ⅱ層	5
TP8ピット6	第Ⅱ層	11
TP8ピット7	第Ⅱ層	18
TP8ピット8	第Ⅱ層	138
TP8ピット9	第Ⅱ層	164
TP8ピット10	第Ⅱ層	219
TP8ピット11	第Ⅱ層	152
計		834

Ⅱ．甲殻動物

カメノテの殻がまとまって多数出土している。殻長1.1㎝位の大きさである。カメノテは食用にもなるので集められたものであろうか。

第40表　カメノテ殻（フジツボの類）出土状況

出土地点	層　序	個　数
TP8ピット1	第Ⅱ層	114
TP8ピット2	第Ⅱ層	62
TP8ピット3	第Ⅱ層	62
TP8ピット5	第Ⅱ層	33
TP8ピット6	第Ⅱ層	106
TP8ピット7	第Ⅱ層	102
TP8ピット八	第Ⅱ層	70
TP8ピット9	第Ⅱ層	86
TP8ピット10	第Ⅱ層	114
TP8ピット11	第Ⅱ層	74
Bトレンチピット1	第Ⅱ層	1
不　明	不　明	1
計		825

第41表　カニ出土状況

出土地点	層序	部位	個数
TP8ピット9	第Ⅱ層	右可動指	2
B地区南西部	不　明	右可動指	1
		左可動指	3

Ⅲ．軟体動物

コウイカ甲片が出土している。

第42表　コウイカ出土状況

出土地点	層序	部位	個数
B－23	不明	甲羅	1
M－23	不明	甲羅	1
合計			2

Ⅳ．脊椎動物

a）魚　綱

メジロザメ科のサメ類の歯を１点検出している。歯冠高3.0㎝、尖端が若干摩滅しており、何かに使われた可能性がある。

その他に硬骨魚綱の上顎骨と鱗が検出されている。

第43表　サメ出土状況

出土地点	層序	部位	個数
A地区客土	表採	歯	1

第44表　魚骨出土状況

出土地点	層序	部位	個数
Q－26	第Ⅱ層	上顎骨　右	1
		ウロコ	21
		不明	1
合計			23

b）哺乳綱

イ　ヌ

遊離肢骨である。橈骨、完存する大腿骨は大型の標本でおそらく新しいものであろう。

第45表　イヌ遺存体部位別出土状況

出土地点	層序	RL不	橈骨			大腿骨			頸骨		
			p	s	d	p	s	d	p	s	d
C－30	不明	R									
		L								1	
		不									
H－30	不明	R		1							
		L									
		不									
不明	不明	R				（1完形）					
		L									
		不									

ネ　コ

２個体分の骨があるが、骨格は揃っていない。埋葬されたものが後に撹乱されたものであろう。

第46表　ネコ顎骨出土状況

出土地点	層位	部位	個数
B地区不明	不明	下顎骨	1

第47表　ネコ遺存体部位別出土状況

出土地点	層序	RL不	上腕骨			尺骨			大腿骨			頸骨		
			p	s	d	p	s	d	p	s	d	p	s	d
A－34	不明	R		(1完形)										
		L											1	
		不												
不明	不明	R		(1完形)			1			1			1	
		L		(1完形)						1			1	
		不					1			1				
合計		R		(2完形)						1			1	
		L		(1完形)									2	
		不												

ウ　マ

大型獣骨の中では出土量が最も多い。歯の数よりも四肢骨のほうが多い。脛骨、中手、中足骨には叩き割った亀裂痕がはいる。食用に当てられたものであろう。

第48表　ウマ歯牙・顎骨出土状況

出土地点	層序	部位	個数
C－28	不明	上顎　左　M 1	1
C－32	不明	上顎　右　P 3	1
D－34	不明	下顎　右　M 2	1
		下顎　左　P 3	1
合計			4

第49表　ウマ遺存体部位別出土状況

出土地点	層序	RL不	環椎骨	橈骨			頸骨			中足骨			指趾骨		
				p	s	d	p	s	d	p	s	d	基節骨	中節骨	末節骨
K－29	不明	R													
		L													
		不			1										
M－29	不明	R													
		L							1						
		不													
R－26	不明	R													
		L													
		不													1
A地区客土	表採	R													
		L													
		不			1							1			
不明	不明	R													
		L													
		不	1							1		1			
合計		R													
		L							1						
		不	1	2						1		2			1

イノシシ・ブタ

イノシシもしくはブタの歯や骨は多い。おそらくその大部分は家畜化された現在のブタであろうと思われる。下顎骨、四肢骨はいずれも大きい。

第50表　イノシシ歯牙・顎骨出土状況

出土地点	層位	部位	個数
南西部　P－26・27，Q－26・27	Ⅱ	上顎　I 1	1
B地区Cトレンチ	Ⅱ	上顎　M1	1

第51表　ブタ歯牙出土状況

出土地点	層位	部位	個数
O－24	不明	下顎骨　左	1
P－26	不明	下顎骨　右　犬歯（オス）	1
B地区北東部	Ⅱ	下顎骨　左　（破片）	1
不明	不明	下顎骨　右　犬歯（オス）	1
不明	不明	下顎骨　M1	1
不明	不明	上顎骨　右　M2	1
不明	不明	上顎骨　右	1

第52表　ブタ遺存体部位別出土状況

出土地点	層序	RL不	肩甲骨			上腕骨			橈骨			寛骨			大腿骨			頸骨			中手足骨		
			p	s	d	p	s	d	p	s	d	p	s	d	p	s	d	p	s	d	p	s	d
C－16～23	不明	R																					
		L																	1				
		不																					
C－27	不明	R																					
		L					1												1				
		不																					
E－30	不明	R																					
		L																					
		不																			1		
K－29	不明	R																					
		L																	1				
		不																					
M－27	不明	R																					
		L											1										
		不																					
B地区北東部	不明	R							1														
		L																	1				
		不																					
B地区南東部	不明	R																					
		L		1															2				
		不																					
B地区北西部	不明	R																					
		L																	1				
		不																					
A地区客土	不明	R																					
		L					1																
		不																					
不明	不明	R						1															
		L														1							
		不																					
合計		R		1					1				1						2				
		L					2									1			5				
		不																				1	

ヤ　ギ

ブタとともに出土量は多い。ヤギの骨がこのように目立つのもかなり新しい時期の組合せではないかと思われる。骨には若、成獣が含まれる。

第53表　ヤギ歯牙・顎骨出土状況

出土地点	層位	部位	個数
A－34	不明	下顎骨　右　M2	1
D－31	不明	下顎骨　右　dm4～m2	1
B地区北西部	不明	下顎骨　左　M2	1
不明	不明	下顎骨　右　P4	1
合計			4

第54表　ヤギ遺存体部位別出土状況

出土地点	層序	RL不	下顎骨	肩甲骨			上腕骨			尺骨			中手骨			頸骨			指趾骨		
				p	s	d	p	s	d	p	s	d	p	s	d	p	s	d	基節骨	中節骨	末節骨
C−31	不明	R		1																	
		L							1												
		不																			
C−16~23	不明	R																			
		L	1																		
		不																			
H−30	不明	R																			
		L		1																	
		不																			
K−29	不明	R																			
		L		1																	
		不																			
L−28	不明	R																			
		L									1										
		不																			
B地区 Bトレンチ Pit−2	不明	R																			
		L															1				
		不																			
B地区 南東部	不明	R																			
		L																	1		
		不																			
B地区 南西部	不明	R																			
		L												1							
		不																			
不明	不明	R																			
		L						1	1												
		不																			
合計		R		2																	
		L	1	1				1	2		1			1			1		1		
		不																			

ウ　シ

歯の出土は最も多いが、骨の多くは断片となっているために確認されることが少なくなっている。肋骨に切断されたものがある。

第55表　ウシ歯牙・顎骨出土状況

出土地点	層位	部位	個数
A−25	不　明	不明　歯破片	2
D−31	不　明	下顎　右　M3	1
N−28	不　明	下顎　右　M1	1
Q−26	不　明	上顎　右　M3	1
B地区Cトレンチ	不　明	不明　　P1	1
B地区北東部	不　明	下顎　左　M2	1
B地区南東部	不　明	不明　歯破片	1
B地区南西部	不　明	上顎　左　M2	1
A地区客土	不　明	不明　歯破片	1
合　計			10

第56表　ウシ遺存体出土状況

出土地点	層位	部位	個数
B地区2トレンチ	不　明	中節骨	1

まとめ

本遺跡から検出された動物遺体には遺跡本来のものと現代のものの両方を含むようである。層位的にそれを確かめることは出来なかったが、形質的にはほぼ間違いないであろう。

また魚骨の少ないことも本遺跡の特徴であるが、南島の遺跡では時期が新しくなる程魚骨の出土が減少する。ブタ、ウシへの依存傾向が強まるのである。ブタ、ウシの家畜としての利用がこの傾向をいっそう強めていく。

城間遺跡の資料を今少し混在を含まぬ状況で、今後考察出来ればと思っている。

第Ⅴ章　まとめ

ここでは、発掘調査によって出土した遺構・遺物について、前述の各項目の成果の概略と若干の考察をもってまとめとする。

遺構はＡ地区とＢ地区東部で石積み＋溝遺構（総延長69ｍ）、石敷き遺構９基、石列２基、窯遺構３基、落込み群、Ｂ地区南西部で落込み群、石列２基、炉址？１基、集石１基が確認された。

前述の遺構で注目できるものに窯遺構がある。前項で製糖用の窯の話に触れたが、発掘調査後、県内の製糖用の窯について資料収集を少々試みたところ、全長二間半（約4.5ｍ）で勾配５度程の登り窯状の窯について聞き取り調査報告および略図の資料（聞き取りより宜野湾市が作成）（註１）、石川市内に所在する窯跡（註２）を見ることができた）が、本遺跡から確認された窯につながる資料の収集はできなかった。

土器は、沖縄貝塚時代前期（高宮暫定編年前Ⅳ期）の伊波式あるいは荻堂式土器（第１類土器）、同時代中期（高宮暫定編年前Ⅴ期）と思われる土器（第１類土器）、同時代後期後半（高宮暫定編年後Ⅳ期前後）の土器（第２類土器）、グスク時代の土器（第３類土器）が出土した。第１類土器は第６層上面で僅かに出土したが、明確な包含層の広がりおよび遺構等は認められなかった。第２類土器は主にＱ－26・Ｎ－31グリッド付近である南西部で出土した。第３類とした土器は５点の出土でいずれも上層の出土である。陶磁器等が出土していることからこれらの遺物に伴うものと推察する。

なお、注目すべき土器に土製品として扱った資料（第13図）がある。同資料は「こしき」の底部資料ではないかと推察するからである。しかし、同資料の報告が県内でこれまでに無いことから今後の資料の増加を待って再検討したい。

石器は総数113点検出された。石器の中でも石斧の出土状況を見ると表土層で広く採集されているもののまとまった地区および層は南西部の第２類土器が出土する層であった。石器の特徴等については、県内の同時期の遺跡と特に変わったものは見られなかった。

貝製品は、総数25点が出土した。同製品はタカラガイ有孔品、二枚貝有孔品等が認められた。

磁器は、13世紀後半と推察されている白磁のビロースクタイプ碗Ⅱ、14～16世紀の青磁、16～19世紀の染付（中国産および肥前産）、16～19世紀の色絵・かけ分け・るり釉（中国産）、その他には、明治以降の国産磁器が出土した。

沖縄産陶器は、施釉（上焼）1,000点余、無釉焼き締め（荒焼）1,327点が出土した。沖縄産陶器の考古学的編年は未だ十分でないことから現在は他の遺物より所属年代を推察する方法を取っている。沖縄産陶器の出土状況を見た場合、遺構上面の撹乱層部分より主に出土していることから、前述の磁器の年代の範囲、または、その中のある時期のものと推察したい。

軟質陶器は、那覇市壺屋で「アカムヌー」と呼ばれている焼物の一群で、胎土から概ね４種

に分けた。器種は鍋、浅鉢、鉢、壺、注口、皿、蓋等が認められた。出土の状況は、前述の陶磁器等とほぼ同じで総数3,145点である。

円盤状製品は総数236点出土した。素材で見ると無釉焼き締め（荒焼）66.9%、施釉（上焼）13.1%と沖縄産陶器が全体の80%を占めた。前述の状況から推察して沖縄産陶器の時期を念頭に置いて製作および使用年代を考える必要があろう。サイズは直径3.1～4.0㎝が45点、直径4.1～5.0㎝が77点、直径5.1～6.0㎝が54点と多く、直径3.1～6.0㎝が全体の74%を占めた。

その他の人工遺物の中で注目すべきものに、B地区南西部より出土した「開元通寶」がある。詳細は前項の記述に委ねたい。また、その他の遺物についてもそれぞれの項に委ねることにする。

自然遺物は、貝類遺存体と動物遺体に分けられた。

前者の資料の棲息地を見ると外洋・サンゴ礁域の亜潮間帯上縁部、リーフ、礁斜面で岩盤地帯、泥・砂・礫底に棲息する貝が全体の70%前後を占めていた。これは城間遺跡の西側に広がる海の環境にほぼ類似することから目の前の海から主に貝を採集した可能性が想定された。なお、調査区別の特徴等については、前項を参照いただきたい。

動物遺体については、他の遺物の出土状況同様、遺存体からも現代の動物の混在が確認された。遺体は魚骨が少なく、ブタ、ウシ、ヤギ、の家畜化されたもの、現代のイヌ、ネコと思われる遺体が確認された。

次に遺跡を大きく２つに分け、空間の性格について若干の考察を試みることにする。

B地区南西部が貝塚時代後期後半前後（高宮暫定編年後Ⅳ期前後）の土器、石斧・叩き石等の石器、古銭（開元通寶）、落込み群（柱穴？）集石、石列、炉址？と他の遺跡とほぼ共通する遺物・遺構の内容が確認され、出土の状況もそれぞれが落込み群（柱穴？）の部分に集まる傾向（セット？）があったことから居住空間ではなかったかと推察する。

他の地区は、13世紀後半から昭和10年代の陶磁器等の遺物が出土した。確認された遺構は溝と石列、石敷き、窯跡等であった。前述の遺構の中でも最も広がりを持つ石列と溝を組み合わせた遺構は、造りが雑で広いひろがりを有する（総延長69m）ことから建築物に伴うものといった様子は窺えなかった。また、同調査区から住居址のプランを摑める遺構も確認されなかった。

遺構の状況等から遺構の機能を推察するなら、広い空間の区画・排水、窯跡等、居住以外の空間が考えられる。例えば、生産空間が想定されるが、これを裏付ける遺跡からの資料が乏しい。参考までに昭和10年代の遺跡一帯の土地利用を見ると大半が畑である（註３）。

遺構の時期としては、石列、石敷き、窯跡等の遺構の石の中から中国陶磁器等が僅かに出土していることから16～19世紀頃と推察している。

この地区を居住空間以外と想定する場合、出土した遺物の扱いが問題になると思うが、考えとしては、生産等の過程あるいは後のなんらかの原因で堆積したと推察したい。しかし、遺物

の出土が7.000点を越えること、遺物の内容が豊富であることから同地区の空間利用については今後さらに検討して行きたい。

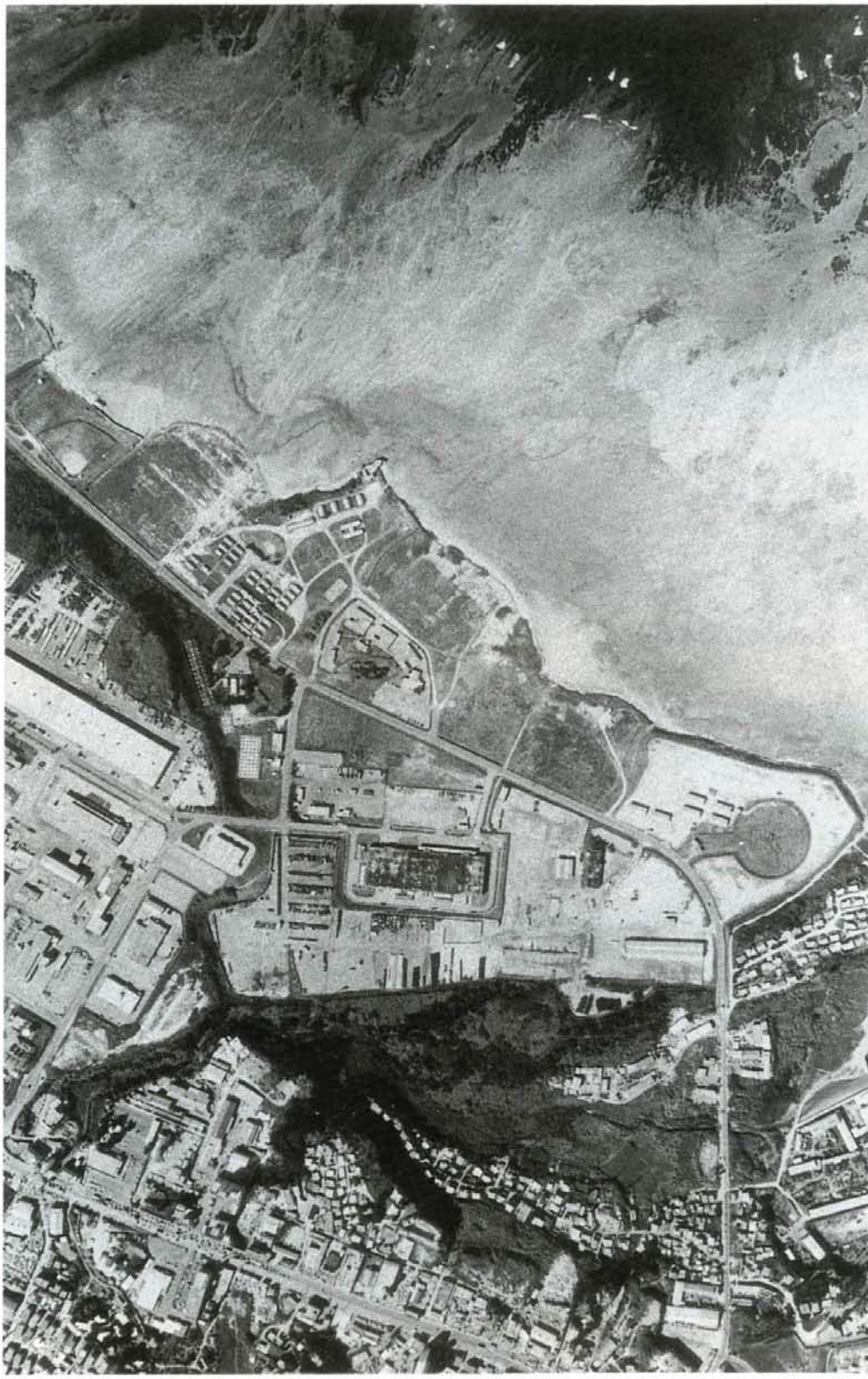
（註）

1．宜野湾市史編集委員会　宜野湾市　宜野湾市史民俗編　昭和60年３月20日

2．石川市教育委員会の宮里実雄氏に案内および説明を賜わった。

3．浦添市史編集委員会　浦添市教育委員会　昭和61年３月31日　浦添市史第６巻

図　　版



図版１　遺跡周辺の航空写真

図版 2　A地区近景（南より）

図版 3　A地区近景（北より）

図版 4　A地区発掘作業状況

図版 5　A地区発掘作業状況

図版 6　A地区褐色土層の範囲

図版 7　A地区南側の黒褐色土層の範囲

図版 8　A地区C－13グリッドからC－15グリッドの東壁層序

図版 9　A地区石列遺構

図版 10　A地区石積み遺構

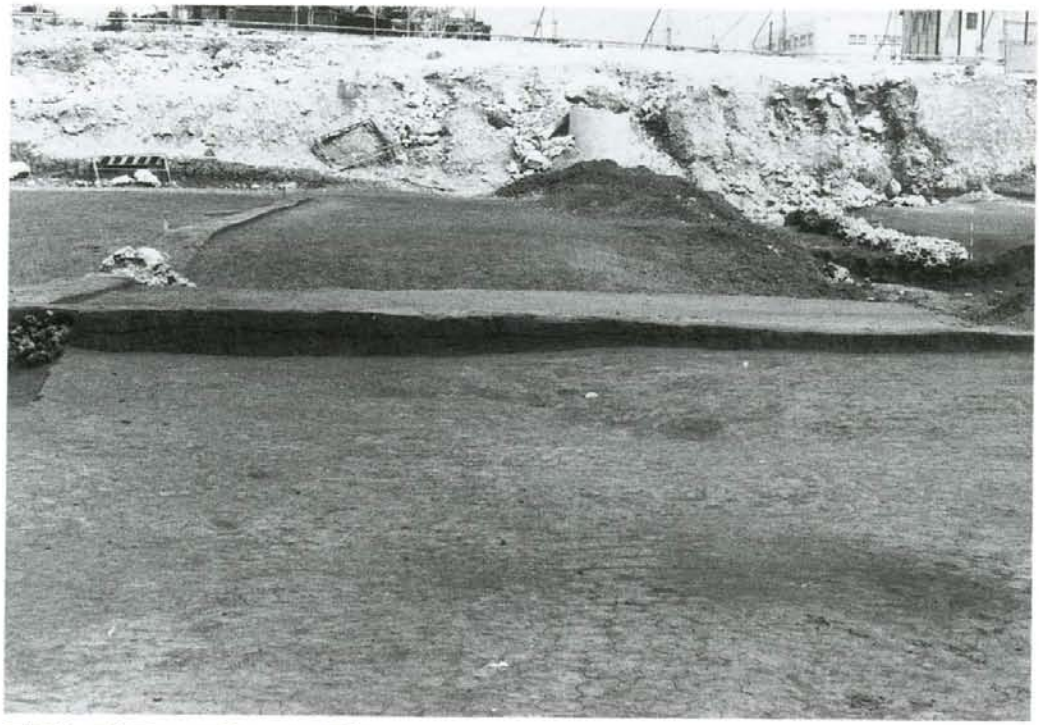
図版 11　A地区石積み遺構の断面

図版 12　B地区近景（東より）

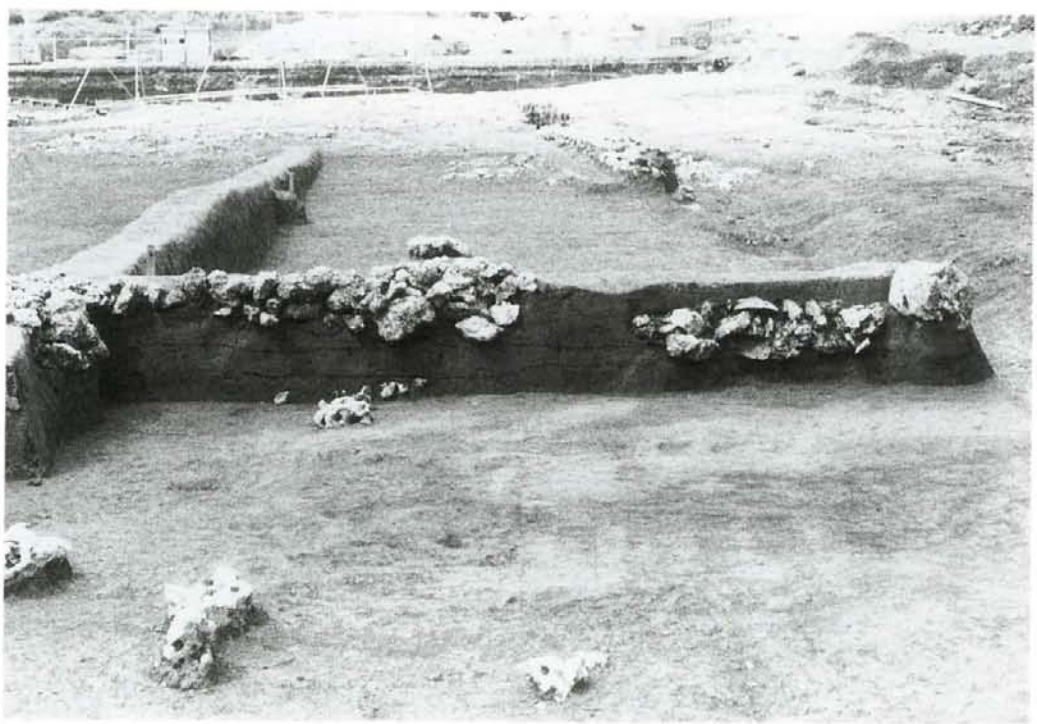
図版13　B地区近景（南より）

図版 14　B地区発掘作業状況

図版 15　B地区発掘作業状況



図版 16　B地区D－25グリッドの層序



図版17　B地区C－26グリッド北壁の層序

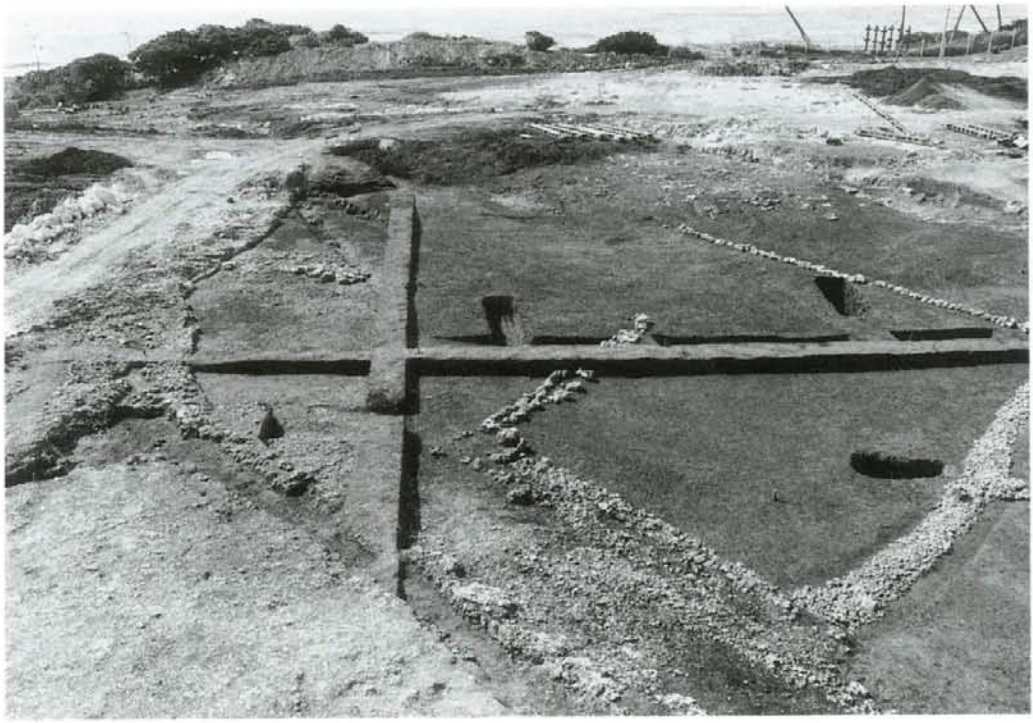
図版18　B地区耳東部の石列・石積み・石敷遺構（西より）

図版19　B地区南東部の石列・石積み・石敷遺構（東より）

図版 20　B地区南東部の落ち込み群

図版 21　B地区南東部の窯遺構（B）

図版22　B地区北東部の石列・石敷・溝遺構（北より）



図版23　B地区北東部の石列・石敷・溝遺構（東より）

図版 24　B地区北東部E－35グリッドとF－35グリッドの北壁層序

図版 25　B地区C－31グリッドの窯遺構（A）

図版 26　B 地区北西部の近景

図版 27　B 地区北西部M－31グリッドの層序

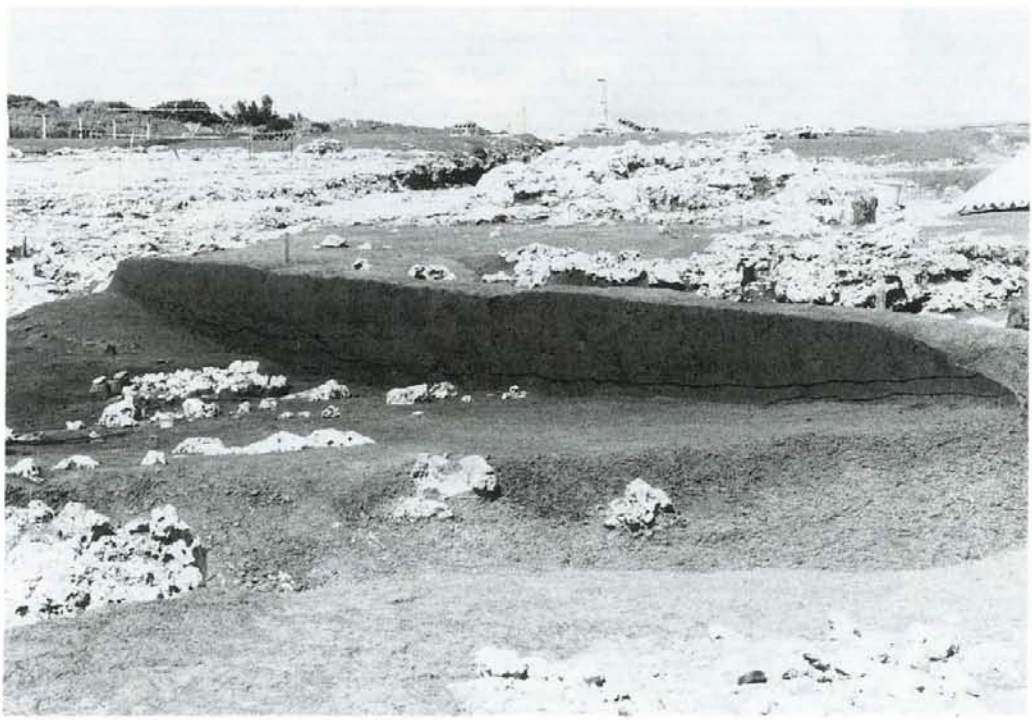
図版 28　B地区北西部の石列遺構

図版 29　B地区北西部の落ち込み群

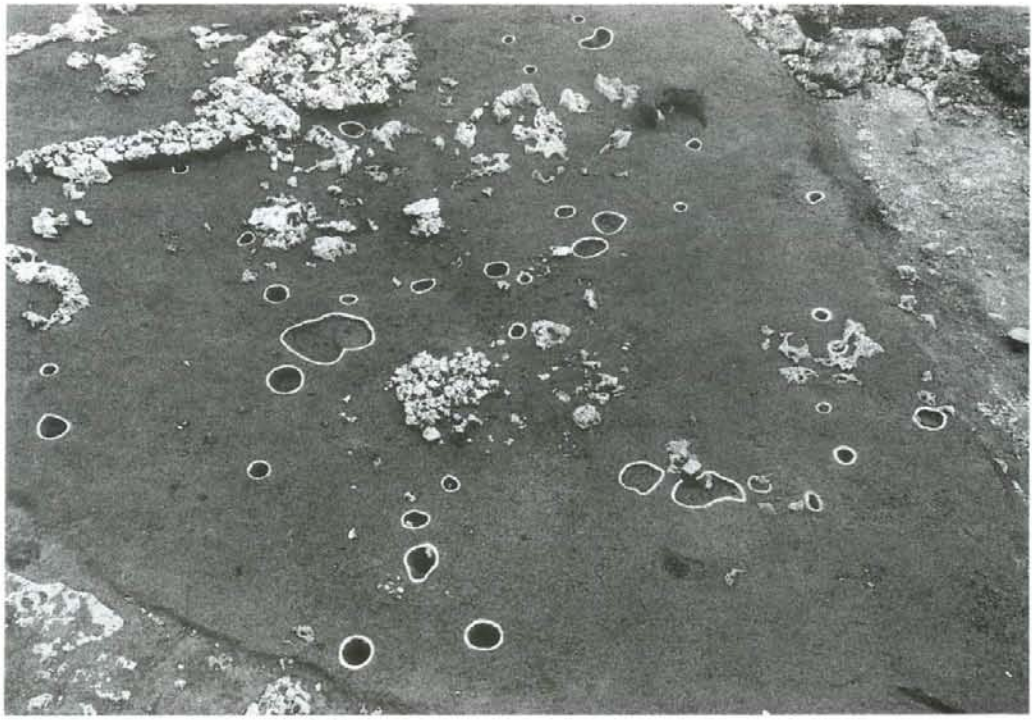
図版 30　B地区南西部の近景（北より）

図版31　B地区南西部の近景（東より）

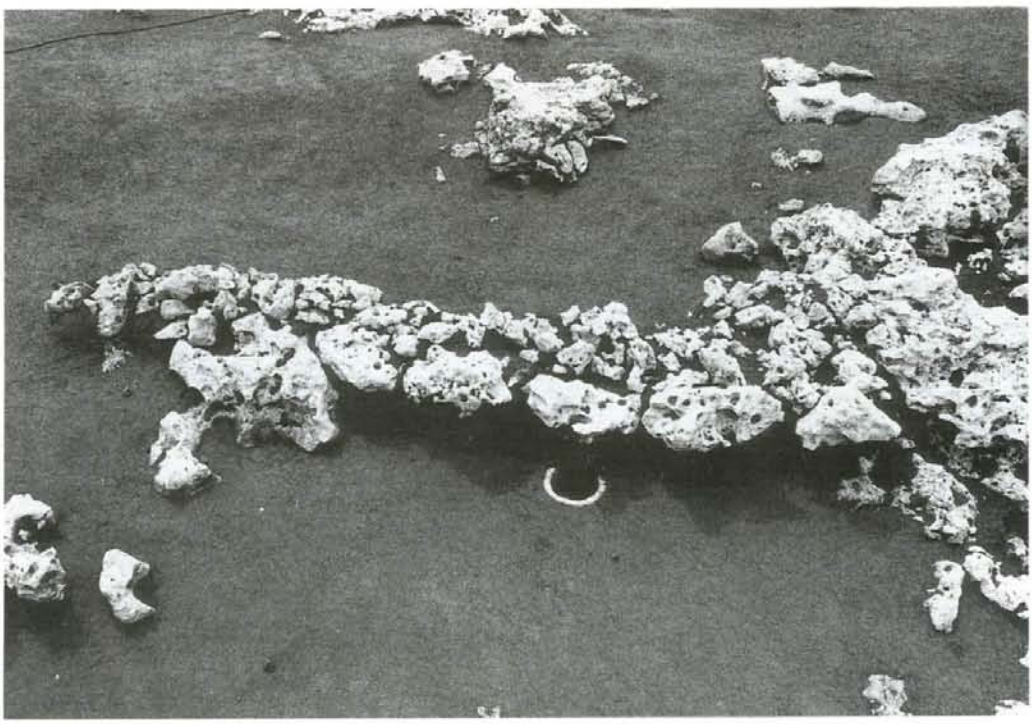
図版 32　B地区南西部の発掘作業状況



図版 33　B地区南西部のQライン東壁層序



図版 34　B地区南西部の落ち込み群



図版 35　B地区南西部の石列遺構

図版 36　B 地区南西部の集石遺構

図版 37　B 地区南西部の炉址（？）遺構

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

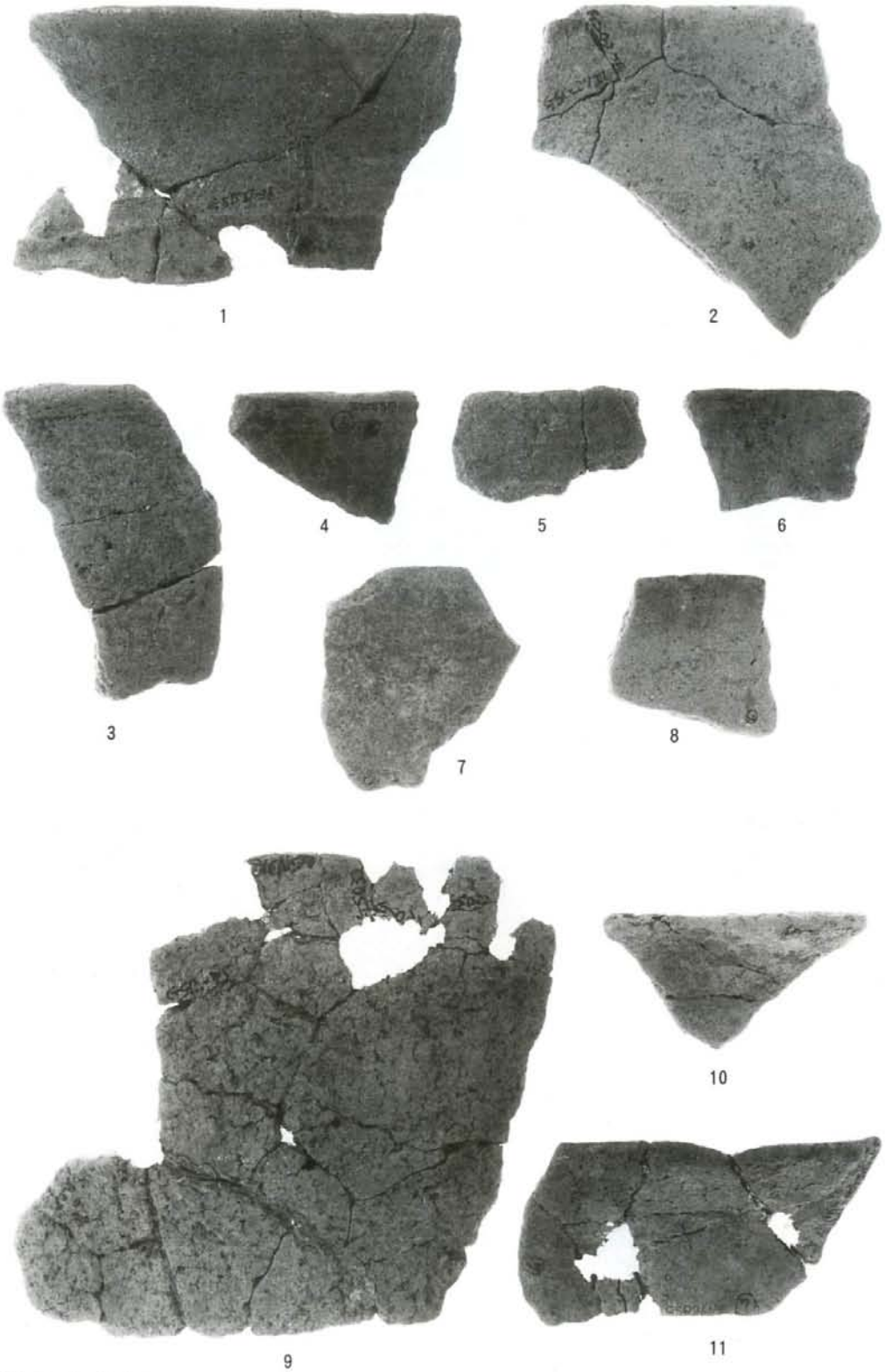
12

13

14

15

図版 38　第 1 類土器



図版 39　第 2 類土器

1

2

3

4

5

6

7

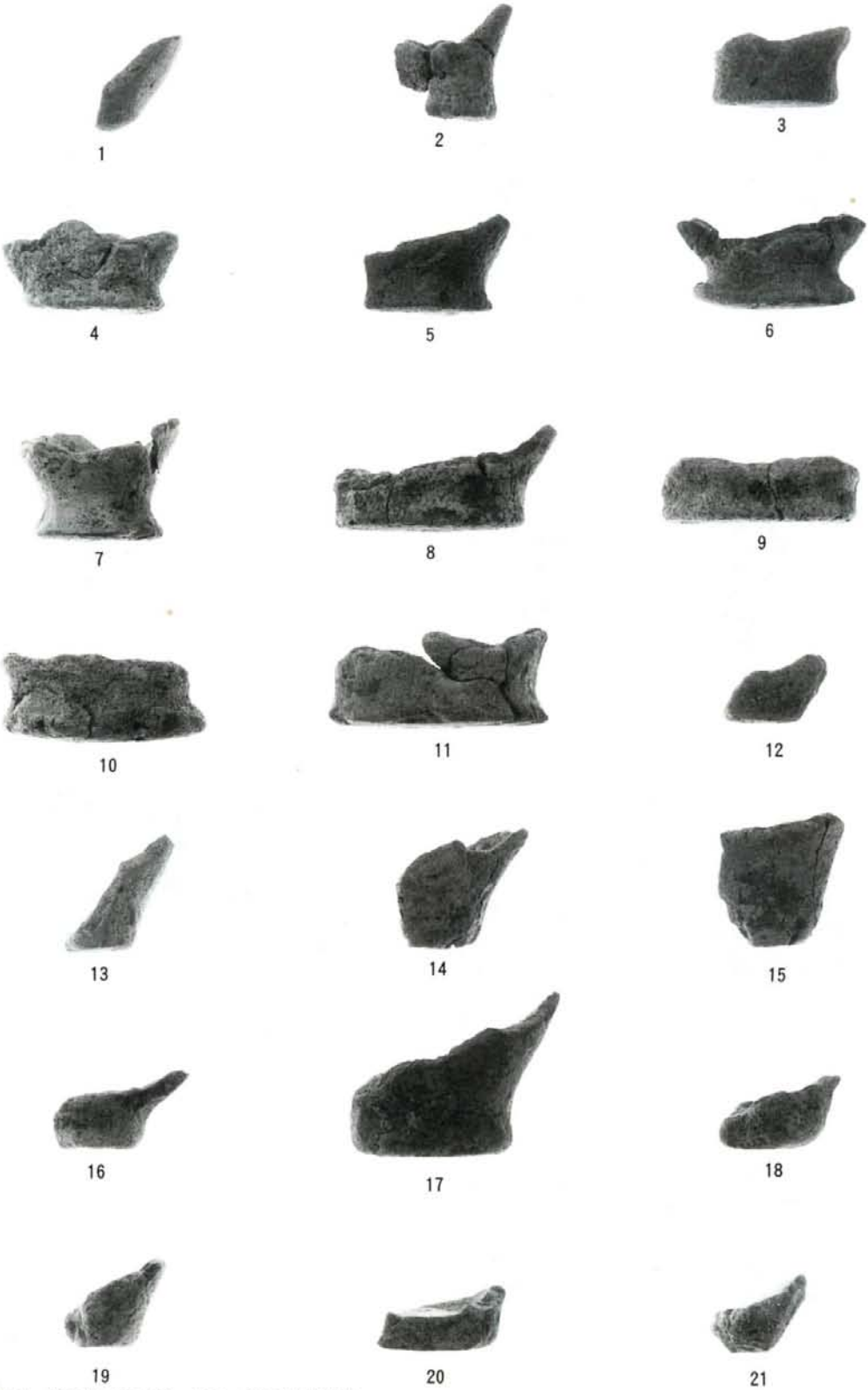
8

9

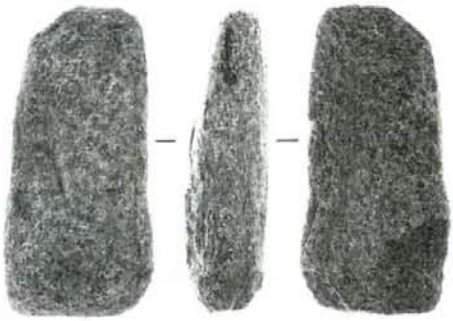
10

11

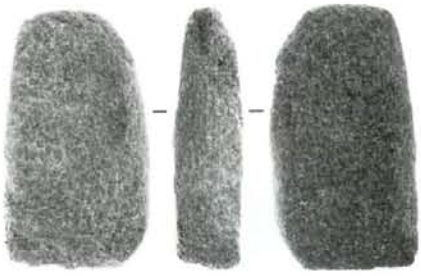
図版 40　第 2 類土器



図版 41　第 2 類土器（1 ～20）、第 3 類土器(21)



1



2

3

4

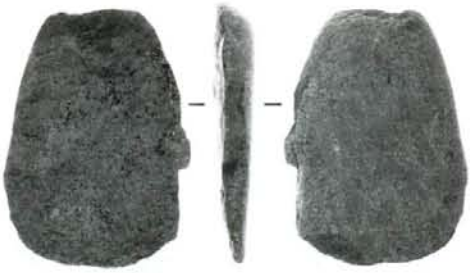
5

6

7

8

図版 42　石斧(1)



1

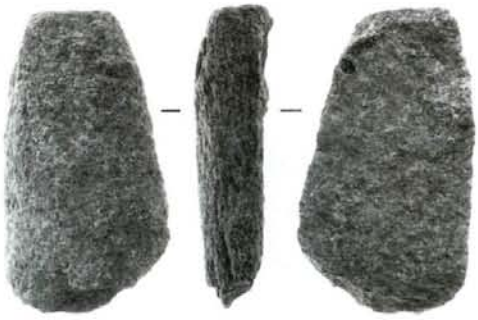
2

3

4

5

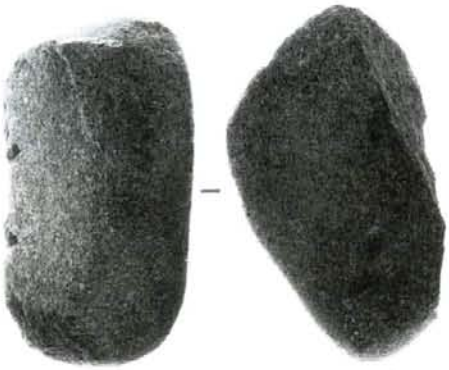
6



7

8

図版 43　石斧(2)



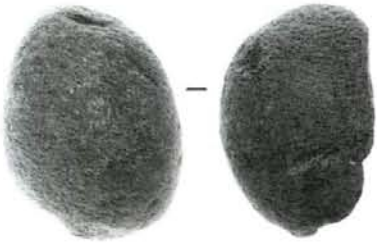
1

2

3

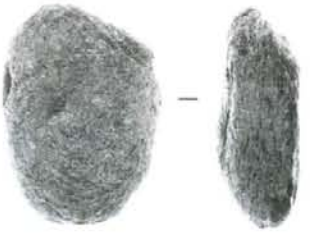
4

5

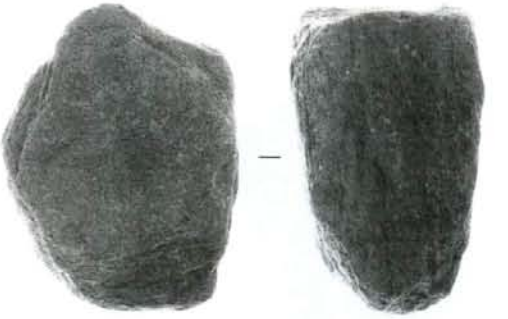


6

図版 44　敲石

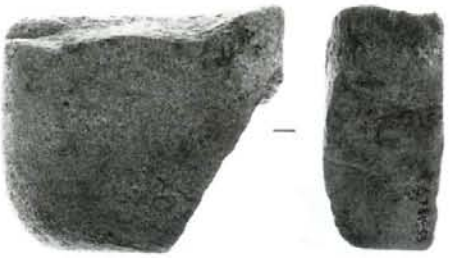


1

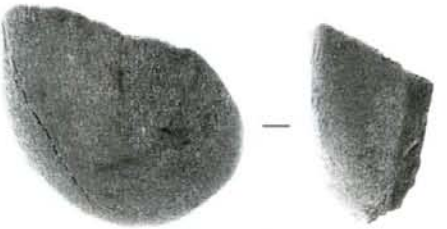


2

3



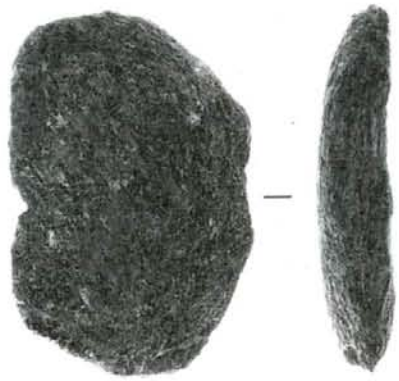
4



5

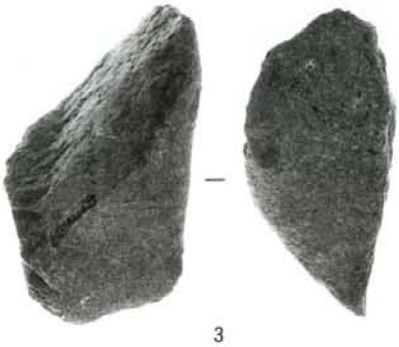
6

図版45　敲石（1～5）、磨石(6)



1

2



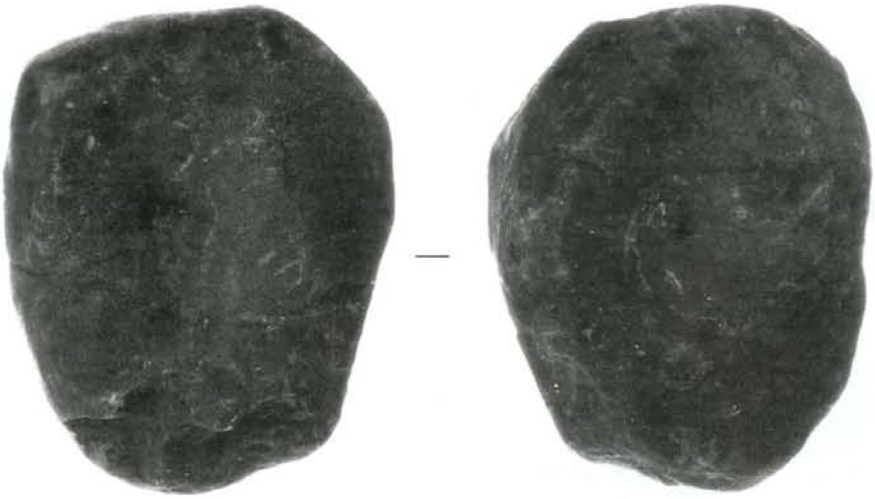
3

4

5

6

図版46　磨石（1・2）、器種不明（3～6）



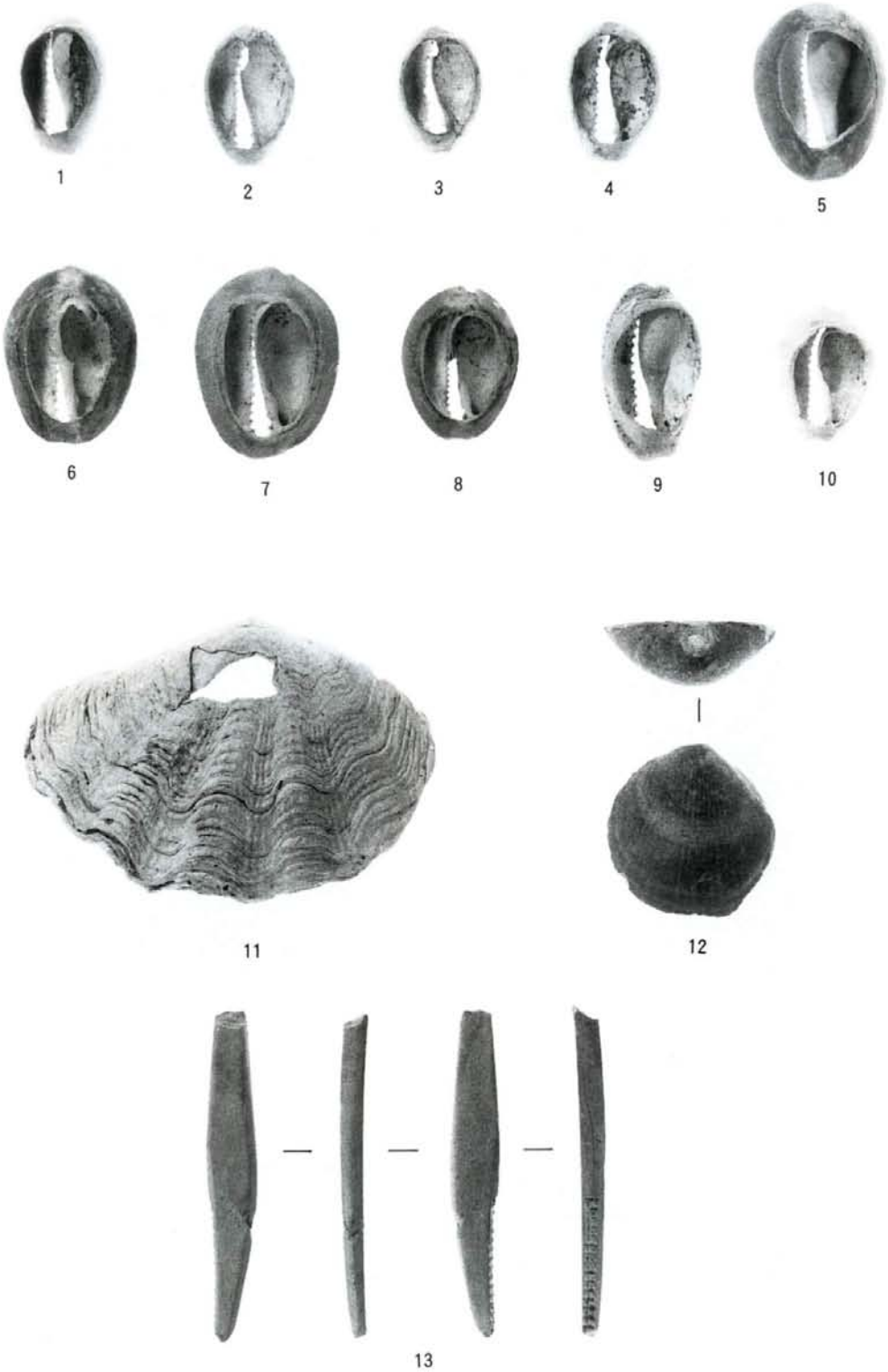
1

2

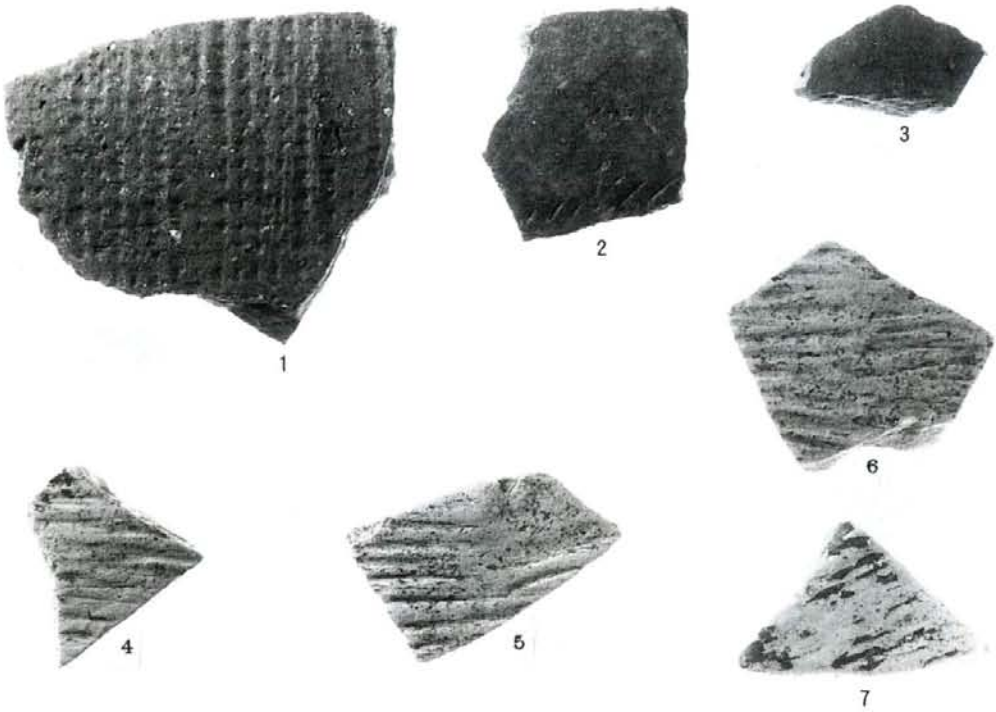
3

4

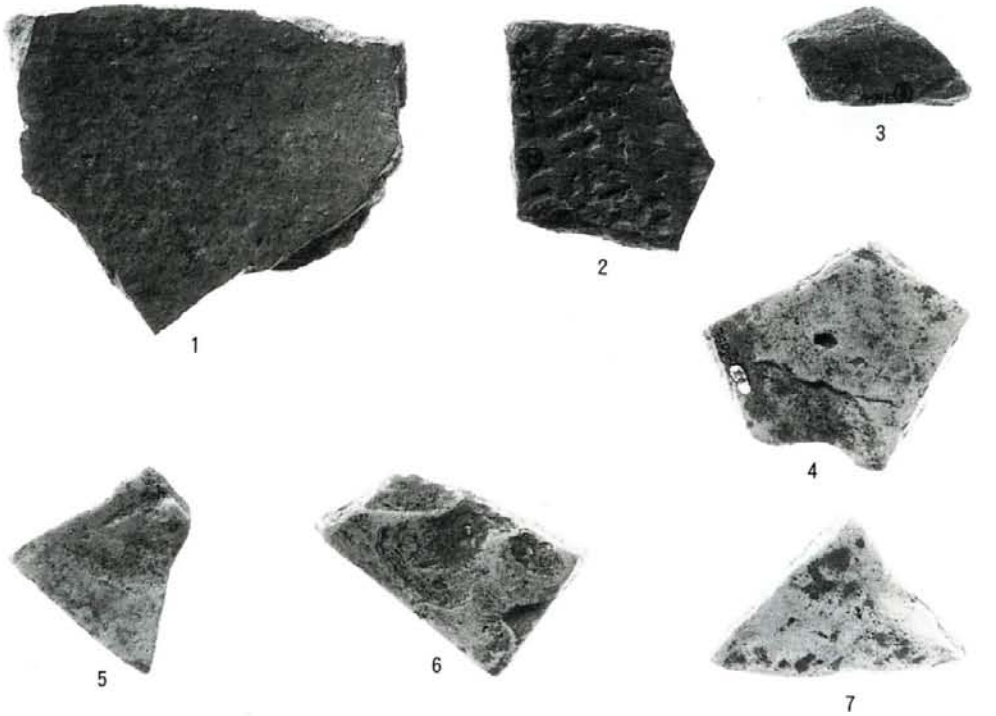
図版 47　くぼみ石(1)、石皿（2・3）、器種不明(4)



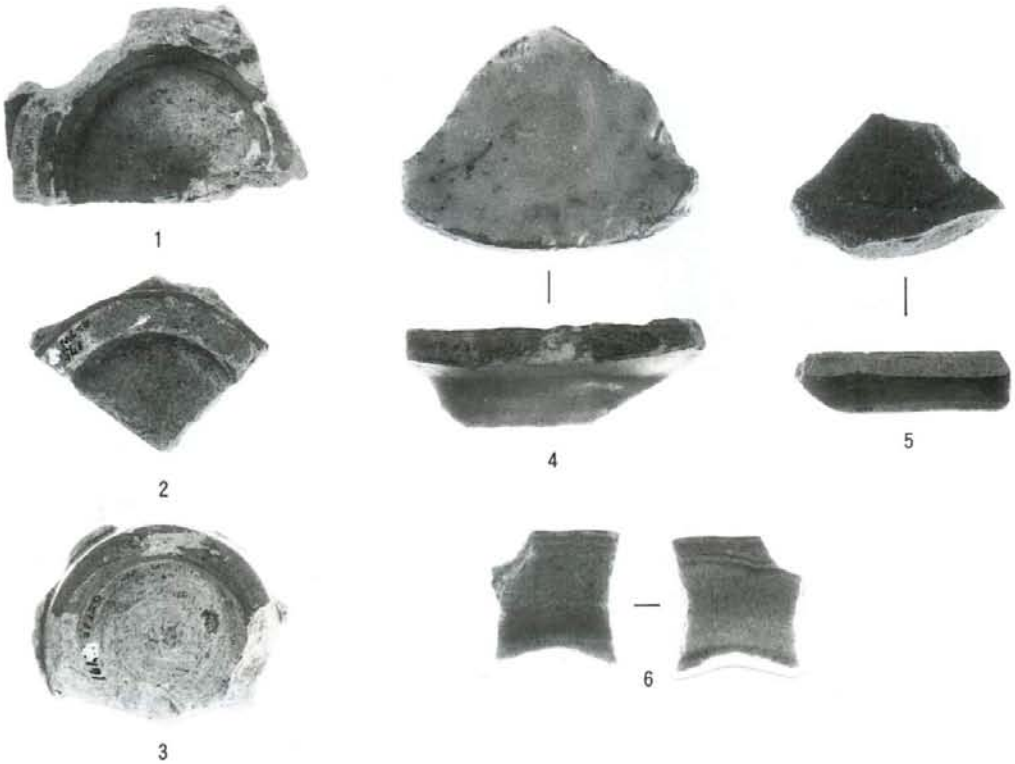
図版 48 タカラガイ有孔品（1～10）・二枚貝有孔品（11・12）・骨製品(13)



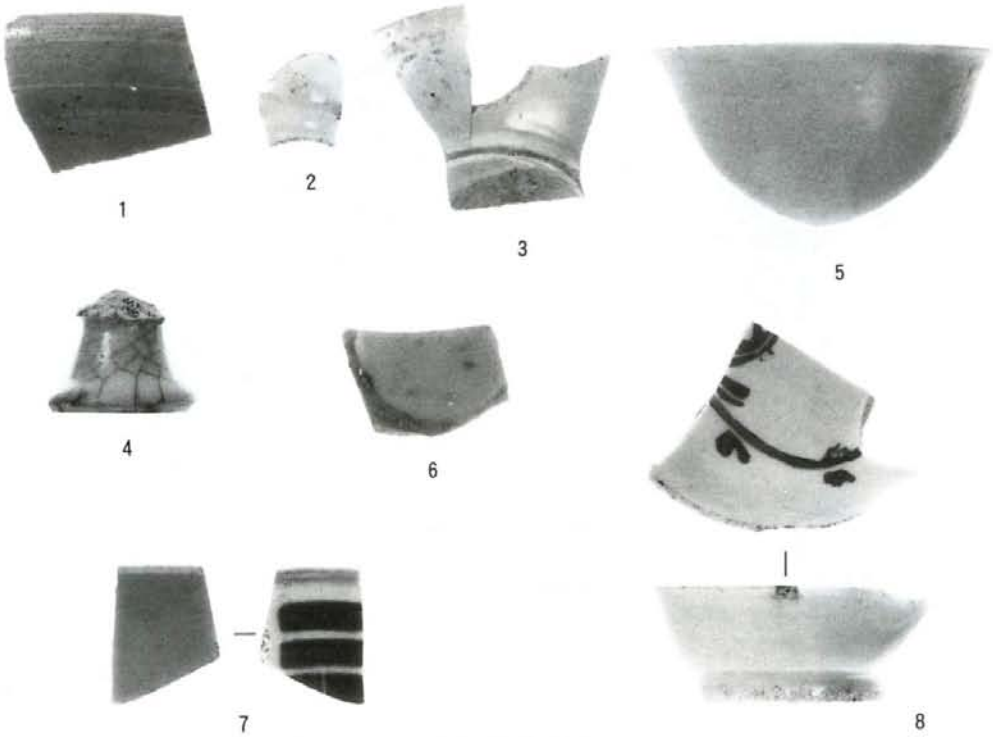
（表面）



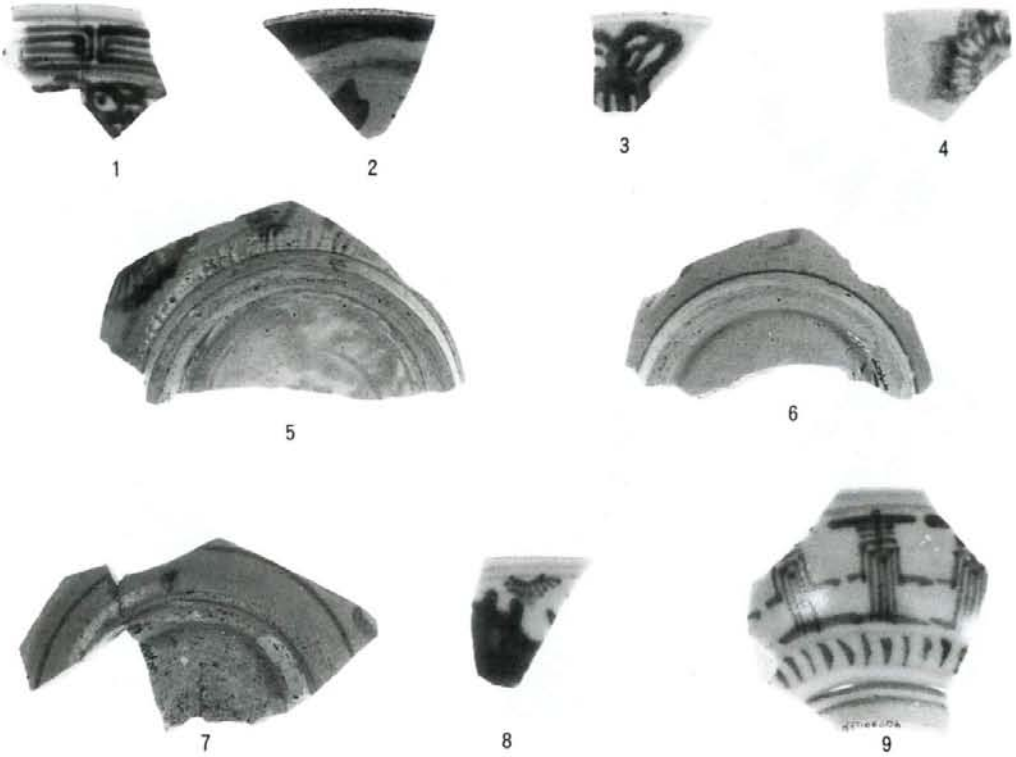
図版 49 類須恵器（裏面）



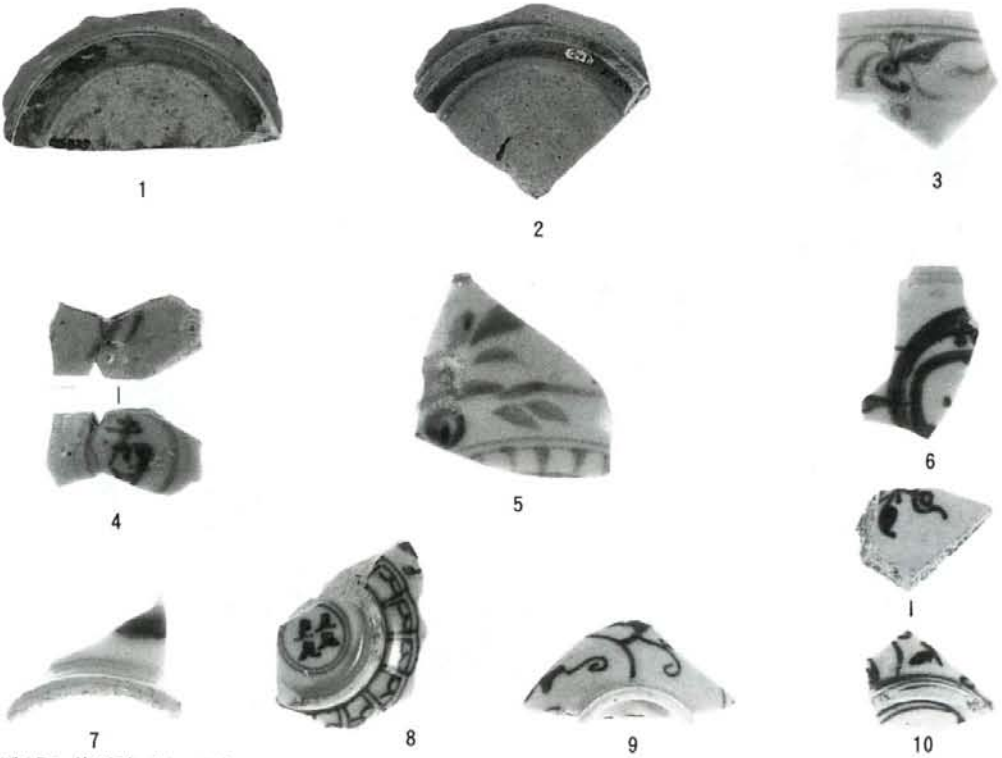
図版 50 青磁（碗 1 ～ 4，皿 5 ・ 6）



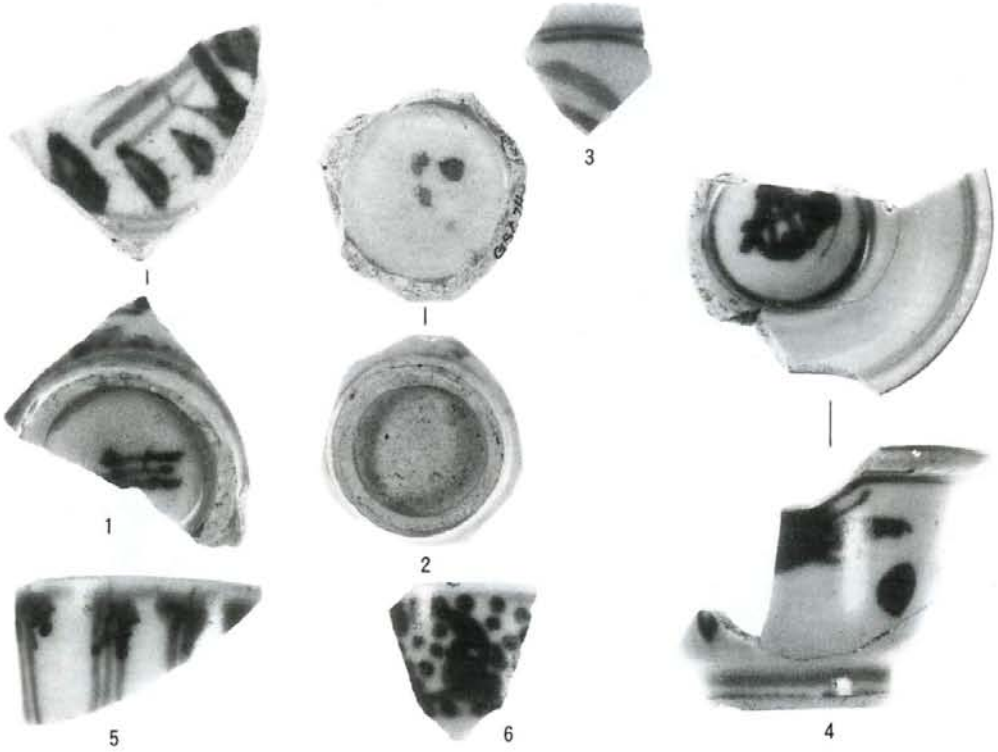
図版 51 白磁（1 ～ 4）、色絵（5 ・ 6 ・ 8）、かけ分け青磁(7)



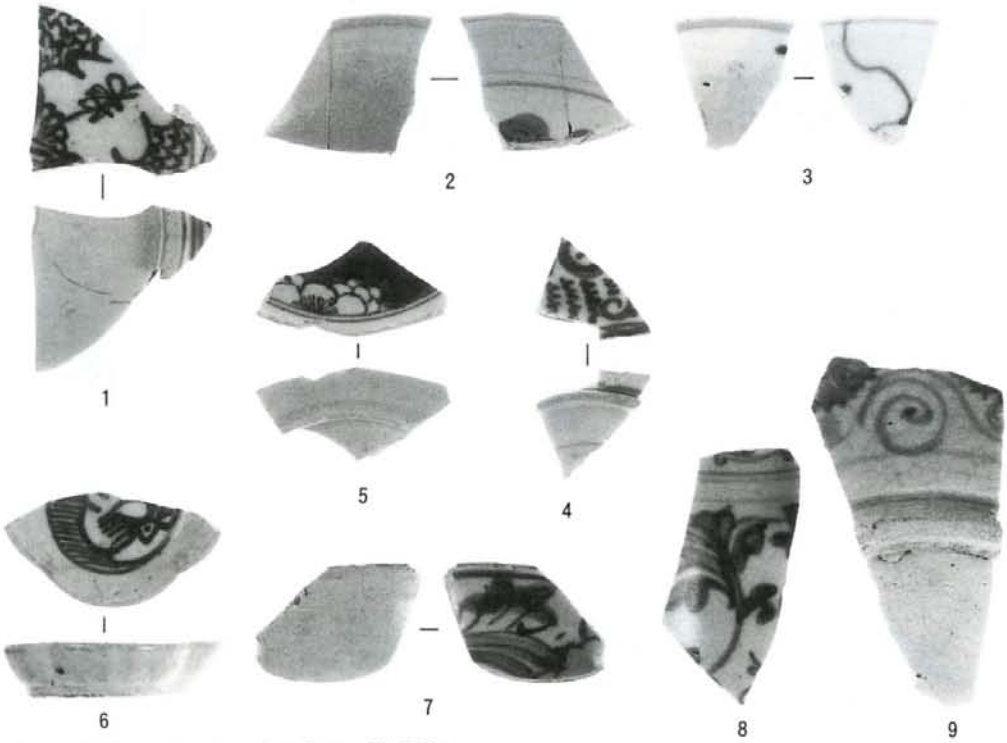
図版52　染付碗（1～9）



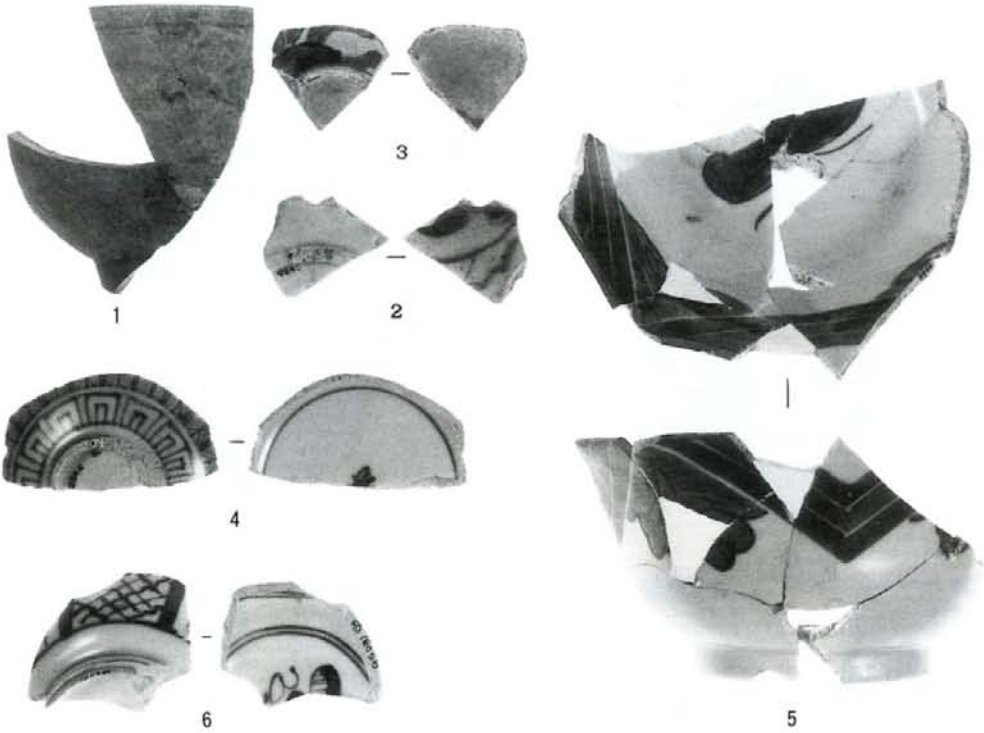
図版53　染付碗（1～10）



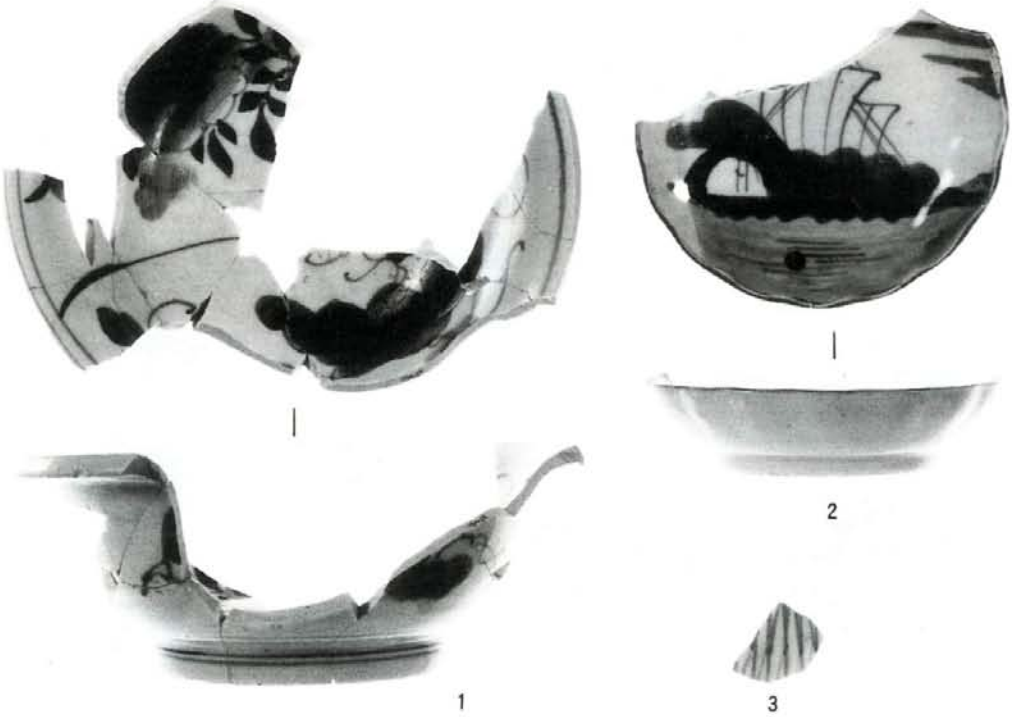
図版 54 染付坏（1～6）



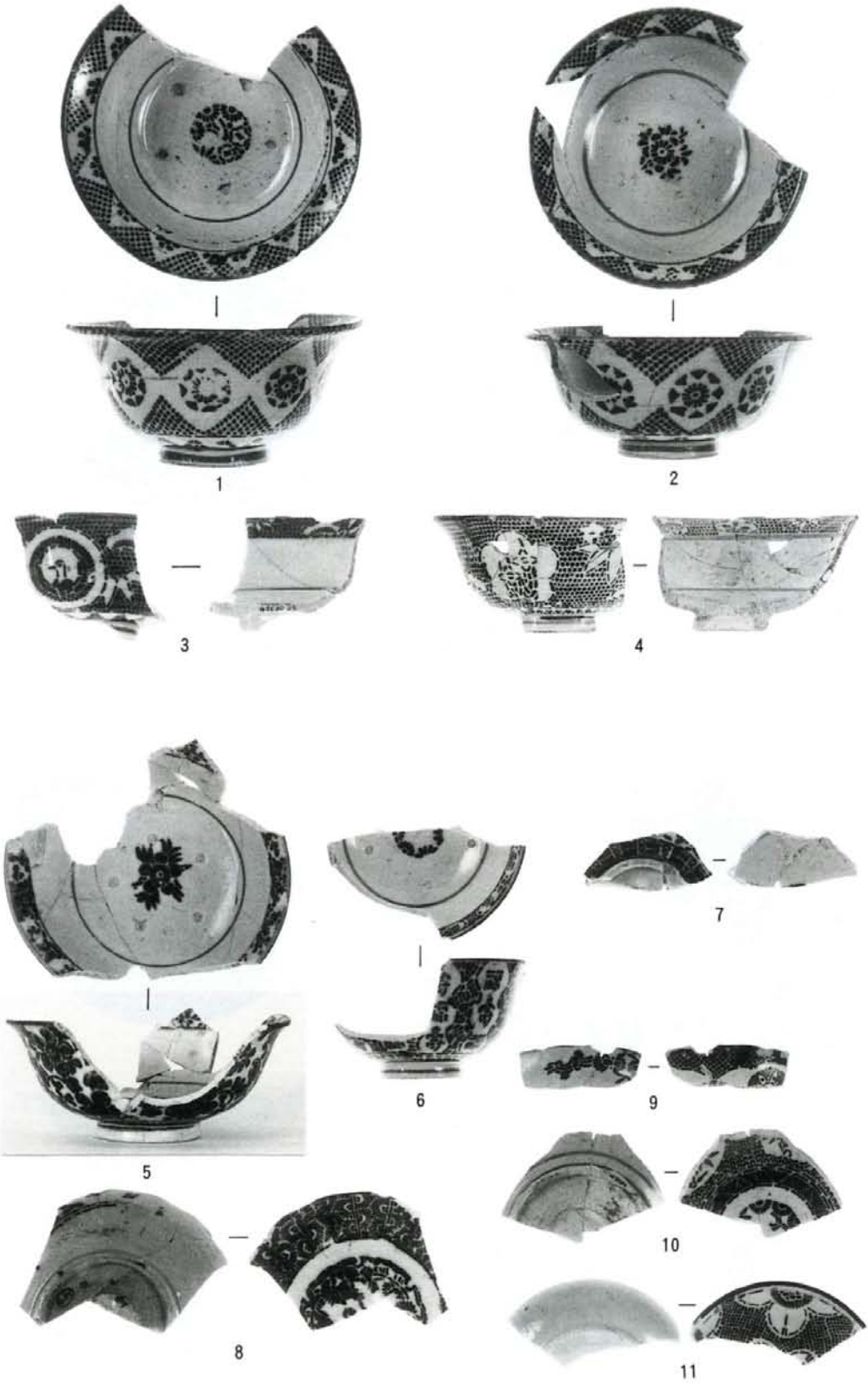
図版 55 染付皿（1～7）、染付瓶(8)、染付鉢(9)



図版 56　肥前産染付　碗（1～4）、鉢（5・6）



図版 57　肥前産染付　鉢(1)、皿(2)、瓶(3)



図版 58　型紙染付碗（1～7）、皿（8～11）

1

2

3

4

5

6

7

8

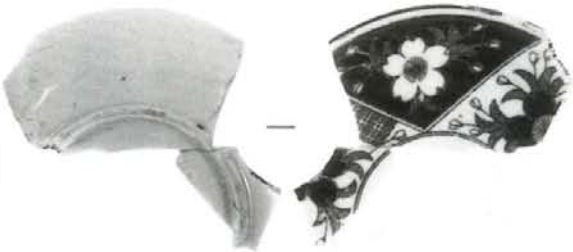
9

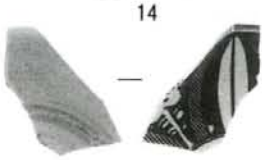
10

11

12

1

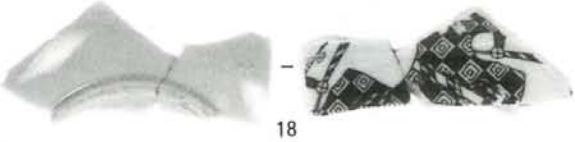

14


16

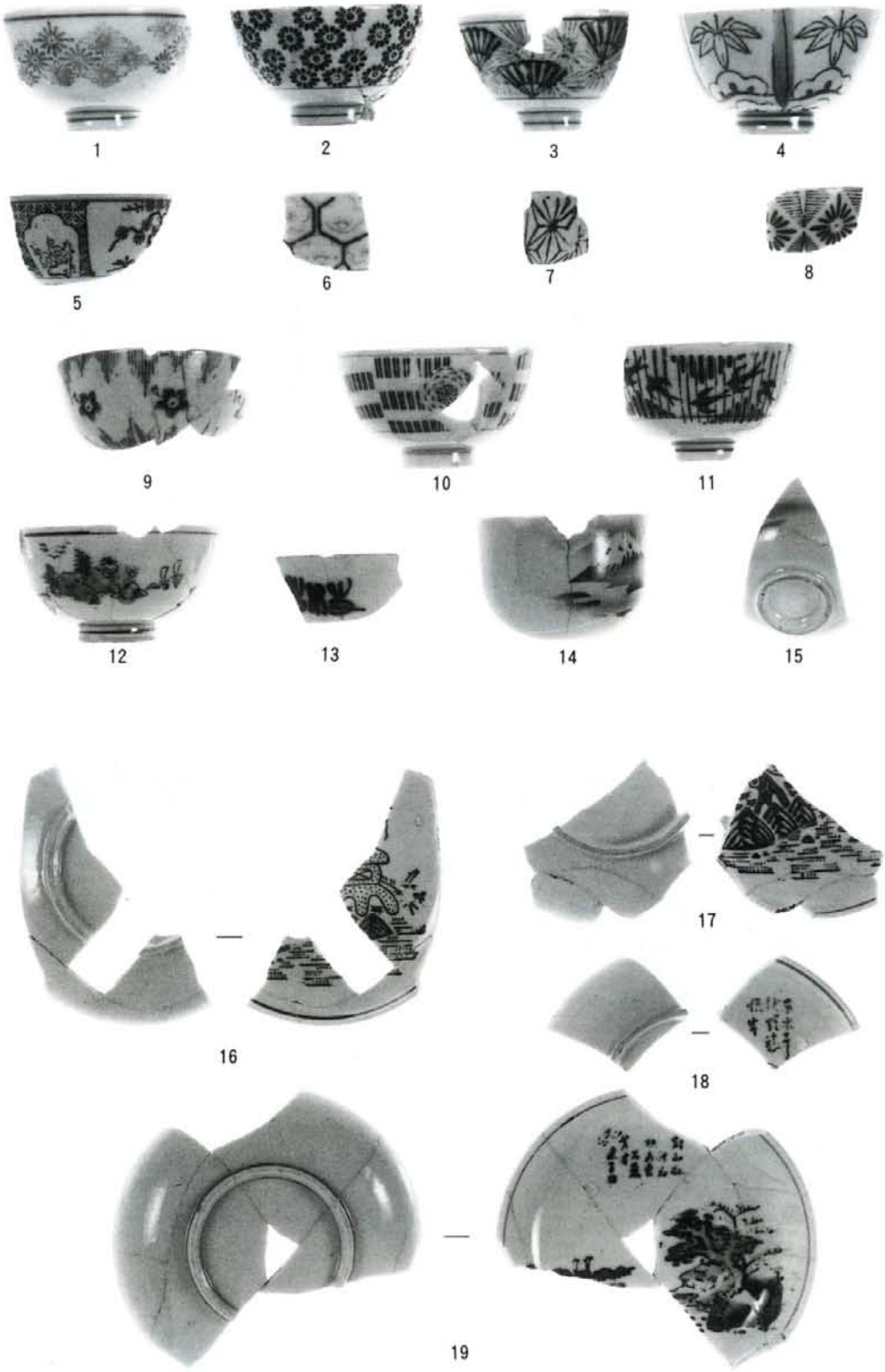
13

15

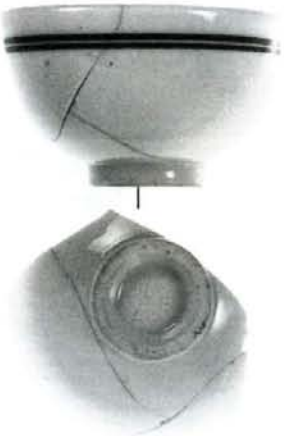
17


18

図版 59 銅版転写文小碗（1～12）、皿（13～18）



図版 60　印文小碗（1～13）、吹き付け文碗（14・15）、皿（16～19）



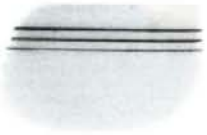
1

2

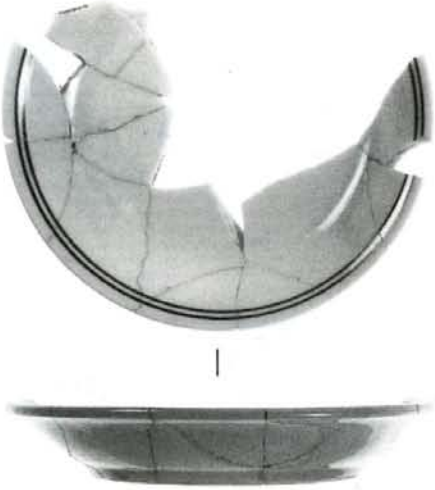
3

4

5



6

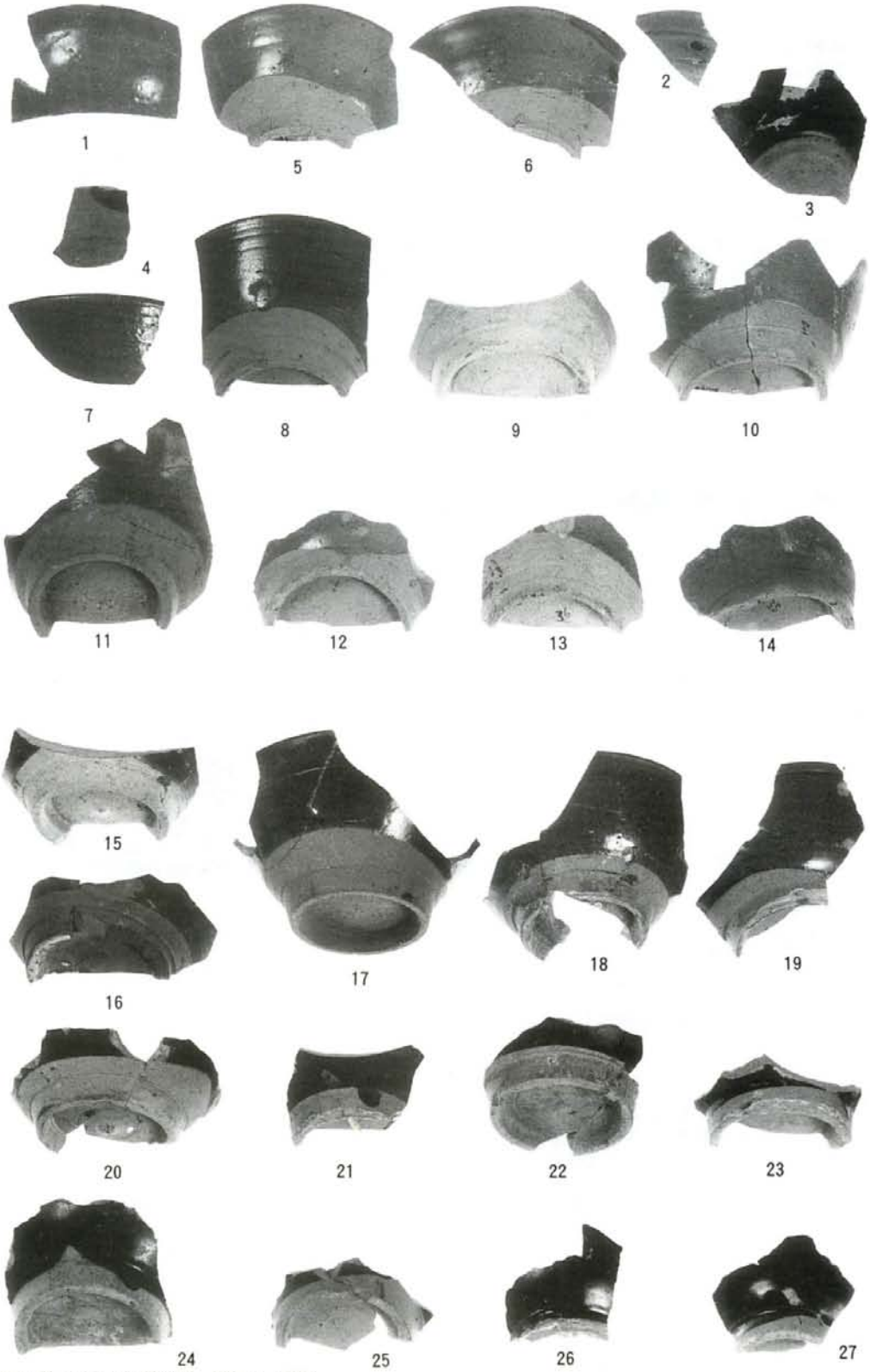


7

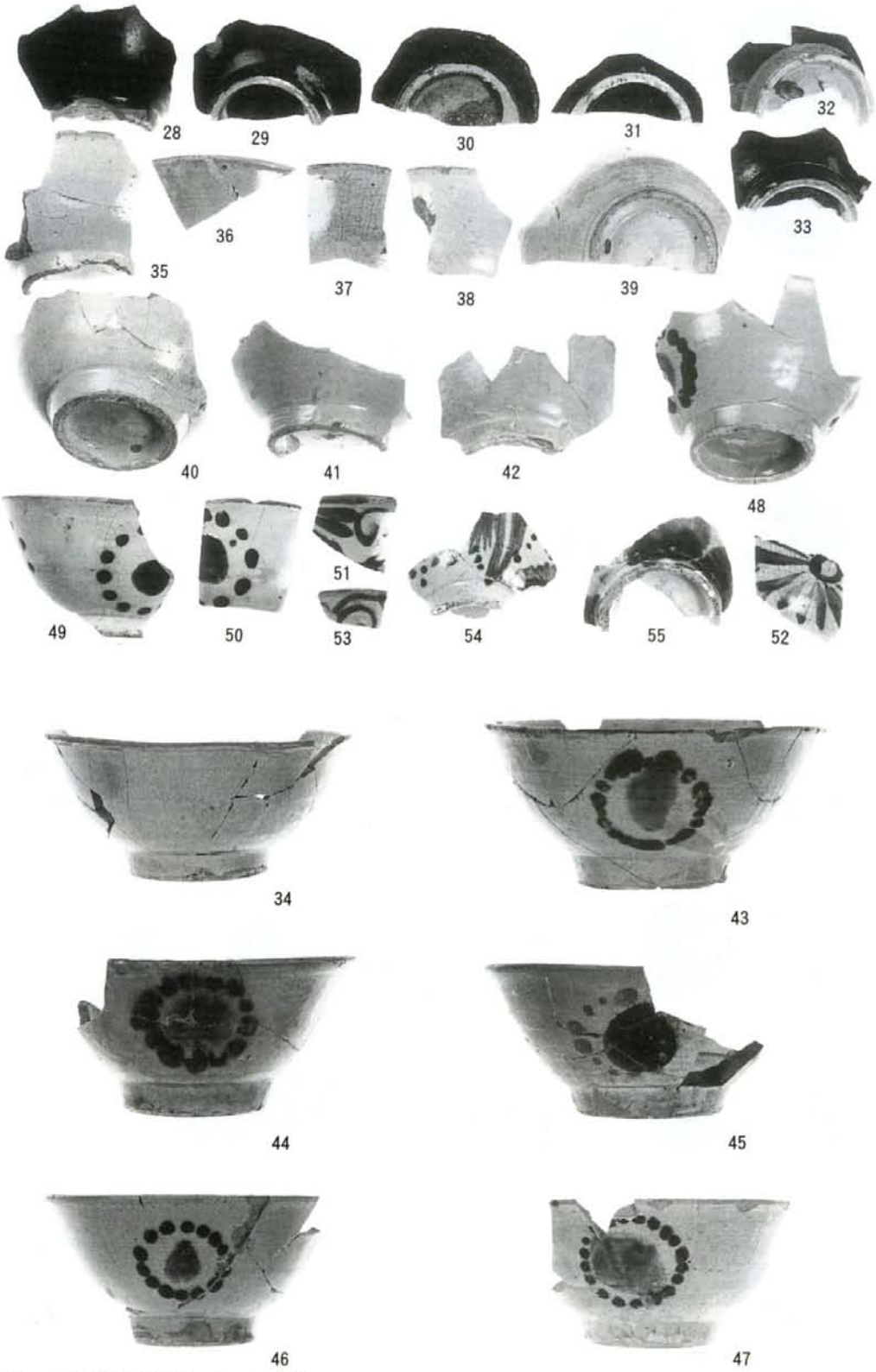
8

9

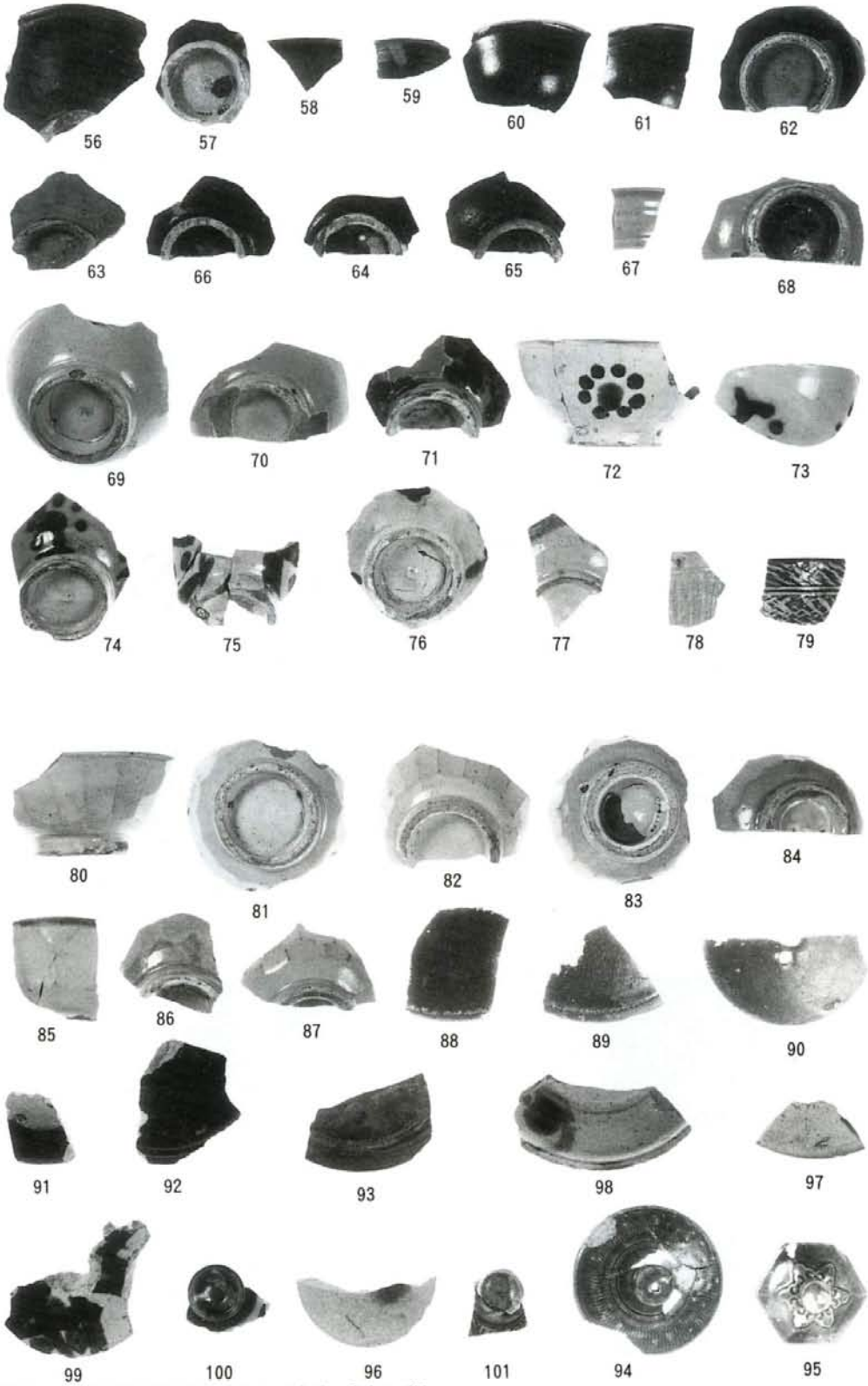
図版 61　美濃産磁器碗（1～6）、皿（7～9）



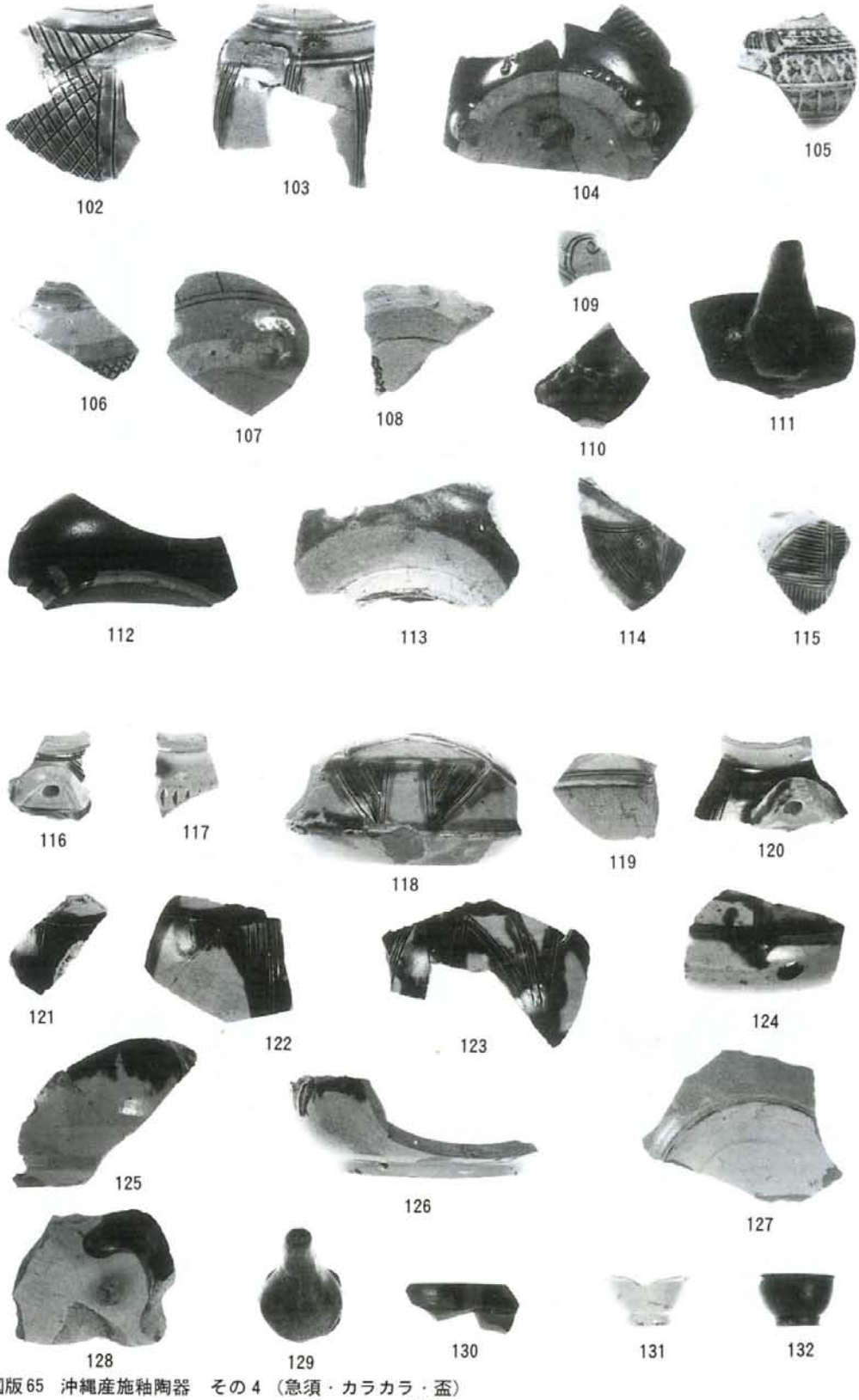
図版62　沖縄産施釉陶器　その1（碗）



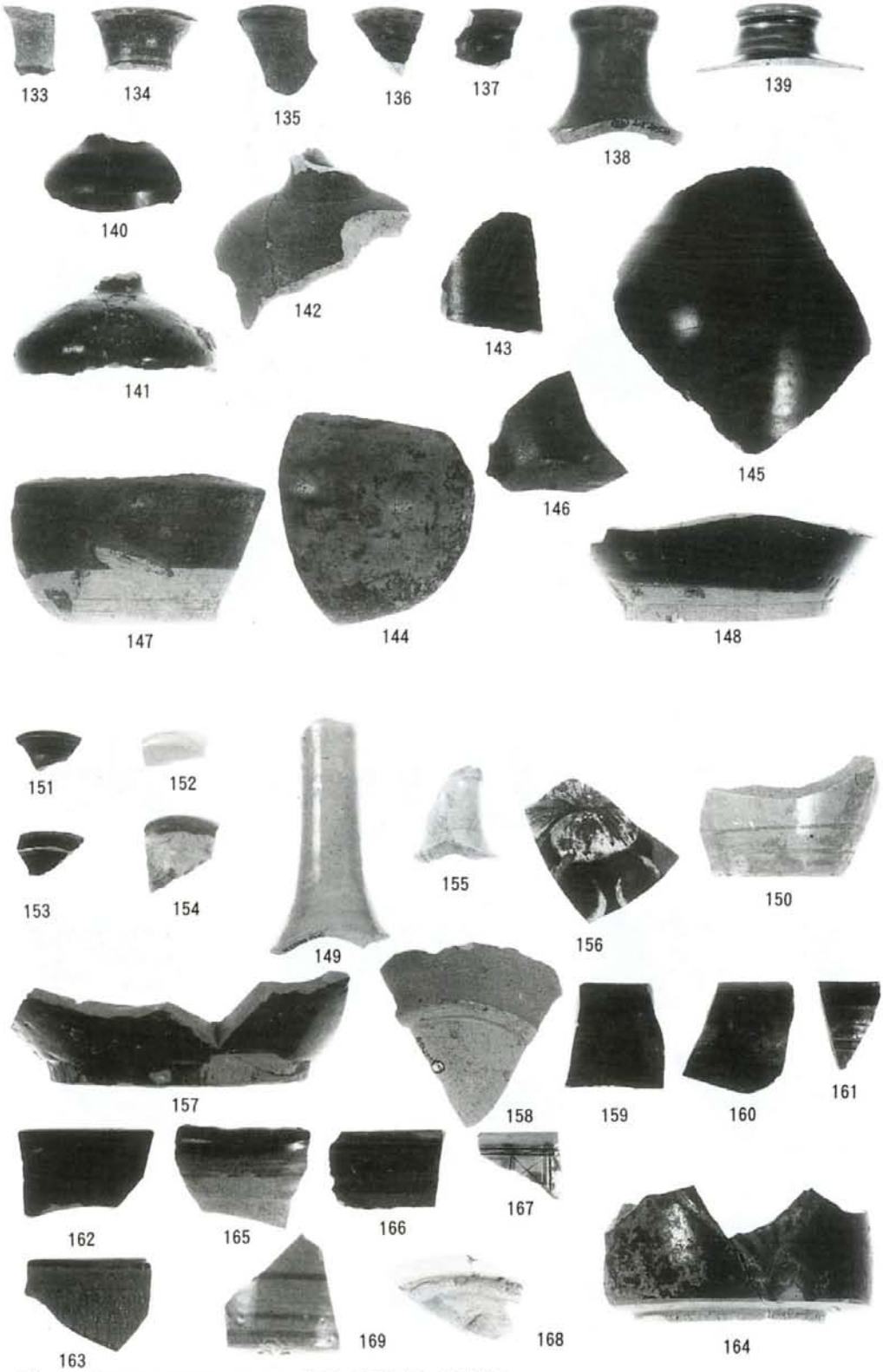
図版 63　沖縄産施釉陶器　その 2（碗）



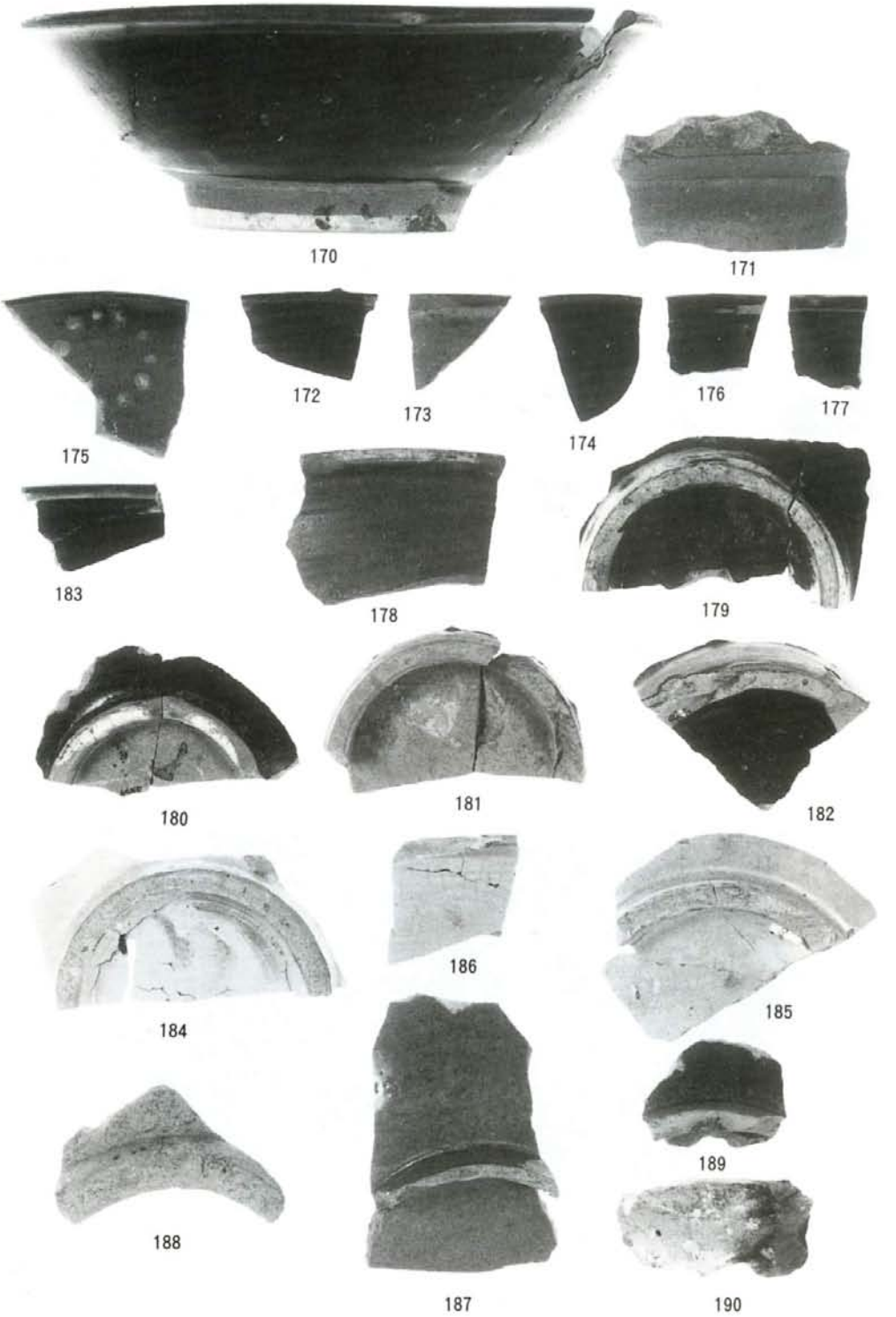
図版64　沖縄産施釉陶器　その３（小碗・角杯・蓋）



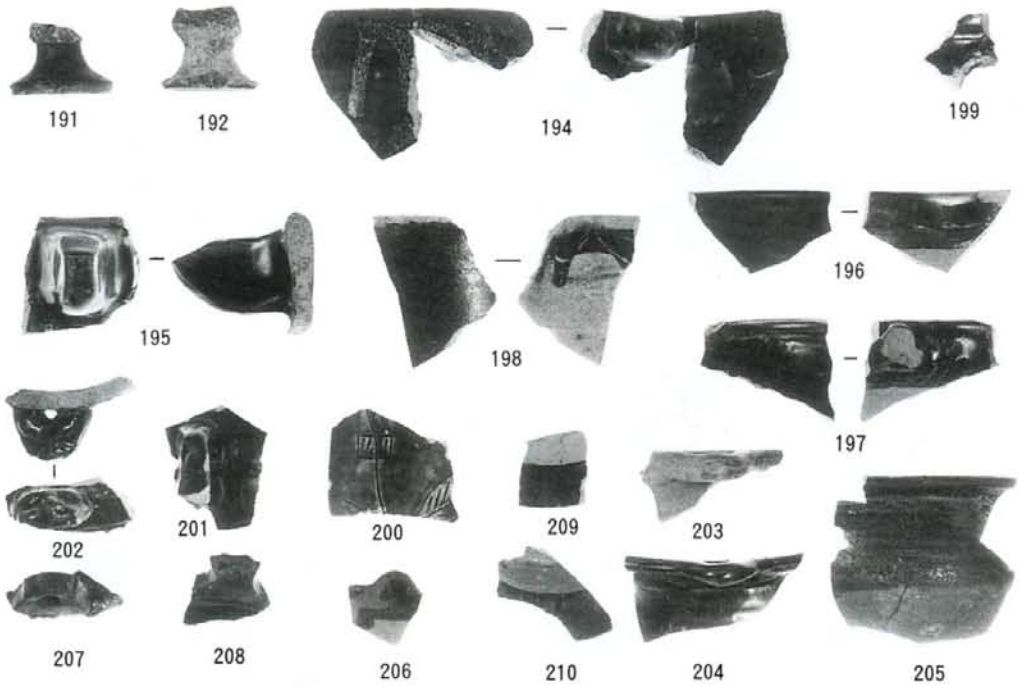
図版65　沖縄産施釉陶器　その4（急須・カラカラ・盃）



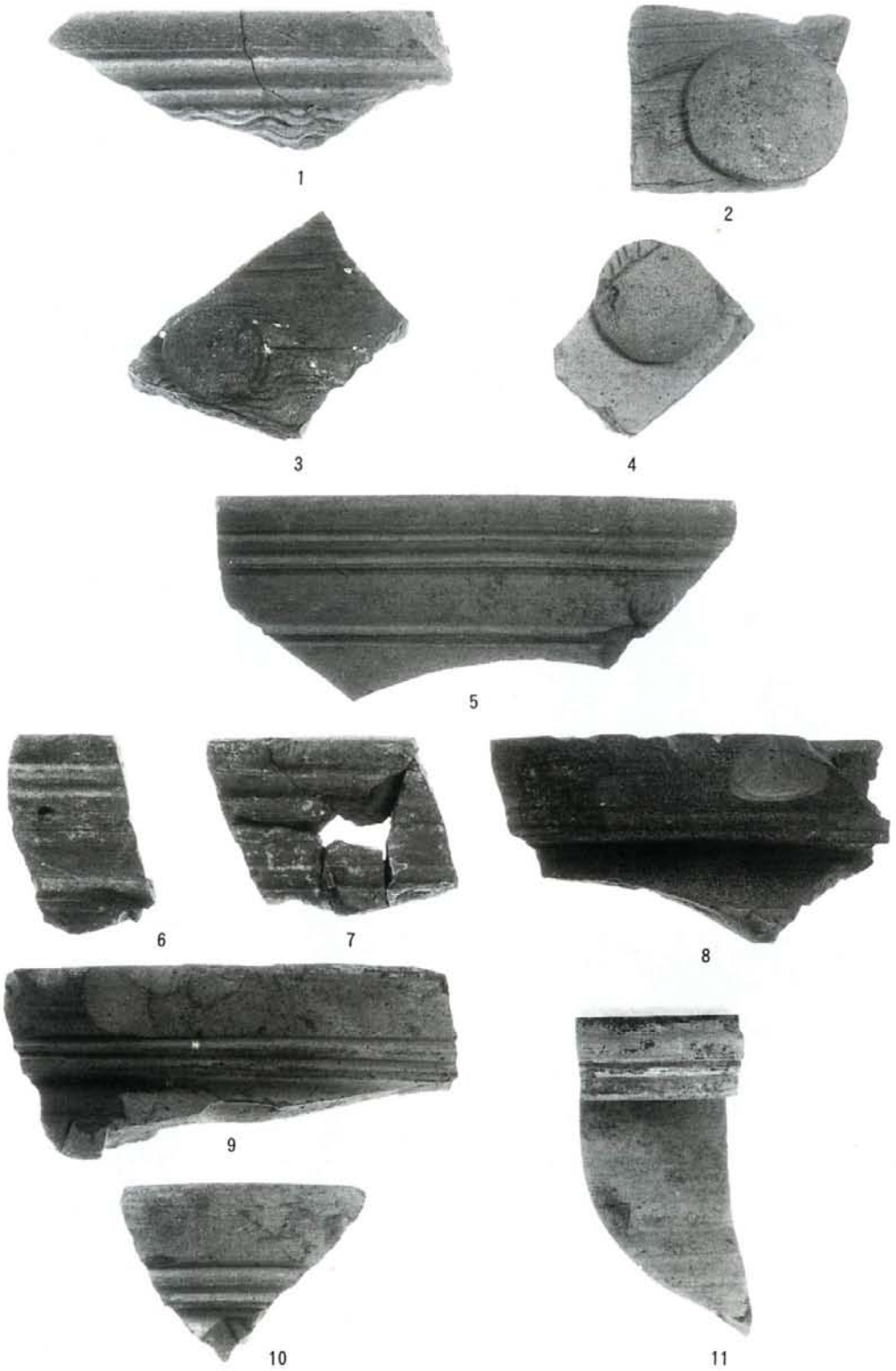
図版 66 沖縄産施釉陶器　その5（瓶子·油壺·火取·香炉類）



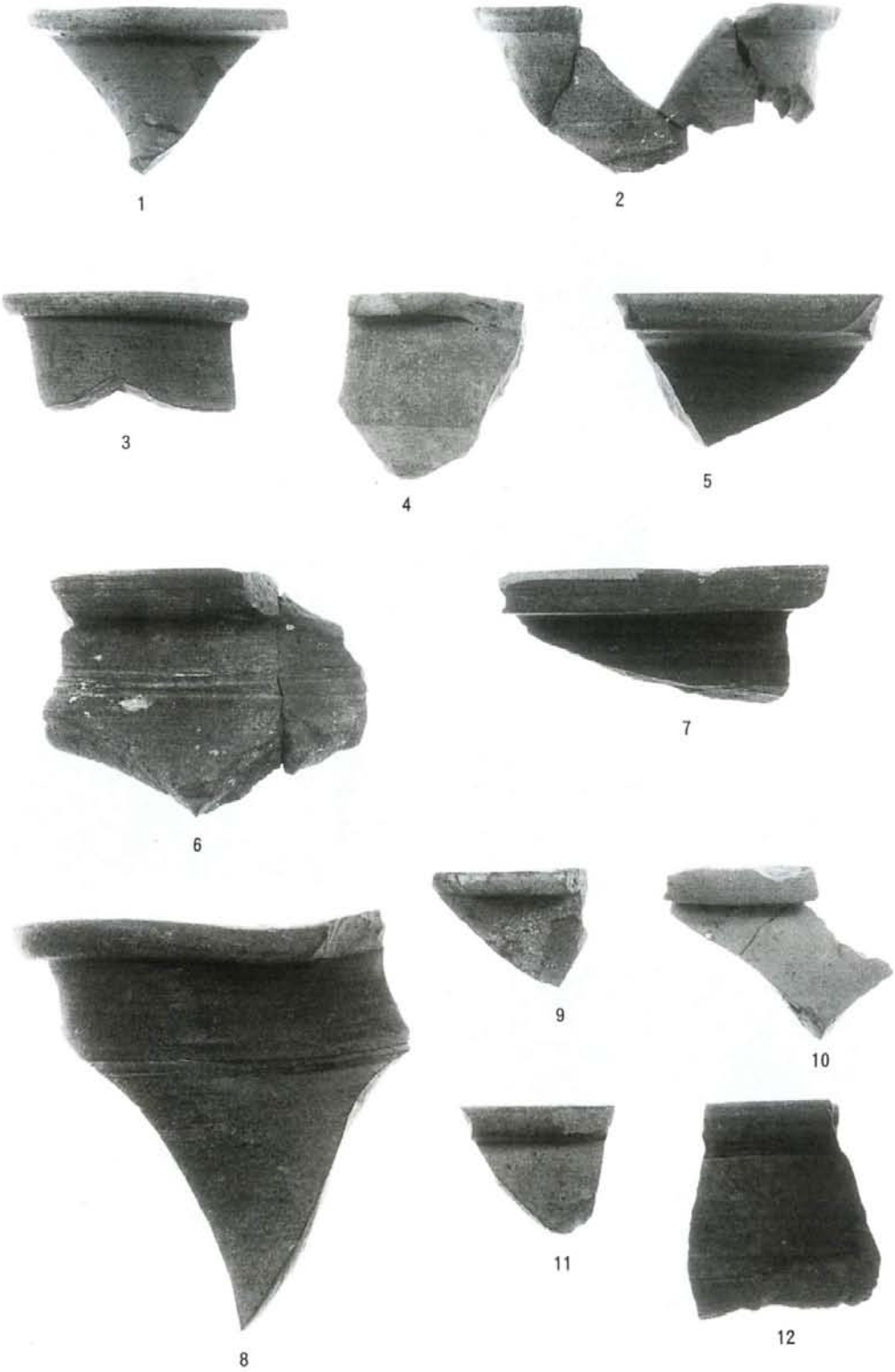
図版67　沖縄産施釉陶器　その6（大鉢・大碗類）



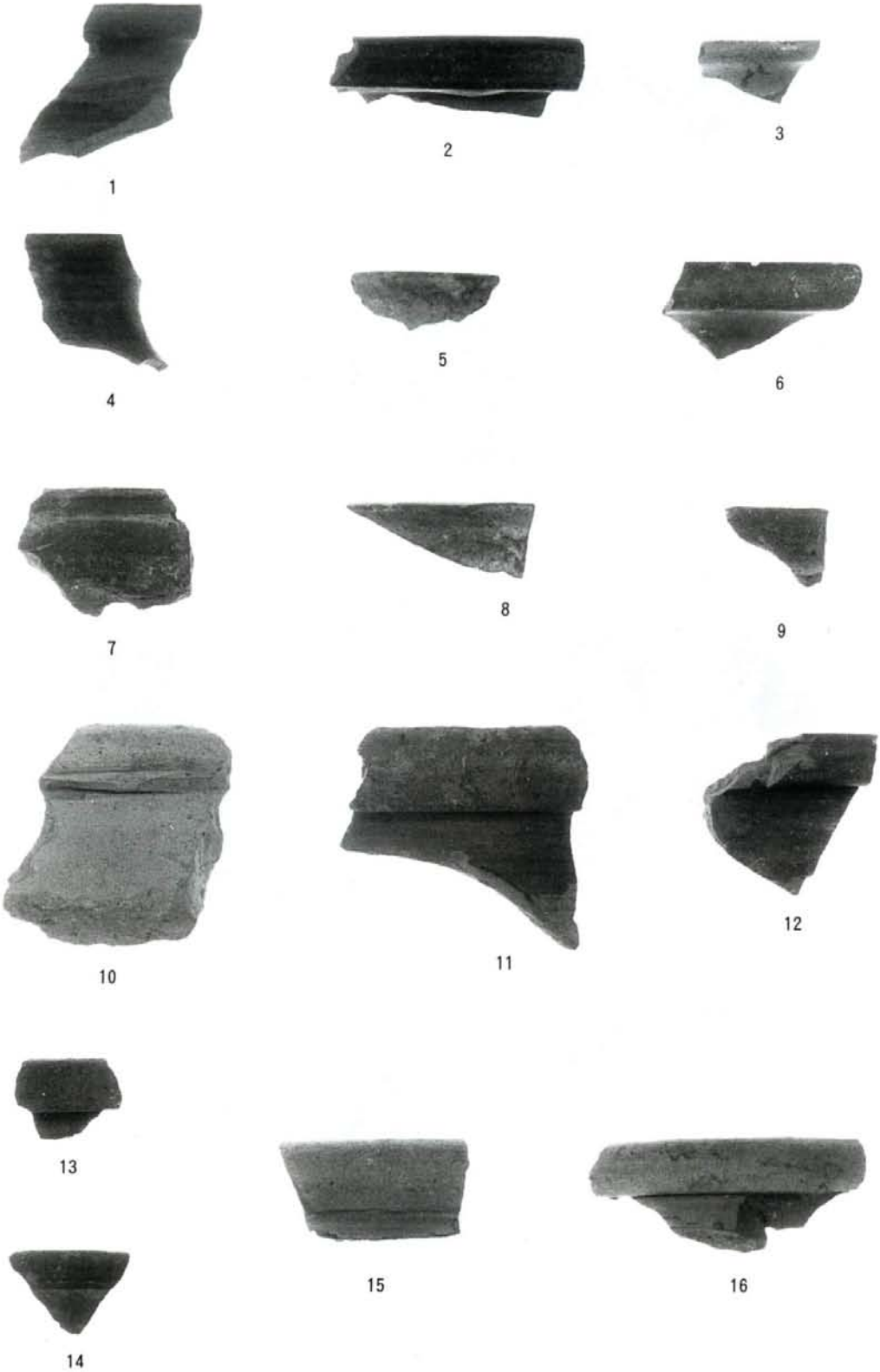
図版 68　沖縄産施釉陶器　（燭台・香炉・火鉢・土鍋・蓋）



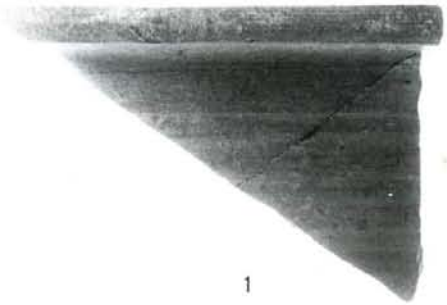
図版 69 沖縄産無釉き締め陶器（甕形）



図版 70　沖縄産無釉焼き締め陶器（壺形）



図版 71　沖縄産無釉焼き締め陶器（壺形）



1

2

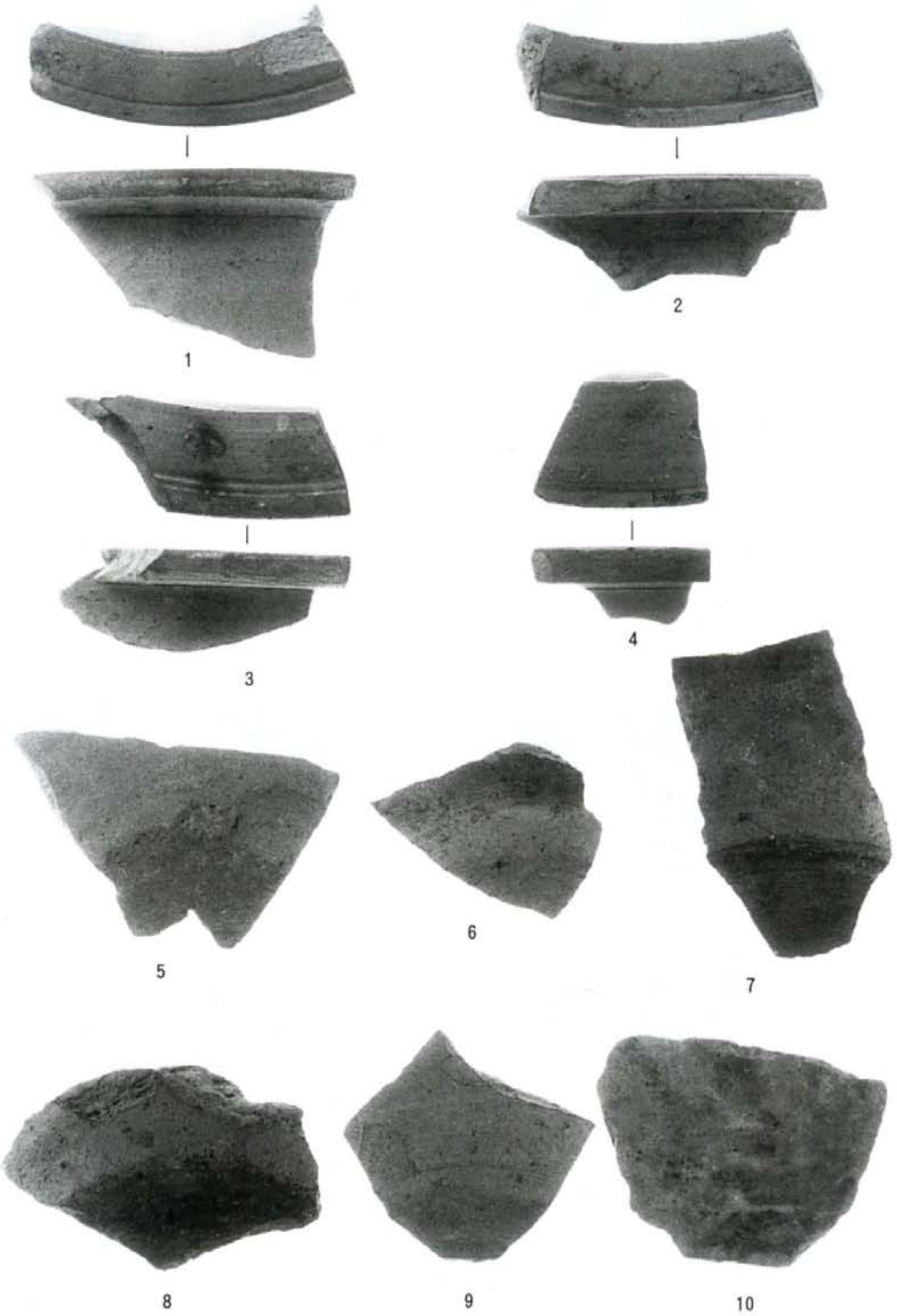
3

4

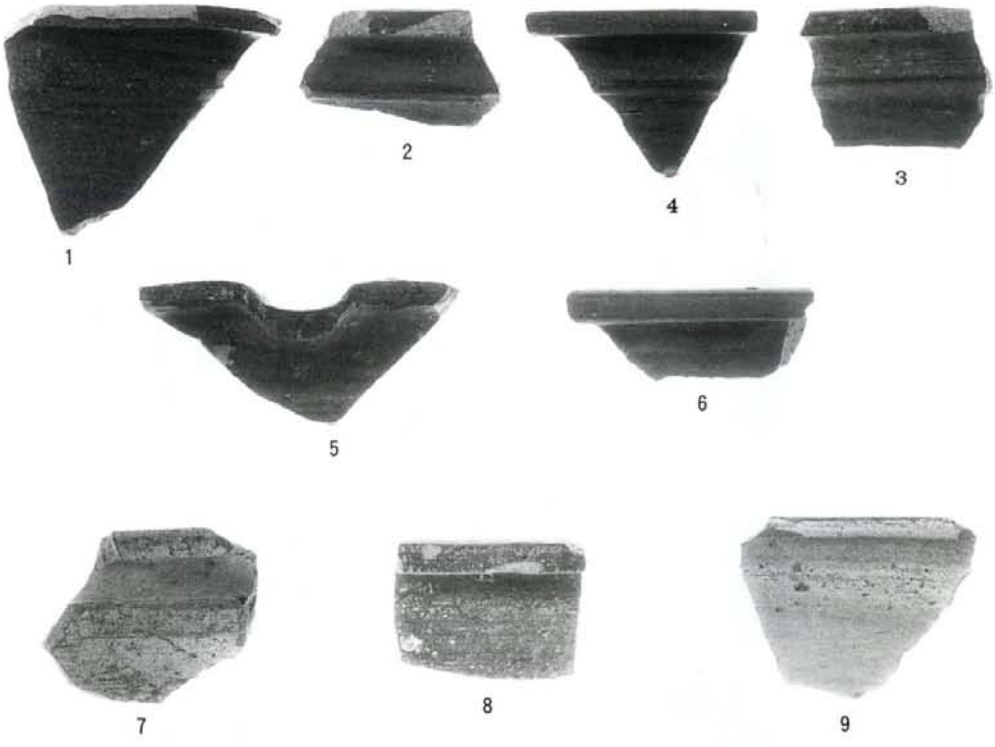
5

6

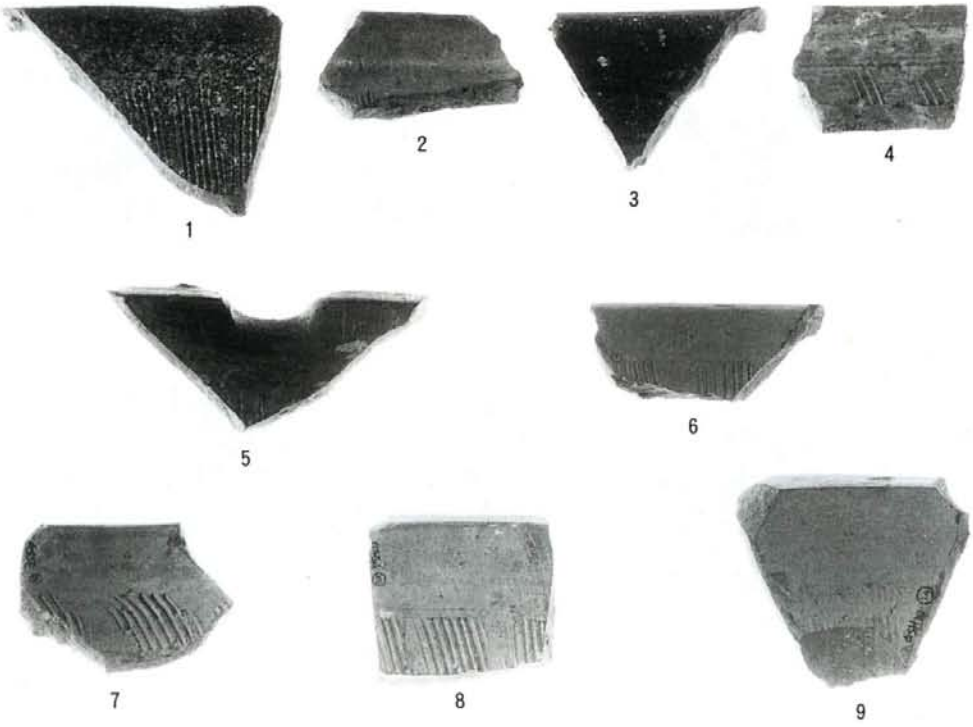
図版 72 沖縄産無釉焼き締め陶器（鉢形）



図版 73 沖縄産無釉焼き締め陶器（鉢形）



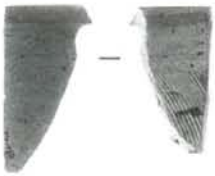
（表面）



（裏面）

図版 74　沖縄産無釉焼き締め陶器（摺鉢）

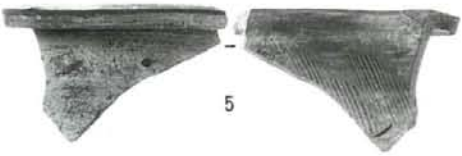
1



2

3

4

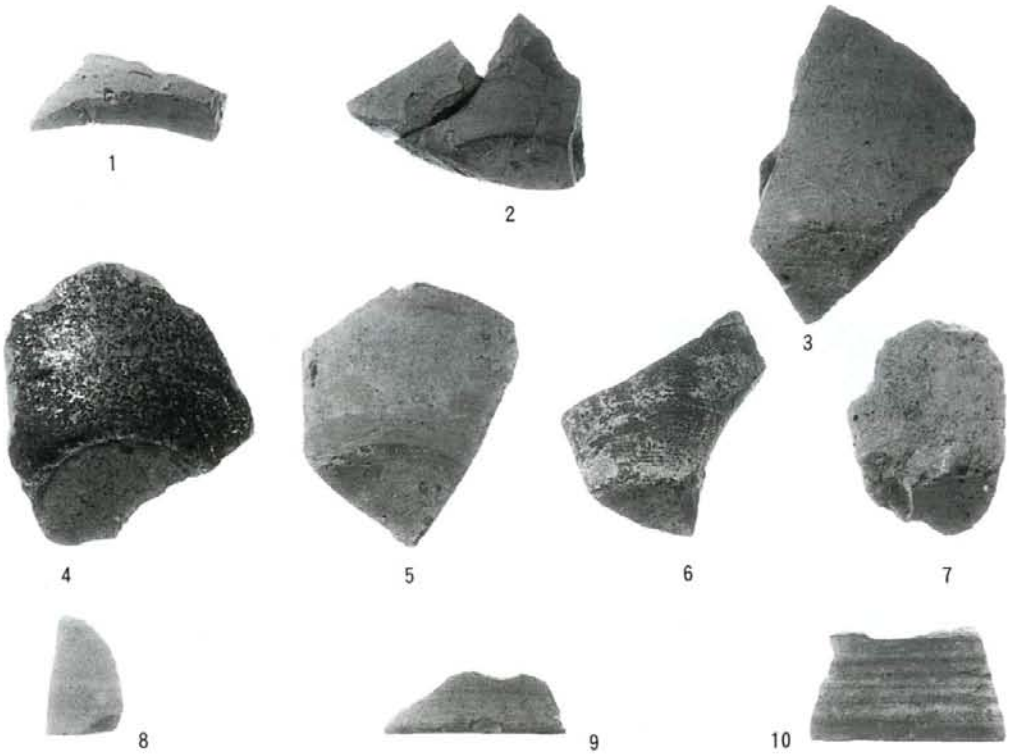


5

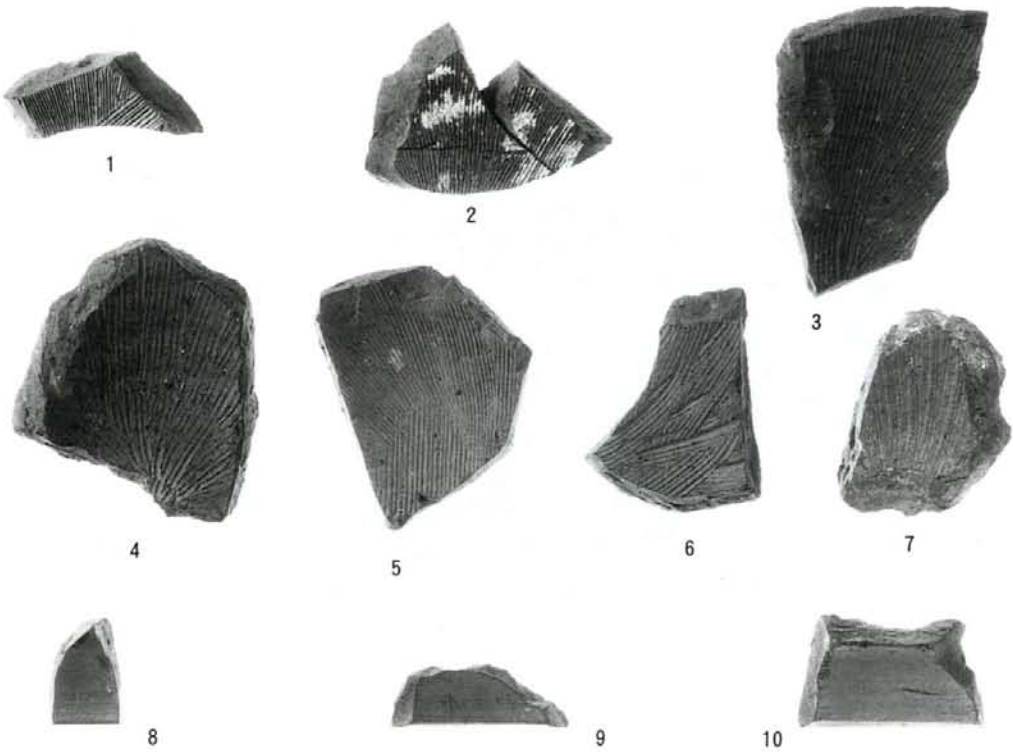
6

7

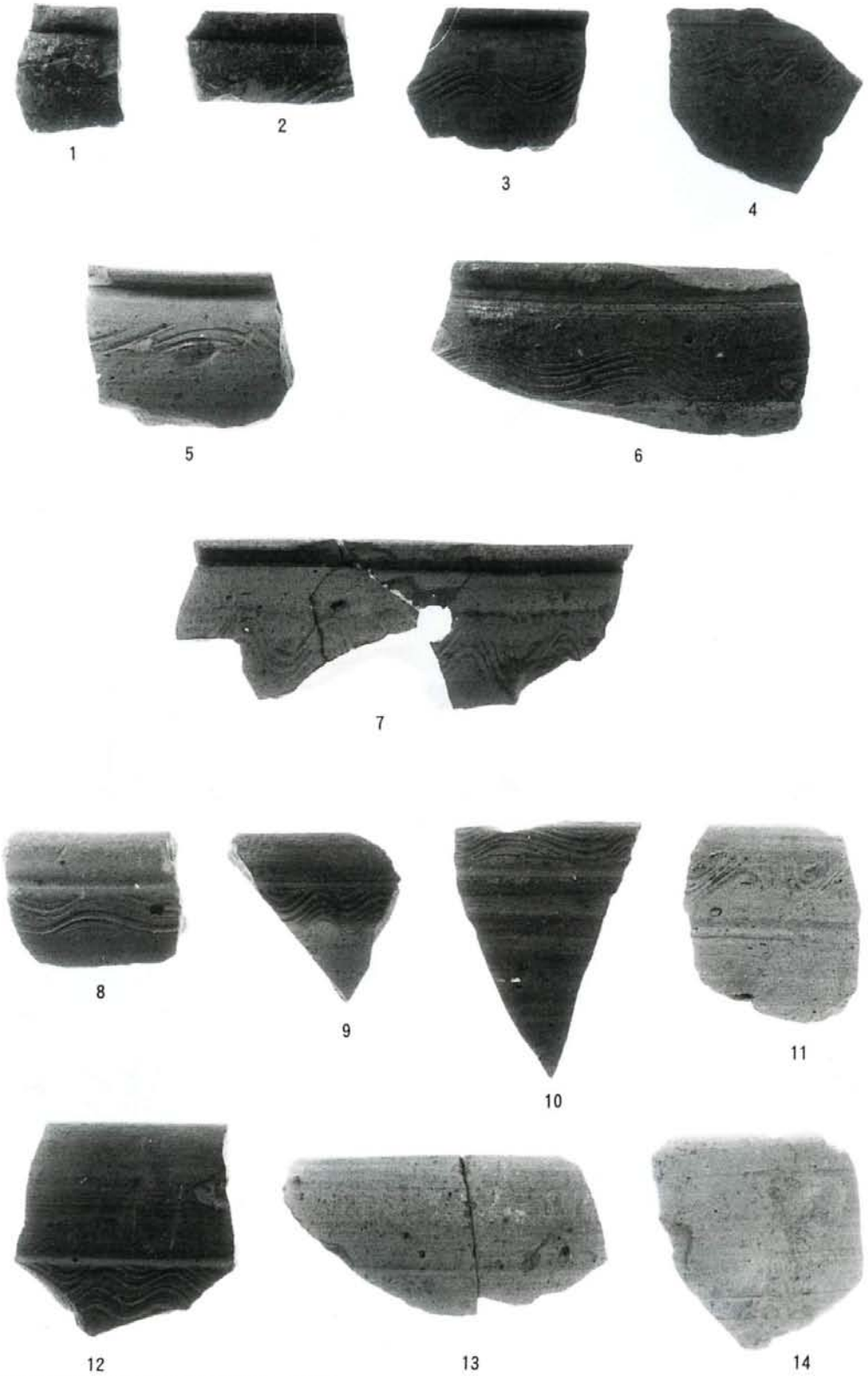
図版 75　沖縄産無釉焼き締め陶器（摺鉢）



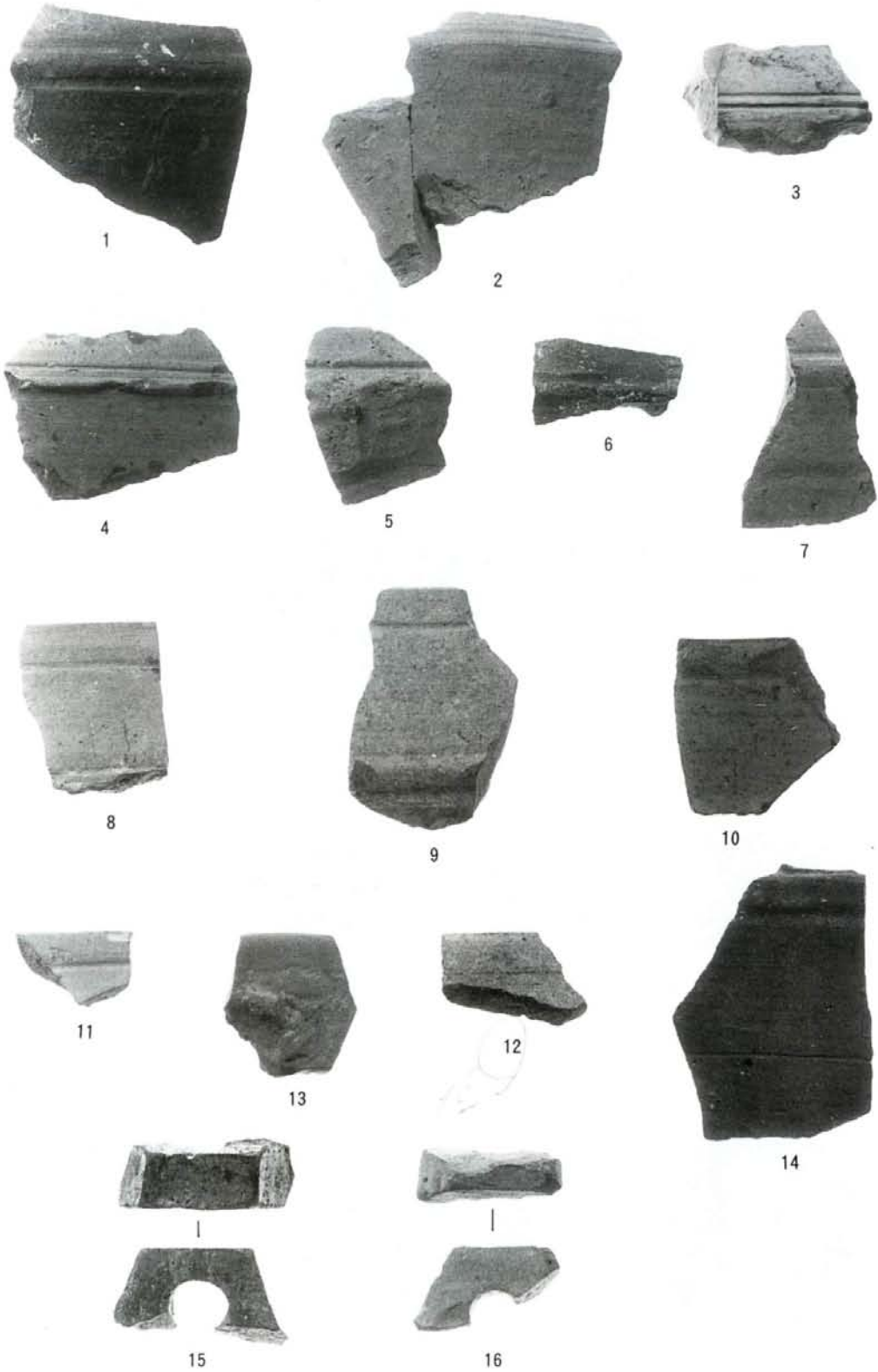
（表面）



図版76　沖縄産無釉焼き締め陶器（摺鉢）　（裏面）



図版 77　沖縄産無釉焼き締め陶器（浅鉢）



図版78　沖縄産無釉焼き締め陶器（火炉）

1

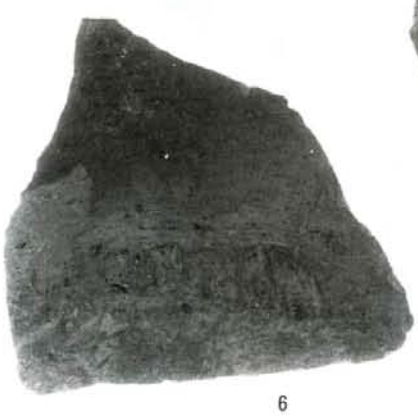
2

3

4

5

7



6

図版79　沖縄産無釉焼き締め陶器（底部）

8

9

10

11

12

13

14

15

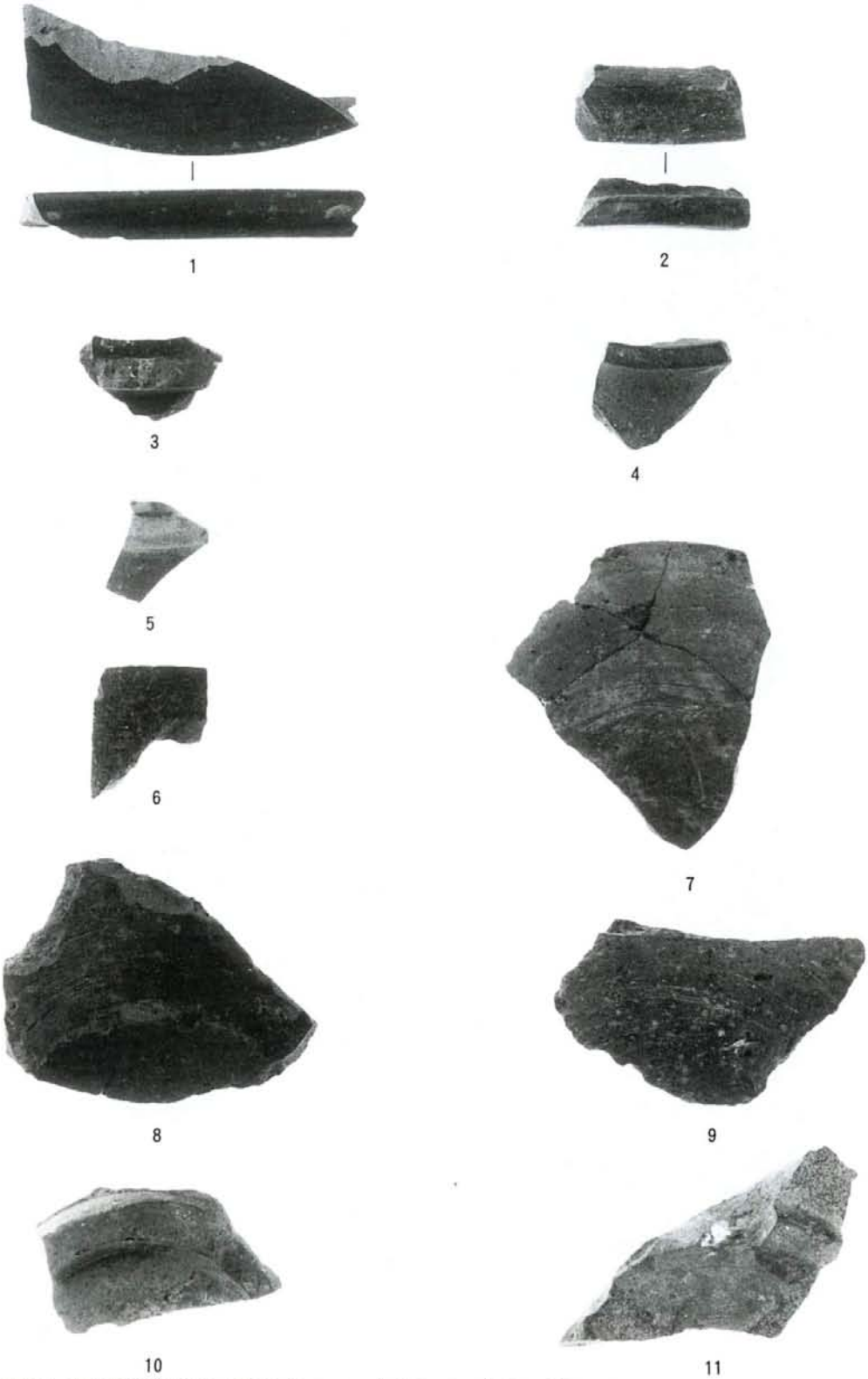
16

17

18

19

図版80　沖縄産無釉焼き締め陶器（底部）



図版 81　沖縄産無釉焼き締め陶器（蓋 1・2、水注 3・4、小壺 5、瓶 6、皿 7～11）

1

2

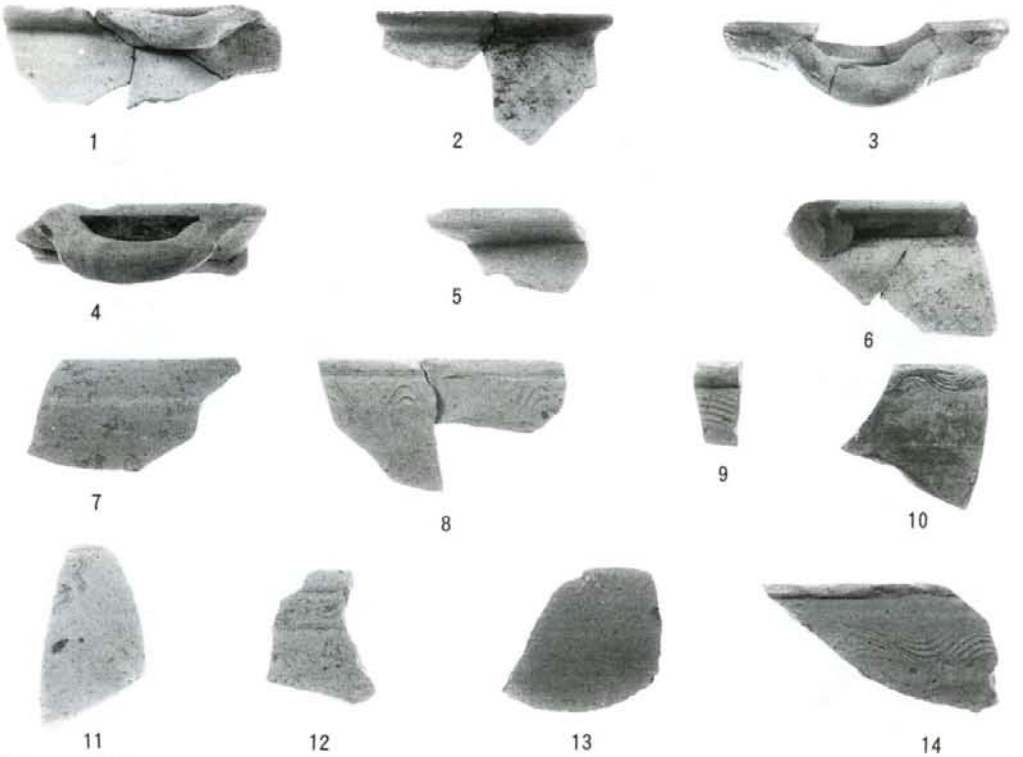
3

4

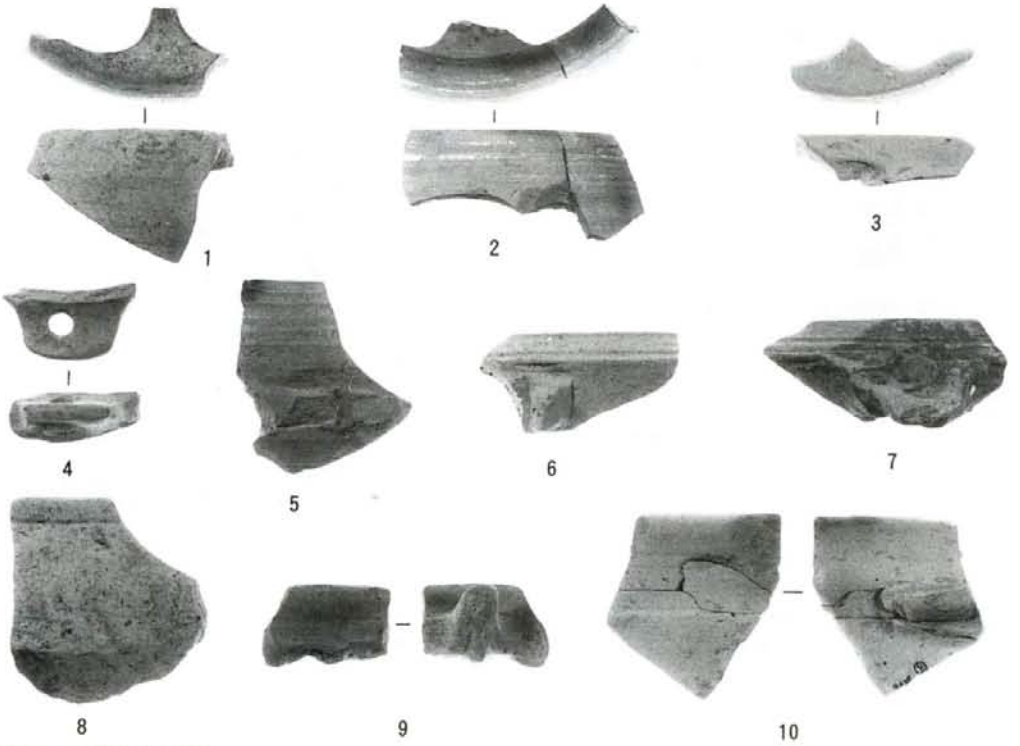
5

6

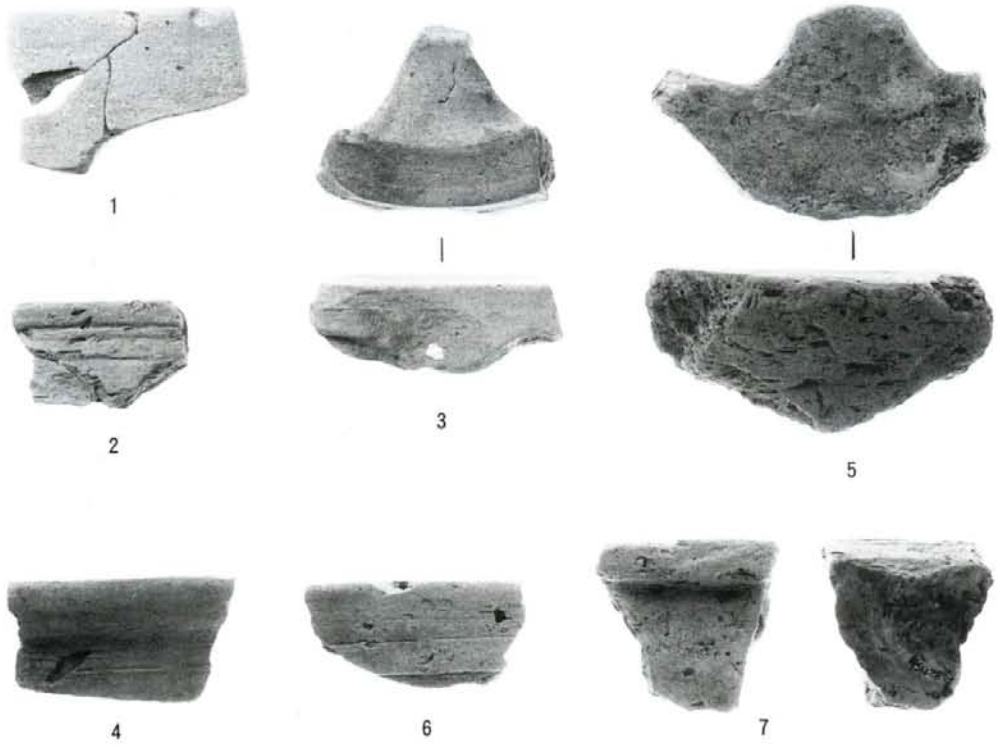
図版82　沖縄産無釉焼き締め陶器（納骨器1～4、その他5、土製品6）



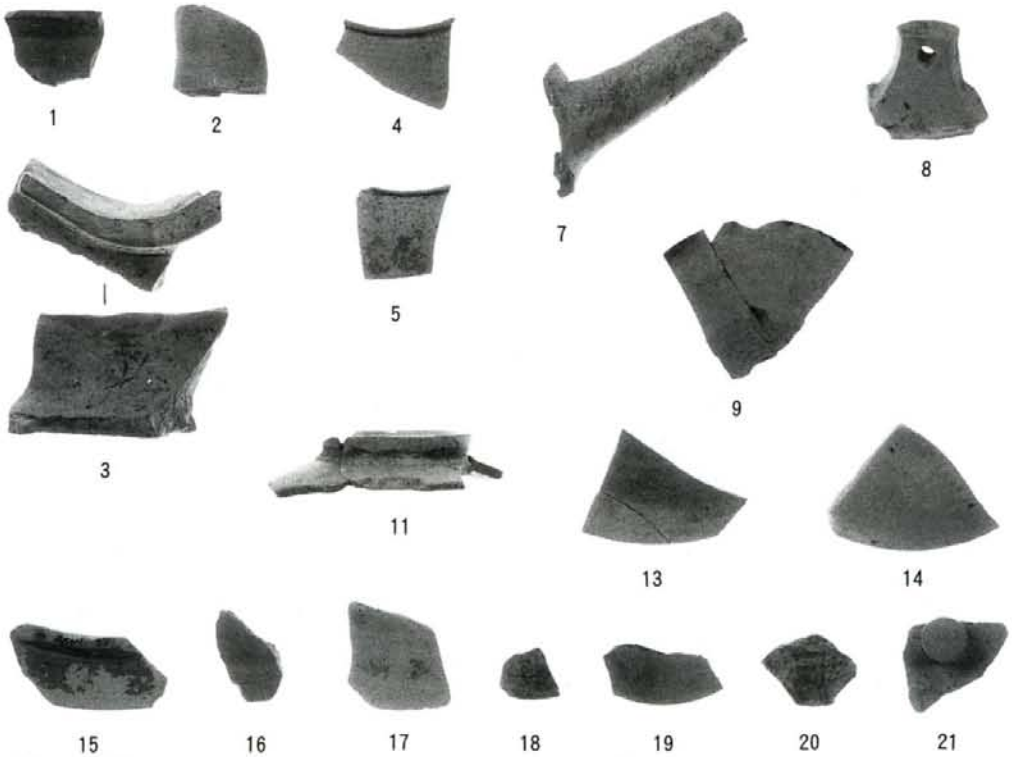
図版83　軟質陶器（1～6鍋、7～14浅鉢）



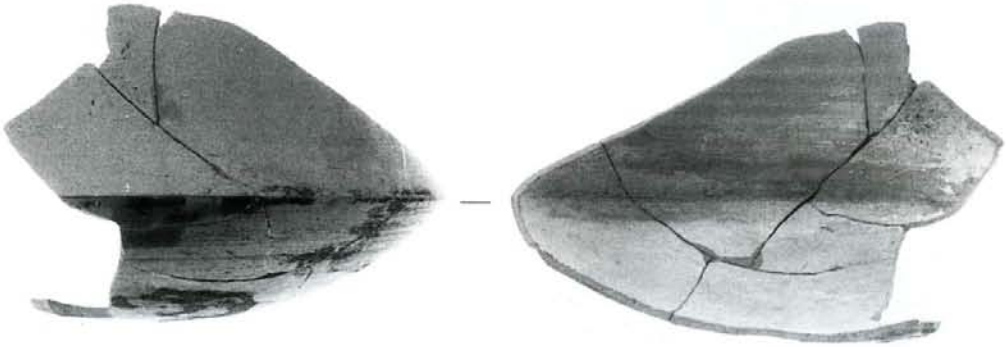
図版84　軟質陶器（鉢）



図版 85 軟質陶器（鉢）

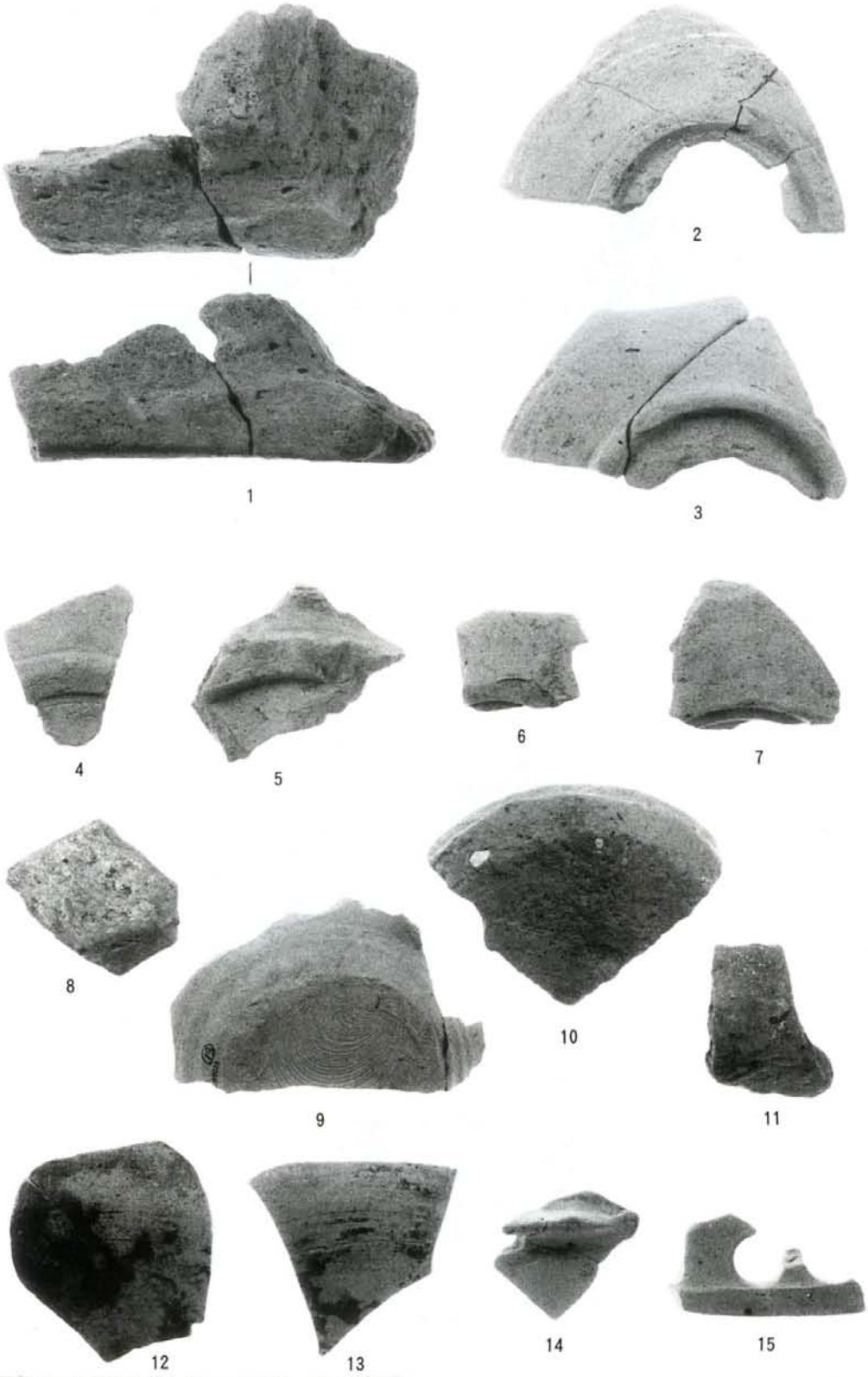


図版 86 軟質陶器（1～5壺、7・8注口、9皿、11・13～21 蓋）

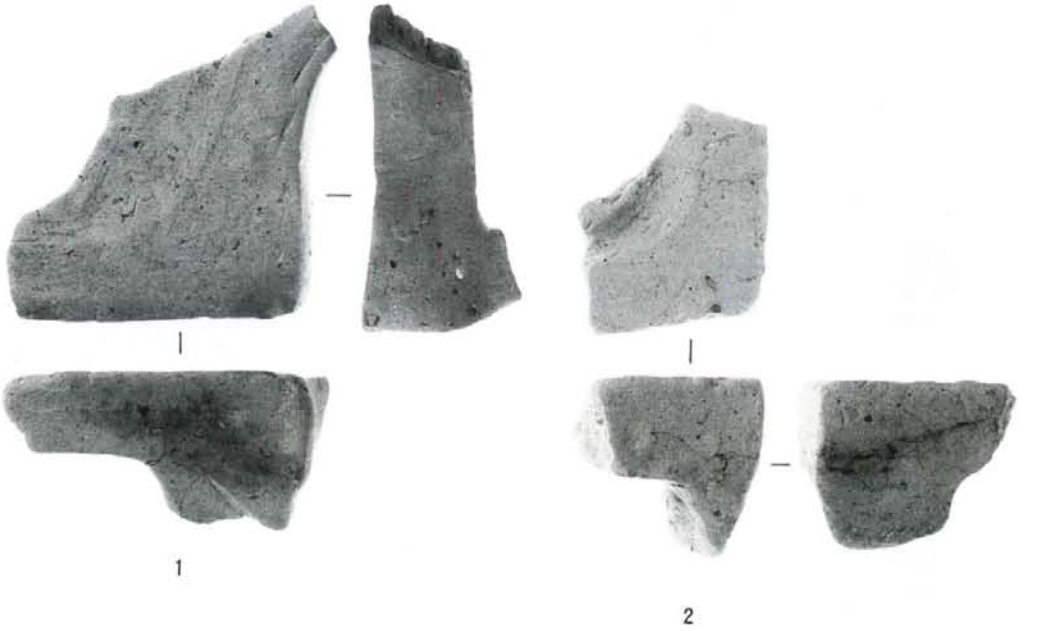


図版 87　軟質陶器（注口）

図版 88　軟質陶器（蓋）

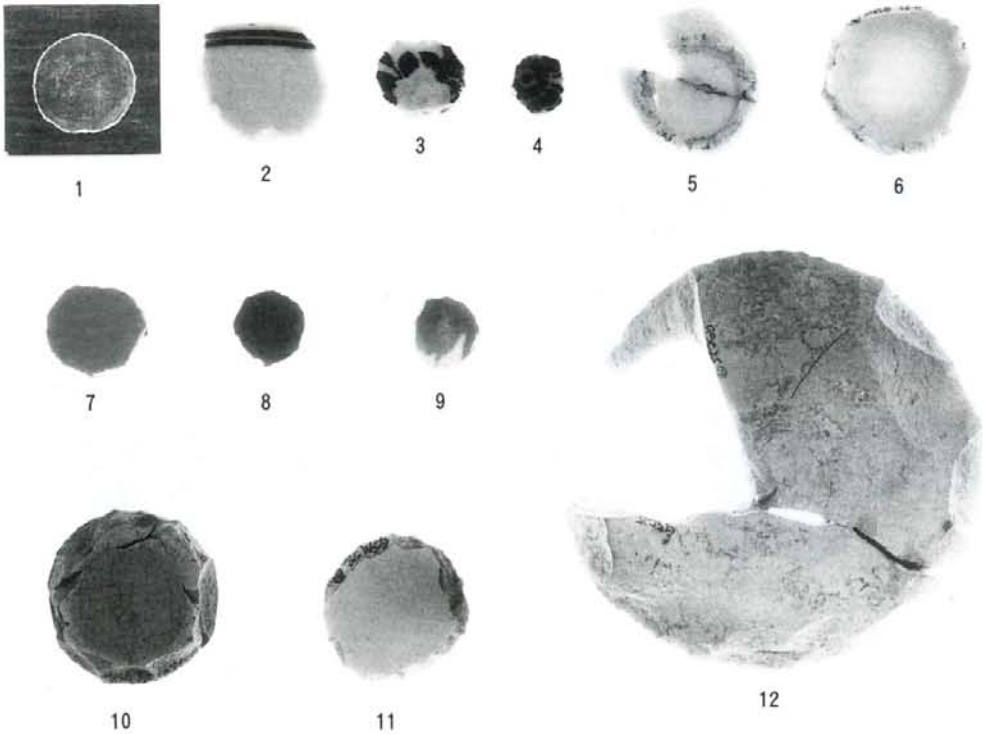


図版 89 軟質陶器（1 蓋 2 ～13底部、14・15把手）

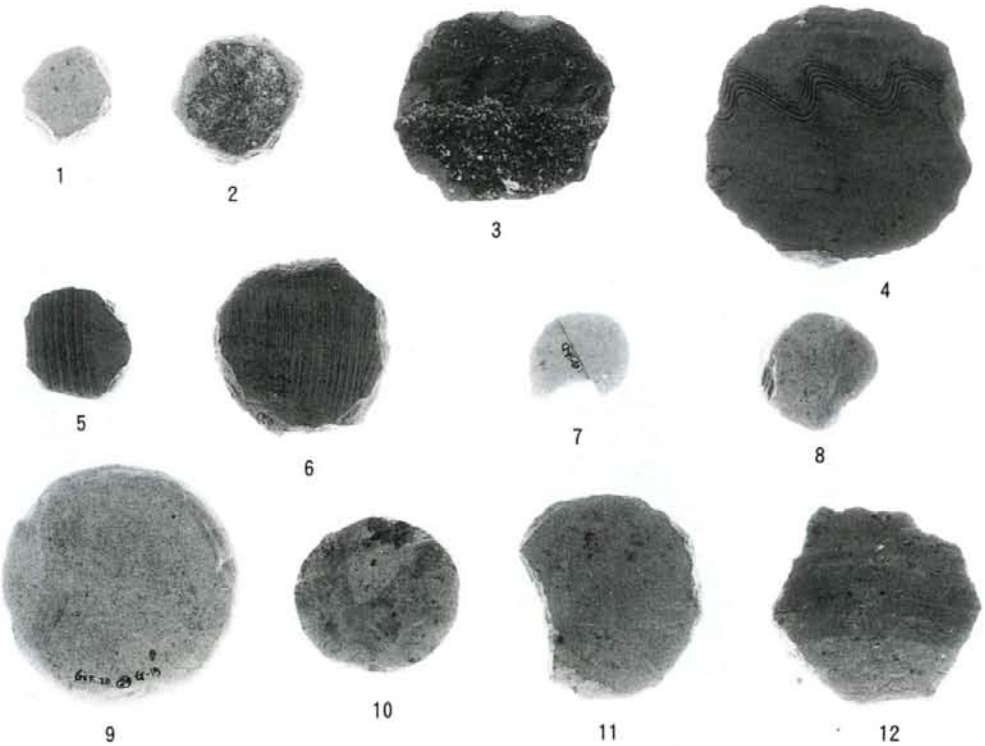


図版 90 軟質陶器（器種不明）

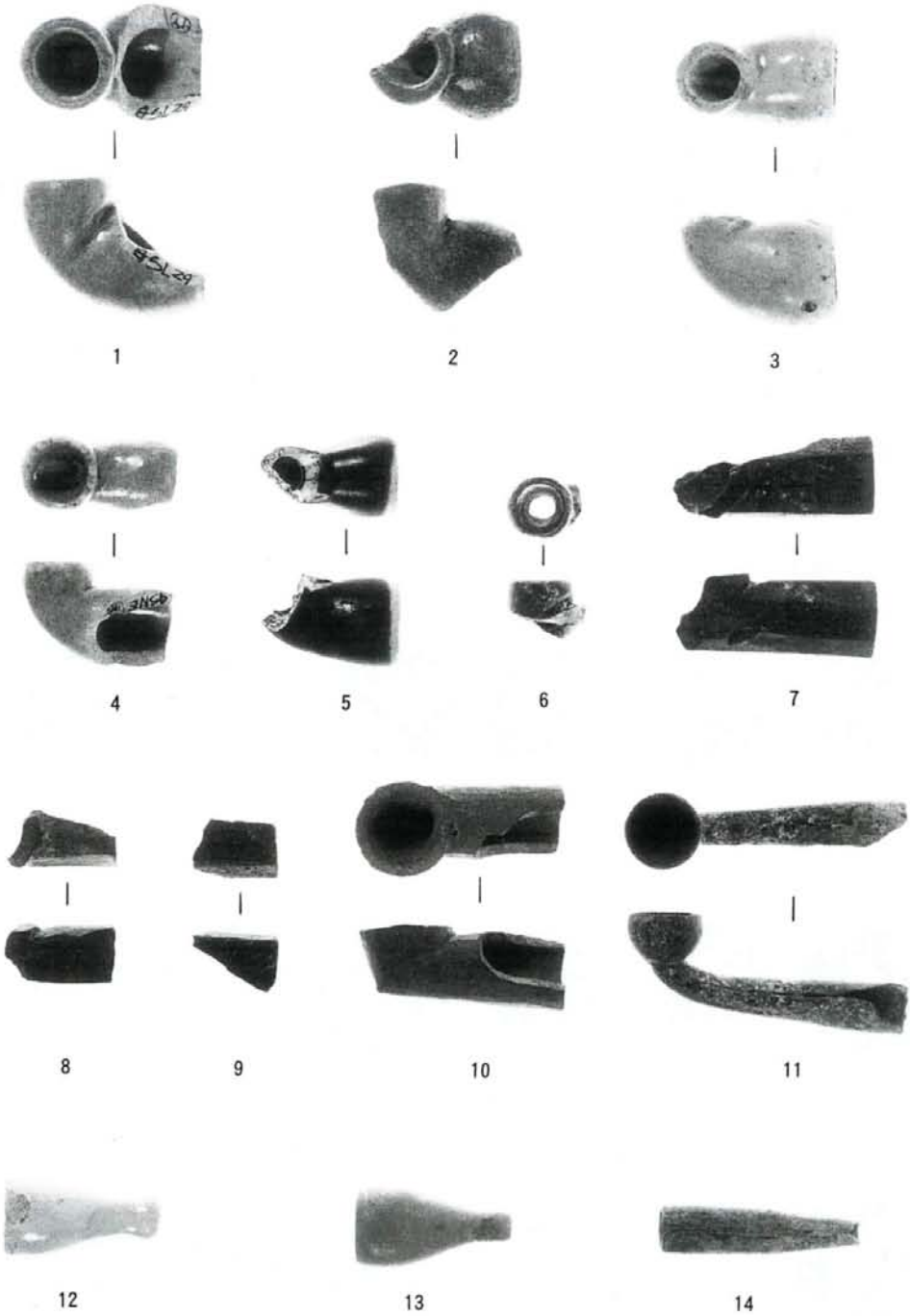
図版 91 搬入陶製品



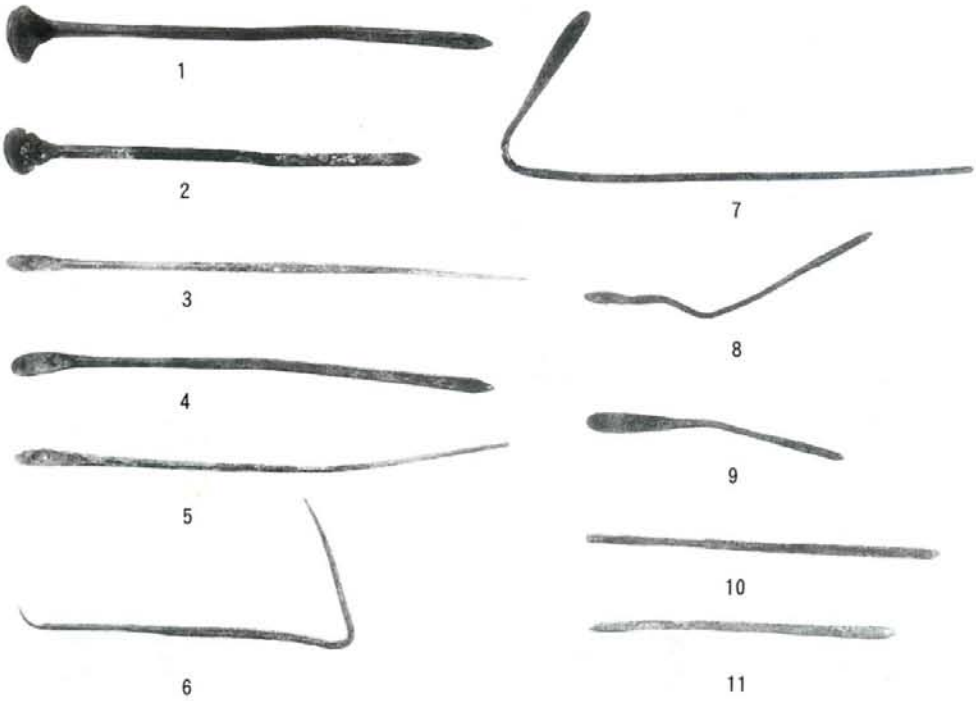
図版 92 （1ガラス製、2～6磁器製、7～12上焼製）



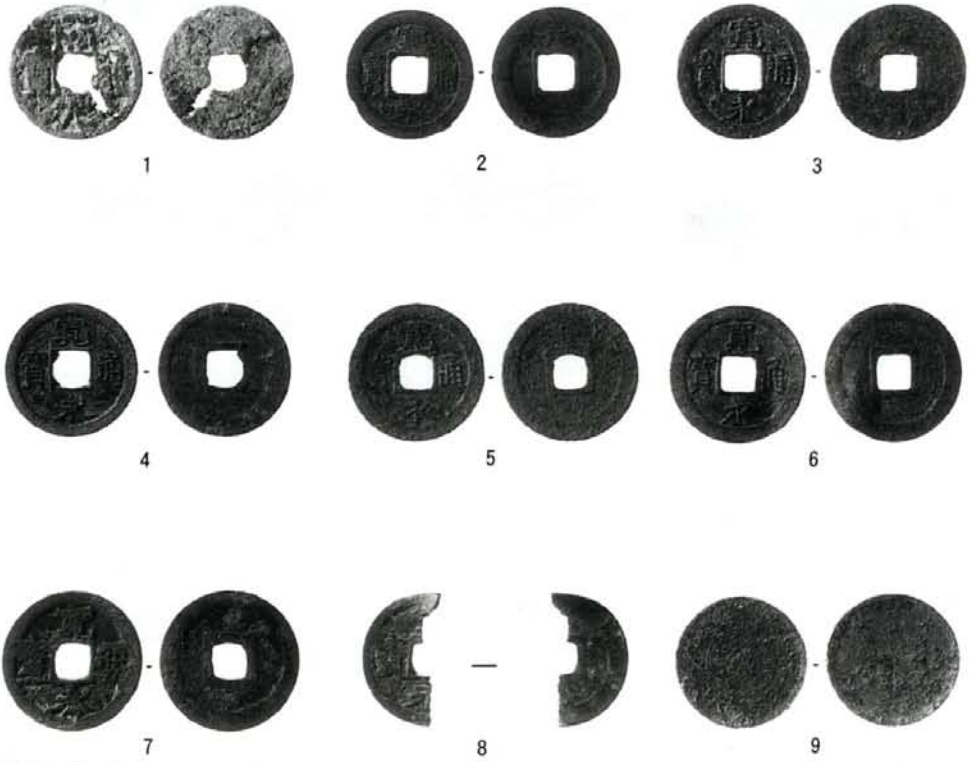
図版93 円盤状製品（1～6・12荒焼製、7～9軟質陶器製、10・11瓦製）



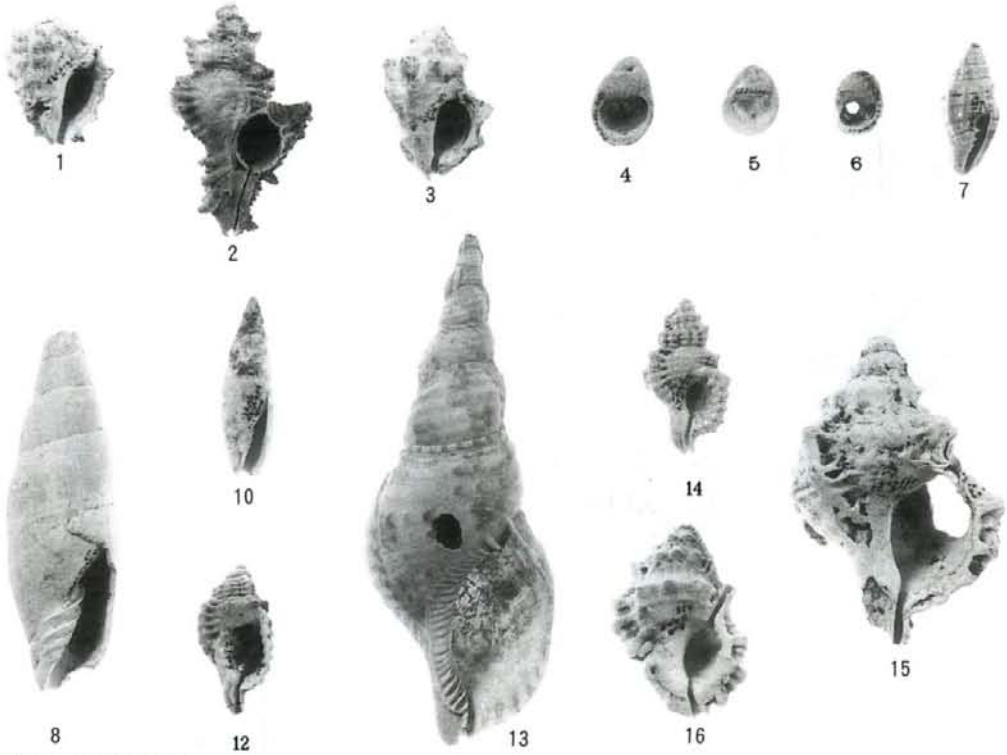
図版94 煙　管（1～11雁首、12～14吸い口）



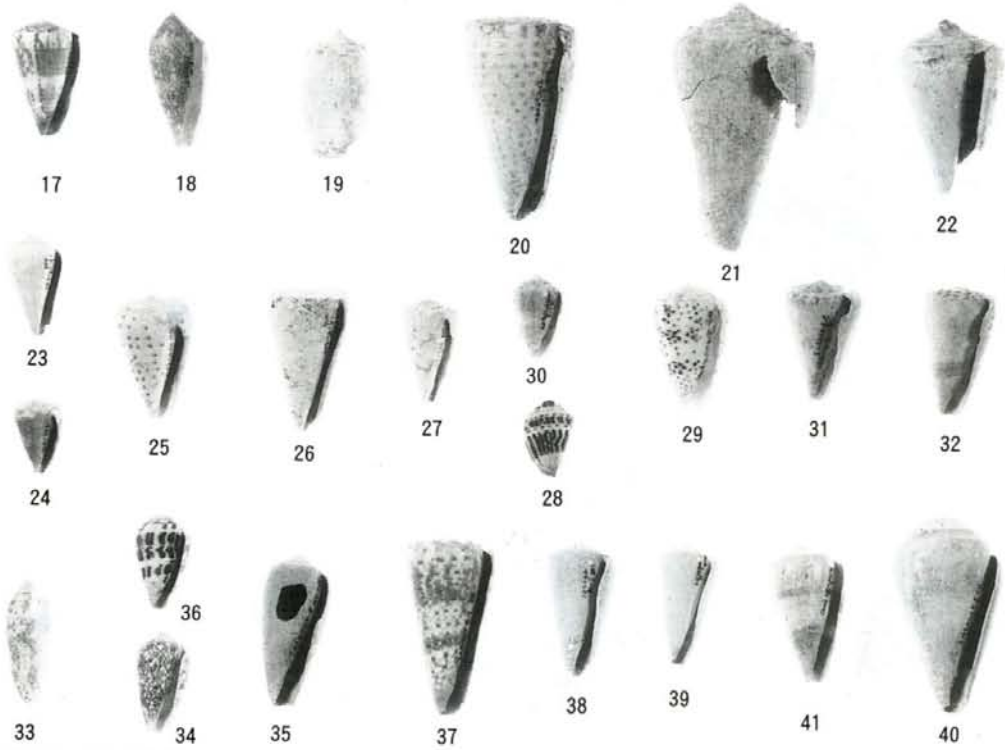
図版 95　かんざし



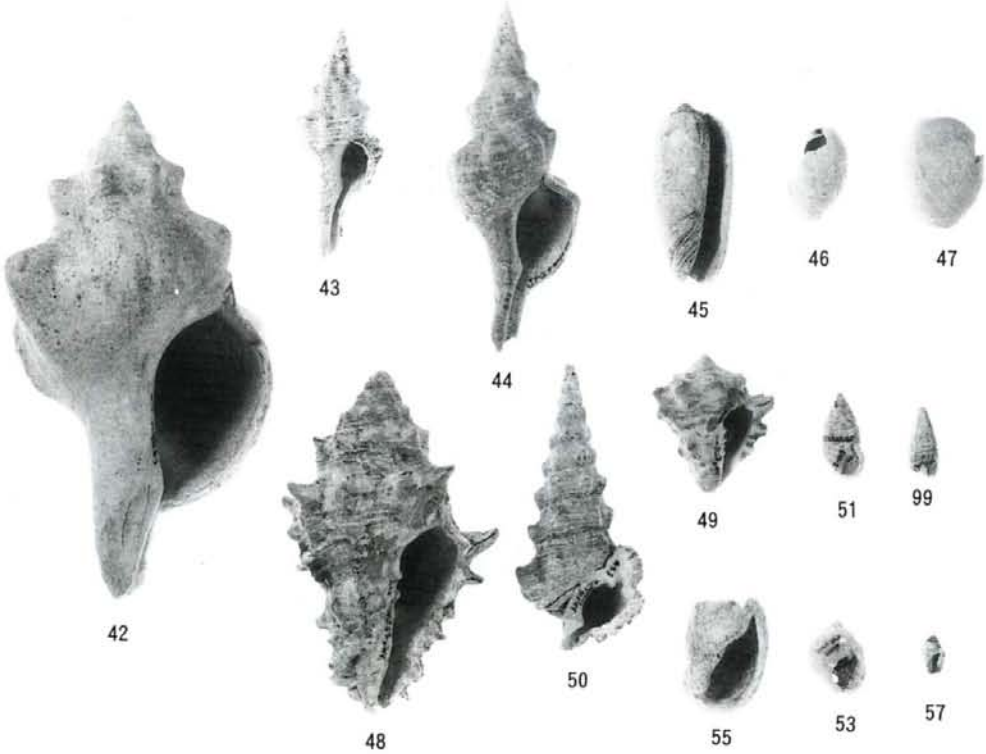
図版 96　銭　貨



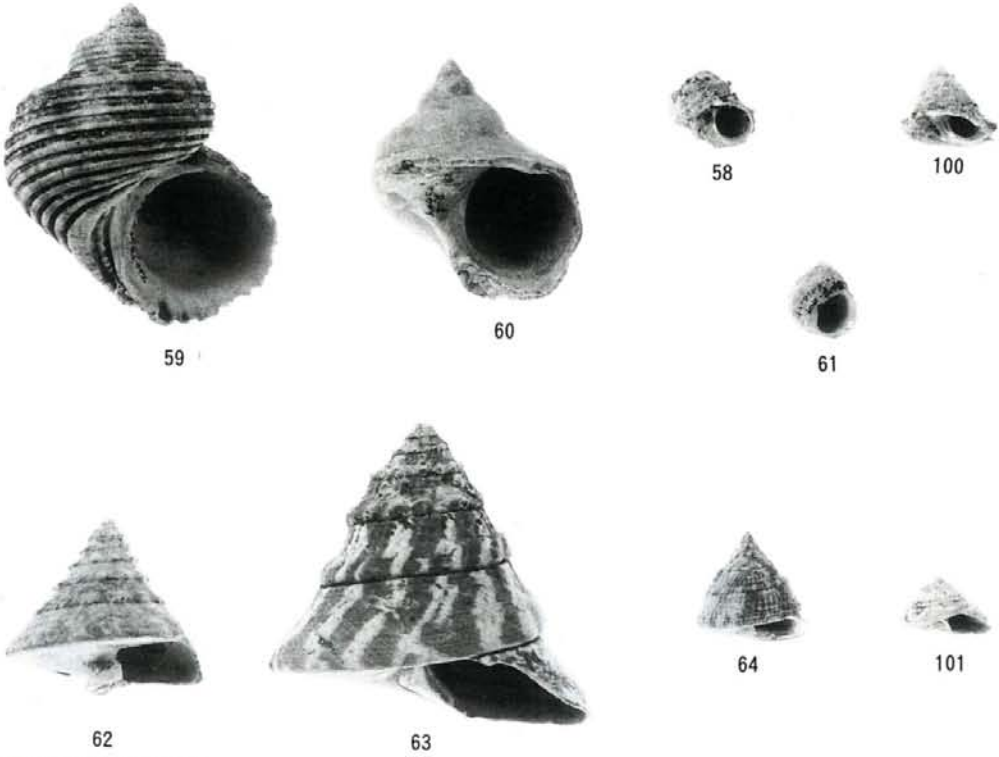
図版 97　貝類遺存体(1)



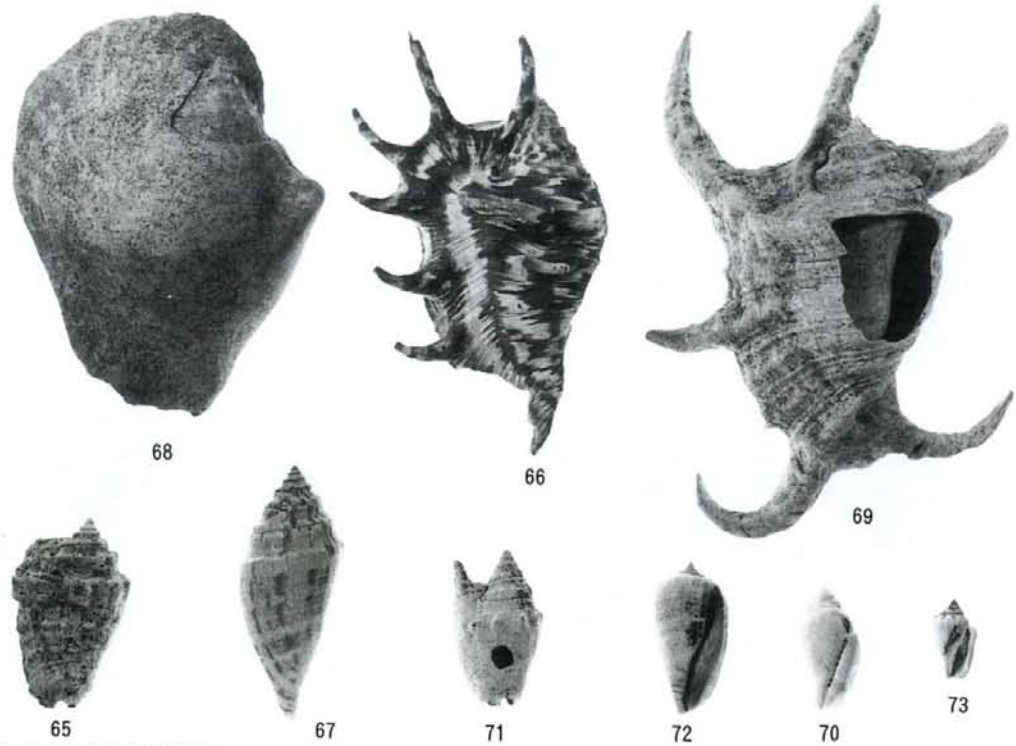
図版 98　貝類遺存体(2)



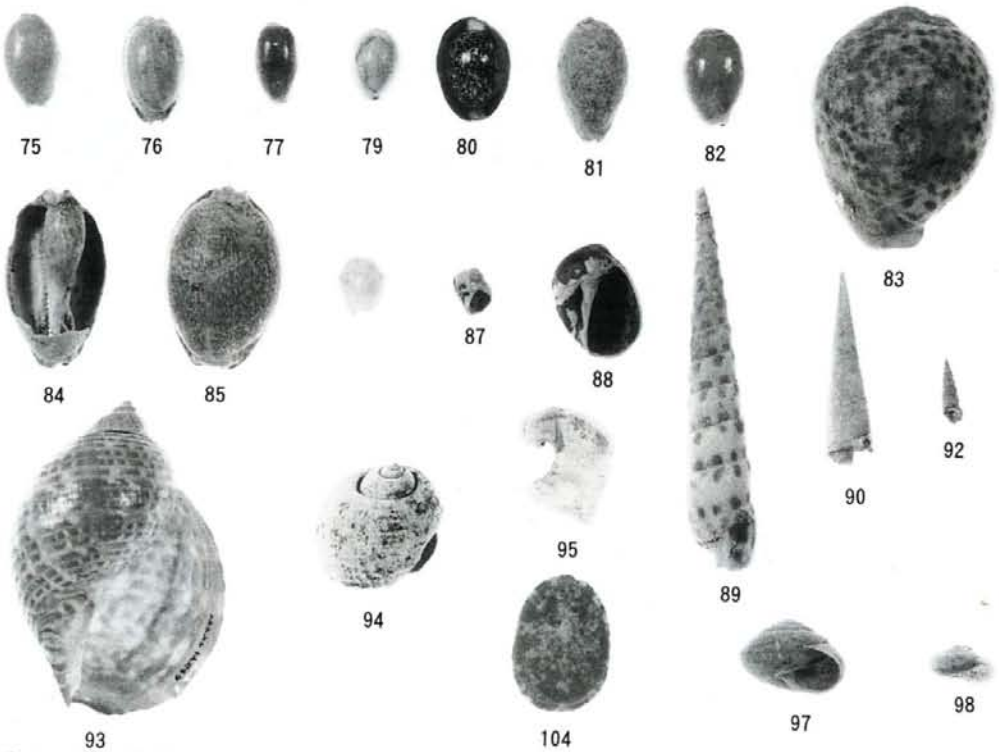
図版 99　貝類遺存体(3)



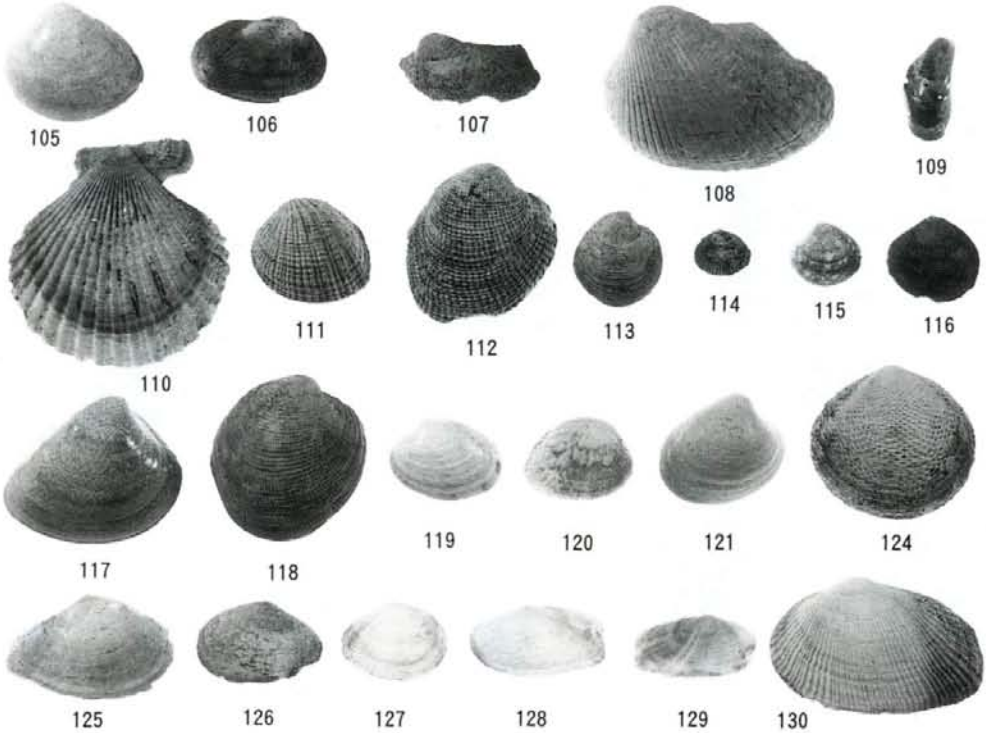
図版100 貝類遺存体(4)



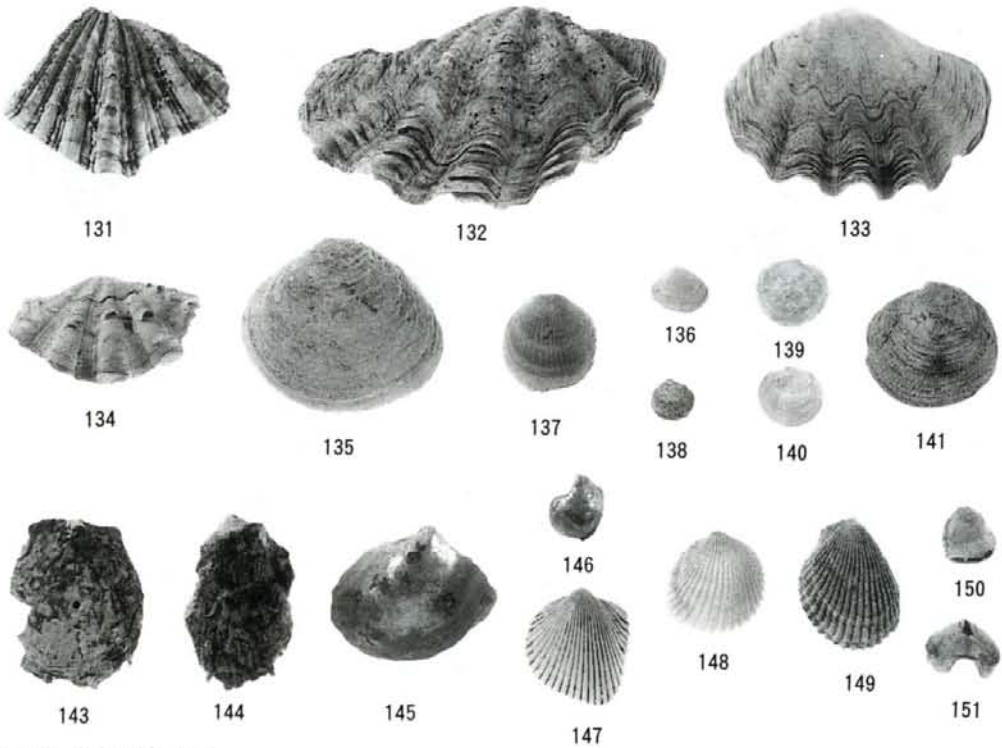
図版 101 貝類遺存体(5)



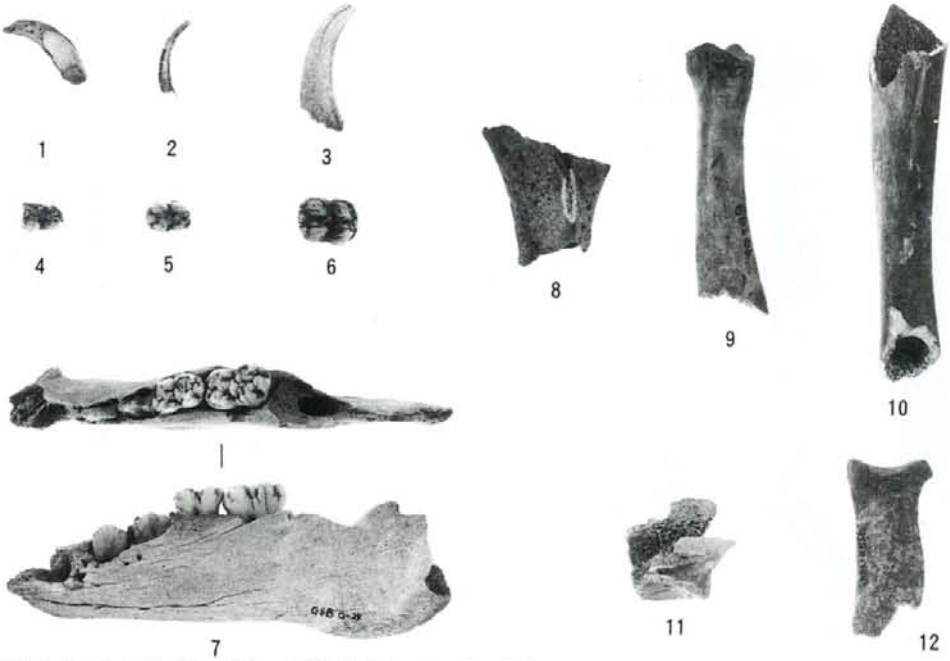
図版 102 貝類遺存体(6)



図版103 貝類遺存体(7)

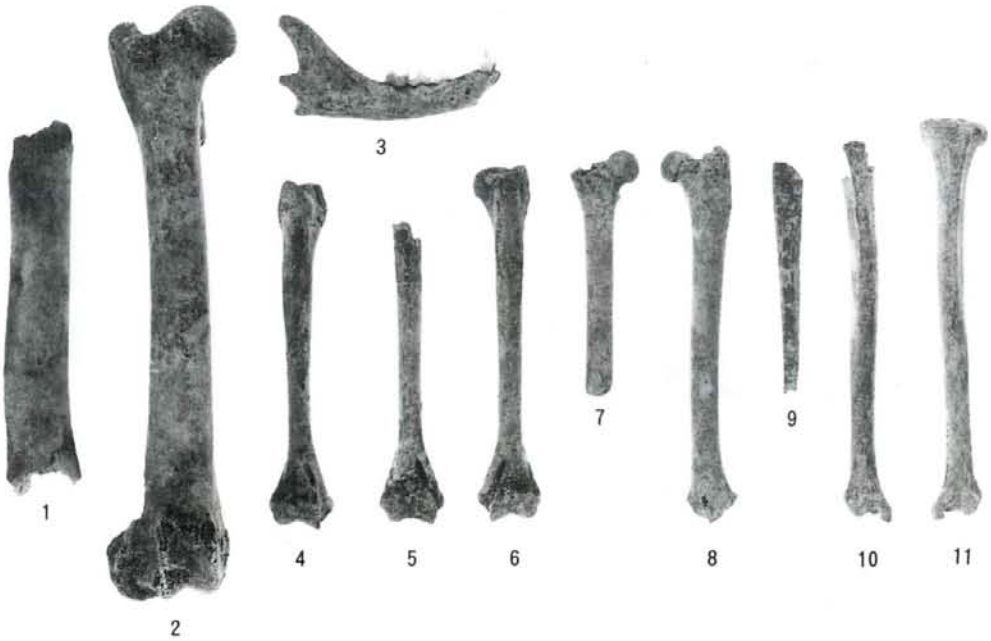


図版104 貝類遺存体(8)



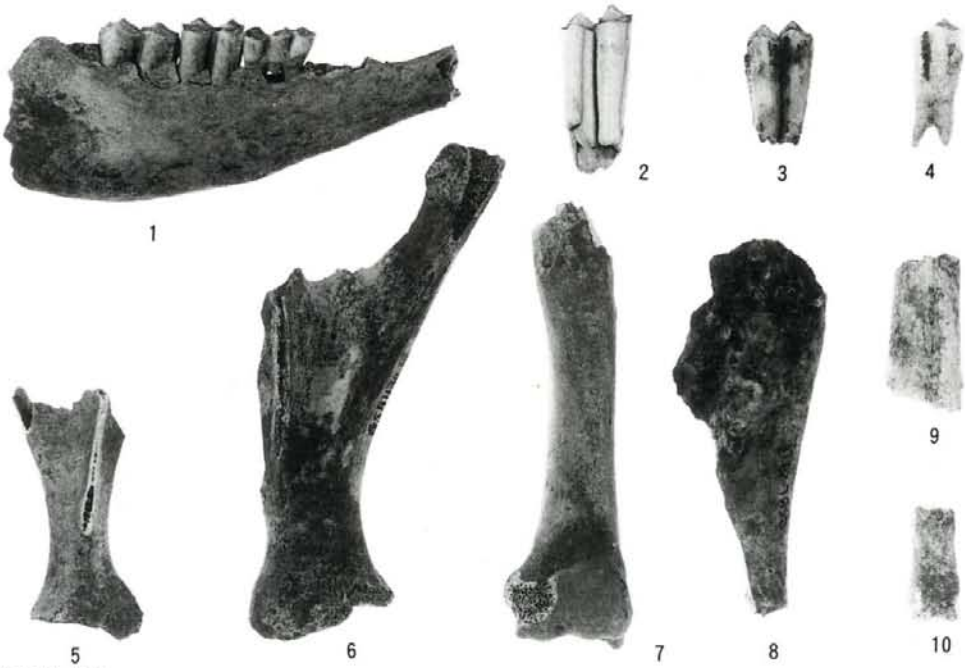
図版105 イノシシ骨（1・5）・ブタ骨（2～4・6～12）

1　上顎　I'
2 R下顎（犬歯）♂
3 R下顎（犬歯）♂
4 R下顎M_1
5　下顎M_1
6 R上顎M_2
7 L下顎骨
8 R片甲骨S（骨体）
9 R橈骨　　杁　机
10 L脛骨S（骨体）
11 R寛骨S（骨体）
12　中足骨P（近位端）



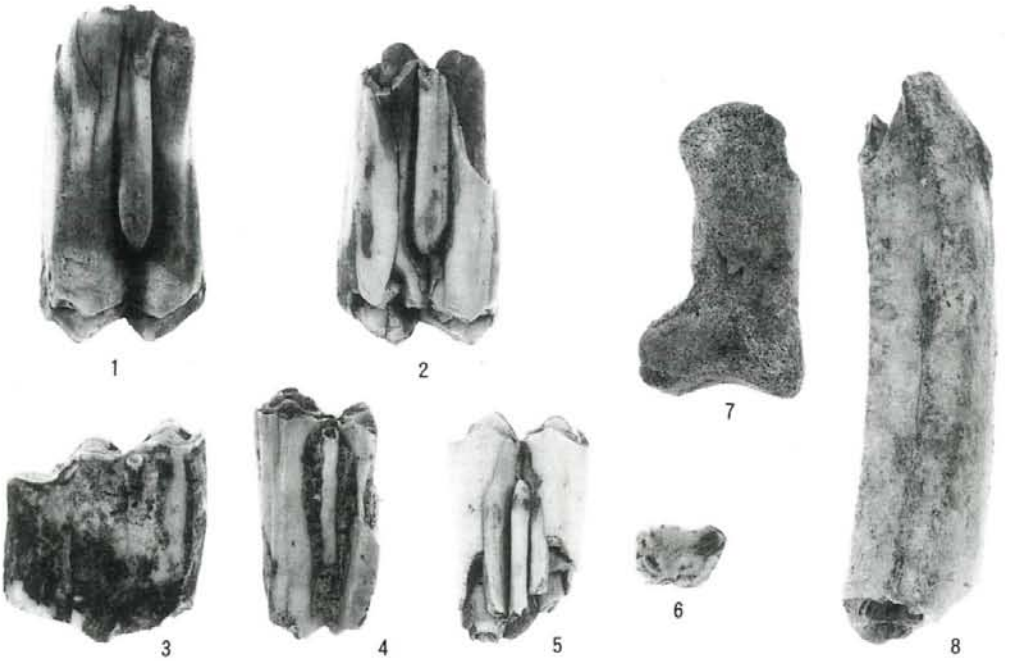
図版 106 イヌ骨（1・2）・ネコ骨（3～11）

1 R橈骨　S（骨体）
2 R大腿骨　Per(完存)
3 R下顎骨
4 R上腕骨　Per(完存)
5 R上腕骨　Per(完存)
6 L上腕骨　Per(完存)
7 R大腿骨
8 L大腿骨
9 R尺骨
10 R脛骨
11 L脛骨



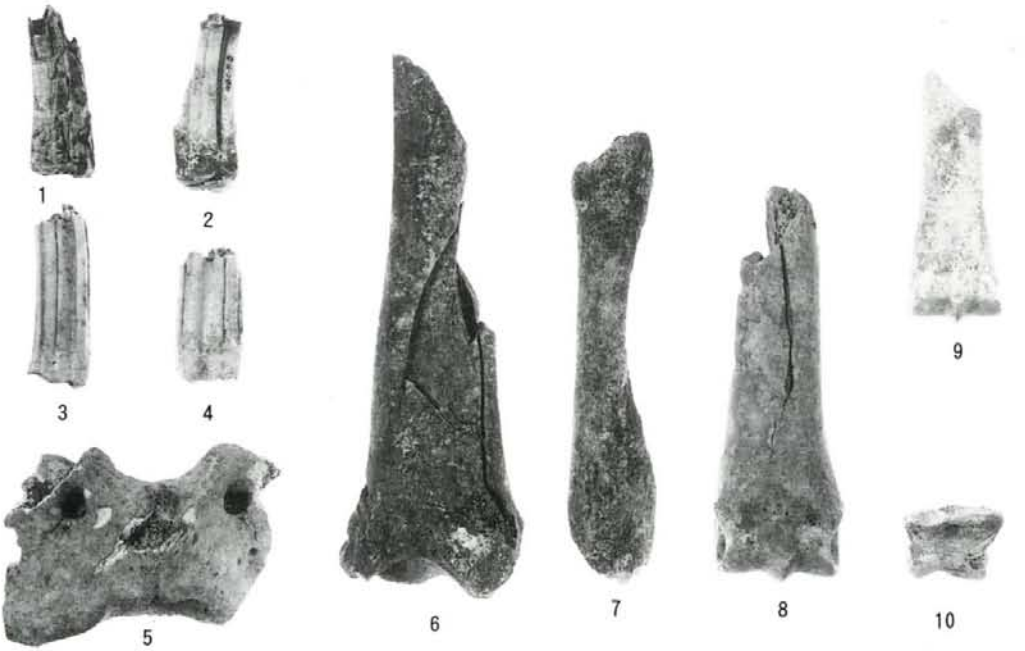
図版107 ヤギ骨

1 R下顎骨　dm_1～m_2
2 L下顎　M_2
3 R下顎　M_1
4 R下顎　P_4
5 R肩甲骨（幼獣）
6 L肩甲骨
7 L上腕骨
8 L尺骨
9　中手骨（破肩）
10　指骨（基）d（遠位端）



図版108 ウシ骨

1 R上顎M_2　3 R下顎　M_3　6　下顎P
2 L上顎M_2　4 L下顎　M_2　7　指骨（中）
　　5 R下顎　M_1　8　肋骨（破方）



図版109　ウマ骨

1 L上顎　M_1　4 R下顎　M_2　7　橈骨
2 R上顎　P_3　5　環推 椎　8　中足骨d（遠位端）
3 L下顎　P_3　6 L脛骨d（遠位端）　9　中足骨d（遠位端）
　　10　指骨（中）

浦添市民憲章

わたくしたちは、
古い歴史と新しい希望にみちた、
てだこの都市・浦添の市民として、
この憲章を定め誇りをもって
その実践につとめます。

1. わたくしたちは、
自然を愛し、みどり豊かなまちをつくります。

1. わたくしたちは、
きまりを守り、住みよいまちをつくります。

1. わたくしたちは、
働く喜びをもち、活気にみちたまちをつくります。

1. わたくしたちは、
平和を愛し、文化の香り高いまちをつくります。

1. わたくしたちは、
心と体をきたえ、明るく健康なまちをつくります。

浦添市文化財調査報告書第19集

城間遺跡

牧港補給地区開発工事に伴う
緊急発掘調査報告書　Ⅲ

発行日　平成4年3月
発行所　浦添市教育委員会
浦添市宮城2丁目4番1号
電話　098-877-4556
印　刷　株式会社　南西印刷
那覇市首里石嶺町1-127
電話098-884-4321